

if物語 藍染に成り代わった男

フ瑠ラン

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

俺の名前は藍染光右介^{あいぜんこうすけ}。そう、俺は光右介だった筈だ。だがなんだ？朝眼を覚まして鏡を見たら……イケメンになってるじゃないか!?

モテモテの人生確定!!昔の俺は中の下の顔面偏差値だったが今は上の上だっ!!ちやほやされまくりだぜっ!!……って思ってたんだけどなあ。

素だと凄く生きにくい世界だと直ぐに気づいてしまったので、少し猫かぶりしようと思います。

この物語は阿呆な男が藍染惣右介なんて頭のいい男に成り代わり波乱万丈な人生を送る生活である。

※どちらかというと転生よりも憑依に近いのでタグは憑依にしています。

※更新不定期。沢山更新したと思ったら急にパタリと更新が止まったりします。

※現在アンケート実施中。期限は皇との戦いが終わるまで。是非、一票入れていって下さい。

※評価100人記念で番外編(?)リクエストを募集中。

<https://syosetu.org/?mode=kappa&view&kid=210738&uid=22496>

目次

序幕

少年

将来の夢

日常編

変わってる男

色々な出逢い

弟子

十二番隊

教えて

両手に華

借りた服

嫉妬

卍解

赤子とバケモノ

大切な上司

新体制

さあ、私を

魂葬の実習生

両親

瀨霊廷通信

新隊士

部下の成長

志波海燕

甘い 催眠のような 誘惑

1

7

15

23

37

45

51

59

66

75

82

87

92

99

105

113

119

125

132

138

146

155

尸魂界編

旅禍

162

副官章

168

藍染惣右介

180

本当は

193

破面編

転校生

199

怒られる

204

疲れた

218

破面

224

フュズイオン

231

黒髪の子

238

決断

243

機嫌

249

王鍵

254

攫われた井上織姫

261

朽木ルキアの戦い

268

尸魂界からの増援

273

志波海燕の怒り

279

『融合』

287

ボロボロな三人

291

空座町を滅す

296

乾聖

305

彼女だけは

311

怒りの力

320

『鏡花水月』遂に卍解

閑話

生きてた

藍染惣右介誕生祭

涅マユリ

小さくなった「藍染惣右介」

男として

がっかり？

藍染と浦原はグル？

更木剣八との決闘!!

なぜこうなった？

Merry X'mas

325

329

332

336

341

349

353

357

361

364

368

序幕

少年

俺の名は藍染光右介^{あいぜんこうすけ}。大学に通う金もなければ次の日も生きていけない程の金もない、貧乏人の20歳である。

バイトを掛け持ちして、掛け持ちして、掛け持ちしまくってなんとか1日を繋ぎ止めている。安いすきま風の絶えない家に帰り風呂にも入らず布団も敷かず俺は硬いフローリングに寝転ぶ。

今日は疲れた。体力はそこそこある方だと自負する俺であるが今日は本当に疲れた。だから眠った。風呂にも入らず布団も敷かず硬いフローリングで。俺は眠った。

起きた時には知らない場所にいた。



硬いフローリングで寝ていた筈の俺であるがいつの間にかふつかふかの布団に包まれていた。いつの間に布団を敷いたのだろうか？そもそも万年金欠の俺がこんなフカフカの布団を持っていたであろうか？

勿論寝起きの俺はそんな事も考えることはできず部屋を出、洗面所に向かう。洗面所に備え付けてある鏡には顔面偏差値中の下の俺の顔ではなく、顔面偏差値上の上の顔の少年が映っていた。

……………。

ヤヴァイ、嬉しい。実は将来の夢で「イケメンになってキャッホーイウフフの生活を送りたい」って小学生の卒業文集で書いてたんだ。まさか、叶うとは！

よく見るとこの家めっちゃ金持ちそうだぞ?!金持ちか、金持ちなんかこの少年は!?夢だ、夢かもしれない!!

現実か夢かの区別がつかなくなった俺は少年(俺)の顔を結構本気でぶん殴ってしまう。勿論俺がぶん殴った頬はヒリヒリとして凄く

痛い。腫れた。絶対腫れた。これ確定。明らかに力加減を間違えてしまった。

思った異常の痛さに悶絶する俺。思わず床を転がってしまった。けれどこれでわかった。この少年は俺で間違いなしだ！ドジっ子の神が間違えて俺をやっちゃまったとかそんななんどうでもいい。俺は生まれ変わった！イケメンに！！金持ちに！！

「うおおおおおっつ！！勝ち組だあああっつ！！」

思わずのガッツポーズをする俺。遂に俺は勝ち組だ。今までの不幸を取り返す程の幸運が来たのだ、この俺にっ！！



俺は幸運者だと思う。何故かって？万年金欠の俺がこんな金持ちに成ったこともそうだし、この広い家の中でこの洗面所に行けたところから凄いだろ。

と言うことでこの家の構造を知る為にも俺はこの屋敷を探検したいと思う。

この屋敷は昔ながらの屋敷だと思う。木製だし、和風だ。こう：現世で言う……お城？みたいな感じだな。現に俺は忍者とか隠れ部屋とか出てこないかなあと内心待ち望みしている。

屋敷と言うほどだ。やはり、部屋は沢山あった。部屋の中には本が沢山並べてあったので本好きだったのだろう。成る程、俺と趣味が合うな！少年よ！！

俺も、本を買う金はなかったので幼稚園の年中から図書館に通いだし、中2の時には図書館の本を全て読みきつてしまう程の本好きであった。

お陰で「特別会員」なるものになり、本を数冊貰った記憶がある。あのときの俺は若かった…。

最初のいた部屋に戻ると、その部屋もやはり沢山の本が置いてあ

る。どんな本なのかと少し興味がわいたので一番端に置いてある茶色の表紙の本(?)を手元に取った。



○月△日

きょうは、かあさまに『かいどう』というものを、おしえてもらった。かあさまは『惣右介』、『はるみ』をまもれるつよいおとこになりなさい」といわれた。わたしは『はるみ』だけではなく、ちからをもたないものまでまもれるつよいおとこになりたい。

○月☆日

『はるみ』がやしきにきた。『はるみ』はわたしのかおをみると「アンタ、少しは動きなさいよ!!」とむりやりそとにだしてきた。そのおかげで、ふくはどろだらけになって、かあさまにわらわれた。



…どうやらこれは少年の日記らしい。この少年一人称『私』なの!! うん、頭がよさそうな匂いがプンプンとするね。

それにこの日記に出てくる『はるみ』って誰だよ。彼女か? 彼女なのか?! 俺には一度も出来たことはない彼女を俺よりも年下(?)のこの少年は彼女を持っているのか?! …世界は不公平だ……。

それにしてもこの少年の名は『惣右介』^{そうすけ}と言うのだな。俺の『光右介』^{こうすけ}と実に名が似ている。似ているのに俺と少年はこんなにも違うのだな。…当たり前前、か…。

「惣右介っ! 榛巳^{はるみ}が遊びに来てやったわよ!!」

突然現れたのは、ピンクのいい生地に包まれている金髪ツインテールの女の子だった。声は透き通るソプラノで少し着物が汚れているところを見ると活発な女の子なのだろう。

そしてこの子が先程、少年の日記から出てきた『はるみ』か…。なんとも元気そうな女の子である。

「…私は本を読むのに忙しいから今日は……」

とりあえず、この少年の事を知る為にも俺は少年の日記を読まなくてはならない。その為に榛巳にはお帰り願おう。

「はあ!? アンタ、本当につまらない男ね! 私榛巳から誘ってるんだから行くのよ!!」

グン、と腕を引っ張られそのまま外に連れられてしまう。力強いな、最近の女子は…。しかも何気に榛巳、足早いし。

「ふふふっ! 追い付けないでしょ!! お父様との訓練の賜物たわものよっ!!」

ドンドンとスピードをあげていく榛巳に対して、差をつけられる俺は少しカチンときた。大人、嘗めてもらっちゃあ困るね、餓鬼様んちよ。

俺は足に力を溜め…地面を蹴った。

ドオンとすぐ下から音がする。

「…ちよっと、惣右介!? アンタ何やってんの!?!」

俺、空中飛んでました…。



「アンタ、負けず嫌いなのは解るけど、『瞬歩』を使おうとするなんてバカじゃないの!?!」

どうやら俺は『瞬歩』なるものを使おうとして失敗したらしい。空中から地面へ突撃した時は死を感じ取った。なのに生きているこの少年の体が凄いと思う。

「ほら、早く怪我したところアンタのお得意の『回道』で治しなさいよ」

『回道』。これは先程の少年の日記にもあった言葉である。しかし残念ながら俺は少年ではないので『回道』なるものの使い方が解らないのだ。

「何してんの!?早く手に霊圧集中させなさいよ!」

『霊圧』……とは?え?力的なものを手に集中させればいいのかな?とりあえず、そうしてみよう。するとなんと言うことだろう。

手がっ!手がっ!!光ってるっ!!

光を傷もとに当てると暖かくてみるみる傷が治っていくのが解る。なんだよ、これ。

……ハイスペック過ぎね?少年よ



暫くの時が過ぎると榛巳は「お父様に怒られるっ!!」と叫んで慌て家に帰ってしまった。なので今現在俺は少年の日記を読んでいたのだが…。

…人の気配がしない。

この家は結構大きな屋敷だと俺は思うのだ。大きな屋敷なら、お手伝いさんぐらいいても良いのではないだろうか?なのに、今日1日そのお手伝いさんも見なければよく日記に出てくる母様も見ない。静か過ぎる。

そう考えるとなんか一気にやる気が出なくなってしまった。思わず日記を次へ次へと適当なページにめくっていつてしまう。いつの間にか最後のページ。勿論全部は読んでいない？読んだのは最初の数ページだけだ。



☆月○日

母様が亡くなった。前々から体が弱っていったらしい。初めて私はそんな事を聞いたので驚きで倒れてしまった。何故、母様は私に体の事を教えて下さらなかったのだろうか。私はまだ母様に何も恩を返せてはいない。誰か、教えてはくれないだろうか。私は大切な母様を亡くしてしまいどうすれば良いのだろうか。



死んだのか。噂の母様は。悲しかっただろうな、少年よ。どうすれば良いのだろうか、か。それは俺も知りたいことである。が、とりあえず。俺は元の体に戻るまで（本当は戻りたくないけれど）この体でエンジョイすることにしようと思う。

前の体で出来なかった事を沢山して、悔いなく前の体に戻りたい。それまで俺に体を：貸してはくれないだろうか『惣右介』よ。

将来の夢

「ねえ、惣右介。アンタってさ、昔から学者になりたいたって言ったじゃない？今も…そう、思ってる？」

少年こと藍染惣右介に俺が成って早2日。目の前にいる榛巳は俺に聞いてきた。

：少年は学者になりたかったのか。確かに顔は頗る頭のよさそうな顔をしている。が、しかしである。俺はそんなに頭よくねえぞ？机に向かつて鉛筆やらシャーペンやらを持っているよりも外でかけっことかがしたい派である。

読書は好きだが勉強は嫌いだ。昔から俺は変わり者なのだ。

「私は、死神になりたい。死神になってバンバン虚^{ホロウ}を倒すの。ねえ、惣右介。私とき、一緒に…死神になろうよ…？」

死神、とは…？あれか？なんか神話とかに出てくるあれか？黒いデカイ鎌持って人間の魂を狙うあれか？…そもそも虚とはなんだね？バンバン倒すって言うてるぐらいだしやっぱり敵なんだよな？うん？そもそも死神って何の味方だよ。

死神じたい俺は知らないのうん、とも、ごめん、とも言えない。

「…何でそんなに死神になりたいんだ…？」

「何で、って。カッコいいし私の憧れだからよ。アンタが一番それを知っていたでしょう？少なからず…結右華^{ゆうか}さんが生きてた時まで、アンタも…」

『結右華』とは誰だろうか？生きていた、と言うことは少なからず、今はもう死んでいるのだろうか。

「アンタのお母さん…結右華さんは昔、四番隊の副隊長やってたもん

ね。お陰でアンタは回道の腕は一流だし、破道だつて少しは使える。けれど結右華さんが死んでからは鍛練も何もしなくなった。けれどアンタこの前、瞬歩使おうとしたよね!? 死神になる気になったの!?!」

お、おう…。俺の知りたいたいことをベラベラ喋ってくれるな榛巳よ。とりあえず『結右華』つて言うのは少年の母親だったワケだ。何か副隊長やらなんやら…。意外に結右華さんつて凄い人なんじゃね? だから少年もハイスペックなのか…。理解できるわ、うん。

「…死神じたいには興味はある」

「えっ、ホント!?!」

ガシリと俺の肩を掴む榛巳。どれだけ俺を死神にしたいのか。それともそんなに死神が好きなのか。はたまたは両方なのか。…やはり女子の考えることは俺には解らん。

因みに死神に興味があることは本当だ。榛巳の話を知っている限り、死神つて職業。ほいよな? そんな職業あつたら入ってみたいと思うのは普通な筈だ。どんな職業なのか少し気になる。

「なら、私と一緒に修行しましょう!! 惣右介と私なら、きつとなれるわ!! 死神に!! 目指せ隊長!! 皆から尊敬される隊長になるのよ!!」

榛巳は俺の肩を揺らしながら興奮したような感じで言った。とりあえず…酔うから止めて、榛巳。



屋敷にある本を読んでいて気づいた。榛巳と少年はどうやら親戚らしいのだ。しかも少年も榛巳も貴族と言う…。ヤバすぎだろ。設定盛りすぎだつて。

何？頭が良くて、イケメンで？更には貴族っていう金持ちで？更にはちよつと気の強い美人な幼なじみがいるって…なんだよ、頭も悪くて顔面偏差値もかなり下回ってて、更には貧乏人で美人な幼なじみもない俺に自慢してんのかよコノヤローっ!!

この世は不公平である。俺は今、猛烈に泣きたい気分だ。…泣かないけどな。

因みに今俺は少年の母親こと結右華さんの部屋を漁っている。結右華さんは元死神らしいから関連の本が有るだろう。現に今見つけた。

『死神について』

黒い表紙に金色の文字でそう書いてある。この辺は随分随分と埃被っており、埃が部屋に充満する。咳き込む俺だが、俺は気にせず本を開く。本には黒装束に日本刀のような物をもった男の人と女性の写真がかかれていた。

『死神とは霊力の有るものとなる職業である。霊力の有るものは腹が減り、食べ物を食べることで成長していく。そのような者は真央霊術院しんおうれいじゆつゐんで死神としての学、力の扱い方を学び死神としての教育を受ける。真央霊術院で浅打あさうちをもらい、現世で魂魄あたまの魂葬ソウル・ソサエティを行い虚を倒す。死神とは虚を倒し戸魂界ソウル・ソサエティを護る者である』

…所謂あれか。ヒーローみたいな感じだろ？って言うかこの世界は尸魂界って言うんだな。初めて知ったわ。何か俺のいた所と全然違うから焦るわー。俺のいた所なんて死神なんて職業なかったし。浅打だっけ？そんなの持ってたら警察に捕まるわ。じゅーとーナント力ってやつでね、うん。

こんなのには榛巳はなりたい、って言ってんのか…。危なくね？少なくともこの虚っていう写真見たら化け物だぜ？こんなのと戦うんだろ？やめた方がいいって。命いくつ会っても足りねーよこんなもん。

死ぬって、確実に死ぬって。……頑張って榛巳止めさせねえと。少なからず、榛巳は少年の知り合いであり大切な人なんだ。俺の目の前で死なれたら少年に会わせる顔がねえ。女子は前線で戦うんじゃないって後方で護られてる。少年が（多分）護ってくれるから。

え？俺が護ってやらねえのかって？ムリムリ。死ぬよ、確実にね、うん。確かに運動は好きだけど運動と戦は違うのよ。命かけてるから。俺は無謀なこととはしない質なのっ!!



惣右介と私は小さい頃からの付き合いだった。結右華さんのお兄ちゃんが私のお父様で、お父様と結右華さんはとても仲が良かった。それに、結右華さんは小さい頃から体が弱かった、って聞いてたしそのせいでお父様も更に結右華さんを気にかけるようにしてたのかもしれない。

私と惣右介は兄妹のように育ってきた。いつも隣には惣右介がいるのが当たり前。だから横に惣右介がいなくなったあの時期が私には信じられなかった。

結右華さんが死んで、惣右介は家に引きこもるようになった。昔はよく私と鬼道の練習とかしてたりしたのにそれも無くなって、私が家に行っても出て来てくれなかった。

でも、惣右介は強いから、私は信じてた。いつかきつと乗り越えてくれるって。案の定、惣右介は結右華さんのいなくなった悲しみを乗り越えて外に、私に会ってくれた。

そんな感動的な事があって約2年。惣右介が惣右介じゃなく感じた。……違和感を感じるのだ。外見とかはそのままだけど「惣右介」って呼んでも一回じゃ振り返らないし、鬼道とか死神とかの話をしてても全く解ってない顔ぶり。

惣右介は私よりも頭が良かったからすぐに可笑しいと気づいた。今だってその違和感を感じる。

「榛巳、死神絶対やめた方がいいよ」

「はあ?」

昔の惣右介はこんなことは言わなかった。私がやりたいうて言えば「自分が後悔しない選択をすればいい」って言うてくれて大抵は了承してくれたし、昔の惣右介は死神になることも賛成してくれてた。

「…最近のアンタ、可笑しいわよ。昔はそんなことは言わなかったのに。変なモノ拾い食いでもしたの?」

惣右介の顔がギクリと動く。そのギクリは果たして拾い食いのギクリなのかはたまたまは…私の可笑しいと言う言葉にギクリなのか。まあ、興味ないからどうでもいいんだけど。



この生活にも慣れてきた。そりやあもう五年も経ってればなれてくるだろう。時々、榛巳から怪訝な目で見られる事が多々あったが、全て無視を決め込んでやった。

3ヶ月後には噂の真央霊術院に入学する。俺はかなり必死に勉強して『縛道』やら『破道』やら『回道』やらを習得してやった。

因みに俺が一番信じられなかったのはこの少年のハイスペックさである。勉強も、鬼道全ても軽々と頭に入ってくる。昔の自分の体と比べると何もかもがランクアップしているのだ。

暗記能力もいいし、身体能力もいい。全てにおいて、オールエーを取れる程である。思わず俺は泣いた。虚しくなって泣いたとか違うから。格の差を見せつけられて虚しくなったとか違うから…!!

「んー、念のために森とかでやるわよ!」

「…了解」

現在は『縛道』と『回道』の苦手な榛巳の為に、森に向かっている。

森で修行するのだ。

「…『破道』は得意なんだけどなあ……」

「壊すことしか頭に入っていないでしょ」

「ちよつと、どういう意味よ、それ！」

『破道』のポーズをとった榛巳を見て俺は直ぐ様平謝りをする。基本榛巳は莫迦だから上辺だけの謝罪も本謝りと勘違いしてすぐに許してくれるのだ。…チョロい、チョロ過ぎるよ、嬢ちゃん。

暫く、榛巳の苦手な場所を徹底的に練習していた頃。榛巳が大分へトヘトになってきたので、休憩をとることにした。

「彼処に座ろう」

大きな木の下を指差して俺は言った。榛巳も俺の意見に賛成のようでも小さく頷く。俺と榛巳が木の元に腰掛けようとした時だった。

「グオオオオオオオオツ!!」

大きなドスの聞いた遠吠えのような声が聞こえる。それも…近い。

「惣右介っ!!」

ドン、と押される感覚がした。吹っ飛ぶ俺の体。大きな黒い何かは榛巳を掴んだ。そして数秒後には榛巳の赤い血が地面に落ちていく。

「え？」

全てが理解出来なかった。目の前にいるバケモノはなんだ。何故、赤い血が地面におちたんだ。榛巳の腹にはどうしてあんなに大きな穴が空いているんだ。

理解、出来なかった。

ボトリと重力に逆らえず落ちていく榛巳の体。俺は慌てて榛巳の元へと駆け寄った。榛巳はまだ意識が有るようで、俺に話しかけてきた。

「…よ、かった…惣右介、生きて、た、……。助け、ら、れた…」

青白くなつた榛巳の白く細い腕が俺の頬を触る。その腕は段々と熱がなくなつていつて冷たくなっているような気がした。

「わたし、し…もう、ムリ、み、たい…」

力なく榛巳は笑うと俺に言った。

「……………わたしの、分、まで……………生きて、死神に……………なつて……………沢山、の、ヒト……………助けて、あげ、……………て…」

ガクンと力の抜けた榛巳の腕は落ちていく。榛巳はもう既に目を瞑つていて開けることはない。俺は悟った。

死んだんだ。

榛巳は、死んだんだ。

あの、黒いバケモノに、殺されて、死んでいった。あれだけなりたいたと言つていた死神を俺に託して榛巳は死んでいった。怒りと悲しみが混じりあつて何がなんだか解らなくなった。

気づいた時には赤い血の池の上に俺は立っていた。黒いバケモノは消えていた。



榛巳の葬式では誰も俺を責める人はいなかった。逆に皆口を合わせて「惣右介だけでも生きていて良かった」と言った。

「…惣右介くん」

榛巳の葬式が終わって数週間が経ったある日。榛巳の父さんが少年の家に訪ねてきた。家に出迎えて俺はお茶を出す。

榛巳の父さんは真剣な眼差しで俺を見つめ、言った。

「惣右介くんは死神になる気はあるのかい？」

「なりませんよ、死神」

即答だった。

「榛巳が、俺…私に託した最後の言葉、だったから」

俺がそう言うと榛巳の父さんは「そうか」と笑った。何故、笑えるのだろうか。最愛の娘を亡くしたにも関わらず笑えている榛巳の父さんの考えが俺には解らない。

「…榛巳は生きているよ。少なくとも、私や惣右介くんの心の中に。榛巳の意志を継いでくれる惣右介くんがいて安心した。私は惣右介くんを応援するよ」

榛巳の父さんは俺の肩に手を置いて「榛巳の分まで沢山の困った人を助けてあげてくれ」と言った。俺は強く頷いた。

日常編

変わってる男

人前での一人称を「私」から「僕」に変えた俺は真央霊術院を首席で入学し、その後も全て一位を保っていた。お陰で一年生ながら飛び級の話がきたらしい。

何故らしい、なのかと言うと俺は断ったので間接的にしか聞いていないからだ。頭の中身は学生を超えていたとしてもまだ体は学生なので、このまま学生を続けようと思ったのだ。……正直、学生割引とありそうじゃん。

が、学生割引は本音じゃねえからな!!お、オプシヨンみたいな感じで考えてるだけだから!!嘘じゃないよ!本当だよ!!

そんなこんなで今日も俺は学生を続けています。



首席入学、学年一位の藍染くんは孤立している。孤立、と言うよりも私達が彼に歩み寄らない、と言う方が正しいのかもしれない。

彼は頭も良く、『斬・拳・走・鬼』全て一位を誇っている。しかも顔のベクトルも高く、裏ではファンなるものが作られるほど人気だ。

こんな人気な彼だが友達と言う人は誰もいない。何故か、それは私達クラスメイトが畏れ多くて彼に近づけないのだ。

でも、一度だけ解らない所を教えてもらったことがある。その時の彼は少し目を見開き…数秒後、嬉しそうに微笑み「いいよ」と言っただけで、解りやすく教えてくれた。お陰で私は成績伸びたし、1ヶ月の間、藍染くんファンクラブからのいじめの対象にあった。勿論藍染くんはその事は知らない。

私が藍染くんに近いと近づかないのはいじめの対象になるのが怖いんじゃない。あんなもの怖くはない。なら、何故近づかないのか。そんなの決まってる。……私が彼に惚れちゃったから……

今日も藍染くんはカッコいいです。



友達と言うものができないまま俺は真央霊術院を卒業した。そして真央霊術院で浅打と言う斬魄刀を貰った。この斬魄刀には“本当の名前”なるものがあるらしい。頑張つてその“本当の名前”を聞けるように努力したいと思う。

名を聞くには“座弾”と言うものが必要らしい。早く名前を聞きたいと思つている俺は、早速その座禅なるものをしてみた。

気がつくと俺は全てが鏡の世界にいた。右も鏡、左も鏡、上も下も鏡。そんな鏡の世界に俺とは違う、小柄な1人の少女が立っていた。彼女はアルビノなのだろうか。髪の色素が薄く、白に近い水色の髪色をしている。

彼女を見たときの第一印象は“白”である。髪も白に近ければ、肌も白い。最後には白い無地のワンピース。彼女は全体的に白を強調しているようにしか俺には見えなかった。そんな彼女を見つめること約数秒。彼女が小さな口を開けた。

「貴方様ならば私の力を善い方向で使つてくれると信じ、出てきました。私の名は『鏡花水月』」

彼女はビー玉のように透き通っている青い目で俺を見つめながら言った。

「正直、私はホツとしております。私の持ち主が貴方様であることを『鏡花水月』は何か俺の事を知っているのか？」
「知っていますとも。少なくとも貴方様が本物の藍染惣右介ではないことぐらい。私は貴方様の斬魄刀ですから」

彼女はそう言った。彼女の表情は安心しているようで、少し笑つて

いるようにも見える。彼女の笑う姿はとてもかわいらしい。

「きつと、本物の藍染惣右介であつたならば、私の力を悪用し闇の道へと進んでいったに違いないでしょう。しかし、心が清らかな貴方様ならば、私の力を悪用し闇の道へと進むことはない、と思っております」
「悪用、ってことはそれだけ強い能力ってことか？」

俺が彼女に聞くと彼女は首を横に振り「強い、と言うよりも悪用しやすいのです」と言った。

「私、『鏡花水月』は能力解放に伴う形状の変化はないのですが、解放の瞬間を一度でも見た相手の五感・霊感等を支配し、対象を誤認させることが出来る完全催眠という能力を持つのです」

「…チート……?」

「貴方様はこの力を正しく、光の道で使ってくださいますか？」

彼女は俺の「チート」と言う言葉を完全無視して不安げな表情、声音で聞いてくる。そんな彼女の顔を見て俺は何故か居た堪れない気持ちになり、頭をガシガシと搔いた。

「…俺、光の道だとか闇の道だとかそんな解らねえし」

「……………」

「俺は、ただ、自分が正しいと思つた道を進むだけだ。とりあえずは、この力を尸魂界に貢献するとするさ」

俺はそう言う彼女に近づいた。そして、しゃがみ視線を合わせる
と俺は彼女に手を出して言った。

「俺は、か弱い命を護れるだけの力が欲しい。助けて、と思つている少年、少女、ご婦人、爺さんや婆さんの助けになれる力が欲しい。だから、俺に力を貸してくれないか?——『鏡花水月』」

俺が『鏡花水月』にそう問うと『鏡花水月』の目から透明な涙エキタイが流れてきた。女の涙なんか見たことのない俺はアタフタする他にはない。

：な、なな、何で泣いてるんだ!?俺、何かやった!?え、もうしかしてだけどこれ：俺が泣かせちゃった系：?：……何やってんだよ、俺っ!!女泣かせるとか最低じゃねえかつ!!

俺が泣かせちゃった疑惑が俺の心の中で浮上し更にアタフタする。そんな俺を見て、彼女は笑った。それも上品に。

「勿論ですとも。どうぞ、これから宜しくお願いしますね、我が主」

『鏡花水月』は俺の手を取った。



真央霊術院を卒業して間もなく、俺は五番隊に入隊した。因みに副隊長と言うかなり高い役職に就いてしまった。周りは先輩だらけで新参者の俺はかなり孤立している。かなり息苦しい。

「俺の名前は朱司波すずなみせいげん征源。これから宜しくな!」

赤髪で俺よりもガタイのいい隊長は笑って言った。俺は一礼し「宜しく願います」と言う。

「そんなに畏まるな!何か気になるだろ!」

俺の背中をバンバンと叩く隊長。一応力加減をしてくれていて、痛いとは感じなかった。

「隊長、少し聞きたいことがあるんです」

「なんだ？」

「…そもそも、僕は何処の隊に行っても悔いはなく、特に希望もありませんでした。だから希望書にも何も書かなかった」

死神になる前。真央霊術院を卒業し間もなく渡されるのは何処の隊に所属したいかと聞かれる「希望書」である。

必ずしも、自分の希望が通るとは限らないが、少なくとも皆には何処の隊に行きたい、と言う希望があるのだ。まあ、俺は特になかったから白紙で出したんだけど。

俺は回道が得意だったので、てつきり四番隊に飛ばされると思ってたのだが…。まさかの五番隊。しかも隊長直々に俺を五番隊に入りたい、と言ったらいいのだ。

だから聞いた。確かにこの少年の体はスペックが高くて、イケメンであるが態々隊長が指名するほどののだろうか、と。体はイケイケでも中身は全然イケてないのだから、中身が全てを台無しにしてしまっていたのだから…。自分で思ってた悲しくなってきた…。

兎に角、気になったのだ！気になったから聞いた！只それだけ！！

隊長は一瞬キョトンとした顔をすると豪快に笑った。

「真央霊術院を首席で入学し、一位を誰にも譲ることなくそのまま首席卒業！！鬼道の腕もよし！何なら得意は回道！！そんな金の雛鳥を呼んで何が悪い！！」

俺は目を見開いた。…金の雛鳥なんて…カツコいいじゃねえかっ！！

「俺はお前の力を認めてるんだ！いきなり副隊長なんて責任重大な場所についちまったが、俺はお前ならできる、って信じてるんだ！頑張ってくれよ、藍染！！」

隊長が笑った顔は、俺の心を安心させた。



俺が副隊長になって早百年が経とうとしていた。五番隊の皆とも慣れ、俺の演技には更に磨きをかけ優しく何でもできる上司を演じてきた。お陰でヴァレンタインデー（少しだけカッコつけた）では尸魂界一沢山チヨコを貰うと言う快挙を成し遂げた。

皆からは自分の上司にして貰いたい人と言う謎のランキングでも一位になり、告白と言う昔の俺ではされないこともよくされるようになった。

イケメンでイケボ、仕事も完璧と言う三拍子が揃っているとこうも人生薔薇色になるんだ、と実感した百年だった。

書類仕事をしながら昔の記憶に馳せていると、扉がノックされる音がする。俺は「どうぞ」と声をかけた。

「失礼します」

入ってきたのは平隊士であり、平隊士は緊張した顔で俺に言った。

「た、隊長が現在、新米隊士の紹介をしているので、時間が作れたら来るように、と！」

「…態々済まないね。ありがとう」

「い、いえ!!それでは失礼します!!」

勢いよく出ていく隊士を見送り、俺はエベレストのような書類を見て…ため息をつき、早く終わらせねば、と気合いを入れる。

「一度ぐらいは顔を出さないとな」

書類を見てまた、俺はため息をつくのだった。



結局、エベレストの山を短時間で終わらせることはできず、顔を出すことは叶わなかった。そして、現在俺は顔には出さないうがかなり慌てている。

何故かって？隊長が姿を消したからだ。隊舎中探しても見つからない。それに皆から聞いた話だと隊長を最後に見たのは約2週間前だと言う。

そして今、俺は総隊長の目の前に立っていた。話の内容は勿論隊長のことについてである。

「藍染惣右介よ。この度朱司波征源が姿を消した」

「はい」

総隊長の言葉に俺は頷く。総隊長の鋭い視線が俺に灌そそがれる。自分の体が少し強張るのがわかった。

「あやつは隊長。隊長不在は隊にとっても大きな影響を受ける。その為、新たな隊長を呼ぶことにした。名は平子真子ヒラコシンジ」

総隊長が「入って参れ」と言うその後ろにあつた大きなドアが開き金髪ストレートイケメンが入ってきた。肩よりも少し長いぐらいの金色でストレートの髪をした男性。白い羽織を着ていてその羽織には「五」と書かれていた。

「平子真子。今日から五番隊隊長を命ずる」

「了解しましたわ」

……関西弁。また、癖のありそうな人が隊長に任命されたもんだ。まあ、自分が隊長にならないだけマシか。

その後、俺と平子隊長は一番隊隊舎を出て五番隊隊舎へと向かった。隊士たちには「朱司波隊長は家の事情で隊長職を下りざる終えな

かった」と伝えようと思う。

「お前、名前なんて言うん？」

「僕は藍染惣右介です。特技は書類仕事なので隊長のお手伝いが出るかと」

「ほな、惣右介。肩の力抜いてええで。お前ホントはそないええ性格ちやうやろ？」

なんと。朱司波隊長にも知られなかった『俺』をまさか知られるとは。この人意外と観察眼あるな…。

「…じゃあ改めまして、俺は、藍染惣右介。特技はいい子ぶることです」

俺の自己紹介を聞いて平子隊長は悪巧みするような顔で笑った。

「『僕』よりも合うと思うで。宜しくな、惣右介」

『友達』と言える程まで仲の良い友達がいるわけではなかった。だから、本性を人前で曝すことなんて一度もなくいつも息の詰まるような生活を毎日していた。

だからこそ心の中では気づいて欲しかったのかもしれない。自分から言うことなんて出来ないし、絶対にないと思うから他人に気づいて欲しかったのかもしれない。

…素直に平子隊長に尊敬したと同時に彼についていきたいと思っただ。彼の下で働きたいと思っただ。彼になら…。

平子隊長にならアレを渡してもいいと思っただ――

色々な出逢い

「なんや？これ？」

平子隊長を認めた…と言ったら下に見ているような感じがするの
で言い換えよう。俺が平子隊長の下で働きたいと思つて2日目の朝。
俺は平子隊長にとある物を渡した。

銀色の不格好な小さな欠片。平子隊長は欠片を掌に乗せると色ん
な角度でまじまじと見ていた。

「俺の斬魄刀の破片です」

俺がそう言うのと平子隊長は目を見開き数秒後「俺にゴミ渡して来た
んか？」と言つた。

「いや、それゴミじゃなくて持つて欲しいんです」

「…言うてる意味がよう解らんわ。ちゃんと説明しい」

俺は「勿論説明しますよ」と頷く。

「俺の斬魄刀『鏡花水月』の能力は『完全催眠』。俺の始解を一度でも
見たらヤバイんです。それから逃れる方法は2つ。1つ目は自分の
目を切り落とすかなにかして見えなくする。二つ目は鏡花水月に触
れておくこと」

「…流水系の斬魄刀や、って俺は聞いたつたんやけどなあ」

「…流れでそんな感じになつたんですよ。まあ、面倒なんでそのまま
放置しましたけど」

「で、なんでこれを俺に渡したん？」

平子隊長は本気で解らないような顔をして俺に聞いた。俺は言う
のが少しだけ照れ臭くて、頭をガシガシと掻きながら言った。

「貴方の下で働きたい、って感じたから。尊敬する上司を催眠にけるなんて嫌だから刀の一部を渡したんです。それを持っておけば、隊長は俺の完全催眠にかかることはありません」

「なんや、この短時間でかなり俺を信頼してくれたみたいやな」

「俺の素を出せるの今のところ隊長だけなんで」

俺がそう言うのと隊長は何回か瞬きを繰り返してニヤリと笑って言った。

「意外と友達おらんみたいやな惣右介」

「……余計なお世話だアアア!!」



護廷十三隊に入って初めての休暇を取った。今現在俺は流魂街にいる。理由は「自分で作る家、カツコよくね？」とふと思ったからである。3日の休暇をとり現在3日目を過ごしている。時刻はお昼、家の完成度は上々であり俺は不眠不休で家を作ったのであった。

家の大きさは小さな一軒家程である。部屋は3つで広さはそんなにない。成人男性二人程住めたらいいな、ぐらいだ。

正直そんな家を不眠不休で作る理由が見いだせなかったのだがまあいいだろう、と適当に満足しておく。

グウと俺の腹が鳴った。当たり前だろう。世間ではもう昼飯の間である。朝取った新鮮な野菜たちを見て何を作ろうか悩む。そして俺は気づいた。

…薪、無くね…?

薪がないと何もできないので俺は昼飯を作るのに必要な薪を取りに外に出たのだが……。

いつの間にか子供拾ってました。

銀髪の子供が俺の腕の中で寝息を漏らしている。そんな子供を俺

は抱き抱え俺は不眠不休で作った家に向かっていた。

俺の顔は冷や汗ダラダラである。今すぐにも暴れだしたいが少年が腕の中にいるのでそんなことはできない。…尸魂界って、警察あつたっけ…？

どうして俺がこんなにパニックになっているのか、いつこの俺が抱えている少年に会ったのかを知って貰う為にここで少し回想に入ろうと思う。



「ふう。これぐらいでいいかな」

足元に落ちていた薪を拾い俺は呟いた。両腕には沢山の薪がありこれぐらいなら大丈夫だろうと結論付ける。立ち上がり帰ろうとしたその時だった。

目の前でユラユラと揺れる影。目の前、と言っても距離はかなり離れているので遠目で見ていて見える程度である。

影は人でそれも現世で言う五歳ぐらいの年頃の銀髪の少年だった。少年は俺に近づいて来たかと思うとそのまま地面に倒れてしまった。

「……………」

俺は右手に持っていた薪を捨てて少年を拾った。

……こうして俺は初めての誘拐(?)をしてしまったのである。



子供を拾った理由は少し昔の自分と重ねてしまったのがあるだろう。流魂街には貧しい子供が沢山いる。しかし彼はその中でも「例外」である。

少年は倒れる少し前にお腹を鳴らした。すなわち少年には「霊圧」がある、と言うことだ。霊圧があれば流魂街の暮らしたんかしく

ていい。死神になれば給料が入ってきてこんな貧しい暮らしなんか
しなくていいからだ。

：まあ、それは少年の1つの未来であって選ぶのは少年。少年が死
神を目指すかどうかの話だな。

家に着くと、とりあえず少年を寝かせた。残念ながらここに敷き布
団なるものは存在しないのでそのまま地べたに寝かせることになる
のだが。：我慢してくれ、少年よ。

俺は本来の目的、昼飯を作るため炊事場へと向かった。真空パック
してある肉や新鮮な野菜を切り、水とその他の調味料を少し加えて鍋
に入れる。先程取ってきた薪を燃やし、鍋を温めた。

お手軽簡単料理だ。簡単な上に俺と少年の分までの量があると言
うなんとも一石二鳥。：：：なんとも使い方可笑しくね？

自分で自分の考えたことに野次を入れる俺は莫迦だと思う。まあ、
これは惣右介に成る前からなので治ししようがないと思っている。
これはきつと一種の病なのだろう。そうに違いない。

スープを二人分少年のいる部屋に持っていくと、スープの匂いを嗅
ぎ付けたのか少年が飛び起きた。そして俺に了承を取ることもなく
食べ始めた。

：：：俺は優しいから許してやる。ここに総隊長とかいたら少年は
既に炭となっていただろう。それほどまでに俺は優しいのだ。何の
自慢か解らんがな。

ものすごい早さで完食すると少年は俺に向かって「美味しかった
で」と言った。

また関西弁か。俺の身の回りに関西弁が多すぎると思う。隊長も
関西弁だし、確か八番隊副隊長も関西弁だったし、十二番隊の副隊長
も関西弁だったような気がする。：関西弁率高いな。流行ってんの
？ 関西弁。

「：：なんでボク、こんなところにおるん？」

「その疑問せめて飯を食う前に聞いて欲しかったな」

俺は笑顔で少年にそう伝えると少年に会うまでの経緯そして少年が死神に向いていることを話をした。

「…アンタがボクを助けてくれはったんやね。礼言うわ、ありがとう」「いやいや。別にこれぐらい。あ、そうだ。俺と君には縁ができた。その縁ついでにこの家、貰ってくれないかな？」

突然俺は家をあげる、と言い出した。少年は戸惑った顔をする。まあ当たり前だろう。俺だって急にそんなことを言われたら戸惑うに違いない。

「は？」

「いやねえ、作ったのはいいんだけどどうにも俺には活用出来なさそうだし。少年が使ってくればこの家も喜ぶと思うんだよね」

これは本当のことである。この家を作ったのはいいのだがいつ使うのが解らない。俺の家は瀟霊廷にあるし、流魂街に来ることなんて全然ないのだ。だからこの少年が使ってくればいいな、と思った。

俺が少年にそう伝えると少年は「嫌や」と言った。

「ボクはこの家に住まへん」

「そっかあ…」

少し残念だが、少年がそう言うのだから仕方がないだろう。

「…ボク、死神になる」

「え？」

「ボク、アンタのこと気に入ったわ。だから死神になる」

突然少年の「死神になる」宣言。驚いた俺は「そ、そっかあ」とし

か言えなかった。

「だからボクを側に置いてくれへん？」

「……………ん？」

「死神に成るには勉強とか色々せなあかんのやろ？ボク、文字とか全然解らへんもん。だから教えてや、アンタが」

「ボクとアンタは縁があるんやろ？」と少年に言われてなんとも言えなくなった。…………この少年、意外と頭がいいぞっ!!

そんな少年を俺はかなり気に入った。少年に指摘され、自分が笑っていたことに気がついた。

「…んー、隊長が何かと五月蠅そうだけどいいんじゃないかな」

案外あの隊長は嫌な顔をしながらも許してくれそうだ。少年は嬉しそうに笑うと「ボク、市丸ギンや」と言った。

「ギン、ね。俺は藍染惣右介だ。これから宜しく」

俺とギンは握手を交わした。



その後、ギンと色々な話を話した。今話していることは俺が猫かぶっている、と言う話である。

「へえ猫かぶつとるんやね。大人は大変やな」

「そうなんだよ、大変なんだよ」

俺とギンは家を出て、瀨霊廷へと向かう。ギンは瞬歩を使えない為、徒歩になるのだが俺にしてみれば全然苦ではなかった。久しぶりにちちゃんと景色を見ながら歩いたような気がする。

因みに今の俺の心情は可愛い弟を持った気分だ。一人っ子なので俺は凄く嬉しかったりする。

昼に家を出て日が落ちてきた。そろそろギンを抱えて瞬歩で瀟霊廷に向かおうとしたその時だった。前からドドドと沢山の足音が聞こえる。その足音は段々と俺達に近づいてきた。

「…なんや……？」

ギンが呟く。俺も何も解らないので「さあ？」としか言えなかった。

「た、助けてエ——!!」

イノシシの大群に追われた1人の男。見た目の歳は俺とそう変わらない。しかし、である。男は色々と危なかった。

「なア、あいぜ——」

俺は無言でギンの目を手で隠した。今の光景を見させない為である。

「言うな、何も言うな」

「いや、でも——」

ギンはその先の言葉を言えなかった何故なら……

「ギン！今すぐ俺に捕まれっ!!」

イノシシの大群に追われていた男は何故か全裸で、しかもその全裸の男が目の前まで迫ってきていた為、俺がギンを抱えて瞬歩で逃げたからである。

瞬歩で逃げたにも関わらず全裸の男は俺を追ってきた。後ろには

もうイノシシの大群はいない。

「た、助かったア……」

全裸の男に遭遇した場合、何処に電話をすれば良いのだろうか。伝令神機で110を押したとして、現世の警察が態々流魂街まで来てくれるか？それはないだろう。何故なら流魂街に来るには一度死ななくてはならないからだ。じゃあ……刑軍こと二番隊に連絡した方がいいのだろうか……。

俺が懐から伝令神機を取り出すと男は慌てた。

「れ、連絡だけはやめて下さいっ!!」

俺は男を冷たい眼差しで見ると言った。

「これは猥褻ワイセツだよ。男が男に男の汚いモン見ても喜ばないし逆にこっちはげっそりするわけ。それにこの場にはいたいたいな少年もいるわけだしさ。…刑軍に電話するからちよつと待ってて貰えないかな」

「刑軍!? それ、オレ死んじやいますっ!!」

「じゃあ死をもってその罪、償おうか」

にこりと笑って俺が言うと男は「オレの話も聞いてください!!」と言った。

「嫌だ」

「そ、即答ですかア——っ!?!」

男の目は絶望した目へと変わった。俺はそんな男を見て鼻で笑って刑軍に電話しようとしたその時だった。袖がグイグイと引っ張られる。引っ張った人物はギンであった。ギンは男を呆れた眼差しで見

ながら俺に言った。

「…藍染さん、ちよつと聞いてやろうや。なんか……可哀想に思えてきたわ」

「……いたいけな少年に助けられたね、猥褻男」

「変なアダ名つけないで下さい……」

ギンに言われ、俺は伝令神機を懐に戻し、渋々男の話に付き合うことにした。

「オレの名前は乾^{イヌイ} 聖^{ミスキ}。鬼道衆参席をやらせて貰っている者です……」

『乾聖』それは五大貴族である乾家の当主の名前でもある。そんな奴が今俺とギンの目の前で全裸しかも正座をしているのだ。見るに耐えない光景である。

「実はオレ、今日休暇を取りまして……。流魂街を歩いてたんです。したら流魂街の男達に襲われ、身ぐるみを全て剥がされちやいまして……」

「そのまま全裸になったんやな」

「ハイ。流石に全裸で流魂街を歩くことはこの外見では無理なので山に入ったんですが……気づかない間にイノシシの縄張り荒らしちゃつてたみたいで」

テヘツ、みたいな感じで言う乾の顔を見て俺とギンの声は被った。

「アホやろ、コイツ」

「アホだろ、コイツ」

こんな奴が五大貴族の当主の1人、しかも鬼道衆参席でいいのだからか……。俺はそう思った。

「イヤー、ホントにいいんですか？」

「洗ってない服ソレでいいなら貸してやる」

俺は乾に昨日着ていた自分の服を渡した。乾は笑って「ダイジョブですよ」と言っ受けてると「ホント、アリガトウございます」と言って服を着た。

「藍染さんと市丸くんに助けられなかったらこのままこの森で暮らすか色々と鬼道長に見つかって吊り上げられるところでした」

「いや、一度吊り上げられた方がいいって絶対」

「あ、でも多分婚約者には吊り上げられることになるんでダイジョブです」

「……は？」

「婚約者」と言う言葉に引つ掛かりを覚えた俺。なにコイツいつちよ前に婚約者とか作っちゃんでんの？この猥褻卑猥男が？（ちゃっかり卑猥を付け加えた）

……でもコイツ何気にイケメンなんだよなあ……。金髪に近い茶髪、大きく綺麗な青い瞳、綺麗な形の涙袋、全体的には細いがちゃんとついている筋肉。第一印象が悪かっただけでちゃんと話してみるとかなりいい好青年である。

……ダメだ、コイツ分析していると腹がたつ。

「あ、もうしかしたら藍染さんならあったことあるかもしれませんよ。彼女、死神なんで」

「名前は？」

「三番隊副隊長 皇スメラギミカド 帝です」

『皇』これまた五大貴族の1つの名前である。因みに俺は三番隊隊長の鳳橋楼十郎さんおわとりばしろうじゅうろうとは隊長が仲がいいので会ったことがあるのだ

が。

「あー、その反応会ったことないですわね」

「護廷十三隊は広くて大きいからな。俺だってまだまだ会ったことのない人は沢山いるさ」

「じゃあ帝は会ったときのお楽しみにしておいて下さいよ。彼女綺麗ですから藍染さん一目惚れしちゃうかも。ヤメテ下さいよホント藍染さんだと洒落にならないんで」

「綺麗ならば俺は彼女に同情するね。婚約者がこんな卑猥で変態な猥褻男なんてさ」

「なんか色々増えてませんか!？」

日も落ちてきて乾とは別れた。アイツとはこの数分でかなり仲良くなった。……でも俺はあんな奴が友達第1号なんて絶対に信じない。



五番隊に帰ってきたのは日も落ちて暗くなった時だった。思わぬ道草をくってしまったものである。

「ただいま帰りました」

「おー、遅かったなア惣右介……誘拐?」

隊長は俺からギンに視線を落とすと呟いた。勿論俺は否定する。

「違います」

そう、これは誘拐ではない。ギンが自分で望んでここに来たのだ。だから俺は何も罪を犯していない。罪を犯したのは乾だけである。

「市丸ギン言います」

「京都弁かいな。また珍しいモン拾うて来たなア惣右介」

平子隊長が悪い笑みを浮かべる。きつと俺も今、悪い笑みを浮かべているだろう。

「彼、意外に頭いいんで死神に育てようと思って連れてきちゃいました」

「ええんやない？ちゃんと育てろよ、惣右介」

「隊長じゃないんでその辺は大丈夫です」

「喧嘩売つとるなら買うで」

「いやいや」

とりあえず平子隊長はギンをここに置くことを許してくれたようだ。



ギンは俺の部屋で一緒に住むことになった。現在俺は十三番隊に書類を渡しにいくついでにギンの服を買おうと着たのだを連れて街を歩いていた。

色んな服屋を見てまわる。ギンは服には興味がないようで安く着やすい奴を適当に選んでいた。もう少しお高いやつ買ってあげるよギン。それをギンに伝えるとギンは「どうせすぐ小さくなってしまふからええんよ、適当で」と言った。

「服、興味あるんですか？」

突然後ろから話しかけられ俺とギンは振り向く。後ろには黒いストリートな綺麗な髪を肩の上まで伸ばし、紅いふつくらとした唇、白い肌とは対称的な黒い死覇装、そして腕には副官章がついていた。

——彼女は何処かの隊の副隊長か

そう気づくと同時に、彼女は俺の記憶の中にいる人物の顔と酷似し

ていることに気がついた。



隣から溢れる殺気。ボクの冷や汗は先程から藍染副隊長の殺気によって止まらなかつた。藍染副隊長が殺気を出し始めたのはつい先程。目の前の妖艶な女性が話しかけてきた頃からだつた。

目の前の女性は藍染副隊長の殺気に臆することなく笑っている。化け物だと思つた。横にいる藍染副隊長も目の前の女性も。

ついにボクの足は生まれたての小鹿のように震えだした。それでも藍染副隊長は殺気を出すことはやめない。

「…初対面だと思つていたのですが…まさかこんなにも嫌われているとは」

「失せて貰えないかな。君のその顔は目障りだ」

「初めて言われましたわ、そんなこと」

目の前の女性は藍染副隊長の言葉に傷つくことなく逆に笑つていた。笑つている女性の姿は美しいと思つたが…何か気に食わなかつた。

「そこまで嫌つていらつしやるのなら直ぐに失せましょう。その前に自己紹介をしても宜しくて?」

「要らない」

「私は皇スメラギミカド 帝と申します。先日は大変婚約者が世話になつたようで」

彼女はなんとつい先日知り合つた乾聖の婚約者であつた。ボクは少し驚く。確かに乾が言つていたように彼女は美しかった。

皇は自分の名前を告げると「実は私たち同期なんですよ、知つてました?」と藍染副隊長に聞いた。しかし藍染副隊長は皇の言葉に返すことはなかつた。皇は少し微笑むと「またご縁があれば会いましょ

う」と瞬歩で消えていった。

皇が居なくなると同時に藍染副隊長の殺気は消えた。そしてボクの足の力も消えた。地面に倒れることはなかった。藍染副隊長が受け止めてくれたからである。

「ごめんね、怖い思いをさせてしまった」

「いや、別に大丈夫なさかい安心してエな。それにしても…ものすごい嫌つとつたなア」

「僕の知り合いと酷似していたものでね。後悔はしてないよ」

…副隊長、そこは後悔しようや。

ギンにとつてはとんだ波乱万丈な1日であった。

弟子

「志波海燕くん。君を呼び出したのは他でもない。副隊長のことに
ついてだ」

志波海燕と呼ばれた青年は緊張の面影で自分の上司——十三番隊隊長 浮竹十四郎を見ていた。緊張して肩に力が入りすぎている海燕を見て浮竹は微笑む。が、しかしそれは一瞬のことであり浮竹の表情も真剣な表情へと変わった。

ピンと張り詰めた雰囲気。海燕はゴクリと唾を飲み込んだ。

「君に、この隊の副隊長をやって欲しいんだ」

元々海燕は浮竹からスカウトされ十三番隊に入隊。死神の才能と努力を惜しまない性格から僅か六年で参席となった期待の新人である。

普通の死神なら副隊長に成ることは断らない。自分の地位も上がるし給料だって今までの倍となるからだ。しかし副隊長とは普通の隊士以上に給料をあげなければやっていけない地位であり隊長まどとはいかなくともかなりの責任が問われる地位である為そう簡単にはなれない。

海燕は嬉しかった。浮竹は海燕を認めたのだ。認めたから副隊長の話を持つてきてくれた。しかし海燕は唇を強く噛み、俯いて言った。

「…考え、させて……下さい」

責任感の強い海燕は直ぐに「はい」とは言えなかった。逆に断りたいくらいだと思っている。しかし、浮竹は海燕の事を認めたから副隊長と言う重要な役割を押しした。そんな浮竹の気持ちを無下にすることは海燕にはできなかった。

そんな海燕の気持ちを悟ったのか浮竹は「焦らなくてもいいんだ。断りたいなら断ってくれて構わない」と優しく言う。

「…すみません」

何故か落ち込んでしまっている海燕を見て浮竹はパンパンと手を叩いた。まるでこの話はここで終わり、と言っているかのようだ。

先程の暗い雰囲気とは変わって明るげな雰囲気へと変わる。浮竹は思い出したかのように海燕に言った。

「そう言えば、今日十三番隊は五番隊に集合って皆に伝えておいてくれないかな?」

「…五番隊、ですか……?」

海燕が聞き返すと「そうだ」と浮竹は大きく頷いた。

「話によると五番隊副隊長 藍染惣右介が皆に始解を見てほしいと言うことだ。彼は流水系の斬魄刀で、霧と水流の乱反射により敵を攪乱させ同士討ちにさせる能力を持つらしいんだ。味方まで同士討ちにさせてしまう恐れがあるからあらかじめかからないよう始解を見てほしいと言うことだ」

「(流水系……)」

海燕はなにやら考え込むような素振りを一瞬見せると…「解りました!!」と大きく返事をした。



五番隊には沢山の隊士達が集まっていた。おそらく十三番隊以外の隊士もいるのだろう。

「うわっ……めっちゃいるなア」

自分の先輩とおぼしき人物もそこらにいる。がしかし先輩達は海燕には気づいてはいないようだ。海燕が話しかけようとするが寸前でやめる。先輩達の嬉々とした顔を見て、今は話しかける時ではない、と悟ったのだ。

(藍染副隊長、すげえ人気だな……)

藍染副隊長は何回か平子隊長の策略により隠し撮りの被害等を受けている苦勞人だ。因みにその隠し撮りは九番隊にいき、瀨靈廷通信 藍染副隊長特集”で特集されていた。

因みにその藍染特集は瀨靈廷通信の売り上げ過去最多の一位となり、僅か一時間で全て売り切れてしまうという快挙を成し遂げた。

この場にいる “藍染ファン” 達はまるで「自分はファンです!」と言っているかのように藍染特集を手元に持っていた。

少し時間が経つと、藍染副隊長が出て来て始解を見せた。彼の始解はとても綺麗で海燕は目をキラキラとさせる。

始解を見終わり海燕は隊士達がいなくなったのを見計らって藍染に駆け寄った。

「藍染副隊長!!」

「ん、君は……志波海燕くんだよな?」

海燕が「はい!!」と返事をする。藍染は「どうしたんだい?」と優しく海燕に聞いた。海燕は勇気を振り絞り大きな声で言った。

「俺を弟子にしてください!!」



「なア惣右介」

「なんですか? 隊長」

仕事なんてする素振りもみせない隊長の言葉に俺は返事をした。

「オマエのホントの斬魄刀の能力知つとんのは俺だけか？」

「そうですよ」

俺が返事をするのとソファーに寝転んでいた隊長は起き上がり「じゃアオマエの始解を見たことのあるヤツはどれだけや？」と聞いてきた。

「五番隊に入った時に先輩達に無理矢理させられたぐらいですね。任務とかは全て鬼道で終わらせてしまいますし」

「ほな、瀨霊廷における死神全員に見せてこい」

「は？」

突然の無茶振りのせいで俺は書類を書く手を止めてしまった。因みに今の平子隊長は真剣なような…悪人顔のような…となんとも微妙な顔をしている。

「悪い予感がするんや」

「悪い…予感？」

神妙な顔で頷く隊長。隊長は顔を見上げ、天井を見ながら言った。

「俺の悪い予感、以外と当たるんよ。だからしといた方がいい。オマエの能力わりと使えるしな」

「万が一に備えることも大切なんやで？」と言う隊長。確かに何かあったとき、瀨霊廷の皆が『鏡花水月』の催眠にかかっていると動きやすいこともあるだろう。…珍しくマトモなこと言ってるなこの人…。

コンコンコン

ドアのノックと共に「九番隊です。頼まれたものをお届けに参りました」と言う声が聞こえた。

「……頼まれた、もの……？」

「……ちよつ、待つ——」

最初は解らないような顔をしていた隊長だが思い出したのだろうか。急に焦った声へと変わった。そんな隊長を見て思った。

……怪しい

あの慌てようは異様である。なんだかんだ食えないような顔をしているあの隊長が今俺の前で慌てているのだ。

……何か隠してるな、コイツ

俺は慌てている隊長を横目で見ながらドアをノックしてくれた九番隊隊士に「入ってください」と声をかけた。

「惣右介!？」

「失礼します」

九番隊隊士は律儀に入る前に一礼をし、隊長の元へと近づいていた。

「平子隊長が予約していました。『瀨霊廷通信 藍染副隊長特集』です」

「お……僕の……特集……？」

全く身に覚えの無い特集が組まれていたことに俺は今知った。九番隊隊士は平子隊長に茶封筒に包まれた雑誌らしきものを渡すと隊首室から出ていった。

「……平子隊長。あなた、知っていましたね……？」

「ちちち、違うんや！これはちよつとワケありで——」

「問答無用っ!!」

これは瀨靈廷にいる死神に始解を見せる日の一週間前の出来事である。



そんなこんながあり、無理矢理隊長のせいで人前で始解を見せるイベントなるものを実行してしまった俺は今、とてつもなく焦っていた。始解を見せるだけのイベントだったはずなのに目の前の志波海燕は俺を師匠にしたいと言ってきている。

「藍染副隊長の綺麗な始解に俺、惚れました!!同じ流水系の斬魄刀ですし学べることがあると思うんです!!」

「そ、そうか……」

……つてイヤイヤヤ!!危うく納得しかけたけど！俺ホントは流水系の斬魄刀じゃない!!無理に決まってんじゃん！

と、とにかく早くこの事態を収拾させなくては。こんなところ隊長に見つかったら面倒なことに……。

「あ、おったおった。こんなところにおったんか惣右介」

自分でフラグをたてて自分で回収してしまったアアア!!

「浮竹んとこのやつと何を話しとるん?……オマエまさか男にまで告白……」

「誤解を生むようなこと言うんじゃねエエエ!!」

「藍染副隊長をししよムゴツ!」

隊長に告げ口的な事をしようとした志波の口を押さえる。…隊長

にそんな事知られたら面白そうとかそんな理由で師匠させられるに
違いない。この事態を打破するためにもそんなことは言わせられな
い。

「面白そうなハナシしとんなあ。…何隠しとるん？惣右介。ホラ隊長
に言うてみ」

「嫌です」

「ムゴツ、ムゴゴゴ！ムゴムゴムゴゴムゴゴゴ！！」

（訳：俺、藍染副隊長に！師匠に成つてもらうよう頼んでたんです!!）
「そうかそうか。面白そうやん。やてあげてもええんちやう？惣右
介」

「いや、なんで話通じてんだよアンタら」



文字の読み書きをしてたけど解らん文字が沢山出てきたから藍染
副隊長に教えてもらおう思うて探してたんやけど……。

「…なんでそない疲れた顔しとるんや？副隊長」

「もうやだ。俺、五番隊やめようかな…」

「賭けには勝つたで惣右介!!」

「これからよろしくお願いします!!」

異様に疲れた顔しとる副隊長どもの凄い嬉しそうな顔をしとる隊
長と……あと知らん人。全くこの状況が掴めん。一体何があつたん
や。

「平子隊長、誰ですか？コイツ」

「志波ア、兄弟子が顔出したでアイサツしとき」

「志波海燕です!!ヨロシクお願いします！兄弟子さん!!」

……いつの間にかボク兄弟子になつとつた……。ほんまこの短時

間で何があったんや副隊長…。

十二番隊

隊首室の扉を開ける。部屋には人っこ一人いなく、机の上に山のよ
うに積まれた書類しか置かれていなかった。勿論そのうち書類も手
付かずである。そんな書類を持ち上げるとヒラヒラと白い紙が落ち
てきた。地面に落ちた紙を拾い書いてある文章を読む。

『判子置いとくからよろしくなア〜』

クシヤリ、持っていた紙が原型をなくす。さて、どうやってあのサ
ボリ魔隊長を血祭りにあげてやろうか、隊長に対する怒りで真っ赤に
充血させた目で黙々と考えることにした。



「…ホントにええんですか？仕事サボって」

「ええんや、ええんや。時にはなア大人はサボらなあかん時があるん
や」

五番隊隊長 平子真子は五番隊副隊長 藍染惣右介の一番弟子
市丸ギンを連れて十二番隊へと続く道を歩いていた。

「何しに行きはるんですか？」

「喜助がオマエに会いたい言うのとつたからなア。オマエも会ってみた
いやろ？喜助」

「いや、興味ありまへん」

「アイツはおもしろいで。とんだ狂ったマッドサイエンティスト科学者やから」

「いや、興味ない言うてるやろ」

市丸ギンは興味ないと何度も言うのだが人の話を聞かない平子真
子の『喜助トーク』は続く。対して興味の無い話題を悶々と聞かされ
ているギンの表情は歪んでいった。

「(あかん。この人、人の話聞かへんわ)」

「はあ」とギンはため息をつく。どうしたら『破道』の高い数字の詠唱破棄が出来るかと一人で自主連をしていたところいきなり真子に「外に行くで！」なんて言われ外に無理矢理連れ出されたギンだったが今となればかなり後悔ものだ。

「(…藍染副隊長の部屋で勉強しとけばえかった…)」

「おい、そこのハゲ金髪にチビ銀髪」

後ろから話しかけられギンの足は止まるが周りを見ていない、聞いていない、空気読めない、の三拍子が揃っている真子は止まらず一人で『喜助トーク』に華を咲かせていた。

そんな真子を無視してギンは振り返り、話しかけてきた少女——いや、死覇装を着ているところを見るときつと死神なのだろう。そう考えるとギンよりも歳上…な女性を見た。

「ボクらになんか用か？」

「オマエに用なんてあらへんわ。用があんのは———そのハゲた金髪だけやアっ!!」

突然女は大声を出したかと思うと真子にミドルキックを食らわせた。真子は綺麗に放射線を描きながら飛んでいく。

「痛いわっ!!何すんねんひよ里!!」

「ウチが話しかけとんのに何無視してんのや!アホか!!死ね!!ハゲ!!」

真子は綺麗に地面と接吻キスをした後ミドルキックを食らわせた女性

———十二番隊副隊長 猿柿ひよ里を怒鳴った。

しかしひよ里は反省したような顔ではなく、無視したからミドルキックを食らうのは当たり前のような顔をして今も尚横になっている真子をしたげシゲシと蹴っていた。

「痛いわ！ヤメロ!!オマエ分かつとんのか!?!俺隊長、オマエ副隊長!!副隊長は隊長に暴力ふることは赦されへんのや!!」

「アホか!!ろくに仕事もせえへんでそこら歩いとるやつに隊長名乗る資格なんてあるわけ無いやろ!ボケ!!」

「仕事してますう〜!!今日だつて仕事してきましたあ〜」

息をするように嘘をつく真子を見てギンはため息をついた。真子は今日一日一回も書類を触っていないと言うのに仕事をしてきたと言うのだ。あり得ない話である。

「そうですか。仕事、したんですね。…ところでその隊長がやったと言う書類はどこですか?低能な僕では探すことが出来なかつたので是非とも教えてもらいたいです」

「隊長がやった」や「低能な」「出来なかつた」等と所々強調された言葉。そして真子にとっては凄く聞きなれた声が後ろからした。

「藍染副隊長!!」

ギンが走つて藍染の元へと行くと藍染は笑つて「隊長と一緒にいたんだね」とギンの頭を撫でた。真子はギギギと壊れたような機械音を首から発し冷や汗ダラダラの顔で「よ、よう…惣右介」と右手を上げた。

藍染は真子の後頭部を鷲掴みにするといつもの営業スマイルで告げる。

「で、どこですか?そのやった仕事というのは」

「い、いやあ……どこ置いたかなア……は、ハハツ……」

「ホラ、早く思い出してくださいよ」藍染は手に力を込める。真子の頭がギシギシと悲鳴をあげた。

「痛い!!痛い!!割れる!割れるからヤメテ!!」

「どうです?思い出せました?」

「ホントはやってません!手エつけてません!嘘ついてスイマセンでした!!」

「帰ったら、やりましょうね」と脅迫染みた言葉を残して藍染は真子の頭を離れた。真子は叱られた幼稚園児のように目に涙(?)を溜めてコクコクと頷いた。

——滅多に怒らない人が怒ると怖い

これは世の中の法則である。



結論から言うとおひよ里と藍染はグルだった。サボり魔真子を懲らしめるための作戦を考えていたところに涅のお使いくろつちをしていたひよ里と鉢合わせし、真子の悪口大会で華を咲かせ、気が合い殺つちやおみtainなノリで作戦を実行。結果は大成功と言ったところである。見事、真子に恐怖を植え付けることができた(藍染は)。

「で、何のためにギンを連れてここまで来てたんですか?」

「喜助がギンに会うてみたい言うてたから会わせてやる思うて連れてきたんや」

「喜助って……ついこの前十二番隊に着任した『浦原喜助』のことですか?」

「せやせや。惣右介も着任式の時少し会うたやろ」

俺とは全然面識のない浦原喜助。…ホントこの人顔広いよなあ。

「アイツが着任した後大変やったんやで？ひよ里は喜助なんか認めへん言うて大暴れするし」

「うっさいわ!!今も認めとらんわ!!ボケ!!ハゲ!!」

「これでもだいたい大人しくなつたんやで」

そう言つて平子隊長は猿柿副隊長を指差した。その指差した指は猿柿副隊長によつてへし折られていた。グキリと嫌な音をたてていたので確実に痛いだろう。現に隊長は俺の目の前で痛すぎて悶絶している最中である。

「……今日と言う今日は許さんで。何回も俺、同じこと言うてるよなあ」

猿柿副隊長によつてへし折られた指を庇いながらヨロヨロと平子隊長は立ち上がり言った。

「オマエなんか怒つても全然恐くないわ!!」

平子隊長に臆することなくキツと猿柿副隊長は平子隊長を睨み付ける。そして…ドガツ、バキツ、と嫌な音をたてながら喧嘩をし始める二人。こんな道のど真ん中で喧嘩なんぞやめて欲しいものである。そんな二人を見てギンが隣で呟いた。

「…案外、この人達仲ええよな……」

「喧嘩するほどなんとやら、だよギン」

「何ですか？それ」

「帰ってから辞書を括つてみるといい」

結局隊長達の喧嘩の決着はつかず延長戦に持ち込もうとしていたので俺が二人の喧嘩を止め平子隊長を引きずって隊舎へと連れていったのだった。喜助がどうのこうのやひよ里殺す等隊長が叫んでいたが俺は知らんふりを決め込んでいた。そんな俺を見てギンがどこからかガムテープを出して言った。

「副隊長、ガムテープいります?」

「貰っておくよ」

何故かこの場でガムテープを持っていたギンからガムテープをもらい平子隊長の口にぐるぐると巻き付けた。所々髪の毛を巻き込んでしまったが…まあ、いいだろう。

「…いつそのこと藍染副隊長が隊長をやればええのに」

ギンの期待の眼差しやそんな言葉は見えないし聞かなかつたことになった。隊長なんてめんどくさい役職誰がするものか。

教えて

「破道の三十一」

しゃつかほう
「赤火砲!!」

志波海燕は手に霊圧を込め、的に赤い炎の火の玉を放とうとしたが、しかしうまくいかずその場で不発してしまった。

「十回中八回成功か。：微妙やな」

「んー、鬼道って苦手なんだよなア」

ギンの言葉に海燕は悔しそうに頭をガシガシと搔いた。

五番隊敷地内訓練場。そこで海燕とギンは修行をしていた。海燕が浮竹に副隊長の話を買ってから早一週間。藍染の（無理矢理）弟子になってから早一週間が過ぎていた。

ギンと海燕は同じ藍染の元で学ぶものとして関わりそこから友好関係が深まった。そんな二人を見て藍染は海燕を弟子にして良かったかもしれないと思っているのだがそんなことを二人は知るよしない話である。

「何で不発しちゃうんだ？」

「……霊圧の込め方があかんとちゃうの？」

「霊圧の込め方って言われてもいつも通りさつきと同じ込めかたでやったしよ……」

修行に行き詰まる二人。二人の顔はとても苦々しいものであった。

「ギン、昼御飯食べに行こうか」

そんな時、救世主が現れた。言わずもがな二人の師匠、藍染惣右介である。ギンと海燕の顔が苦々しいものから光輝く子供の姿へと変貌を遂げる。そんな二人を見て藍染は来るタイミングを間違えたと

後悔をするのであった。

「師匠!! 鬼道を教えて下さい!!」

「師匠はやめてって何度も言っているだろう? 海燕君」

「ボク達修行行き詰まってん。ええとこに来てくれたな、藍染副隊長!」

「……ちよっと人の話聞こうか」

鬼道があーちやらこーちやら、修行がどーちやらこーちやらと勝手に人の話も聞かずどんどんと進めていく二人。

「…人の話を聞け」

最後には鉄拳チョップを食らわされた二人だった…。



「不発?」

「十回中二回、不発しちまうんですよ…」

海燕がそういうと藍染は「そうか…」と呟いて悩み込んだ。なんやかんや考えてくれるらしい。

「鬼道って言うものは、言霊の込め方や霊圧の扱い方で大きく変わるんだ」

「言霊? 霊圧?」

藍染が「ああ」と大きく頷く。

「自分が破道でも縛道でも何かを出すときの強い思いが言霊となつて大きな威力を出すし、自分の霊圧の纏い方でまた変わるんだ」

「霊圧の纏い方ってなんや？」

「今のボクらみたいな纏い方じゃあかんの？」とギンは藍染に聞いた。藍染は「ダメって言うわけじゃないよ」と言う。

「例えば、戦闘大好きで有名な十一番隊隊長鬼巖城剣八きがんじょうけんぱちがいるだろう？僕は彼とは馬が合わなくてね会うたびに霊圧に当てられるんだが…いつも喉元に剣を突き付けられている感じがするんだよ」

「まあ会うたびにそんな事をされても恐怖感情は一切芽生えなかったけどね」なんて平然と言いのける藍染は普通に凄い。神経が凶太いのだろうか。

「そう言や前に京楽隊長言ってたなあ。「山爺に本気の霊圧を当てられたことがあるけどその時は周りの風景が一瞬地獄と化したような気がした」って…。そんなもんですか？」

「そんな感じだね」

「……奥が深いなあ」

「海燕君は鬼道を出すとき、どんなことを思いながら放っている？」「え？」

急な質問に海燕は戸惑った。

「ど、どんなんて…俺はどっちかって言うて鬼道が苦手だから…」

「それがダメなんだよ」

「え？」

「わざわざ技を放つときまで苦手意識を持たなくていいんだ。そんなに神経を集中させておくよりも相手をどう倒すか、とか作戦を考えていた方がまだマシだね。ホントは詠唱の意味とか詠唱を妄想したりするのが一番いいんだけど…戦闘中にそんな事を考えていたら直ぐに殺されてしまう」

藍染はニコリと笑っていった。

「今度からの鬼道系の修行は詠唱に注目してやってみるといい」
「詠唱の意味かあ…。よし、ギン！一緒に勉強するか!!」

ドタバタと走っていかうとする二人を藍染は捕まえる。

「勉強の前にご飯だ」



「海燕君、副隊長就任おめでとう」

「い、いえっ!!こちらこそありがとうございますっ!!」

海燕はつい昨日十三番君副隊長に就任した。本来、責任感の強い海燕はとても光榮な立場であると共に若造の自分が就いていい立場ではないと思っていた為、断ろうと思っていた。浮竹に断る前、海燕は藍染に相談をしていた。

「藍染副隊長、俺…。副隊長の話断ろうと思ってます」
「そうか」

海燕の言葉に横槍を入れることもなく静かに話を聞いてくれる藍染は海燕にとって相談しやすかった。一通り海燕が藍染に自分の考えを話すと藍染は言った。

「海燕君。世の中に完璧な人間なんて存在しないよ」

「え?」

「君は色々と考えているね。考えることもいいことだが、時には実行しないと何もならない。正直言うとね僕も副隊長なんて今すぐ辞め

たいさ」

突然のカミングアウトに海燕は「えー!!」と大きく叫び立ち上がった。

「それ、本当ですか、副隊長!!」

海燕が聞くと藍染は少し笑いながら「本当だよ」と言った。海燕の開いた口が閉じるのには時間がかかりそうだ。

「正直僕は上に立つ、って言うのがね苦手なんだ。上に立つものは下にいる者達を守るためより一層の努力をしなくてはならない。副隊長も隊長も隊士の命を預かる立場だからね。でも、簡単に辞めます、って言って辞められる立場でもない。少なからず僕に命を預けてくれている隊士は沢山いるし尊敬だって何だっしてしてくれる者もいる」

「僕の場合はこの五番隊に入隊したときから副隊長に就いていたからね。緊張のあまり若干人間不信になったことだってあったさ」と懐かしそうな顔をしながら語る藍染。海燕は啞然する他にはなかった。

「本当はもう僕はここにいない筈だったんだ」

「……え?」

「僕は平子隊長よりもこの五番隊に長くいる。勿論平子隊長の前には隊長も知っている。ここだけの話なんだが…前隊長は失踪なされたんだ」

藍染の顔から懐かしみが消え無へと変わる。

「見つからなくて僕が隊長職も兼任してた。正直、もうこの隊にいることは無理だと思ったよ。…死神なんて辞めようと思った。それほ

ど隊長の失踪は僕の心にダメージを与えたんだ」

「……」

「でも平子隊長に会ったとき、前隊長を上回る程に惚れた。ついていきたいと思ったし尊敬もした。だから辞めなかつた。あんな隊長だけど僕は尊敬している。彼の下しかつかないと心に誓ったんだ」

藍染は海燕に聞いた。

「海燕君にとっての浮竹隊長はなんだい？」

「尊敬の出来る自慢の隊長です!!」

即答だった。浮竹にスカウトされたあの日、浮竹の包容力に人格に人間性に惚れ込んだ。この人についていきたいと思った。

「副隊長は隊士の命を預かるだけではなく隊長をサポートするのも仕事の1つだ。隊長から海燕君に副隊長の話が来るってことは……浮竹隊長は海燕君に近くで支えて貰いたいんじゃないのかな」

海燕の決心が、ついた。

それから数日後、浮竹と話をつけた海燕は見事副隊長へとなった。就任式では思わず藍染が吹き出しそうになるぐらいガチガチに海燕は緊張していた。ちなみに平子は藍染の隣で爆笑して藍染とひよりに制裁を食らっていた。

「(浮竹隊長が俺に隣で支えて貰いたい、か。本人に言われたワケでもねえのに……以外とチョロいんだな俺って)」

就任式が終わり海燕は右腕についている副官章を見て苦笑した。

「海燕」

「浮竹隊長!!」

後ろから話しかけられ、海燕は振り向く。

何か用事でもあるのだろうか？そんな事を思っていると浮竹が口を開いた。

「…大変なことも沢山あるだろうがどうか俺を、十三番隊を支えてくれるだろうか」

浮竹の問いに海燕は少し目に涙を溜め言った。

「こんな未熟者の俺でいいのなら……よろしくお願いしますっ!!」



「海燕を説得してくれたのは藍染副隊長だと聞いた。ありがとう」

「いえ、僕は何もしていませんよ。ただ少し自分の昔話をしただけです」

十三番隊隊首室に今、藍染と浮竹はいた。今日は浮竹の調子も良いらしく起き上がっている。

「彼は責任感の強い男です。きっと部下達からも慕われているでしょう」

「やはり解るか？もう十三番隊は海燕無しでは生きられないさ！」

「ハツハツハ！」と笑う浮竹。自分の自慢の部下を相変わらずに褒められ嬉しいのだろう。

「彼は副隊長についてまたより一層の努力苦々しい励んでいます。体を壊さないよう浮竹隊長からも厳しく言っておいてくださいね」

「うーむ、藍染副隊長は四番隊みたいな事を言うな！」

「浮竹隊長も駄々をこねずちやんと薬を飲んでください」

「……………」

「そんなことでは良くなる体もよくなりませんよ」

四番隊隊長 卯ノ花烈のような笑みと圧倒的な威圧。思わず浮竹はゴクリと唾を飲んだ。

「…藍染副隊長、もしかしてだが母親は卯ノ花隊長だったり……」
「しませんよ」

藍染は苦笑した。

両手に華

両手に華…ではなく両手に書類の束を持っている藍染は昔の行動について振り返っていた。

…最近俺、クサイ台詞しか言っていないような気がするっ!!一番クサイと思っただのは海燕を副隊長に説得した時の台詞だろうか。あれはもう黒歴史に認定されるほどクサイ。

目の前に書類の束が有ると言うのにそれに手をつけず、昔の自分の行動に悶絶する藍染。そんな藍染を見て平子は言った。

「オマエ仕事のやりすぎでヤバなっとなるで。今日と明日は休みにしてやるさかい帰れ」

「…どうやったたらタイムマシンって作れるかな」

タイムマシン作って過去に言っただけ自分をおもいつき殴りたい、そんな衝動に駆られる藍染。勿論平子の話は聞こえていない。

「おい、ギン。ちよつと卯ノ花隊長呼んできてな」

平子は本気で藍染の頭を心配した。

仕事の鬼、ワーカホリック仕事中毒等と変なあだ名を多数平子からつけられている藍染。勿論本人は知らない。…つて言うか知ってたら今頃平子は半殺しにあっていることだろう。

ともかくそんな男でも休みは必要らしい。平子は藍染から書類の束を取り上げ無理矢理休ませた。因みに藍染の診察をしに来た卯ノ花隊長の話によると「カウンセラー五番隊に置くのをオススメします」と平子は言われた。…そこまで藍染は病んでいたのか(勘違い)。

「平子隊長がそない仕事せえへんからちやう?」

「えっ…俺のせいなん?俺が悪いん?」

少しずつではあるが机の上に置かれた書類を無くしていつている平子と藍染の分の書類を片付けているギン。ギンは五番隊に来てすぐ平子が書類仕事から逃げる為に書類整理の仕方を無理矢理叩き込まれていた。その為今、藍染が残っていた仕事をギンが肩代わりしているのだ。

勿論ギンが書類整理出来るなんて藍染は知らない。平子がサボるために教えた、なんてバレたらきつと藍染に酷い仕打ちが来ると目に見えているからである。…下手したら殺される可能性も出てくる。

「とりあえず一人にしたけど…えかったんかな？」

「首吊りとかしとらんよね？」なんて縁起でもないことを言うギンに平子は吃りながらも「…ないやろ…」と言った。全くもって説得力皆無の言葉である。

「…カウンセラー、置いた方がええんかな」

平子は窓から空を見ながら一人呟いた。



タイムマシンについて考えていたらいつの間にか家にいた。覚えていることと言えば平子隊長に「ちゃんと休めよ!!」と強く念を押されたことぐらいだろうか。……一体何があったんだ？

ついに仕事をする気になったのかと嬉しく思いながら一先ず黒歴史とタイムマシンの事を忘れることにする。

「何故か休みを貰ってしまった。…考えると久しぶりだな休み」

確か最後に休みをとったのはギンを拾ったあの日だったような気

がする。そう考えるとかなり休んでないんだなあとわかった。…護
廷十三隊はブラック企業か。

久しぶりすぎる休みの為何をしていいのかわからない藍染。

「…そういえばこの前手紙来てたな。それでも読むか」

忙し過ぎて読めなかった手紙。差出人は榛巳の父親だった。内容は「最近実家に帰ってきていないようだが元気にしているか」や「色んな人に虐められていないか」「仕事はきちんとやっているか」等であつた。

「……………心配性かよ……」

藍染の顔が少し嬉しそうに綻ぶ。そして手紙の最後の行にはこんなことが書かれていた。

「忙しいと思うが、榛巳の墓に遊びに行つてやつてくれ」

よくよく考えれば藍染は護廷十三隊に入つてから墓参りに一度も行つていなかった。そう考えるとここ百年ぐらいは榛巳と顔を合わせていないことになる。

「…今日は丁度休みだし、行くか!!」

藍染は立ち上がり、墓参りに必要な道具を持った。バケツに雑巾、花瓶は……念のために持つていこう。花は…墓参り行く途中に買つていくか。服は汚れてもいい服をで、墓を光輝く墓に!そんな目標をもつて藍染は墓参りに出掛けた。



「…墓参りに最適な花つてなんだ…?」

生憎、光右介時代も惣右介時代も墓参りなんぞしたことがなかった為、わからないことだらけだ。花なんて何を選べばいいのか男の藍染にはこれっぽっちもわからなかった。藍染はどうしたらいいのかわからず花屋の前で右往左往する他になかった。

「あのく、すみません。そこで何をしてるんスか？」

「…浦原、隊長ですか。どうもご無沙汰してます」

「イエエ……」

花屋の目の前を通ったのは十二番隊隊長 浦原喜助だった。この人は何かとうちの隊長と仲が良かったので多少の顔見知りだ。

浦原隊長は俺の服装を見て「今日は休みなんスか？」と聞いてきた。

「ええ。珍しく隊長が仕事にやる気を出したみたいで休めと言われまして」

「あらら。あの平子サンがスか？……風邪でも引いたんでしうか」

なんとも酷言い草である、が否定は出来ないので何とも言えないのが今の現状だと言ったところだろうか。

「何か迷っていたように見えたが…どうかしたんスか？ボクが手伝えることなら手伝いますよ？」

あの藍染がわからないことがある、と浦原は知った。藍染のわからないことは一体何なのか。それにただ浦原は興味が湧いたのだ。

藍染は少し恥ずかしそうに笑うと「恥ずかしながら…」と言葉を続けた。

「墓参りに最適な花とは何ですかね？僕の知り合いの墓参りに行くこうと思ったのですが…生憎、知り合いは花よりも鍛練に興味を持ってい

たので好きな花がなく…」

浦原は「ああ」と頷いた。墓参りの花で悩んでいたのか。何とも意外だ、そんなことを浦原は思う。正直言うと藍染の墓参りの相手が知りたかったが浦原はそんな野暮なことは聞かなかった。

「墓参りの花で主流なのは、カーネーションとかツスカね。他にもアイリスとかユリとか」

「そんな花があるんですね…。凄い」

「ボクもそんなに詳しくは知りませんが」

浦原はポリポリと頬をかく。藍染は浦原に「ありがとうございます。助かりました」と礼を述べた。

「別にこれぐらいいいツスよそんなに感謝させることボクしてないツスから」

「それでも僕は助かりました。今度、十二番隊に御礼の品持っていきますね。高いのは流石に無理ですけど…」

「いやあ、ありがとうございます」

ただ花を教えただけなのに今度御礼の品を持っていくと言われた浦原。どんな御礼の品が来るのだろうか。

「（お菓子等だったら夜一サンが喜びますかね…）」

「お菓子、持っていきますね」

どうやら藍染には浦原の考えていたのが読めたようだ。浦原は思わず苦笑いになる。

「ホントありがとうございます」と浦原は礼を述べると「ではボクはこれで」と一礼して行ってしまった。

浦原を見送ると藍染は花屋でカーネーションを買った。

「(平子サンが随分、藍染副隊長に肩入れしてましたが……なんとなくわかるような気がするツス。少なくともひよ里サンとは違って急に殴ってきたりはしないでしょうし、気が利くツスね)」

少しだけ藍染のことが気に入った浦原だった。



バケツに水を見て入れて雑巾を濡らす。定期的に榛巳の父親が来ているのか墓を拭いた雑巾は案外綺麗で大して汚れていなかった。

墓に置いてあった花瓶にはまだ綺麗な花が生けられていた。念のために花瓶を持ってきてきた花瓶にはまだ綺麗なため息をついた。家から持ってきた花瓶に水を入れ、浦原に教えてもらったカーネーションなるものを花瓶に入れる。赤い花卉に水滴がついていて、その水滴が日光に反射して輝いている。とても綺麗だ。

「来るのが遅くなった。…ごめん。俺、護廷十三隊の副隊長やってるんだ。隊長はサボり魔だけど…心の開けるやる時はやる人だ。それに弟子二人も持ちこたった。人の話とか全然聞かないけど、楽しくやってる。榛巳はどうだ？」

榛巳は俺の問いに答えてくれているだろうか。正直俺には榛巳の姿が見えないので何と言っているのかわからない。

「……うん、ごめん解らん。…榛巳もそつちで元気でやれよ」

俺は手を合わせ、黙想する。数秒後、閉じていた目を開け、立ち上がった。朝、家を出た筈なのにもう茜色の空が広がっている。燃えるような夕焼けはとても美しい。そんな空を見ながら俺は家に帰った。

……「燃えるような夕焼け」とかクサクね？やっぱタイムマシン、
必要かもな。

帰りに十二番隊へのお菓子を買って逃げるように帰路についた。

借りた服

「えーと、ここがこの道で……あれ？こつちか？」

白い紙に黒いインクで書かれた直線と文字。所謂、地図であるが男はその地図をひっくり返したり、回したりしている。どうやら迷っているようだ。

「藍染さんから借りた服を返しに来ただけど……瀨霊廷のことはさっぱり解らん」

「なら私が案内してあげますよ」

「帝は仕事だしなア。うーん……」

「案内してあげますよ、って言ってますよね」

横からクイツと顔を出したのは首もとで黒髪を三つ編みにしている女性だった。白い羽織、隊首羽織を着ているところを見ると隊長格なのだろう。

「四番隊隊長 卯ノ花烈うのはなれつです。道に迷っているようでしたので」

「あ、すみません。俺、乾聖って言います」

名乗られたので名乗り返す乾。卯ノ花と言った彼女は「目的地は何処ですか？」と聞いてきた。

「えーと……五番隊？ですかね、藍染さんがいるところって」

「ええ、五番隊ですよ。藍染副隊長にご用事ですか？」

卯ノ花の問いに乾は「はい」と返した。卯ノ花は優しそうに微笑むと「では行きましょうか」と歩きだした。乾は慌てて卯ノ花を追った。



「……………」

「……………」

「……………」

「……………」

沈黙が続く。当たり前だろう。二人は顔見知りな訳でもなければ親しい仲でもない。喋ったのは冒頭に書いてある数分だけ。

「(ち、沈黙が辛いイっ!!)」

大して仲が良くない卯ノ花であるからか、乾にとっては凄く沈黙が辛く感じた。

「(服返しに來ただけなのに何この仕打ち!!)」

乾は頑張って話題を探す。そして(少し)閃いた。

「う、卯ノ花さんはどうしてここに…?隊長って忙しいと聞いてますが…」

「私も藍染副隊長に用があったんです。が、今日はやめることにしました」

「えっ、それってもうしかして……………」

「(俺の、せい…?)」と乾は思う。卯ノ花の顔を見ても全然怒っては無さそうだ。「(だが…………)」と。やはりここはレディファースト、女性優先だ。

「俺、よ、用事思い出した!!きよ、今日は帰ろうかなア…」

「下らないお芝居はやめなさい、乾聖」

「え、っ、く、下らない…………?」

どうやら卯ノ花は乾が気を使って帰ろうとしていたことがあ見通しのようにだった。…まあ乾は卯ノ花の「下らない」と言う言葉にショックを受けているが。

「別に貴方のせいではありません。ただ私の予定が想像以上に今日はハードだった為、日をずらそうと思ったのですよ」

「な、なら俺の案内なんて…」

「一度私から引き受けたのです。ここまで来てやめませんよ」

「いや、ホント大丈夫ですから」

「……」

卯ノ花がにこりと笑う。乾の表情筋がピシリと固まったような気がした。タラタラと止まることをまるで覚えていないような冷や汗、心臓を生で鷲巢かみされているような感覚、肌にヒシヒシと伝わる殺気。乾は自分の身を、まだまだ生きるため卯ノ花のこと説得をやめた。

卯ノ花もまた、殺気を出すのをやめた。すると乾の体が軽くなる。どうやら卯ノ花の威圧で体が重くなっていたようだ。

「(う、卯ノ花隊長恐エエエ!!)」



卯ノ花の恐怖を実感した数分後、乾の目的地五番隊に到着した。

「ここが五番隊です」

「ありがとうございます!!」

「元気がよろしいことで」

卯ノ花は「では」と言うのと瞬歩で姿を消した。もう乾の周りには卯

ノ花の霊圧は感じられない。

「(は、疾え…)」

卯ノ花が率いる四番隊は救護を主に扱う部隊だと乾は聞いていたが、しかし…である。

「(あの人が絶対其処らの隊長よりも強エって、絶対)」

「(もうしかしたらウチの鬼道長よりも強いかも)」なんて思いながら乾は五番隊隊舎へと入っていった。



乾がまだ、卯ノ花という頃。藍染は五番隊に出処していた。

「あれ？副隊長、何でこんなところにおるんですか？今日まで休みな筈やろ？」

「休みの日に何したらいいのか解らなくてね。仕事も残していたし、その分をきっちり今日やろうかと思つて」

「ワーカーホリック
「仕事中毒…」」

「何か、言つたかな？」

にこりと笑つてギンを見る藍染。ギンはそつと目線を外した。藍染は自分の机に行くと、既に終わっている自分の仕事を見て吃驚していた。

「え、終わつてる…何で」

「まさか、あの…隊長が…？」震える手で藍染は終わっている書類を見た。丁度その時、平子が部屋に入ってきて藍染とギンの視線が集ま

る。

「おはようさん。…って何で俺こない見られとるんや」

「隊長、これやったの隊長ですか？」

藍染は平子に書類を見せる。平子はニヤリと笑って「せや、凄いやろ俺。やれば出来るんやで」と言った。藍染は平子の言葉に「そうですね」と返すと白い紙を平子に渡した。

「ん？なんや、これ」

「その白い紙に『あ』と書いてみてください」

平子は訳もわからないまま藍染に言われた通り『あ』を書く。平子の『あ』を見た藍染は平子の頭を鷲掴んだ。メキメキと平子の頭の軋む音がする。

「え、え、何!？」

「隊長…ホントは書類なんてやってませんよね？明らかに字の書き方違うじゃないですか。一体…誰にやらせました？」

更に平子の頭の軋む音がする。平子の頭が軋む音に比例するかのよう平子の悲鳴も段々と大きく、苦しそうに変わっていく。

「ちよつと!!ちよつとは俺がやった!!」

「……ちよつと……?」

藍染の声に怒気が含まれる。平子は「ひい」と小さい悲鳴を漏らした。

「ギンが…手伝ってくれたんや…」

「手伝って、くれた…?」

藍染の手に倍の力が入る。平子は大きな悲鳴をあげながら先程の言葉を訂正した。

「ホントは手伝わせました!!ギンを手伝わせました!!!」

真実を聞き藍染は「はあ」とため息をつくと平子の頭を離した。

「…ギン」

「は、はい!!」

「隊長の頭は信じてもいいけど口は信じてはダメだよ」

「はいっ!!!」

生きる屍となった平子を見てギンは返事をするしかなかった。



五番隊隊舎に入ると乾は近くにいた隊士に藍染の居場所を聞いた。

「案内しますよ」

「あ、ありがとうございます」

話によると藍染は『隊首室』と呼ばれる隊長、副隊長しか入ることの許されない場所にいるのだとか。隊首室につくと「ギヤアアア!!」等と腹の底からだしたような悲鳴が聞こえてくる。

「えつと…これって……」

「多分、隊長と副隊長の戯れですね」

「戯れ……?」

これが戯れか。悲鳴をあげるほどのおぞましい何かをやっている

と言うのか。

「…五番隊恐エ。この日常がさも当然のように言っているこの隊士も恐エ」

暫くすると悲鳴もおさまった。どうやら決着(?)がついたらしい。隊士はトントンとドアをノックする。

「…入ってええで……」

「失礼します」

疲れたような声に入室許可をもらい乾と隊士は隊首室に入る。

「副隊長にお客様です」

「ども、藍染さん」

部屋に入ると藍染さん他に銀髪の少年、そして金髪ロン毛がいた。少年は前あったことがあるが金髪ロン毛はない。乾は少し新鮮な気分になった。

「あ、あの時の…」

「あん時の…」

藍染さんと少年は乾を指差して言った。

「変態」

「違うっ!!」

少し、認識が可笑しかった。



「何しに来たんだよ、変態」

「いや、まじで変態はやめてください。お願いします」

「全裸さん、どないしてここに来たんや?」

「いや、ホントそんなに昔の記憶を掘り返さないで」

乾は「着物を返しに来たんだ」と言うのと紙袋に入った着物を藍染に渡した。藍染は紙袋の中身をチラ見すると「ちゃんと洗った?」と聞いた。

「洗った」

「ホントに?」

「ホント」

「……………」

「どれだけ信用ないの、オレ!」

怪しむような目で見られた乾は若干涙目である。

「…まあ、ありがとうございます。…………着ることはもう無いだろうけど」

「……………」

藍染の最後の一言で乾は泣いた。それを見たギンは完全に引いている。

「…………引かないでエ……………」

「大の大人が号泣つて。引くしかあらへんやろ」

「この子も藍染さんも辛辣ウ」

「わかるで!それ!!」

乾と平子に謎の友情が生まれた。二人は熱い握手をしている。

「俺の部下の筈やのにアイツ等いつつもいちやもんつけてくんねん!!」

「それは貴方が仕事をしないからでしょう」

「仕事やってやったと思うたら頭鷲掴みされるし」

「やったのはアンタじゃなくてギンです」

「……うるさいねん!!一々!!」

「……………」

「すみマセン」

ギロリと平子は藍染に睨まれ直ぐに謝った。もう藍染の恐怖が身に染みているのだろう。

「…もうあんなの部下やない、悪魔や、魔王や…!!」

「…大変なんですな!!隊長さん!!」

「俺の苦勞を分かってくれるのはオマエだけや!!誰だか知らんけど」

藍染とギンは謎の茶番劇を始めた乾と平子を冷たい眼差しで数秒間見た後、隊首室を後にした。

嫉妬

人間は嫉妬、憤怒、悲哀、等様々な感情を持っている。それは勿論あの完璧主義者と言われる藍染もである。

時を遡ること30分前……

「最近ギン見らへんようになったなあ。ちよつと前までは副隊長、副隊長、言うて惣右介の後ろぎようさん走りよつたのに。なんや、オマエら喧嘩でもしたんか？」

平子隊長の言葉で俺は気がついた。確かに最近ギンの姿を見ていないな、と。喧嘩は勿論した覚えもない。逆に最近は何々と忙しかつたので海燕の修行やギンに構ってやれる時間がなかったのだ。

「流魂街に散歩にでも出掛けたんじゃないですか？」

最近のギンの趣味は散歩である。流魂街に散歩にでも出掛け、昔俺が作った家で一泊して帰る。…と言うことは今ギンは昔俺が作った家にいると言うことなのか。

段々心配になってきた俺は早急に今日の分の仕事を終わらせ平子隊長に言う。

「ちよつとギンを探してきます。隊長、くれぐれもサボらず仕事を遂行してくださいね」

所々の言葉を強調しながら言う。隊長は怯えた様子でコクコクと頷いた。俺は隊長に一礼すると瞬歩で流魂街へと向かった。



昔俺が作った家に着くと俺の目の前が真っ赤になったことがわかった。決してギンが殺されたとか其処らに倒れてるとかそんなわ

けではない。ギンが女と一緒に家に入っていく姿を見てしまったのだ。

……え、もしかして、彼女……？

……俺が何百年も欲しいと願ひ続け、一度も出来たことのない、彼女……か……？

俺は発狂した。ギンに気づかれないように発狂した。俺にまだ一度も出来たことのない彼女をアイツは作りやがった!!

何分発狂していたのかは分からない。分かったことといえば冷静になった時の自分の虚無感だろうか。ヴァレンタインデー(カツコつけた)で尸魂界一コロレートを貰ったとしても彼女は出来なかった。そんな俺の拾い子ギンは俺を抜き去って、彼女を作った。……俺の一体何がいけなかったんだ。俺が女子に一体何をしようんだ。俺は今猛烈に虚しく、悲しい。



ギンのことは全て見なかったことにした。て言うか記憶から消した。抹消した。

「聞いてや、惣右介。今日はちゃんと自分の力で仕事終わらしたで」
「……」

平子隊長の言葉を完全に無視する。この人と今構っている時間も労力も精神もないのだ。隊長に使っている時間があるなら俺は彼女探しの旅に出たい。

それかギンが自分よりも先に彼女を作っていたショックを……心を癒したい。

そんなことを俺が考えているなんて露程知らない隊長はギンを探しに行った俺がギンを連れていないことに不信に思ったのだろう。ギンの事を聞いてきた。

「…なんや、ギン見つからんかったんか？」

「あ？」

今、ギンの話題は死に等しい。禁句ワードである。その為俺は血走った目で平子隊長を睨み付けた。勿論悪いと思っていないし、後悔も反省もしていない。話しかけてきた隊長が悪い。

「(なんや、今ものスツゴい機嫌悪いでコイツ)」

ウザったらしい平子隊長を目で制し俺は事務作業へと戻る。すると扉がノックされ平子隊長が入室許可を出した。入ってきたのは海燕で顔は何故か嬉しそうである。一体どうしたのであろうか。

「副隊長に報告があつて」

まさか隊長に昇進？もしそうであればかなり凄いことである。打ち上げいかないといけないな、なんて考えは直ぐにぶちのめされることとなる。

「俺、結婚することになりました」

右手に持っていたペンがボキリと折れる音がした。……冷静は保っていた筈だ、うん。



一体惣右介に何があつたんかは分からんけど兎に角機嫌が悪かった。それだけは明白やった。それが今、完全に噴火した。怒りの炎が噴火した。

惣右介が握っていた万年筆は見事に二等分されており、今となってはもう跡形もない。何でキレたのか…それは確実に志波の結婚報告だろう。勿論どこにキレル要素があつたのかは俺でも分からん。け

ど何かの爛にでも触ったのか目の前にいる惣右介の機嫌は先程よりも数段悪くなっている。思わず俺は志波の頭を叩いた。

「痛っ!!」

「アホか!!惣右介の機嫌が更に悪うなつとるやろ!!何火に油注いどるんや!!全部とばっちりは俺に来るんやぞ!!」

「いや、そう言われても一体…副隊長は俺の何の言葉にキレたんスカ?」

「知るか、そんなもん!!」

勿論これら全ての会話は小声である。俺は冷や汗をダラダラと流し志波を咎めるが、志波も志波で自身のどのような言葉にキレたのかわからず謝ることも出来ない。…ストレスが溜まってたんやろうか。

事態の収集がつかないまま惣右介は隊首室を後にした。



…：…こうやって嫉妬やらなんやらをするからカッコ悪い、モテないと気づいた俺は無理やり怒りを鎮め、外に出てきた。勿論頭を冷やすためである。

…：結婚かあ、いいなあ、俺もしたいなあ。彼女すらない俺には到底無理なことを考えながらヒラヒラと空を舞う桜を見ていた。

ギンと一緒にいた女はギンを騙しているのではないだろうか。よからぬ女だったら俺が成敗して…ギンがそんな女に引つかかるわけないか。そんな女だったら逆にギンが成敗しているに違いない。

ぱつと見、年代も同じぐらいみたいだったし、本人が彼女がいいと言うならそれでいいのだろう。俺もそこまで野暮ではないのだ。

ギンにあの家をあげよう。そして二人で仲睦まじく過ごして欲しい。そう考えると家もうちよつと大きく作つとけばよかつたなあ。子供はせめて結婚した後…：つて今度ギンが来たら言おうかな。…

俺も彼女探そ。

因みにギンが久しぶりに顔を見せたので「子供はせめて結婚してかならな」と言うのと鳩尾された。痛かった。家あげるって言ったらあんなに喜んだのに……。俺、何か悪いこと言った？

「(何でボクが乱菊拾ったこと副隊長知つとるんや?…恐っ)」



海燕がまさかの結婚か。相手は確か…都と言った女性だったか。一度だけ話したことがあるような気がする。可愛いと言うより綺麗な女性だったような気がする。あくまでも気がするである。

祝宴会などやるのだろうか。やるなら早めに決めて欲しいなどと思いつつながら事務作業をすること約一時間。浦原隊長の呼び出しから帰って来た隊長が俺に言った。

「惣右介、浮竹が探しとったで」

浮竹隊長は体が弱いいため滅多に外には出ない…と言うか出れない人だ。そんな浮竹隊長が俺を探していた事を知っている隊長は帰りに十三番隊に寄ってきたのか。休憩時間を30分もオーバーして帰って来た隊長だが心優しい俺は咎めることしなかった。

「わかりました。丁度十三番隊には書類を届けないと行けませんでしたし…ちよつと抜けますね」

「おう。ついでに休憩もとってきい。どうせ惣右介のことや、休んذرんのやろ?」

「……………」

「二時間は帰ってこんでええからな」

何気にあの人は周りを見ているから嫌なんだ。こういう時に限つ

てあの人は仕事を終わらせている。サボり魔かと思えば急に仕事をやったり気分屋は如何なものか。

「わかりました。一時間で帰ってきます」

「二時間言うてるやろ!!人の話聞けや!!」

俺は平子隊長の言葉に頷かなかった。



十三番隊に着くと虎徹清音こてつきよねと小椿仙太郎こつばきせんたろうの大袈裟な歓迎を受け、若干と言うか気分は駄々下がりであるが勿論顔には出さない。

浮竹隊長の部屋に着くと浮竹隊長は待っていたような顔で俺を見て「藍染副隊長も知っているだろう?」と言った。

「あ、座ってくれて構わないよ」

「ありがとうございます」

浮竹隊長に言われ俺は座ると「知っているって…海燕くんの結婚のことですか?」と聞いた。浮竹隊長は「勿論、それだよ」と。

「海燕の祝宴会をやりたくてね。是非とも海燕の師である藍染副隊長には来てもらいたいんだ」

「勿論、いいですよ。…と言うか僕、行く気でしたから」

浮竹隊長は俺の言葉を聞いて「そうか、そうか!!」と嬉しそうに笑った。

「それでいつがいいだろうか? 藍染副隊長は無理な日などあるかな? あるなら言って欲しいんだが……」

「僕はいつでも大丈夫ですよ。浮竹隊長のお暇な日であれば」

「分かった。俺の体調によるんだが…それでも大丈夫だろうか?」

不安げに見る浮竹隊長を見て俺は安心させるような笑みで言った。

「逆にそうしてください。そうじゃないと海燕も気が気ではないでしようし」

「そうか、助かる」

暫く談笑すること数十分。俺は話を切り上げ五番隊へと帰った。
…隊長から無理やり後一時間休まされた。

卍解

結論から言うとお海燕は泣いて喜んでいて。本人はとても喜んでいたらよかったと思う。…まあその後俺は死んだんだけどね、色々。

まず最初に死んだのは海燕の奥さん都さんはとても美しかったことだ。流石に弟子の嫁さんに惚れるなんてマネはしないが確かに海燕が惚れるのも分からなくはない。…いっちょ前にデキル奥さん捕まえやがって俺にもわけてくれコノヤロー。

次に死んだのはデロンデロンに酔った京楽隊長や海燕の後処理である。大声で歌うは酒ぶちかますわ、平子隊長があまりの五月蠅さでキレるわ、矢胴丸副隊長が京楽隊長の両頬腫れるまで殴るわ、なんやらで兎に角大変だったのだ。どんちゃん騒ぎも限度を弁えてやつて欲しいものである。

最後に死んだのは残っていた書類達だろうか。無理やり海燕の祝宴会に出たせいで、祝宴会が終わって家に帰ったら残業をやらなければいけなくなった。お陰でロクに睡眠をとることは出来ず現在五徹目である。

その五徹目でようやく書類の山を消すことに成功し俺は布団と言う安息領域で休みを取ろうと目を瞑った。勿論瞬殺で睡魔にやられた。



「我が主、どうか返事をくださいませ。我が主」

「……ねえ、五徹目なんだけど、俺」

斬魄刀『鏡花水月』に呼ばれ俺は頭をガシガシと搔きながら『鏡花水月』を見た。『鏡花水月』は悪いことをしたという意識はないらしく表情もふてぶてしい顔のままだった。

「質問よろしいでしょうか、我が主」

「早く寝たいからうん、いいよ。できれば簡単な質問でよろしく」

俺がそう言うのと彼女は「では」と言っただけで俺に聞いてきた。

「いつになったら私を使ってくれるのですか？名を呼んで貰える時をずっと待っていますのに一向に使ってくれる素振りすら見せないではありませんか」

「副隊長は滅多に虚退治とか行かないしね。主に隊長の世話か机仕事デスクワークだし」

俺がそう言うのと『鏡花水月』は頬を膨らませ言う。

「もういつそのこと尸魂界の反逆者となりましょうぞ。さすれば、主は私を使ってくださいましょう」

「いや、アンタ昔光の道がどうの言っただじゃん。悪用しないで欲しいとかなんとかさ。何自分から闇の道行っちゃってんの」
「それほどまでに私は名を呼んで欲しいのです」

そう言われても仕方ないと思う。よほどの事件が無い限りは副隊長が行くなんてないし暫くは無理な話である。

「ではこうしましょう、我が主」

『鏡花水月』はまるでいいことを思い付いたと言うように手をポンとし言った。

「卍解を覚える、と言うのは」

俺の目が点になったのが分かった。そして心の中で渦巻いた言葉は唯一つ。

「嫌だ」

俺は一言そう言う。すると『鏡花水月』の顔が驚愕の表情へと変わる。

「何故でありますか、我が主!! 卍解とは即ち力を手に入れると言うことですよ!?! 誰もが目指す場所ではありませんか!!」

「それが嫌なんだよ!! 卍解の修行して使えるようになってみる!! 誰かにバレたら隊長推薦されて無理やり隊長に隊長にされるのがオチだ!! 唯でさえ副隊長の仕事で参ってるって言うのに虚に殺される前に事務に殺されるわ!!」

「大丈夫です!! 我が主はそんなことでは死にませぬ!! さあ、修行を!!」
「一体何の根拠があつて言ってるわけ!?!」

卍解とは死神たちの中でも、選ばれた者だけが使用できる力。死神の専用武器、斬魄刀の能力は通常であれば「対話と同調（精神世界で斬魄刀と対話をして信頼関係を築き、名前を知る）」を済ませて習得できる「始解」だけで引き出すことができる。事実、死神で編成される部隊護廷十三隊の中でも副官以下の死神たちは、基本は始解しか習得していない。戦闘力としてはそれで十分と見なされるのだ。

始解で許される、即ち卍解は扱うことも習得することも難しく副隊長クラスでも出きるものは早々といえない。それ故に卍解が出きるものは即戦力、隊長へと推薦されるのだ。

俺は副隊長のままでも十分である。隊長になりたいなど一回も思ったことはない。隊長の事務がめんどくさいこともあるが一番は平子隊長の下でずっと働いていたいと思ってるからだろうか。あんな人でも俺は尊敬し唯一無二の隊長なのである。

「隠しとけば万事解決でありますれば、主!!」

「嫌だ、嫌だ! 何かポロつと出しちゃったりするかも知れないでしょ!! それに唯でさえ『鏡花水月』はチートなんだからこれ以上強くしな

くていいって!!もうすでに敵無しだって、最強だって!!」

「卍解使えるようになったら呼んで貰える回数増えるかもしれないませぬ!!少しの可能性がある限り私はその可能性に掛けます!!」

「少ない可能性に掛けても意味無いよ、無理だよー!」と言うのだがあつち中は中々折れない。チクショウ、こちらら五徹目で無理やり呼ばれたって言うのに…。対話って寝た気がしないから嫌なんだよね。

え?いや、決して『鏡花水月』のことが嫌いって訳じゃ無いんだよ?唯、今は疲れてるって言うか…。

「わ、我が主は私のことが嫌いでありますか」

「だから、違うって!!」

「なら卍解を覚えてくださいまし!!私を幸せの道へと連れていってくださいませ!!」

「卍解覚えても幸せの道なんて行けないって!待ってるのは幸せじゃなくて大量の事務作業と書類だよ!地獄しか待ってないよ!!」

「ホラ!!我が主は私のことが嫌いなんですわ!!だからこうやって駄々を捏ねる!!」

シクシクと泣いた真似をする『鏡花水月』。その泣いた真似が無性にイラツとくる。……この斬魄刀めんどくさいなー(本音)。

「どつちかって言うと『鏡花水月』が俺のこと嫌いだろ!!明らかに過労死させようとしてんじやん!!」

「人間、そんなヤワには作られておりませぬ!!さあ、目指せ卍解!!」

「目指してねえよ!!目指す気も無いわ、アホ!!」

「アホ!!」と俺が言うと一瞬『鏡花水月』は動きを止めた。そして数秒後ワナワナと肩が震え始める。

「私は決してアホではありませんせぬ!!」

『鏡花水月』は涙目で言った。『鏡花水月』は意外と泣き虫らしい。と言うかそこまで俺に卍解を習得して欲しいのかよ。いい迷惑である。

「そもそも女と言うものは強いものに憧れ、恋愛感情を抱くもの!!我が主はカッコいい男になりたいのでしよう!?!」
「……………」

俺は俯く。『鏡花水月』に何も言い返せないからである。『鏡花水月』は更に言葉を続けた。

「卍解とは選ばれた者だけが習得できる力。それ即ち女子にモテ放題でありますれば故に。さあ、どうしまししょうぞ我が主。覚えてはみませぬか、卍解を」

「……………流石に今日は無理だが、明後日からならば!!」

俺は俯いた顔をあげ『鏡花水月』を見た。明日からは流石にキツいので明後日から。そうしないと俺の体が壊れる。確実に死ぬ自信があるからだ。

『鏡花水月』は嬉しそうに笑い「その言葉、待っておりました」と手を差し出してきた。俺は手を出し『鏡花水月』と熱い握手を交わす。

「(…意外とチョロいですわね、我が主)」

勿論、『鏡花水月』がそのような事を思っているなんて俺は知らない。って言うか知らなくていいよね。

赤子とバケモノ

人気も何も無いところ。そこに赤子の鳴き声だけが鳴り響いていた。赤子が捨てられるなど流魂街ではよくあることである。赤子の不運と言えば集落で捨てられたのではなく、人里の離れた人気の無いところで捨てられた、と言うことだろう。

赤子の鳴き声が鳴り響く。しかし誰の耳にも届かない、そう思われていた。

「…赤ちゃん…」

赤子を見つけたのは顔に白い仮面を付けた虚バケモノであつた。虚バケモノと言つても人形ヒトガタの虚バケモノである。

そんな虚バケモノは籠の中に入れられた赤子を見た。そして…赤子を拾つたのだ。赤子を。

「…小さな、生命…」

泣いている赤子をあやすかのように揺れる虚バケモノ。表情は無表情であるが故に少し恐い。しかし、そんな恐い顔を見て赤子は更に泣き出すかと思えば笑つたのだ。嬉しそうに、楽しそうに。虚バケモノは赤子の持つていない片方の指を出す。すると赤子は可愛く笑い少量の力で指を握つた。虚バケモノも嬉しそうに笑つた。



『——』様、見てくださいこれ』

「アイツがくれたんです」と沢山の果実を少女は差し出した。『——』と呼ばれた細身の男は無表情で果実を見、「そうか」とだけ言葉を漏らした。

「食べます?」

「要らん。この体は食事を欲さん」

「何度も言っているだろう」と男が言うと少女は「食べれないこともないでしょ? 食べよう?」と負けじと食い付く。男は「はあ」とため息をつく。「一つだけだ」と赤い果実を取った。少女は嬉しそうに笑った。

「今日はどうだった」

「別に。いつも通り、アイツが五月蠅くて五月蠅くて」

「それでも楽しいんだろ」

「……………」

男は果実を食べながら「友は大切にしろ」と言った。

「それ』『様が言う?」

「……………」

「私、知ってるよ。』『様がどうしてもここから離れないのか。皆が恐がつてるからでしょ?」

「そのダサイお面が恐いんだよ、きつと」と少女は『……………』についている仮面を指差した。男は顔についている仮面を触る。

「外せないんだ、これは」

「…邪魔じゃない? それ」

「慣れると案外いいものだよ。これも」

そう言うと男は窓から外を見た。外は曇天の空である。

「…嵐が来そうね」

「ああ」

男は静かに窓から目線をずらした。



イタイ アカイ イヤダヨ シニタクナイ
コワイ クライ ヒトリハ シニタクナイ
タスケテ ダレカ タスケテ タスケテ
カナシイ マツカ クライ アカイ シニソウ
ウエテル うえてる 飢えてる 餓えてる
ホシイ タベタイ タベル？ タベチャウ？

「私の体、使っていていいよ」

ダレ？ オマエ タベル？ タベテイイ？

「うん、食べていい。もう、一人じゃ無いんだよ」

ジャア タベチャオウカナ

「貴方に拾われた時から薄々こうなる、って感じてた。だから後悔はないよ」

少女は小さな手を広げる。バケモノは唯それを見ていた。

「（本当はアイツともっと……）」

イタダキマス

少女はバケモノに食べられた。目映い光が少女達を中心に覆った。数分後、目映い光は消え失せ出てきてのは先程のバケモノではなく、

先程よりも成長した少女だった。

「…生き、てる……」

『生キテ、ナイヨ。モウ死ンダヨ。ダツテ、俺ト融合シチャツタカラ』

何処からか聞こえる声を聞いて少女は「そう…」と言った。

「生きてるの楽しかった？」

『………楽シカッタヨ。アノ日、アンタを拾ツタ日ハ掛ケ替エノナイ日ダツタヨ』

その言葉を聞いて少女は嬉しそうに笑う。「そう、良かった」と。

「まだアイツといれるんだね」

『当分ハネ』

伸びた身長、伸びた髪、その他諸々を見て少女は顔を綻ばせる。

「随分と大人っぽくなっちゃった」



「な、ななな、なんだよソレ!!身長伸びてね?髪伸びてね?」

「うん」

「何で!?一体1日で何があったわけ!?!」

「…成長期?」

女の言葉に少年は「あり得ないでしょ!?!」と言う。

「人間あり得ないことなんてないよ」

「だからってそんなに身長も髪も伸びねーよ!!てか俺も欲しいよ!!」

「うおおおお!!俺も身長欲しいいいいい!!」と頭を抱える少年を見て
女はクスリと笑った。

「そう言えばよ」

少年は思い出したような顔で言った。

「俺、決めたんだ。死神なろうかな、って」

「何で?」

「カッコいいと思ったんだよ」と少年は言う。

「この前さ、大雨降ったじゃん。そんな時、俺虚に襲われちゃって。助け
てくれたんだ。鬼道長が、こんな俺を。あの後ろ姿すげえカッコよく
て、あんな人に俺もなりたいな、って」

「カッコいい男じゃないと許嫁のオマエに迷惑かけちゃうだろ?」と
イタズラをする時のような顔で少年は言った。

「なら私もなろうかな」

「は!?!」

「脅威のスピード出世しようかな」

後ろで少年がごちゃごちゃと言っているが完全に無視を決め込ん
だ。

女は…いや、女の中に入っていたバケモノは笑った。

コレデ俺モ頂点ニ立テル

大切な上司

カランと下駄の歩く音、そして次にザツと草履の歩く音が2つ。

「お」

俺と隊長は歩いていたのだが、隊長が足を止め振り替える。思わず俺はため息をついた。これは長くなる、と。

「お——す。おはようさん」

「あ、おはよツス平子サン」

俺達の後ろを歩いていた一人、浦原隊長が隊長の言葉に返事をする。

「シンジでええ言うてるやろ。めんどいやつちやな」

隊長の言葉に浦原隊長は「ハハハ」と笑う。そして隊長は浦原隊長から視線を外すと浦原隊長の後ろを歩いていた一人、くろつち涅マユリに話しかけた。

「おはようさんマユリ」

「余所余所しく涅と呼べといっているだろう。不愉快な男だネ…！」

「めんどいやつちやなア」

隊長はせっかく挨拶してやったのに、と口を尖らせ涅参席に文句を言った。隊長は話題を変えようとした。そうした、である。決して変えることは出来なかったのだ。

「そーいや聞いたかオマエあの話」

「どの話ツスか？」

浦原隊長が平子隊長の話に食いついて来たにも関わらず平子隊長はぶっ飛んで言った。平子隊長の背中に渾身の蹴りが入った、と俺には見えた。音もズゴオといい音がした…：ような気がする。と言うかいい音がした。隊長を蹴った人物に隊長は怒鳴る。

「何やねんひよ里いきなり！」

「ウチへの挨拶がまだやつ!!」

平子隊長を蹴り飛ばしたのは十二番隊副隊長の猿柿さるがきひよ里である。俺とも隊長とも深く縁のある人だ。

「なんでオマエにアイサツせなあかんねん!!」

「あかんにきまつとるやる流れ的に！一人だけアイサツせえへんて」

自分だけ仲間外れにされたことがかなり逆鱗に触れたようだ。猿柿副隊長は顔を真っ赤にして怒っている。

「ええんですー！俺は隊長オマエは副隊長！隊長のすることにイチイチ口出さんといてん…あ痛たたたたアつ!!」

ドタンバタンと目の前で乱闘が起きているにも関わらず浦原隊長も俺もいつも通り平然とした顔で立っている。て言うかいつも通り出し。これが日常です。そんな日常をBGMに俺は浦原隊長に話しかけた。

「そうだ浦原隊長。もう耳にされましたか？」

「何をツスカ？」

「流魂街での変死事件についてです」

俺が浦原隊長に言うのと平子隊長は猿柿副隊長との乱闘を一時中断

し「それや俺が言いたかったんは！ナイスフォロー！惣右介!!」と言った。

「変死事件？」

どうやら浦原隊長の耳には届いていなかったようで俺と隊長に説明を求めた。隊長は浦原隊長に説明する。

「せや。ここ一月程、流魂街の住人が消える事件が続発しとる。原因は不明や」

「消える？どこかへいなくなっちやうつてことツスカ？」

浦原隊長の疑問を平子は「アホか」と言つて一蹴する。

「それやったら蒸発て言うわ。ちやうねん。消えるねん。服だけ残して跡形もなく。死んで霊子化するんやつたら着とつた服も消える。死んだんやない、生きたまま人の形を保てんようになって消滅した。そうとしか考えられへん」

「生きたまま人の形を保てなく…？」

浦原隊長にはまだまだ疑問が残るようだが平子隊長にはそれが答えられる程の知識は持っていなかった。

「スマンなア。俺も卯ノ花隊長に言われたことそのまま言うてるだけや。意味わからへん。ともかくその原因を調べる為に今、九番隊が調査に出とる」



『緊急招集！緊急招集！各隊長は即時一番隊舎に集合願います!!九番隊に異常事態！九番隊隊長、六車拳西及び副隊長久南白の霊圧反応消

失！それにより緊急の——』

事務作業に勤しんでいた俺と隊長は手を止めた。

「……この警鈴、ただ事じゃないなア」

平子隊長は重たそうな腰を上げ、立ち上がる。

「嗚呼、嫌な予感がするわ」

「確か隊長の嫌な予感って中るんでしたよね」

昔の記憶を俺は掘り起こしながら言う。平子隊長は面倒そうに頭を掻き「そうや」と言った。

「サボりたいなア」

「隊長、こんな緊急時にサボったら打ち首ですよ、多分」

「あ、打ち首よりも流刃りゅうじんじゃつか若火で焼かれるかな」と言う。隊長は真顔で「おおー、恐っ」と言った。全く恐いと思っていな顔である。

「惣右介、ついてこい」

「はい」



「火急である！前線の九番隊待機陣営からの報告によれば夜営中の同隊隊長・六車拳西、同副隊長・久南白の霊圧が消失。原因は不明！これは想定し得る限りの最悪の事態の一つである！昨日まで起きた単なる事件のは一つであったこの案件は護庭十三隊の誇りにかけて解決すべきものとなった！よってこれより隊長格5名を選抜しただちに現地へと向かってもらう！」

総隊長が全て言い終わると同時に浦原が到着した。浦原は自分に行かせて欲しいと頼むが却下され選ばれた5名は――。

――三番隊隊長、おわとりばしろうじゆうろう鳳橋楼十郎

――五番隊隊長、平子真子

――七番隊隊長、あいかわらぶ愛川羅武

――鬼道衆総帥大鬼道長、つかびしてっさい握菱鉄裁

――鬼道衆副局長、うしよだはちげん有昭田鉢玄

話し合いの末、鬼道衆のトップ2を出すのはさすがにと言うことで握菱鉄裁の代わりに矢胴丸リサがいくこととなった。



「嗚呼、嫌や。面倒や。何で選ばれてしもうたんや、俺」

「こんな嫌な予感、ぴんぴんしとる言うのに」と曇った空を隊長は走りながら見つめていた。

「…選ばれたものは仕方ありません」

「せやなア。ここで文句言うてもしやあないか。ちよつくら行って拳西達救って帰ってくるわ」

平子隊長はそう言うとき少し走るスピードを緩めて言った。

「惣右介、隊長命令や。俺が帰ってくるまで…五番隊頼む」

「…俺も、ついて行き…!!」

「隊長命令や、惣右介。ほんま俺こない使いたくないねん。けどもし俺に何かあった時頼めるやつなんて、五番隊引つ張って行ける奴なんてオマエしか、惣右介しかおらんやろ。安心せえ、俺が帰ってくるまでや」

「……………」

「頼んだで、惣右介」

隊長の隣を走っていた俺の頭をポンと隊長は乗せた。

「…お気を、つけて」

俺は走る足を止め、隊長に深くお辞儀をした。

……隊長が五番隊に帰ってくることはなかった。

▼▲▼▲▼▲

「平子隊長が…!!?そんなことある筈が…!!」

「口を慎め、藍染惣右介。副隊長のお主にこの場の発言権はない
!!」

「藍染惣右介」

中央四十六室。俺は虚と処分された平子隊長と繋がっている等と言いつけられ、ここで裁判をしていた。

「判決は平子達は虚処分と言いつ渡す。そして貴様には五番隊隊長として、五番隊を纏めるのだ」

「なっ!?俺が平子隊長の代わりなんて」

「ええい!!黙れ!!これ以上口を開くと言うのなら貴様も追放することになるぞ!」

「……………」

俺は静かにお辞儀をして出ていった。

▼▲▼▲▼▲

「…ホントだ。隊長の、嫌な予感…当たっちゃった」

「憎いなア、この晴天が憎い」俺は憎たらしい晴天を見て呟いた。隊長は帰ってくるのだろうか。いや、帰ってくる。隊長は「帰ってくる」と俺に言った。信じて待つんだ。俺が信じなくてだれが信じるんだ。

「…だれかが帰ってくるまで、五番を俺が護るんだ。隊長の座は俺が」

俺は一人、自分に誓いを立てた。

新体制

「ほんまにええですか？ボクがいきなり副隊長なんかやってしまうて」

「ギンは平子隊長の業務も手伝っていたし…何よりも今五番隊はごたついている。それにここにいる全員、ギンの顔見知りだろう？」

平子隊長が居なくなつて俺は隊長にならなくてはいけなくなつてしまつた。そんな時にギンは死神となつており、五番に配属されてきた。丁度いいと有能なギンを副隊長に推薦したのだが…どうやらギンは嫌らしく中々受け入れて貰えない。

「…確かに顔見知りやけど…」

「もう始解だつて使えるんだらう？」

「せやけど…」

「お願いだ、ギン」

「……………」

俺がずっとギンを見ているとギンは「ああ!!」といきなり大声を出した。

「やればええんやろ、それでええんやろ、満足なんやろ!!」

「分かればいいんだ」

「あんま上官とかやりたないねん!!めんどくさい!!」

半ギレのギンにとりあえず今日1日の書類を渡す。

「仕事のやり方は教えなくていいよね。ギンだところこういう手間をとらなくていいから楽なんだ」

「なア、せめて質問してや。もしかしたら覚えとらんかもしれんやろ」
「覚えてないのかい？」

「いや、覚えとるけど……」

「ならいいじゃないか」と俺は言う。ギンの頭を撫でた。うーん、暫く会わなくなつた内に結構成長しているような気がする。あくまでも気がするであるが。

「そう言えば彼女も護廷十三隊に入ったんだよね？何番隊？」
「十番隊」

「同じ隊に入ろうとは思わなかったのかい？」と俺が聞けばギンは「流石に同じ隊はキツイわ。気が散って仕方ないねん。それにアイツ……凄いや。ボク死因が過労死とかほんま嫌やから」だそう。サボリ魔は俺も嫌だな。困る。

「結婚式には呼んでくれよ」
「気が早いわ!!」

どうやらまだ結婚はしないらしい。…残念。

「そう言えばギン、今日は護廷十三隊の御披露目がある」
「御披露目？なんですよ、ソレ」
「今回の件でかなりの隊長格が居なくなつてしまつたからね。ガラツと変わるんだ。ソレの御披露目」
「…隊長、平子隊長は……」

心配な顔をしているギンの頭を俺は撫で言った。

「必ず帰ってくるよ。あの人は不死身みたいな人だからね。大丈夫、約束したんだ」

「約束？」

「俺が帰ってくるまで五番隊頼む」って。あの人が帰ってくるって

言ったんだから地の果てでも何処にいても帰ってくるよ」

「確かにあの人がウザったらしいからなア」

「髪も性格も」とギンは言う。俺は「きつとあの髪の長さで隊長のウザさは比例してるんだよ」と言った。…決してデイスっているわけではない。いい意味で言っているのだ。…多分。

「御披露目なんて堅苦しいもの正直苦手なんだが」

「隊長、それボクもや。欠席しちゃあかんの？」

「逆にギンはそんな勇気があるのかい？あるなら称賛に値するよ」

「……………」

俺とギンはため息をついた。

「…ギン」

「何です？」

俺は真剣な眼差しでギンの顔を見ると言った。

「護廷十三隊は敵だと思え」

「…言っってはる意味がわかりまへん」

ギンは「どういう意味ですか？」と説明を求めてきた。まあ当たり前だろう。急に、それも入隊初日にこんなことを言われるのだから。

「そもそも出来すぎてるんだ。何人もの隊長が虚になるなんて。浦原喜助の反逆？あの人はわざわざそんな莫迦な真似はしないよ。したとしても…こんなに堂々とはしない」

「つまり？」

「本当の敵がいる、ってことだ。その敵が何処に潜んでるなんて…わからない」

「どれが敵でどれが味方か、なんて早々には分からないだよ」と俺は言う。と歩き出す。

「そろそろ時間だよ、ギン」



一番隊で任命式を終えた。堅苦しいものは苦手はどうやら肩に力が入っていたようだ。俺は長いため息を付く。

「随分長いため息ですわね」

「藍染隊長」と言って歩いて近づいて来るのは俺と一緒に今日三番隊長に任命された皇 帝である。俺の一番嫌いな人物でもあった。

「私も貴方も不運でした。信頼していた上官を無くすなんて」

「……………」

「隊長達が虚化するなど浦原喜助の実験は一体……………」

悲しそうな顔をして彼女は言った。彼女の言葉は俺をイライラさせる。全てが嫌いだ。顔も、声も、何もかも。

「少し黙ってくれないかな」

「浦原喜助、憎い」

「…黙れ!!」

俺が怒鳴ると彼女はペラペラと無駄に喋る口を閉じた。

「俺は…オマエが一番憎たらしいよ。いつか俺はオマエを、殺す」

俺は唯それだけを告げるとその場を後にした。

▼▲▼▲▼▲▼
『行ツチャツタネ』

「ええ、行つてしまつたわね」

藍染惣右介が居なくなつた地面を見て皇帝は静かに聞こえる声に返事をした。

『分カツチャツタンジヤナイ？俺達がアイツ等殺ツチャツタツテ』

「まだ死んでないわ。現世に逃げただけよ」

姿も何も見せない声は『イイノ？』と不安そうな声で言った。彼女は一人怪しく妖艶に笑い「いいのよ」と言った。

「彼は…藍染惣右介はどうせ死ぬ運命ですもの。私達是最強よ。負けることなんてないの」

「そうでしょうか？」と彼女は聞いた。声は『ウン、ソウダネ』と言った。

『俺達ノ『他^た自^じ模^も倣^{ほう}』ガ有^あレバ最強^{じゆうきやう}ダヨ』

声はそう言った。

▼▲▼▲▼▲▼

俺は君を愛している。それは小さい頃から変わらない。え？それを証明して見せろつて？一体俺、何やればいい？全裸とかもういろんな意味でへっちゃらだよ？今なら尸魂界一周はできる気がする。

…い、痛アアアアアつ!!止めて、ゴメンナサイ、俺が悪かつた!!だからそんな沢山の短刀構えないで!!刺さる、死んじゃう!!て言うか何処からそんな沢山の短刀出したの!?!危ないでしょ!!

うん、はい、すみません…。その節は…。え？鬼道長が居なくなつて悲しいか？急にどうしたの？ん？質問に答えろ？はい、答えさせてイタダキマス。だから短刀こっち向けないで。

…まあ、そりゃあ悲しいよね。あの人は俺の道標だった人だから。しつかし謎だよ。こんな俺がさ、何で握菱鬼道長の後任に選ばれたんだろう、って。

…どうした？そんな顔して。俯くなよ。オマエの美しい顔が見れ…グフツ!!何で殴るの!?!照れ隠しか!照れ隠しだろ!!…クハツ!!痛い…溝尾は、痛い、よ…。

…ま、まあ茶番は置いておいて。何か俺に伝えに来たんだろ？そうじゃなきゃ会って一発目「私を愛している？」なんて聞く筈がないもんな。安心して俺に言ってみろよ。俺はオマエを裏切らない。ずっと何処に行つても一緒だ。

…そうか。全部オマエが…。いや、怒ってなんかないさ。俺の優先順位は全部オマエだからな。…え？尸魂界裏切る？藍染さんに殺す発言された？ごめん、ちよつと頭ついていけない。けど…いかん、いかんよ!尸魂界を裏切るのには手を貸すけどね、藍染さんは赦しておけんよ!!俺の愛しい許嫁に何言つてくれとるんじゃ、藍染!!

はい？何処に行くのか？いやちよつくら五番隊に…。殺すのはまだ早い？もう少し泳がせとく？いやでも命狙われちゃつてる訳なんですよ？殺られる前に殺つとかなないと殺されたらたまつたもんじゃないし…。

はあ、作戦があるんすね。いや説明しなくて大丈夫です。俺の頭じゃ到底理解できそうにないんで。はい、はい、すみません。勝手な行動は慎みます。はい。

そんなこんなで今日も俺は彼女の事を愛している。

さあ、私を

「さあ、私を使ってくださいまし!!我が主!!」

「……このフォーメーションを、固めて……いや、それだところながら空きに……んー、ギンを置いとけばどうにかなるかな……これで、んー」

つい先程まで隊首室で色々と考えていた俺。しかしいつの間にか精神世界へと来ており『鏡花水月』が無理やり連れてきたことは明白だった。

「無視は駄目ですわよ、主!!」

「……いや、参席君を……あー、駄目だ」

「主!!」

俺の右手に持っていた書類が『鏡花水月』に奪い取られる。無理やり奪ったのでその書類はビリツと嫌な音をたてた。

「あ」

「あ」

『鏡花水月』からポタポタと大量の冷や汗が流される。因みに今俺の眼は野獣の如くギラギラとしているだろう。

「あ、主……?話し合えば、分かる、筈ですわ……」

「かまちよも大概に……しやがれ!!!」

ゴン!!と俺の鉄拳が『鏡花水月』の頭に当たった音がする。『鏡花水月』はあまりの痛さに泣き出した。チクシヨウ、俺だって泣きたいぜ。三時間の労力無駄にしやがって。

「で、何。何で今日は一段とウザいわけ」

「…主は動かないのでありますか？本命の敵が直ぐそこにいます。敵が殺せるチャンスでありますよ!!さあ、私の名を呼び殺しましょうぞ!!」

「ムリ」

「何で!?!」

ブーブーと大声で『鏡花水月』は俺に文句を言った。あまりの煩さに俺は手で耳を押さえながら言う。

「俺、隊長。副隊長時代よりも忙しいの。それに今は…尸魂界が凄い混乱してる。俺だって周りの隊長から監視されてる身なんだよ。下手なことは出来ねえ」

「だからこそ、私の始解を使えば!!」

「仮にアイツを殺したとして、三番隊の隊長はどうするんだよ。また探すのか？あれ、結構大変なんだよ」

破けた書類の束を持って『鏡花水月』の頭をパシパシと叩く。

「では、尸魂界全員に催眠をかけ、本当は死んでるけど生きているように見せかければいいのでは?」

「それもムリ。まずあんな奴に労力をかける時間がない。それに俺はアイツのことなんて何一つ知らねえからな。アイツのフリをするのもムリ」

「むう。普通に殺してしまえばそれが一番楽ですのに」

「お子ちゃまとは違ってな、大人には沢山の事情つてもんがあるんだよ。オマエわかっているか？俺、アイツの斬魄刀の能力何一つ知らねえんだよ。こつちの手の内も見せてはいないが、あつちだって何一つ手の内は見せてねえ。今は冷戦状態が俺達にとっても一番のベスト。何もしないのが得策だ」

俺がそう言うと『鏡花水月』は黙り俯いた。

「…せっかく卍解を覚えましたのに…」

「無理やり覚えさせたの間違いだろ」

「いつ使う日が来るのでしょうか」

「さあな。一生来ないんじゃないかね?」

俺がおちやらけた口調で言うと怒った猫のように「シヤー」と『鏡花水月』は俺に威嚇してきた。

「卍解を覚えさせれば、私の出番が増えると思っていましたのに!!全く増えないではありませんか!!」

「ソウダネ」

「こんなにも私は頑張っていると言うのに!!」

「ソウダネ」

「ちよつと!!ちゃんと聞いてますの!?!」

ホント、俺の斬魄刀ってめんどくせー。死ぬほどめんどくせー。てか、一回死んで矯正して貰いたいほどめんどくせーわ、うん。

……とりあえず、この破れた書類どうしよ。



精神世界から戻るとどっと疲れが自分に降りかかって来たように感じた。思わず藍染はため息を付く。

「隊長の斬魄刀ってそないたため息が付くほど難の有る斬魄刀なんか?」

「難の有るって言うか…兎に角面倒だね。名前呼べ呼べ五月蠅いんだ」

藍染が苦笑いしながら言うときんは「色々大変やね」と言った。

「気分転換に外にでも出てきたらどうです？ずっと引きこもつとるからそうなるんよ、きつと」

「引きこもってるって言うか仕事してるだけなんだけどね」

藍染はそう言う。「そうしようかな。少し散歩に出掛けてくるよ」とギンに一言告げた。

「羽織、羽織つていかないんですか？」

「流魂街に行こうと思ってるからね。住民が畏縮しちや嫌だろ？」

隊首羽織を机に置くと念のため斬魄刀を持ち、隊舎を後にした。



「ふう〜、散歩生き返る〜」

こつた体を伸ばしながら俺は流魂街まで散歩に来ていた。隊長になつてからと言うもの忙しすぎて散歩する時間がなく、今は丁度息抜きとして有意義な時間を過ごしていた。

さて、流魂街に来たのはいいけど一体どうしようか。ノープランで来ていた為、過ごし悩む。買い物もありだしそのまま散歩を続行するのもありだ。

そんな事を悩んでいると俺の前にフラフラと今にも倒れそうな黒髪の子が血相を変えて、まるで何かを探しているかのように歩いていた。顔色が悪い。きつと彼女は病を患っているのだろう。

彼女は俺の近くまで来ると倒れた。……ふう、間一髪セーフ。俺がキャッチ出来てなかったらこの子、地面とこんにはするところだったよ。危ねえなあ。俺はこの子をつれて近くの宿屋まで行つた。：言っておくけどこれ、誘拐とかじゃないから。俺、ロリコン違うから！！

宿屋につくと俺はこの子をすぐに布団の中へと入れた。パツと見ただけど今のところ病はそんなに進行してなさそうだ。俺の回道で治

せそうだな。

俺は霊術院の頃から回道が鬼道の中でも一番得意だった。それは今でも変わっていない。小さな命。目の前にいるそれは俺でもまだ助けられる命。助ける他に俺の中で選択肢はなかった。

この子にはこの子の何かの目的が有る。だからあんな血相を変えて歩いていたんだ。こんなところで病なんかで死んだらたまったもんじゃないだろう。…寝てる間に治しといてやるか。俺はこの子に暖かな回道の光を当て始めた。



彼女が目を覚ます頃にはもう治療も終わっていた。うっすらと目を開けると目に入ってくる光が眩しかったのだろうか。彼女は目を細めた。暫く彼女はボーっとする。そして数秒後、俺を認識し、慌てた。

「!!」

「調子はどうだい?」

「え…」

自分の体が前よりも軽くなっていることに驚いたのか彼女は目を見開いていた。

「何故…」

「治したんだ、俺が。あんまり体を酷使しちゃ駄目だよ。小さい内の体って案外脆いんだ」

彼女は怒られていると勘違いをしたのか顔を俯かせて「すいません」と一言謝った。

「あんなに必死な顔をしてたんだ。何か目的が有るんだろ?その目的を成し遂げる前に死んだら元も子もないからね。大切に使いな」

俺は立ち上がり部屋から出ようとした。すると先ほどの子が「待つてください!!」と俺に声をかけた。

「名前を覚えてもらえませんか？私は、私は緋真ひまなです!!緋真ひまなと言います!!」

俺は彼女——緋真の方へと振り替えると言った。

「名を教えるほどの者でもないよ」

きつともう、会うことはない。それに俺って色々有名だから風の噂やらなんやらで聞かろう。

後に「名を教えるほどの者でもないよ」と言う言葉はタイムマシンで過去に帰って消したい言葉にランクインするのだが調子にのってる俺はまだ気づかない。



体の調子から悪くても私は探すのをやめなかった。あの時、捨ててしまった妹。今さら妹を捨ててしまったことに後悔して探してるなんて…。

体が前よりも傾くのが分かった。倒れる。そう感じてももうすぐ抗う事をやめた。見つかりっこない、もう嫌だ。いつそ、このまま…。

冷たい地面とぶつかる覚悟をしていたのに、そんなことはなくて暖かい何かに包まれたような気がした。

目を覚ますと光が目飛び込んできた。思わず私は目を細める。いつぶりだろうか。こんなに寝たのは。覚えていないけれど久しぶりのような気がする。

そして気がついた。隣に男の人がいることに。

「!!」

「調子はどうだい?」

「え…」

もうしかしてこの男と人は私を助けてくれたのだろうか。もしそうだとするのなら一番最初に思い浮かんだのは「何故」だった。

「何故…」

「治したんだ、俺が。あんまり体を酷使しちゃ駄目だよ。小さい内の体って案外脆いんだ」

この人はきつと優しい人なのだろう。流魂街にはこんな人は居ない。当たり前だ。流魂街では自分一人で生きることでも精一杯なのだから。

私が「すいません」と謝ると男の人は優しい笑みを浮かべた。

「あんなに必死な顔をしてたんだ。何か目的が有るんだろ?その目的を成し遂げる前に死んだら元も子もないからね。大切に使いな」

そう言うとなりの人は立ち上がる。もう帰るつもりなのだろう。それを読み取った私は男の人を引き留めた。せめても名前を知りたいと思ったからだ。

「待ってください!!名前を教えてくださいませんか?私は、私は緋真です!!緋真と言います!!」

男の人はゆっくりと私の方へと振り替えると笑って言った。

「名を教えるほどの者でもないよ」

そう言って帰ってしまう後ろ姿を私はただ呆然と見るしかなかつ

た。決めた。妹を探して、見つけたら次はあの人を探そう。容姿はしつかりと覚えた。あの人を見つけてそしてお団子の1つや2つで済むとは思っていないけれど、何かをおごつてお礼を言おう。

私はあの人に救ってもらったこの命を大切に扱おうと心に誓った。この数日後私は運命の人と言える——朽木白哉くちきびやくやさんと出会った。

魂葬の実習生

緋真と言う名の子を助けて早百年程が過ぎた頃。書類から追われていた俺はふと散歩に行きたいと思った。急ぎの書類も無いことだし、いける。俺はそう思うとギンを道連れにしようと思いギンに話しかけた。

「ギン、久しぶりに一緒に散歩でもしない?」

「ええですよ。丁度仕事も粗方片付いたところやし」

ギンはそう言うと「よいしょ」と掛け声と共に立ち上がった。

「で、何処に行きはるんですか?また流魂街?」

「いや、今日は違うよ。とびつきりな場所さ」

「とびつきり…?」

俺はニヤリと笑みを張り付けると言った。

「現世で散歩するんだ」



ふと現世に行きたいと思った。まあ元々俺は現世に住んでいたから当たり前だろう。ところで、この時代の現世は一体どの時代なんだろうか。まだ歴史で習うような時代?それとも俺がこの藍染に成った後、つまり…未来の時代?とてもワクワクしてたまらない。俺は色んな妄想をしながらギンと一緒に五番隊の穿界門を通った。

「うお、凄いなア現世は。尸魂界よりも発展しとるとちやいます?」

ギンは高い建物の上から町並みを見下ろしながら言った。まだま

だ俺がいた時代とは程遠いようだ。高い建物もまだ一、二個程しかない。未来の世界ではなかったことに少し残念だが、まあこれはこれで嬉しい。

「珍しいねギンがこんなに舞い上がってるなんて」

「だって現世なんて早々来るところやないんやもん。見れる内に目に焼き付けとかなあかんやろ」

ギンは少し嬉しそうな顔で言った。

「そう言や知ってます?」

「ん?何が?」

「今、現世に実習生来とるらしいですよ。もしかしたら逢うかもしれへんね、ボク達」

「……できれば逢いたくないかな……」

俺がげっそりとした顔で言うとギンは笑って「隊長人気やもんね」と言った。

「講演会を開けば直ぐに満員。イケメンで優しくて何でもできる。そりやあまア人気になるやろな」

「……こんな俺の何処がいいんだか」

そんなことを言いながら俺は少し集中する。周りに実習生がいるかどうかを確かめるためにだ。霊圧を感じとり……。

「!!」

「?どうかしはったんですか?」

「ギン、実習生の所へ行くよ」

「なんでですか?さつき会いとうない言うてはりましたやろ」

横で質問してくるギンを横目で見て俺は言った。

「実習生が危ない」



「…どうして…あたし達みんな逃げてるの…?」

鬼道の達人と言われる実習生、雛森桃ひなもりももが呟いた。先輩達がやられた虚を目の前にして、死神の卯真央霊術院生が逃げ出す。その現実に雛森は疑問を感じていた。

「何言ってるんだ！逃げろって言われたじゃないか!!実習生は引率者の命令は絶対だ!!」

同じ班の吉良きらや阿散井あばらいが何かを言っている。けど雛森は逃げようとはしなかった。雛森はギユと歯を食い縛ると、沢山の虚にやられている先輩を助けに行った。それを見た吉良や阿散井も雛森の後を追った。

ポタポタと鮮血が頭から流れる。引率者の一人、檜佐木ひさぎは目の前にいる何体もの虚を一人で相手していた。

「こいつら…霊圧を消せるのか…!!気づかねえ訳だぜクソっ…!!」

虚が雄叫びをあげながら攻撃してくる。檜佐木は痛みの迸る体ほとばしを無理やり動かし虚の攻撃を受け止めようとした。しかし虚は三方向から攻撃を仕掛けてくる。手負いの檜佐木にはその虚の攻撃を受け止めるなど自殺に近かった。

「…お前ら…!!」

虚の三方向の攻撃は檜佐木には当たることなく、雛森、吉良、阿散

井によって受け止められる。何故ここに、そう言う檜佐木に吉良は滅多に出さない大きな声で言った。

「申し訳ありません！命令違反です！」

吉良に続いて阿散井が言う。

「助けに来たんだから見逃せよな先パイ!!」

雛森が詠唱を始める。

「君臨者よ！」

「血肉の仮面・万象・羽搏き・ヒトの名を冠す者よ！」

「焦熱と争乱」

「海隔て逆巻き南へと歩を進めよ！」

破道の三十一!! 『赤火炮』!!」

赤い火の玉が虚の仮面へと当たる。それを見た吉良達は倒した、と言う安心感からか「よし!!」と声を漏らした。しかし檜佐木が苦い顔で「…いや…」と呟く。

「ダメだ」

傷一つついていない虚達を見て雛森達は絶望した。これはもう勝てない、死にたくない、嘘だ、次々に負の声が漏れる。その時だった。雛森達を襲おうとしていた虚が真つ二つへと割れ、消える。雛森達が目を見開いた。

「ひゃあ。こら大層な数やなア。隊長が気づかへんかったらどないなってたんやろ」

「…待たせて済まない。救援に来たよ」

救援に来た二人を見て四人は驚きの声をあげる。

「…あ…ああ…あなた方は…!!五番隊…藍染…隊長…!!市丸…副隊長…!」

藍染はにこりと安心させるように笑うと雛森達一人一人の頭を撫でていく。

「…よく頑張ったね。怖かっただろう。もう大丈夫だ。後は我々に任せて休んでるといい」

雛森達を通りすぎ、虚を見上げる。

「さあ仕事の時間だよギン」

「折角の現世。もうちよつと堪能したかつたんやけど…まア仕方ないなア。ボクらの後輩、やられてますもんね」

そう言うと二人は斬魄刀を構えた。



虚を一掃した俺達はとりあえず一番怪我の酷い子呼び回道で回復していく。

「…すみません…」

「いいよ。謝らなくて。君はヒーローだ。大切な後輩達を護ったんだから」

「けど…」

「もっともつと強くなって、今度は自分の力で全てを護ればいい。鍛練あるのみだよ」

全ての怪我の治療を終えた俺はこの男子生徒…確か名は…：檜佐木だったかな？の背中をおもいつきり叩いた。

「気合い入れてもっとシヤキツとするんだ。折角治してあげたのにそんな顔されると僕まで悲しくなってくるからね！」

「はい!!」

「ありがとうございます!!」と綺麗なお辞儀をしながら言う檜佐木を横目で見ながらギンを呼ぶ。

「ギン」

「はい」

「もうここに僕達がいる意味は無さそうだから帰ろうとするよ」
「分かりました」

久しぶりの現世。なんか大変なことが起こっててそんなに満喫できなかつたからまたギンを連れてこようと思う。最後に今の町並みを目に焼き付けると穿界門を潜った。

両親

ブーブーと車のクラクションが鳴る。そんな街中に小さい子供は歩いていて。一人で。みすぼらしい格好をして、足に合わないブカブカのサンダルを履いて。季節は冬。冬なのに子供はまるで今は秋なのでは無いのか、と周りを勘違いさせるほどの薄着である。子供はとても寒そう…。いや、慣れた、とでも言うような顔をして歩いていて。

今、自分はどこに向かっているのだろうか。子供はふと考えた。家にいたくなかったから適当な服を着て外に出てきたのはいいが、意外に外は寒いし、行き先だつて予定だつて何も無い。けれど、家には帰りたくない。悶々と子供は考えた。考えた結果人つ子一人もいない忘れ去られた公園にたつていた。

「…まるでオレみたい…」

忘れ去られた公園を見て子供は呟いた。ついこの前、義務教育の始まりを告げる小学校に入学した少年は1つ大人の階段を上り一人称を「オレ」に変えた。まだ言いなれてないせいか少年は自分のことを「オレ」と言うはまだ照れる傾向にあった。

少年はブランコに座るとブランコをこぎ始めた。薄着な上にブランコと言うセレクトはちよつとダメだったかもしれない。少年は少し後悔をしながらもこぐことはやめなかった。

何故だか涙は止まらなかった。

家は嫌いだ。家族も嫌いだ。少年は人知れずそう思った。学校の帰り道、友達の迎えに来てくれる親等を見て何度羨ましく思ったことだろうか。そんな思いは入学してから沢山あった。笑顔の友達を見て自分もあれほど綺麗な笑顔を作れているかと何度も心配した。

学校の友達も先生も嫌いだ。「——のお父さんやお母さん来ないの？」とか「ちよつとお母さん達と先生お話ししたいんだけどいいかな？」なんて言われて嫌だった。

オレが両親を呼んだとして来てくれる人達なら遠の昔に呼んでる。

呼んでも来ないし、彼らは自分に興味関心がない。きっとオレのことを道具としか思っていないんだ。そう思う。

だから常々思ってる。この世なんて滅びちゃえばいいのに。自分も、この地球も、宇宙も全て。道連れにして滅びちゃえばいいのに。けど朝と言うものはいつもやってくる。眠たくなっても自然と目は覚める。その事に落胆の毎日だった。

「そんな薄着で寒くないの？キミ」

一人で泣きながらブランコをこいでいると急に話しかけられた。黒髪の優しそうな顔が印象の男の人だった。男の人は白いワイシャツの上に黒いスーツを着ている。サラリーマンなのだろうか。

「寒いよ」

心が。とは言わなかった。男の人は困ったように笑うとスーツのジャケットを脱ぎオレに羽織らせた。

「これで少しはマシになったんじゃないのかな？」

「…変わらない」

そんなことを言いながらもオレは男の人のジャケットをギュツと握って離さなかった。それを見た男の人は「今時の子は素直じゃないね」と笑った。

「名前はなんて言うの？」

「ヒミツ」

「親御さんは？」

「ヒミツ」

「年齢は？」

「ヒミツ」

男の人は「秘密の多い子だねえ」と言った。無理矢理オレに問うてくることはなかった。

「お兄さんの名前は？」

「ん？俺？俺は瀬野華澄せのかすみって名前だよ」

「…女みたい」

「うん、よく言われるよ」

「…職業は？」

「んー、なんて言ったらいいかな。子供には…難しい仕事かなあ」

「…年齢は？」

「二十才だよ」

「若いね」

「キミの方が若いでしょ？」

瀬野はクスリと面白そうに笑った。

「寒いのは取れた？」

「…さつきよりかはマシ」

「そっか」

「子供は風の子って言うけど、この時期あの格好は流石に寒いよ」と瀬野は自分よりも何倍も大きな手でオレの頭を不器用に撫でた。…頭を撫でられるのも、心配されるのも初めてだった。

「なんでお兄さんはこんなところに来たの？」

「息抜きかな。大人って疲れるから。こうして一人、空を見上げてると落ち着くんのだ」

「オレ、邪魔？」

恐る恐る聞くと瀬野は「邪魔じゃないよ」と笑った。

「たまにはこういうのもいいね」

「そう」

「キミはどうしてここに？」

オレは少し悩んだ末に「家にいたくなかったからここに来た」と言った。瀬野は「最近の子って思春期も早いのか…？」や「いや、これは親離れなのか…？」等とぶつぶつ呟いている。

「…お兄さんは優しいね」

「俺が？」

「うん。こんなオレに話しかけて今も構ってくれてる。だから優しい」

「なんかお兄ちゃんみたい」と言うとお兄野は嬉しそうに顔を綻ばせて「弟か…。一人っ子だからいいかもしれないな」と言った。

「お兄さんも一人っ子？オレも」

「そっか。一緒だな」

おかしくなって笑った。こんなにちゃんと笑ったのも初めてかもしれない。

「お兄さんはオレに沢山の初めてをくれるね」

「何だあ？ガキの癖に俺を口説こうとしてんの？まだダメだよ、キミには早い」

「なに言ってるの、お兄さん」

ジト目で瀬野を見ると瀬野は乾いた笑いで「ジョークだよ、ジョーク。だからそんなにまにうけないで」と言った。

「変なの」

「……………」

「…この世の中の大人がみんなお兄さんみたいだったら良かったのに」

「そうか？俺は嫌だなあ」

瀬野とオレは困ったように笑った。

「キミはいつ帰るんだい？」

「…何でそんなことを聞くの」

「キミが帰るまで待つてあげようかなと思ってさ」

照れたように瀬野は笑った。そんな瀬野の姿を見てオレは小さく呟いた。

「……………帰らない」

瀬野はどうやら聞こえなかったらしく「え？」と聞き返してくる。だからオレはブランクから立ち上がり大きな声で言った。

「帰らないって言ってるの!!!」

瀬野は瞠若する。暫く暫く瀬野は固まったままだったが、意識を取り戻したのかハツとした顔になると言った。

「…キミ、家で何があったの」

「……………ヒミツ」

「でも家には帰りたくないんだらう？」

「うん」

小さく頷くと瀬野は困ったような顔で頭を掻いた。

「大人にも色々あるように子供も色々あるんだよなあ」

「俺もそうだった」と瀬野は苦笑いをしながら言った。

「キミの気持ちも分かるからこそ俺も強く帰れ、なんて言えない。けどなあ、流石に帰らないのもなあ……」

オレは後悔した。嗚呼、お兄さんを困らせてしまった。オレは勢いよく立ち上がると言った。

「さっきのことも、今日、この公園でオレに会ったこと全部忘れていいから」

オレはお兄さんからスーツのジャケットを借りていたことを忘れて、肩にジャケットを羽織ったまま走って公園から出た。

これはとある少年の幼い記憶。

澁靈廷通信

「今回は藍染隊長特集を撮ろうと思うんです!!是非、顔をこちらに向けてもらえると!!」

「重要書類が有るからね、ここではシャッターを押しちゃダメだよ。シャッターを押した場合君は罪に問われることとなる」

「oh:藍染隊長超c o o r!!なら部屋から出てくださいよ!私シャッター押せないじゃないですか!!」

「今のところこの部屋から出るつもりはないかな。だからお引き取り願うよ」

隊首室。コツコツと書類を片付けているとギンと共に九番隊隊士が入ってきた。九番隊隊士曰く「そろそろ写真集また売り出しましょう!!」とのこと。平子隊長がいた時代は平子隊長の隠し撮りで終わっていた写真集であるが、その頼みの綱平子隊長も尸魂界からある日境界に姿を消したので直談判しに来たらしい。勿論答えは「NO」である。

そもそも隠し撮り写真集も俺は了承していない。やるごとに平子隊長を痛め付けてはいたがそれでもなお、彼は立ち上がり隠し撮りをする。正直言ってアホだと思う。が、あれが俺の信頼している隊長なのである。そう考えると少し悲しい。

「僕のじゃなくてギンのを撮ればいいんじゃないかな?」

「市丸副隊長は先月撮らせていただきました!!」

「市丸副隊長もかなり人気で、直ぐに売り切れてしまってます!!」と熱弁する九番隊隊士。ここでそんなことを熱弁しないでほしい。正直に言うとう気が散る。

「そんな嫌な顔せんと、隊長もやってあげたらどうです?」

「結構」

「う、噂通り…。普段は才色兼備の藍染隊長ですが写真集だけは撮らせてくれない!!何故ですか!!」

何故、と聞かれると特に理由はない。ただ嫌なのだ。と言うか何故写真を撮られないといけないんだ？特集なんてわざわざ組まなくていいだろ。そんなの組んでもどうせ彼女でできるわけじゃないしさ。

「仕事が忙しいからかな」

「oh!!流石隊長!!まさしく隊長としての鑑!!」

「そう思うなら仕事させてくれないかな？」

俺がそう言うのと隊士は「それとこれとは別ですよ!!」と言った。いや、何も別じゃねえよ。こちとら貴女に迷惑してるってのに。

「兎に角、許可するつもりも写真を撮らせるつもりもないから帰ってね。仕事、捗らないし」

「そんなこと言わないで!!たったの百枚ぐらいでいいんです!!…やっぱ、二百枚!!」

「却下」

俺はそう言うのと「ギン」とギンを呼ぶ。

「そろそろ仕事に支障が出てくからからね。そろそろ彼女にはお帰り願おうか」

「分かりました」

苦笑いでギンは返事すると九番隊隊士を部屋から追い出した。暫く廊下では九番隊隊士が叫んでいたので九番隊に苦情を言い上司に連れて行って貰った。

「なんでそんな頑なに写真撮らへんの？隊長の写真集凄く売上ええ言

われてたやろ」

「売上は良くてもね、こちらとしてはあんまりいい気はしないんだ。抑写真集って…隊長の業務とも何にも関係性はないし」

「凄いなア隊長は。ボク、あの子ウザすぎて断るのも面倒になってしまったから大人しく領いたんやけど」

「案外隊長も頑固やね」と言っただけでギンは笑った。

「人間、頑固ぐらいが丁度いいんだよ、ギン」



『瀨靈廷通信』

皆!!ごめんね!今月の瀨靈廷通信には藍染隊長の写真集を載せる予定だったんだが中々許可がおりなく最後には追い出されてしまった!!けど私はめげない負けな曲げないの3つの誓いを持ち、また挑戦するよ!!成功したあかつきにはみんなでこの瀨靈廷通信を何冊も買って貰えると嬉しいな!!』

瀨靈廷通信のページ目にこんなことが書いてあった為、藍染ファンはこの記事を書いた九番隊隊士を応援し、五番隊には暫くの間『瀨靈廷通信の写真集許可お願いします!』と言う数々の手紙が送られてきたのだった。

「……………」

「(隊長、キレてるなア)」



「隊長、ボクちよつと抜けますわ」

「うん、いいよ」

書類仕事をしていた隊長はわざわざ顔を上げボクの顔を見て笑っ

て頷いた。

「どうせギンの事だ。粗方仕事は片付いてるんだらう?」

「まア今日の分は終わらせてます」

「なら遅れてきてもいいからね」

隊長はまるでこれからボクが行く場所を知っているかのような口振りで言った。隊長はにこりと笑うとまた仕事作業へと戻る。ボクはそれを少し眺め、隊長に一礼して隊首室を後にした。

藍染隊長はボクの尊敬する人である。ボクを拾ってくれたお陰で今ここにボクはいるし、きつと藍染隊長がいなければボクは死神になるうとは思わなかっただらう。隊長に会ったことはボクにとつてプラスでしかなかった。

ボクの行き先はある茶屋だ。そこで乱菊と一緒に昼食を食べる約束をしている。茶屋に着くと、予約をしていた席へとつく。当たり前だがまだ乱菊は来ていない。きつと今頃、志波隊長から新しく変わった隊長、日番谷隊長にでも怒られているのだらう。彼女は極度のサボり魔だから。

乱菊は来ていないがとりあえず飲み物だけでも頼んでおこうと思ったボクは店員さんにお茶を一つ頼んだ。店員さんは「了解しました」と言うので厨房へと向かう。そんな店員さんの後ろ姿をボーと眺めていると、とある人物に話しかけられた。勿論乱菊ではない。

「お一人ですか?市丸副隊長」

「…皇隊長」

藍染隊長が唯一嫌っている人物、三番隊隊長 皇帝。人嫌い等をしていない藍染隊長が何故か嫌っている人物だ。藍染隊長が関わろうとしていないし、嫌っている為、ボク自身苦手意識がある。そのせいかボクに話しかけた人が皇隊長だと分かると思をひそめてしまった。

そんなボクを見ても皇隊長はにこりと笑っている。そして言った。

「丁度いいところにいましたね、市丸副隊長」と。そして質問もしてきた。「ここに藍染隊長はいませんか？」と。まるでこの場に藍染隊がいたら困ると言っているかのようだ。ボクは不審に思いながらも答えた。

「…おらんよ。今のところここにはボクしかおらん」
「そうですか」

皇は少しホツとしたような顔で言った。

「単刀直入に言わせて貰いますね、市丸副隊長」
「何ですか」
「三番隊の副隊長になって貰えませんか」

柄にもなく自分の目が見開いたことをボクは瞬時に悟った。そして心に浮かんできた言葉は一つ。

「何言うてはりますの？皇隊長」
「そのままの意味で受け取って貰って構いません。単に私は優秀な貴方を部下に加えようとしているだけです」
「……………」

「別にこの場で答えを出せ、と言っている訳ではありませんのでじっくりゆっくりと考えて下さいね」

皇隊長はそう言うのと茶屋から出ていったようだ。店を出て行く皇隊長を見てあの変態男——確か名前は乾——が慌てて後を追っていった。

そんな光景を不審に思いながら眺めているとようやくやく乱菊が来た。約十分の遅刻である。

「ごめんなさい、ギン。遅れちゃったわ」

「また怒られてたん?」

「そうよ。あたしがちよーつと休憩してただけなのに書類持って怒鳴り散らしてくるの」

「でもここにいるってことは…」

「ええ。あたしがやるわけないじゃない」

キラんと星が飛びそうなウインクをすると乱菊は端に置いてあったメニューを取り出し「何がいいかしら」と悩み始めた。

「そう言えばさつき皇隊長を見たわ。男の人と歩いてギンがどうのこの言ってたの。何かあったのあんた」

「別に。ただ三番隊の副隊長ならんか言うわれただけや」

「へえそう。三番隊の副隊長に——って、はあ!?それって別にで済ませる事じゃないじゃない!あんた、三番隊に行くの!?あんなに藍染隊長のこと慕ってたのに!」

「いや、誰も三番隊行く言うてないやろ」

勝手に早とちりした乱菊にそう言う「じゃあ断るの?」と聞かれた。

「…まだ分からん」

「何よ、はつきりしないわね」

「珍しいわギンがそんなにはつきりしてないなんて」とメニューを眺めながら乱菊は言った。

「…怪しいんよ」

「何が」

「皇隊長が」

ボクがそう言うのと乱菊はボクの言葉に一拍置いて「なんか分かるわ

それ」と言った。

「あの人と話していると正直壁があるような感じがしてあたしは苦手よ」

乱菊はそう言うのと店員さんを呼び何かを注文していた。ついでにボクも決めていたものを注文する。

「で、どうするのよ」

「さア。ボクにも分からへん」

「どうするんやろね未来のボクは」ボクはそう小さく呟いた。



「帝、なんで市丸あんな奴ギンを仲間に加えようとしてるんだよ」

乾は皇に聞いた。

「藍染を孤立させようと思ってね。まずは市丸からよ」

「…でも裏切る可能性は？」

「大丈夫。私の斬魄刀は最強だもの」

無表情で皇は言った。乾は皇の斬魄刀に興味を持った。本人が最強とまで言う斬魄刀。一体どのような能力なのか。

「帝の斬魄刀ってどんななの？」

「秘密。教えないわ」

「えエ、教えてよオ」

「ウザイ」

乾は滝のような涙を流した。

新隊士

「雛森桃です！不束者ですがよろしくお願いします!!」

黒い髪の毛を後ろでポニーテールに纏めた女性、五番隊新人の雛森は憧れの藍染を追って五番隊に入隊した。藍染は優しく雛森達新人を出迎えてくれ、尚且つ雛森の顔も覚えていた。その事が雛森にとっては舞い上がる程嬉しかった。勿論、藍染の目の前でそんなみつともない姿は見せてはいない。…ギンには見られたが。

「それでね?!それでね!!藍染隊長も優しいんだけど意外と市丸副隊長も優しいんだ!」

「お、おう……良かったな……」

休憩時間。どこかでお昼を取ろうと思っていた雛森は五番隊を出てぶらぶらとしていた。丁度その時、近くに阿散井が通った為、雛森が阿散井に話しかけると阿散井も丁度ご飯を食べに行くとのこと。どうせなら一緒に食べようとなり、今定食屋で雛森の藍染熱弁大会が開催されているのだ。

「阿散井君はどう?十一番隊に行っただけでしょ?」

「楽しいぜ。尊敬する人もできてよ、この隊に来て良かったって思ってる」

「そっかあ。…そう言えば吉良君は何番隊だっけ?」

雛森が阿散井に聞くと阿散井は「確か…」と少し考える素振りをした後「四番隊だったと思うぜ」と言った。

「アイツもあの時の市丸副隊長に惚れて五番隊志望してたらしいが…」

「え——!?!そうだったの!?!」

「し、知らなかった…」と雛森は小さく呟いた。

「(まあアイツ、雛森に明らかに好意を抱いてたからなあ。追っかけもあつたんだらうけどよオ……)」

阿散井は水を飲みながらそんなことを考える。勿論口には出さない。流石の阿散井でもそんな野暮なことはしないのだ。逆に吉良は雛森から意識されている節が見当たらないのでエールを送っておく。

「でも確かに分かるよ、吉良君の気持ち。わたしもあの時の藍染隊長を見て尊敬し、自分の憧れの人にしたんだから」

これはまたヤバい方向に行き始めている。阿散井は若干身構えた。また、あの藍染熱弁が始まる、と。案の定そこから雛森の藍染熱弁が始まる。それを黙って聞いていた阿散井は雛森に気付かれないようにそつとため息を吐いたのだった。

——雛森、それさつきも聞いた

また阿散井はため息をつく。この熱弁が終わったのは中々帰ってこない雛森を心配した藍染がギンを寄越し、ギンが阿散井に熱弁している雛森を見つけるまで永遠と続くのだった。



「本当にすいませんでした！市丸副隊長!!」

「わたし話に夢中でお昼休み終わってたことに気づかなくて……」と言った雛森にギンは「別にええよ」と言った。

「ちゃんと仕事してくれるなら五番隊は時間にルーズやから」

「はい！がんばります!!」

雛森は「よし」と呟くと両手で両頬を叩いた。それをギンは横目で見ている。鋭いギンは雛森に声をかけた。

「なア雛森ちゃん」

「?何ですか?市丸副隊長」

「雛森ちゃんは始解、覚えたい思うん?」

ギンが雛森に聞くと雛森は「当たり前ですよ!!」と大きく頷いた。

「わたし、将来は藍染隊長の右腕…いや、右腕は市丸副隊長だから左腕になりたいんです」

「…左腕って…」

「近くで支えるならやっぱり力は必要不可欠になってきます。だから何れわたしは始解を覚えて、卍解は…分からないけれど、とにかく藍染隊長に力を貢献できるようにしたいんです!!」

と言った。ギンは「へエゝ大層な夢持つとるなア」と言うと「ならばボクが力貸したるか?」と言った。

「へ…?」

「ボクが雛森ちゃんの始解を使えるために力貸してあげるわ」

「え、いいんですか…?」

「?ボクから言い出しとるのに悪いも何もあるわけないやろ」

ギンは「何言うとるんや?」みたいな顔をしながら言った。雛森は驚きのあまり目を見開いてパチパチと瞬きを数回する。そしてペアと輝いた表情に変わる。

「ホントですか!?!ありがとうございます!!」

まさか副隊長に手伝って貰えるなんて。雛森は歓喜の声をあげた。

「……でも何で急に……？」

「……………雛森ちゃんなら……………」

「えっ？」

ギンの「雛森ちゃんなら……………」から何も聞こえなくなった雛森。雛森はギンに「すいません聞き逃しちやいました。もう一度言つて貰えますか？」と言つた。するとギンはいつもの笑顔、いやいつもの笑顔とはまた違う何か違和感のある笑顔で言つた。

「いや、そこまで良いこと言うたらんから聞かれとらんで良かったわ」

ギンは少し早歩きで行つてしまう。その場に残された雛森は訳がわからなかった。

『……………雛森ちゃんなら……………』

——ボクの代わりに隊長、任せられるやろ？



新年を迎え、尸魂界には新しい顔が沢山増えた。勿論この五番隊にも沢山の新隊士が来てくれた。そして俺の中でもかなり印象に残っているのがこの子だ。

「藍染隊長!!本当にすみませんでした!!」

俺にもものすごい勢いで頭を下げている彼女は雛森桃君。女の子なだけでギンや京楽隊長みたいに気安くちゃん付けでは呼べないの君付けである。彼女も嫌がつている素振りはしていないためまあいいだろう。

「いや、そこまで謝らなくて大丈夫だよ？」

「とりあえず頭を上げてくれないかな？」と雛森君の頭を上げさせる。どうやら彼女は昼休みが終わったことに気づかなくて遅れてしまったことについてこんなに謝ってくれているみたいだ。何とも責任感の強い子である。…平子隊長に雛森君の爪の垢を煎じて飲ませてやりたいぐらいだ。

…：俺としては雛森君が変な事件に絡まれていなかったようなので良かったと一安心。仕事を彼女はサボる性格はしていないと見込んでいたためそこまで怒らない。怒りよりも安心の方がかなり上回っている状況である。

そう言えば雛森君を探しにギンを向かわせたと思っていたんだけど…。

「雛森君、ギンは？」

「あれ？隊長会ってませんか？何か、急に早歩きで何処かへ行かれてしまったのでつきり隊長に何か急用でもあったのかと思っただけですけど…。」

「…いや、会っていないね」

一体ギンは何処へ行ってしまったのだろうか。まあ仕事は粗方片付いていると言っていたし、雛森君とは違って男だからそこまで心配していない。少し時間が経てばフラツと帰って来るだろう。

ギンを怒らせてしまったのだろうかと心配している雛森君の頭を一撫でして俺は言った。

「仕事頑張りなさい。雛森君」

「は、はいっ!!」

みるみる雛森君の顔が茹でタコのように真っ赤になっていく。…

熱でもあるのだろうか。よし、雛森君の仕事少なめにしておこう。
とりあえず今年の新隊士のキャラが濃いことだけは確かなようだ。



あの子がある程度成長するまでまだボクはここを離れる訳には
いかない――。

部下の成長

「雛森君。最近修行を頑張っているようだね。ギンから聞いたよ」

「はいっ!!市丸副隊長が鍛えてくださってるんです!まだ始解は使えません、もつともつと力をつけて、藍染隊長を支えられるぐらい強くなりたいです!!」

「…体には気を付けるんだよ」

「修行のしすぎは逆にダメだからね」と藍染が言うと雛森は嬉しそうに「はいっ!!」と大きく返事をした。雛森が去っていく後ろ姿を見て(決して変態じゃないよ)藍染は考える。

彼女は人を信頼し過ぎだ。俺を信頼してくれるのは嬉しいが、あそこまで信頼されると困りものである。もし俺に何かあった場合、彼女はどのようなのだろうか。……彼女には近い内に俺離れしてもらわないといけないな。

どうしようか、と藍染は悩みながらその場を去った。



「わっ!わっ!!聞きましたっ!!聞けましたっ!!名前、斬魄刀の名前っ!!」

雛森は嬉しそうに椅子に座っていたギンに報告をした。ギンは一瞬目を細めると「おお、良かったなア」と言った。

「はいっ!!」

「斬魄刀の名前、何て言うん?」

ギンは雛森に聞いた。雛森は誇らしそうに斬魄刀を触りながら言った。

『「飛梅^{とびうめ}」って言うみたいです。わたし、単純だからこの斬魄刀…飛梅

の名前を聞いた瞬間梅の花が好きになっちゃいました」

テヘへと笑いながら雛森は言った。そして雛森は大きく息を吸うと宣言する。

「次は正解を使えるように頑張ります!!」

「……正解は今は無理やろ」

「いやっ、今ならいけるような気がするんですっ!!」

やる気に満ちている雛森を見てギンは「まア……やりたいならやればええと思うわ。どうせ雛森ちゃんの気持ち次第やしね」と言った。

雛森は気づかなかったがギンは少しだけ寂しそうな顔をしていた。



「ギンが三番隊に……?」

「ええ。そうです。本人の了承はもう既に貰ってます」

刀と刀のぶつかり合う音がする。今、藍染と皇は模擬試合を行っていたのだった。この二人の仲は良好とは言えない。どちらかと言えば昔よりも更に険悪になっただろう。そんな中、皇の言葉に藍染は不機嫌になっていく。

「私が勧誘したんです。すると彼は頷きました」

キン!!キン!!と甲高い音が響く。

「丁度貴方の部下も成長したみたいですし、いいですよね?」

「…成長した部下とは雛森君のことか」

藍染は眉をひそめると斬魄刀を構え、言った。

「砕けろ『鏡花水月』」

藍染の斬魄刀は流水系の斬魄刀だと広まっている。勿論、皇もそう思っているだろう。本当はここで皇を殺してやりたいが流石にこんな場所で、人手も足りていない尸魂界のことを考えるとそんなことも出来ないの、藍染はやるせない気持ちになる。

そんな中、皇はニヤリと笑った。

「貴方が始解を使うなら私もつかわせて貰います」

そう言うと皇も斬魄刀を構えた。

「――――」

真っ赤に燃え盛る焰が斬魄刀の刃を覆った。まるで刃が燃えているかのように見える。

「…炎熱系斬魄刀か」

「さあ。それはどうでしょう」

妖艶に笑みを深める皇は不気味で仕方がない。

——あんなやつところにギンは行こうとしているのか。……ギンのことだ、何か考えがあるのだろうか。でも……。

「怖じ気づいたのですか？ 藍染隊長」

「いや。君なんか怖じ気づくわけないだろう」

皇に何か違和感が感じる――。

藍染は皇に感じた違和感の正体が分からないまま模擬試合を終わる結果となった。

▼▼▼▼
「ギン、本当に行くんだね？」

藍染隊長の目は「行くな」と言っている。藍染隊長の気持ちを分かっているながらボクは見ないフリをした。

「ええ。隊長が何と言うてもボクは自分の意見を変えるつもりはありまへんよ」

「……そうか」

ここで納得——いや本当は腸煮えくり返っているのだろうか——してくれる藍染隊長は本当に優しい。彼は自分の意見を一番汲んでくれるのだ。きっと隊長も気づいている。ボクが何か考えがあると言うことを。

考えと言う考えではないのだ。ただボクは知りたいただけ。何故藍染隊長があんなに皇隊長のことを嫌っているのか。皇隊長の側に行ったら単純に分かるかも知れないと思った。でも一番の理由は……あの人は何処か胡散臭いのだ。喋っているときも一枚の壁を感じる。近寄らせない何かがあるのだ。

藍染隊長はその近寄せない何かを嫌っているのか、そこが知りた。だから三番隊に行く。そして皇隊長が藍染隊長の脅威になる存在だった場合——ボクは彼女を迷いなく殺すことになるだろう。

「…体には気を付けること。後、アイツは信じちゃいけないよ。何があっても」

「分かっています、隊長。隊長って意外と心配性なんやね」

本当に彼は優しい——。



「ええっ!? 市丸副隊長三番隊に行っちゃうんですか!？」

「うん。せやから今みたいに簡単には会うことはできんなア…」

「聞いてないですよ、市丸副隊長!!」

「当たり前やろ。言っとらんかったんやから……」

不貞腐れる雛森を見てギンは小さくため息をついた。

「雛森ちゃん」

「…なんですか……」

頬を膨らませて明らかに不機嫌アピールをする彼女は可愛いとギンも差直に思う。まあ、乱菊には勝てんけど（のろけ）

「今度から雛森ちゃんが副隊長や」

「……そうですか……って、ええっ!!!？」

軽く受け流そうとした雛森だったが勿論軽くでは受け流せない。

雛森は驚愕する。

「わたしが副隊長ですか!? 無理ですよ!! 最近入ってきたばかりなのに!!」

「異例のスピード出世思うとけばええやろ」

「そういうことじゃなくて!!」

雛森は自分は副隊長には向いていないと言い張る。しかしギンも頑として譲らなかつた。

「雛森ちゃんは始解使えるようになったやろ? それにボクも少しだけやけど修行つけてやったんや。そこらの隊士よりも全然強いんやで」

「自分のことあまり下に見ちゃいかんよ」とギンは言った。

「でも……」

「雛森ちゃんは藍染隊長の左腕になりたいんやろ？」

「そうですけど……」

ギンは「良かったやん」と笑って言った。

「体壊さん程度に頑張り。引き継ぎとかちやんとやるさかい、そんなに仕事教えたる」

「……」

「ボクはこんなこと雛森ちゃんにしか頼まんよ」

「やってくれるよな？」とギンは雛森に聞いた。雛森は涙目でギンを見つめると言った。

「帰ってきてくださいよ……！あたし、五番隊の隊長は藍染隊長で、副隊長は市丸副隊長じゃないと納得いかないんです！！だからわたしは市丸副隊長が帰ってくるまでの代役として、副隊長につきます……！！」

「雛森ちゃん……」

ギンはあからさまに困った顔をする。

「約束ですよ、市丸副隊長!!」

雛森は勝手にギンに約束をつけると走りさってしまった。ギンは一人呟く。

「……困ったなア……」

ギンは一人頭を掻きむしった。



「シロちゃん!!」

「うおっ!? 雛森!？」

「あら雛森じゃない」

十番隊隊首室を勢いよく開け、雛森は座っていた日番谷に抱きついた。日番谷は驚きのあまりか顔を真っ赤にさせる。そして雛森が泣いていると気づいた乱菊は日番谷に抱きついていて、雛森に近づいた。

「雛森アンタ何か…あったの……?」

「うっ、ううっ……」

ただただ日番谷の懐に蹲うずくまつている雛森を見て日番谷は乱菊を見る。乱菊は静かに分からない、とでも言うかのように首を振った。

数分後ようやく涙も止まり、日番谷から離れた雛森。日番谷は茶菓子と共に暖かい茶を出した。

「何かあったの? 雛森」

乱菊が優しく聞くと雛森はポツポツとこれまでのことを話した。

「へえ、アンタそこまでギンを好いてたの?」

「…好いてるって言うか、わたし尊敬してるんです。わたしに始解の修行もしてくれましたわたしが一番尊敬してる藍染隊長のことをよくわかってて、いつかわたしも市丸副隊長みたいに藍染隊長に頼られる存在になりたいんです。だからもう少しわたしは市丸副隊長に教わりたかった……!!」

また泣き始めた雛森を見て乱菊は雛森の頭を撫でる。

「そんな一生会えないみたいな感じだけど会えるのよ? 会おうと思っ

たらずぐじやない」

「…そうですけど…」

「すぐに会えるんだからそんなに落ち込んじゃダメよ。落ち込んだ方が負けなんだから！」

乱菊は元気付けるようにバンと雛森の背中を叩いた。そして日番谷を見ると乱菊は何かを思い付いたような顔をしてニヤニヤとしながら言った。

「邪魔者は退散しますねえ、隊長」

「お、おい！松本！！」

「？」

志波海燕

「あ、藍染隊長お久しぶりッスー！」

片腕を上げて走って来るのは、弟子(?)の一人、志波海燕だった。海燕は遠目から見ても分かる程疲れきった顔をしていた。

「どうしたんだい?そんなに疲れた顔をして」

俺が海燕に聞くと海燕は思い当たる節があるのか「あー…」と少し視線を上げ、ガシガシと乱暴に頭を搔き始めた。そして暫く目を合わせないと思つたら急に「実は…」と話始めた。

「…十三番隊にも新しい隊士が入ったんす。でもその隊士が…」

話を要約するとその隊士とは朽木家クチキの養子の子らしく、朽木家と上手くいってない他に変に肩に力を入れ、十三番隊にも馴染めてないと言う。

「…どうしたらいいですかねエ……」

「どうしたらって、君が上司なんだから君が歩み寄るしかないでしょ」

「歩み寄る…」

「自分から歩み寄らないと駄目だよ。あつちから心開いてくれるなんて早々ないんだから」

そう海燕に告げると海燕は嬉しそうに「ありがとうございます!!」とお辞儀をしていた。

「うっし、行くぞッ!!」

どうやら何か吹っ切れたようである。



何処もかしこも息の詰まる場所ばかりだった。六番隊隊長 朽木白哉様の奥方、緋真様に似ていると言う理由で養子に迎え入れられた。

しかし、私には朽木家が合う筈が無かったのだ。私は元々流魂街出身の身。貴族など合う筈がない。現に奥方、緋真様には数回程しか会ったことがなく、白哉様には何か壁を感じてしまう。

そんな中、私は真央霊術院を卒業し護廷十三隊 十三番隊へと所属することになった。席官入りすることは私の実力じゃ到底できず、知り合いも居ないため話し相手も居ない。白哉様を呆れさせ、友を作ることも出来ない。どこにいても息が詰まり休みをとっていても碌に取れている気がしなかった。

「な——に——辛気臭えカオしてんだオメーは！」

「ひい……！」

急に木の上からぶら下がって出てきた海燕殿を見て私は悲鳴を小さくあげる。…全く気配を感じなかった……。

「なんかオメー毎回俺に会うたびに「ひい！」って言ってんな…軽くキズつくぜ…」

ちよつとキレ気味に海燕殿は言う「ホレ、オメーの分だ飲め！」と水を渡してきた。私はそれを大人しく受け取り、水を飲もうとする。そんな私の姿を見て海燕殿が急に語り始めた。

「…オメーのことだ。何でヘコんでんのかなんて訊いても答えやしねえだろうが…忘れんな。オメーがこの隊にいる限り俺は死んでもオメーの味方だ」

何処を見つめているのか分からない海燕殿が言った。

素直に、格好いいと思った。そんなことを真つ直ぐと言える、彼が。彼なら本当にしそうでそれがまた凄いと思った。それに：嬉しかった。最近は何かと私のことを気にかけてくれる彼。最初は私が曲がりなりにも朽木家の者だからだと思っていたのだが、どうやら違いうで、本気で私のことを心配してくれているのだ。

「格好いい」そう言おうとした。けどそれは海燕殿の耳に届く前に酒を勝手に飲んで酔った虎徹さんと小椿さんに邪魔された。今現在二人は海燕殿にウザがらみをしている最中である。

小椿さんが私に何か言ってくれているが志波隊長が全て「ウザイ」で片付けてしまった。そして最後にはキレた海燕殿に「休憩終了」を言い伝えられた。

海燕殿の隣は心地良かった。あの息苦しさが忘れられるぐらいに心地良かった。そんな海燕殿には妻がいた。女の身で第三席にまで上りつめた女傑でありながら聡明で優しく、美しかった。憧れた。あんな風になりたいと思った。私の、理想だった。

そんな彼女が任務をすぐに諦め、仲間を連れて焦った表情で帰って来た。私は焦った彼女の顔を暫くは忘れることができないだろう。

「海燕ッ!!」

「都!!」

あまりの慌てぶりに海燕殿が近寄る。都殿は海燕殿に詳しい事情を話そうとするが、息があがっており、中々話すことができない。

「藍、染……隊長、が……これ、をッ……!!」

都殿が懐から出したのはクシャクシャとなった紙だった。海燕殿は都殿から紙を受け取り、読み始める。

『彼女達の部隊では僕が無理だと判断した。虚は僕が倒しておくか

ら』

簡潔にそう書かれた紙を見て海燕殿は目を見開いた。

「…あの人が助けてくれたのか」

ようやく息が整った都殿は言う。

「最初は偶然だったの。散歩中の藍染隊長に会って、少し話をしたら藍染隊長もついていくつて。止めたんだけど、大丈夫の一点張り。だからやむ終えなく連れていったら……」

「助けられたのか」

「ええ。虚と戦闘になつて、殺されそうになつた瞬間藍染隊長が出てきたの。そして私にこの紙を渡すように告げられて、撤収命令も告げられた。藍染隊長は十三番隊の隊長じゃないけれど、あの人も隊長。隊長の判断は絶対。だから私は部下を連れて帰つて来たの」

都殿がそう言うとき海燕殿は「そうか」と言った。そして俯いていた顔を上げ、都殿に抱きつく。

「生きていて、良かった。都」

「藍染隊長のお陰よ」

「あの人に礼しなきゃな」

海燕殿は都殿を愛していた。今見ての通りだ。都殿が羨ましかった。どんな手段を使おうとも、生きて帰りその生還を喜ばれる彼女が。きっと私ならそうはいかないだろう。朽木家の名に泥を塗り、そして白哉様からは冷たい眼差しを向けられるに違いない。周りに力を認められていない所詮私のような者は一人誰にも気付かれぬよう死んでいくのが運命さだめだろう。



メタスタシアと言う名の虚を倒した俺は一人五番隊に帰っていた。暇だったので丁度会った都さんに無理を言っつてついてきたのだがそれが良かったらしい。参席の彼女でもあれは力の差が歴然だった。まあ俺のチートと言っても過言ではない『鏡花水月』を使えばどうってこともない相手であったが。

余談だが俺に久しぶりに名を呼んでもらえた『鏡花水月』は凄くうるさかった。俺が思わず『鏡花水月』の刃をへし折りそうになるぐらいには。

閑話休題

五番隊に帰ると一人の隊士が走ってこちらに向かってきた。

「隊長！」

「どうしたんだい？」

「客室にお客様が来ております」

お客様？一体誰だろう。ギンなんか五番隊に来たら客室なんかには通されないだろうし海燕もそうだろう。しかもお客様って。丁寧な言い方だなあ。でもせめて名前教えて欲しかったな。

客室に行くとそのはまた珍しい客がいた。

「君は朽木隊長じゃないか…」

「急に押し掛けた。済まぬ」

「いや、大丈夫だが…」

頭を下げてきた彼に俺は「大丈夫」と伝えると頭を上げた朽木隊長は言った。

「家に来てはくれないだろうか」

「はっ。」

思わず素を出してしまった俺は悪くない。



「隊長をなされてたんですね」

「……えーと……」

何処か見覚えのある彼女、名は緋真と言うらしいのだがその子がずっと俺に礼を告げていた。理由を聞くとどうやら俺は命の恩人らしい。……え？俺が？

全く信じられない話ではあるが彼女がずっとお礼を言ってきたいるのだからきつとそうなのだろう。彼女の気が済むまでお礼を言わせた朽木隊長の気持ちは分かるが正直やめて欲しい。なので俺は彼女に「お礼はもういいよ」と言った。

「藍染様のおかげで私は妹を見つけることができ、今もこうやって命長らえております。礼を言っても言っても足りない所存です」

「えーと……そこまで……？」

「だからお礼を言わせてください」と言う彼女を慌てて止めていたら誰かが帰って来たようだ。「只今帰りました、兄様、姉様」と聞こえる。朽木隊長は「そうか」と一言告げる。すると近くにあった気配は静かに消えていった。

「さっきのが例の妹さんかな？」

「……ええ」

どうやら家族仲筈が良好ではないようだ。彼女の暗い表情がそれを表していた。

「白哉様に無理を言ってるルキアを朽木家に迎えてもらったのはいいのですがどうやって接すればいいのかわからなくて……顔も見れない状

態なのです」

「それに白哉様は…」と言って彼女はチラツと朽木隊長を見る。

「ご存知のように口下手で…。きっとあの子には息苦しくて仕方ない場所なのでしょう」

悲しそうな顔をして彼女は言った。

「とりあえずは世間話でもしてみたらどうだろうか？」

「え…？」

「1日一回でもいいから何か会話をすればいいんだよ。そうしていく内に慣れる。そうすれば君の妹さんだって心を開いてくれる筈さ」

「……世間話…」

何か1日あった出来事等でも何でもいい。少しずつ、少しずつ話をしていけば慣れる。人類は万能に作られている訳である。

「ありがとうございます」

「いや、礼に及びはしないよ」

時間を見るとそろそろいい時間だった為、おいとまさせてもらうことにした。

「本当にありがとうございます」

彼女のお辞儀はとても深かった。



「藍染隊長!!都を助けてくれてありがとうございますッ!!」

どうやら今日は沢山お礼を言われる記念日かなんからしい。土下座をして礼を言ってくる海燕を見て俺はそう思った。

「土下座はやめてくれ。恥ずかしいから」

「いや、こうでもしないと俺の気が済みません!!」

「もう一度言うよ。恥ずかしいからやめて」

冷たい眼差しで見ていると海燕は慌てたように土下座をやめた。

「都が死んでたら俺は多分仇討ちに、死に行ってたと思うんです。だから、本当に」

「君、前に言ってたよね。部下の話」

「へ……? 朽木のことツスカ……?」

どうやら十三番隊の新隊士とは朽木ルキアのことだったらしい。丁度良かった。

「そこまで礼を言うなら、そのルキアって子を見捨てちゃ駄目だよ。彼女に歩み寄るんだちゃんと上司としてね」

「そりやわかってます!!」

「死んだら駄目だよ」

俺がそう言うと海燕はポカンと口を開けた。

「さっき君は言ったよね。都さんが死んでたら自分も死に行ってたって。それは駄目だよ。君には慕ってくれる上司も部下もいる。まだ部下の心も開けてない奴が全てを捨てて死ににいくつもりなんて大バカだ。心を開くどころかトラウマものだよ。誇りやらなんやらを言う前に、周りを見て本当に都さんが君の後追いを言うなら望んでいるのか一度冷静に考えなくちゃいけない。君の悪いところはカッとなると回りが見えなくなることだ」

「本当に、ありがとうございます！」

何故か礼を言われてしまった。が、言いたいことは言ったのでいいだろう。

「そろそろ帰りなさい。都さんが待っているよ」

「はい！」

……リア充滅びろ。嬉しそうな海燕の後ろ姿を見て密かに俺はそう思った。

甘い 催眠のような 誘惑

「――、こっちへ来て」

甘い声で女性は言った。まるで、自分に催眠をかけるように、魂の無い人形にするように。そんな声が、彼女の偽りの笑顔が、全てが嫌いだった。

「貴方はお金を集めるの。どんな手段を使っても」

彼女はギャンブル好きだった。子供を放置してギャンブルに行く。それが彼女の毎日。ギャンブル好きでも強いかと言われればそれは違った。いつも負けて帰ってくる。たとえ勝ったとしてもそのお金は全てまたギャンブルへと行き消え去ってしまう。

そんな彼女を父は早々見捨てた。父は自分が物心つく前に母と自分を置いてどこかへと行ってしまった。勿論帰ってくることはなかった。

とある日、母はオレに聞いてきた。

「そのジャケットどうしたの」

黒いスーツのジャケット。お兄さんの物を持ち帰ってしまったのだ。オレは綺麗に畳んであるジャケットを自分の後に隠すと言った。

「借りたの」

「それを見せなさい」

母は「ほら」と言って手を出してくる。

「嫌だ」

「お母さんの言うことが聞けないの。早く出しなさい」

必死に抵抗した。けど幼いオレじゃまだ母の力には勝てなくて直ぐにジャケットをとられてしまう。

「やっぱり」

母は小さくそう呟くとオレの両肩を力いっぱい掴んで言った。

「アンタいつこんなお金持ちとつるんだのよ!!このジャケット凄いいブランド品じゃない!!」

「痛いーやめてよ、ねえ!!」

「早く言いなさい!!」

パシンと頬を叩かれる。頬は赤く熱をおび、じんじんと痛みを訴えた。

「嫌だ言わない!!」

それから何度も叩かれた。けどオレは最後まで口を割らなくてキレた母はジャケットを持って外へ出て行ってしまった。多分あのジャケットを売りに行くのだろう。

「せつかく返そうと綺麗に畳んだのになあ…」

涙を目にいっぱい溜めてオレは言った。やっぱり親は嫌いだ。



ジャケットを売るため、女性は道を歩いていた。このジャケットはかなりのブランド品。今どっかで売ったとしても凄い値打ちな筈だ。使えないと思っていたものがこんなものを持つているなんて。女性は醜い笑みを張り付けた。

「すみませんちよつといいですか？」

黒髪の高身長な男性が女性に話しかけた。男性は優しそうな風貌で世の中で言われるイケメンである。モデルをやっていると云われればだよねと言いつ返せるほどだ。

「何か？私、急いでるんですけど」

女性がそう言うのと男性は懐を探りながら言った。

「彼を知りませんか？」

「え」

男性が懐から出したのはとある写真。男の子が写っている写真だ。

「この子…」

「取り引きしませんか？俺と」



ガチャとドアノブの捻られる音がする。帰ってきたのかオレはそう思った。出迎えることはしない。それはいつものこと。極力、顔を合わせないように頑張っている…つもりだ。

サツと襖の開く音がする。珍しい、そう思った。母はいつもオレと関わろうとしない。だから部屋にいても滅多に入って来ないのだ。

「ちよつと出なさい。話があるわ」

母はそう言うのとそそくさとリビングへ行ってしまった。本当は行きたくないが行かないとまた叩かれるだけである。叩かれるのは痛い。痛いのは御免だ。だから渋々起き上がり、リビングへと向かつ

た。

リビングには母と男の人がいた。男の人の顔を見たいのだがどうにも影になっついて見えない。母はオレが来たことに気づくと言った。

「アンタ、もうここに帰ってこなくていいから」

「え——？」

言ってる意味が分からなかった。母は母らしいことを何一つやってくれなかったがそんなことはオレに一度も言ったことがなかった。

「取り引きしたのよ彼と。私はアンタを彼に売ったの。だからアンタはもうこの家が我が家じゃないのよ」

「……」

「清々するわ。アンタ邪魔だったのよ。ろくに金も持ってこれないアンタが。アンタを売った金で私は一生遊んで暮らしていける金が入ったわ」

「そう」

元々好きじゃなかった母親がもっと嫌いになった。それと同時に嬉しかった。こんな腐った家から出れることが。

「久しぶりだね」

優しい声だった。聞き覚えのある声だった。思わずオレは近寄って行ってしまふ。

「お兄さん……！」

オレを買った人は公園で会ったお兄さんだった。

「何でお兄さんが」

「詳しい話は外でしてちょうだい。私今から遊びに行くから邪魔なの」

説明しようとしたお兄さんだったが母の言葉を聞いて苦笑いをこぼし「一先ずオレの家に行こうか」と言った。



靴を履いて家を出る。すると野太い声が聞こえた。

「頭ア、五体満足で帰って来てくれたんスね!!」

禿げてるのが剃ってるのかは分からないが、頭には髪の毛一本化たりとも見当たらないガタイのいい男の人が家の前で立っていた。

「そりや戦争に行くわけでもないし当たり前でしょ」

「それでも俺は嬉しいツス!!」

涙目で男はそう言うとおレに気づいたのかオレに視線を移した。

「頭、このガキが…」

「うん。今日俺が取り引きして買った子だよ」

そう言うとお兄さんはオレの頭を撫でた。

「挨拶しな。今日から一緒に暮らすんだから」

「えつと……—です。よろしくお願いします」

名前を言ってお辞儀をすると男の人は少し考える素振りをし言った。

「頭、名字はどうするんですか？」

「あー、うん。今度から『――』って名乗りな。もう俺等は家族なんだし」

「は、はい……」

「緊張しないでいいよ」お兄さんはそう言って笑うと車に乗り込んだ。

「ほら、早くおいで」

「うん!!」



お兄さんは優しかった。少なくとも母よりかはまともにちゃんと育ててくれた。滞納していた給食費も払ってくれたし、ぼろぼろになった筆箱とかそう言うのを見て新しいのも買ってくれた。勿論服も、色んなのを。

「オラァー！若頭が帰ってきよったでェ!!」

1つ文句をつけるとしらここがヤのつく危ないところが嫌だろうか。お兄さんも小さい頃からこれが嫌で毎日抜け出していたらしい。勿論数分で見つかり強制送還されていたらしいが。

お兄さん曰くヤクザの親玉になるつもりはなかったと言う。お兄さんのお父さんが急病で死んでしまいでんやわんやあり、無理矢理ヤクザの親玉になってしまったとか。今すぐやめていいのならやめるとも言っていた。

俺は中学を卒業し高校に入学した。公立に入学した為、そこまでは迷惑をかけていないと思うが、少し気になるところではある。俺は高校を卒業したら一人立ちするつもりだ。お兄さんたちに迷惑をかけるつもりはない。∴決してヤクザが怖いとかそう言う訳じゃないよ、ホントだよ。

高校の成績はまあまあだった。上でもなく下でもない。所謂、中

あるが如何せんパツとしない。そんなのが三年間続きやがて卒業。因みに高校生活は特に書くことも無いので割愛させてもらう。卒業式はお兄さん以外の組の者が来ると五月蠅かったがお兄さんが黙らせていた。ナイス、お兄さん。

そんなこんなで卒業して一人立ちをする日が来た。

「若頭ア!! 本当に行ってしまうんスカ!?!」

「うん」

「何かあつたら帰っておいで」

「はい!!」

「いかないでください」と言う声が多数聞こえたが全てお兄さんが黙らせてくれた。

「それじゃあ…行ってきます!!」

「行ってらっしゃい」

—— 彼の名前は『 藍染光右介 』

尸魂界編 旅禍

外を散歩していた。気まぐれだった。正直あそこ三番隊は好きではない。副隊長の癖に何言ってるんだって思われても仕方がない。けれど嫌いなものは嫌い。どうしても好きになれないのだ。

五番隊あそこの居心地がよすぎたせいだ――。

一人で白道門の近くを散歩をしていたから気づいた。感じたことのない霊圧に。数は複数。その中でも強い霊圧が1つ。隊長各に匹敵するほどの霊圧だ。

「…丁度暇してたところや。見に行ってみてもええな」

ボクは独り言を呟くと白道門へと向かった。

白道門につくと白道門の門番しだんぼう丹坊が旅禍らしき人物達に門を開けていた。ボクは少し、少しづつ丹坊達に近づいていく。大分丹坊達に近づいたところで丹坊がボク存在に気づいた。

「…あ…ああ…あああああ…」

丹坊はボクを見つめて震えている。オレンジ色の髪色をした青年がボクを見て怪訝そうに言った。

「誰だ?」

「さ…三番隊副隊長…市丸ギン…」

ボクを怯えた目で見る丹坊は滑稽でしかなかった。門番は選ばれた者しかできないものだ。そんな選ばれた奴がたかが副隊長のボ

クゴときを見て怯えるなんて。こんなのが門番だと思おうと瀧靈廷が心配になつてくるものである。

「あアこらあかん」

より一層ボクは笑みを深めて言った。☒丹坊が身構える。ボクは斬魄刀に手を……。

「つてホントは言わなあかんのやけど」

「は？」

「見逃したるわ」

斬魄刀に手を掛けていたのをやめボクは言った。オレンジ色の髪色の青年は眉間にシワを寄せてボクに問うた。

「てめえ俺たちを止めなきやなんねえんじやねえのかよ」

「せやね」

「ならなんで止めるんだ？」

「てめえは俺達の敵なはずだろ」そう青年の顔に書いてあるような気がする。そんな青年の顔を見てボクは笑った。

「何笑つてやがるんだ」

「いや、おもしろい思うて。氣イ悪くしたなら謝るわ」

そう言う青年は「別に謝らなくてもいいけどよ…。調子が狂うぜ」と言った。

「ボクに調子崩されとるん？やっぱ若いなあ。これぐらいで調子崩されるならこの先生きていけんで。瀧靈廷の中にはぎようさん優しいマスクを被った黒い悪魔が居るからなあ。氣イつけとき」

「お前意外に優しいんだな」

「ボクが？」

ボクがそう聞くと青年は少しむず痒そうに「ああ」と頷いた。

「んー、ボクの推測からしてキミ見る目無いな。ボクは全然ええ人なんかや無いで。自分の目的のためには手段は厭わん。だからなあ、萱草色かんぞういろの髪に身の丈ほどもある斬魄刀のキミにやって欲しいことがあるんや」

「やって欲しいこと？」

青年は首をかしげて聞いた。ボクは笑顔のまま告げる。

「キミに殺してほしい人物居るんや。ここ通す代わりに殺して来てくれへん？」

「はあ!？」

青年は大きな声を出す。まるで「てめえ何言ってるんだ」とでも言うかのように。

「正直ボクが殺してもええんやけどこれでもボク副隊長やし見つかったら色々ヤバイんや。せやから、キミ等に頼もう思うてな」

ボクがそう言うとオレンジ色の髪色の青年はワナワナと肩を震わせ言った。

「ふざけんな!!俺らは人殺しなんかしねえ!!そんなことするぐらいなら俺らはここを通らねえ!!」

「…何言ってるの?」

ボク達の周りの気温が一気に下がったように感じた。

「キミは朽木ルキアを奪還しに来たんやろ？知つとるでだいたいのこととはな。そんな人殺ししないとかなんとかでほんまにこの尸魂界で生き延びれる思うてる？ほんまにそれを心の奥底から言うてるならキミ」

ボクはここで息を吐いて、吸った。

「死ぬで？」

旅禍達の肩がブルツと震えた。ボクが一気に霊圧を解放したからやと思う。きつと彼らはボクの霊圧に当てられている。

「キミ等意外に弱いんやなア。尸魂界に乗り込んできたから結構強い思うてたんやけど…ボクの霊圧にあてられるぐらいなら朽木ルキアのこととは忘れてのんびり現世で暮らしとった方がええよ」

「てめえ…!!」

「止めろー！護!!」

後ろの方にいた黒猫がオレンジの少年を止めた。この黒猫がこの旅禍達の中で一番強いだろう。きつとこの猫が先程の隊長各に匹敵する霊圧の持ち主だろう。

「うん、その黒猫ぐらいやない？この尸魂界で生き延びれるのは」
「……」

「ま、ええわ。交渉決裂やね」

ボクは斬魄刀に手を掛け☒丹坊の片腕を切った。

「門番は門を開けるためにいるとちやうで」

「☒丹坊!!」

ボクは旅禍達から距離をとる。

「てめえ逃げるつもりか!!」

「なわけないやろ」

「だったらなんだ？その脇差でも投げやるつもりかよ！」

ボクは歩く足を止め、旅禍達と向き合う形になる。

「脇差やない。これがボクの斬魄刀や」

更に霊圧を放出する。

「またキミ等に会えるとええなあ。せや、いいこと思い付いたわ。ボクキミ等のこと気に入ったからええこと教えたる。この瀨霊廷内でキミ等に力を貸してくれそうな人物が数名。一人は五番隊隊長 藍染惣右介。二人目は八番隊隊長 京楽春水。三人目は十三番隊隊長 浮竹十四郎。他にもキミ等が強かったんなら十一番隊の隊長さんとかが手エ貸してくれるかもしれないな。最後に忠告や。キミ等ごときの力であの人が殺れるとは思わんけど、もし五番隊隊長に何かあってみ。ボクはキミ等を殺すまで追いかけるで」

霊圧を二倍、三倍、四倍とあげていくとボクは眩いた。

「射殺せ『神鎗』」

光のように疾い何かの旅禍の方へ行く。旅禍は間一髪斬魄刀でガードしたが丹坊と共に吹き飛ばされてしまった。門が降りるギリギリのところでボクは顔を見せ、旅禍達に言った。

「バイバ——イ♡」

門が閉じられた。



何かを手に入れる為には何かを失わなければいけない。それを旅禍達は何も分かっていないのだ。

「さて、どうしましょ。三番隊さんばんちの隊長殺すには」

旅禍達からはそんなことしないと断られてしまった。こうなればボク自身が彼女を殺さなければならぬだろう。殺すことに抵抗はない。ボク自身彼女が嫌いなだけだから。彼女はいつか藍染隊長に仇なす。確信があった。

「旅禍が侵入して、尸魂界が混乱しとるときに殺るのが一番やるなア」

自分の笑みが薄気味悪いことが自分でも分かった。幸い周りには人が居なかつたので良かったのだが。

ブルツと伝令神機がなる。見てみると隊長からの呼び出しだった。

副官章

ダンダンダンダンダンダンッ

複数の足音が聞こえる。それも慌ただしい足音である。

「…初めてっスよ俺。副官章なんかつけるの」

「あたぼうよー！こんとに強制されてハメるんはワシも初めてなんじゃけえの！」

阿散井の言葉に隣を歩いていた射場いば 鉄左衛門てつざえもんが言った。

「副隊長は副官章を着けて二番側臣室に待機せよ——…か」
「…つと」

指定の部屋に着いた二人は部屋を覗く。すると部屋の中にはまだ雛森しかいなかった。

「…阿散井くん、射場さん」

体育座りして待機していた雛森に阿散井は近づいて雛森に問うた。

「雛森、何だよまだオマエだけか？」

「うん…そうみたい」

「隊長・副隊長なんてのは尸魂界中に散らばって忙しくしてるような連中ばっかだからねエ」

雛森とはまた違う大人の声。綺麗なソプラノの声で阿散井も射場も雛森も聞きなれた声だった。

「全員集まるのに半日ぐらいはかかるんじゃない？」

十番隊副隊長 松本乱菊。彼女は「ウチの隊長とさっぱり連絡がつかない」と言っただけのため息をついていた。

「…阿散井くん…」

「あ？」

「うちの藍染隊長と市丸副隊長知らない？乱菊さんも…」

雛森は涙目になりながら言った。

「朝から隊長の姿を見かけなくて…ホントはこの場所も市丸副隊長と一緒に来ようと思ったのに市丸副隊長も、見つからなくて…」

「…心配すんな。何にもねえよ。この召集だって直ぐ解かれるに決まってるさ」

「そうよ。それに藍染隊長はともかくギンはいつもフラフラと何処かに消えちやうんだからその内ひよっこりと出てくるわ」

「全く心配性ね、雛森は」と乱菊は笑いながら雛森の頭を優しく撫でた。



「…来たか。さあ！今回の行動についての弁明を貰おうか！三番隊副隊長——市丸ギン!!!」

ギイと大きな扉が自動で開かれる。大きな部屋の中には各隊長が集まっていた。勿論中には、藍染も皇もいる。

「イキナリ隊長に呼び出されたかと思うたらこない大袈裟な…。尸魂界を取り仕切る隊長さん方がボクなんかの為にそろいもそろってまア……—でもないか。十三番隊隊長さんがいらっしやいませんか。どないされはったんですか」

市丸の問いには東仙が淡々と答えた。

「彼は病欠だ」

東仙の言葉を聞いて市丸はこの場に居ない浮竹に向かって「そらお大事に」と言う。

「ふざけないで頂戴」

甲高い声が部屋に響く。

「ギン、貴方旅禍と遊んできたみたいね。独断行動の上に旅禍を逃がすなんてどういう見かしら。貴方の行動は三番隊に泥を塗る行動よ」

「泥を塗るやらなんやら知ったこつちやねえ。市丸、てめえ程の奴が旅禍の4・5人殺せねえ訳ねえだろ」

市丸は更木の言葉を聞いて今知ったという顔ぶりで言った。

「あら？死んでへんかってんねや？アレ」

市丸は頭を搔きながら続ける。

「いやアてつきり死んだ思うててんけどなア。ボクもまだまだ未熟だった言うことやる？」

市丸の言葉を聞いて涅が「クク」と笑う。

「我々隊長クラスが相手の魄動が消えたかどうか察知できないわけないだろ。それともそれができないほど君は油断していたとでも言うのかネ!？」

更木や皇、涅の言い合いを静かに聞いていた日番谷がボソツと「始まったよバカ共のバカ喧嘩が…」と呟く。

「いややなあ。まるでボクがわざと逃がしたみたいな言い方やんか」
「そう言っているんだよ」

「うるせえぞ涅！今は俺がコイツとしゃべってんだ！すっこんでろ！俺に斬られたいなら話は別だがな」

「そう言う更木も黙ってて貰えないかしら？私は上司としてギンとケリをつけなきゃいけないのよ」

市丸達四人がギャーギャーと言い合っていると総隊長が動いた。

「べいっー」

四人の言い合いは一瞬のように消えて静かになる。まるで先程の騒がしさが嘘のようだ。

「やめんかいみつともない！更木も涅も皇も下がらっしやい！」

総隊長がそう言うのと三人はおとなしく後ろへ下がる。総隊長は頭をボリボリ掻きながら言った。

「…じゃがまあ今のでおぬしがここへ呼ばれた理由は概ね伝わったかの。今回のおぬしの命令なしの独断行動、そして標的を取り逃がすという副隊長としてあるまじき失態！それについてのおぬしからの説明を貰おうと思つての！その為の隊首会じゃ」

総隊長は大量の霊圧を市丸にかけながら問うた。

「どうじゃい。何ぞ弁明でもあるかの、市丸や」

ギンは総隊長の霊圧をまるで感じていないかのような清々しい笑みを張り付けて言った。

「ありません！」

「…何じゃと？」

総隊長の問いに市丸は視線をやや下に下げ地面を見ながら言った。

「弁明なんてありませんよ。ボクの凡ミス。言い訳しようもないですわ。さあどんな罰でも——」

「……………」

藍染は静かに市丸を見守っている。ギンが全てを言い終わる前に警報が瀋霊廷に鳴り響いた。

《緊急警報!!緊急警報!!》

《瀋霊廷内に侵入者有り!!》

《各隊守護配置について下さい!!》

警報を聞いた隊長各は慌てる。例の旅禍か、と。隊首会は終わっていないのに更木は勝手に飛び出す。それを見届けた総隊長がひとまず隊首会の解散を告げた。

「隊首会はひとまず解散じゃ！市丸の処置については追って通達する。各隊、即時に廷内守護配置についてくれい！」

総隊長の言葉を聞いて隊長は皆部屋を出ていく。その中皇は市丸に近づくと市丸の頬をひっぱたいた。

「随分と都合よく警鐘が鳴るものね」

「隊長、言わはってる意味が」

「…それで通ると思わないで頂戴」

二人が話している光景を日番谷はじつと見ていた。



外に出ると球体のような物が落ちてこようとしていた。俺は慌てて近くにいた雛森君に命令を出す。

「落ちて来るぞ！みんなを少し下がらせてくれ雛森君！」

「は…っはい！」

球体は遮魂膜にぶつかって止まっている。

「あそこに衝突しても消滅しないとは…それほどの密度を持った霊子体だと言うことか…！」

暫くすると球体は壊れ四方に飛び散って行った。



時間が少しずつつ経った頃。傷だらけの阿散井くんが担架で運ばれて来た。

「…そんな…！」

「…僕が見つけた時にはもうこの状態だったんだ…。もう少し早く見つけて僕が戦いに加勢していれば…」

吉良の言葉に雛森は泣きながら頭を振った。

「ううん…そんなの…吉良くんのせいじゃ…」

「…ともかく四番隊に連絡するよ。上級救助班を出して貰おう…」

吉良がそういつた瞬間後ろから声が聞こえた。

「その必要は無い」

聞き覚えのある声。これは目の前に倒れている阿散井の上司、朽木白哉の声だった。

「牢に入れておけ」

雛森は白哉に進言する。がそれは聞き入れて貰えなかった。「一人で戦いに臨むと言うことは決して敗北を許されぬことだ」と。そして阿散井のことを「愚か者」だとも言った。

雛森は白哉の言葉に目を見開き手を、肩を震わせる。

「…ちよつ…ちよつと待ってください!!そんな言い方って…」

「よせ!」

「だって吉良くん…!」

吉良は直ぐ様雛森を止めると頭を下げた。それを見た雛森も渋々頭を下げる。それを見届けた白哉は去っていった。

「お——こわ!」

「市丸副隊長!!」

ギンが姿を表すと二人の強張っていた表情が心なしか少しとれたような気がする。雛森はギンの側によると問うた。

「今まで何処に行ってたんですか!？」

「んー、まア色々あつてなア」

「色々って……」

雛森は顔を俯かせるとギンが頭を撫でた。

「心配せんでもええよ。四番隊ならボクが声かけてきたる」

「でも朽木隊長は…」

「何言うてんの？ここで四番隊に声かけなかったら阿散井クンも死んでまうしボク等も卯ノ花隊長に殺されてまうで？そんなのはごめんやからなア」

ギンはそう言うと「ほなまたな」と雛森に告げ「ついておいでイツル」と言った。吉良は大きく返事をするにギンと共に何処かへと消えてしまう。

「よろしくお願いしますー！」

雛森は大きくギンにお辞儀をした。

「おわ——！こりゃ派手にやられやがったな阿散井のヤロー！」
「ふわあっ?!」

急に後ろへ現れた日番谷に雛森は驚く。

「ひ…日番谷くん!!」

「オイオイ、オレもう隊長だぜ。いーのかよそんな呼び方で？」

「うるさい！もう！どうして隊長さん達はみんな足音たてずに近くに来るのよっ!!だいたいどうして日番谷くんが——どうしてこんなところにいるの？副官さんも連れずに…」

雛森の質問に日番谷は黙った。暫くすると日番谷は雛森に目を合
わせず言った。

「三番隊には気をつけな」

雛森は日番谷の言葉に「え?」と声を漏らす。

「三番隊…? 吉良くんや市丸副隊長のこと…? 何で?」

「俺の言ってることは市丸だが吉良もどうか。取り敢えず気をつけて損はないぜ」

雛森は日番谷の言うことが信じられないと言う顔をしている。現に今日番谷にそう言っている。

「何言ってるの? 市丸副隊長はそんな人じゃないよ? あたし知ってるもん。何でそんなこと言うの?」

雛森の問いを聞いて日番谷は「やっぱり……」と予想していた通りになったことを恨んだ。



「遂に護廷十三隊の副官の一人を欠く事態となった。最早下位の隊員達に任せておけるレベルの話ではなくなった。先の市丸の単独行動については不問とする!」

「おおきに」

総隊長の言葉に市丸は礼を言う。総隊長はそれを一目見ると話を続けた。

「副隊長を含む上位席官の廷内での斬魄刀の常時携帯及び戦時全面解放を許可する! 今回ここに集まれなかった者達にもそう伝えて欲しい!」

そう総隊長は言うと言った怒りを含んだ声で言った。

「諸君。全面戦争といこうじゃないかね」



最近疲労が溜まってきているような気がする。：まあ気のせいだろうが。そんな風に思っていないと生きていけない。今なんか旅禍が瀨霊廷に攻めてきている事態。休暇取りたいなんて言ったら旅禍の首が吹っ飛ぶ前に俺の首が吹っ飛んでしまう。

いつも通りの残業。取り敢えずすぐ寝れるように持ち帰ったのはいいが……正直雛森くんの気配がうざったい。集中できない。だから話しかけることにしてみた。

「どうした。何かあったのかい？雛森くん」

話欠けると雛森くんは襖を挟んでもわかるぐらい肩を揺らしていた。そんなに驚くことも無いだろうに……。雛森くんは静かに襖を開けると謝ってきた。

「……すみません……少しだけ……お話させて頂けませんか……？」

雛森くんの言葉に俺は少しだけ目を見開かせる。確かに雛森くんは甘えん坊だとは思っていたが、こんなことは今まで一度もなかった。と言うことはこの全面戦争が彼女には相当堪えているのだろう。まあ無理もないか。

「……こんな夜更けにご無礼は重々承知の上でお願いします……。ね……寝ません！隊長の前で粗相のないようずっと起きてます！だからどうか——」

俺は立ち上がると着ていた上着を雛森くんに掛けてあげた。最近夜は冷えるからね。

「僕が無礼を理由に追い返すと思うのかい？僕がそんな人間だったら少なくとも今この瀋靈廷にはギンも海燕も居ないよ。日頃、僕はそんなに冷たく見えてるのかな？」

「そ、そんなことはないです!!藍染隊長は優しくそれで、それで!!」

慌てて俺の良いところを言おうとあたふたしている雛森くんの頭を撫でる。

「入りなさい。今日は大変な1日だっただろう。落ち着くまでいつまでもいるといい」

正直早く帰って欲しいけどな（やけくそ）

「…阿散井くんは命に別状はないそうだよ…。朽木隊長は罷免を唱えたが反対にあつてそれもなくなつた。傷が癒えればすぐにでも本隊に復帰できるそうだよ」

「本当ですか！良かった…」

雛森くんは嬉しそうな声色で言った。

「反対って…もうしかして藍染隊長がしてくださつたんですか？」

「僕だけじゃないよ。彼は優秀だし皆に好かれている。彼が罷免されて喜ぶ人なんて護廷十三隊には一人もいやしないさ」

…正直雛森くん。俺の為に早く寝てもらえると助かる。何だよ、仕事持ち帰ったら雛森くんが来て仕事出来なくなるし頭痛いし。これ絶対に風邪引いたね。久しぶりだなあ、風邪引くの。

雛森くんが寝たのを見計らって俺は部屋を出た。まずは体温計から探そう。次は頭痛薬。因みに何故わざわざ雛森くんが寝たのを見計らつたかと言うと騒がれたらめんどうだから。こんなの寝てりや

治るしね。 変に心配されても困るし。

藍染惣右介

「いやあああああ!!」

甲高い叫び声が聞こえる。叫んだ人物は雛森だった。雛森の叫び声を聞き付けて近くにいた副隊長達が集まって来る。

「…あ…はっ…はっ…ああ…あ…」

雛森は目を見開いて、その見開いた目に沢山の涙を浮かばせている。そして、まともに呼吸もできていないぐらい取り乱していた。

「藍染隊長、藍染隊長っ！いやだ…いやです、藍染隊長!!藍染隊長っ!!!」

雛森が見た光景。それは傷だらけの藍染が吊るされていたのだ。雛森は泣きながら叫ぶ。しかし藍染は動くことはおろか目も覚まさない。まるで死んでいるかのように。

「何？騒がしいわね」

後ろから声がする。声の主は三番隊隊長 皇帝。皇の後ろには市丸もいた。雛森はその姿を見て日番谷の言っていたことを思い出す。

『三番隊には気をつけな』

まともな判断がつかなくなった雛森は藍染が吊るされているのを何故か嬉しそうに見ている皇を見て目をカッ開く。怒りを含んだ目で。

「お前か!!!」

雛森は叫ぶと斬魄刀の柄を強く握り、皇に突進する。皇にもう少
しで斬魄刀の刃が届くと言うところで斬魄刀を抜刀した市丸に止めら
れてしまう。

「市丸副隊長…どうして…」

「仮にもボクは三番隊副隊長。隊長の危険は見過ごせんのだよ」

ギンは力なく笑う。しかし周りが見えていない雛森はギンが力な
く笑っていることに気づかない。

「…お願いします…！そこを退いてください…」

「それは無理なお願いやね」

「斬魄刀、退かしてくれへん？」と雛森を説得しようとするギンだが雛
森にその声は聞こえない。

「…お願いします…退いて……」

「雛森ちゃん」

「退けって言うのがわからないの!!」

「お願いやからその刃を退かして!!」

珍しくギンが叫ぶ。雛森がドジなことをやっても「次頑張ろな」と
怒るのではなく優しく、次にいかせと諭してくれたギンが、藍染に似
てかなり温厚な彼が雛森の前で大声を出す。

雛森はギンの叫び声でハツとする。

「雛森ちゃんが斬魄刀退かさないとボクは雛森ちゃんを止めるため
に斬魄刀を使わなあかん。それは嫌や。だから退いてくれへん、雛森
ちゃん。雛森ちゃんの気持ちはよく分かる。せやけど…お願いやか
ら……」

ようやく正気を取り戻した雛森は気づく。僅かだが市丸の手が、斬魄刀を握っている手が震えていることに。

「あ……ああ……」

「ごめん、なさい……」雛森はそう言つて後退りする。後退りした際に手の力が抜けたのか斬魄刀は重力に吸われるように落ちていった。

「あたしよりも、市丸副隊長の方が……ごめん、なさい……ごめんなさい……!!」

雛森は手で顔を覆うと大きな声で、まるで小さな子のように泣き始めた。

「イヅル」

「は、はい……!」

皇は近くにいた吉良に話しかける。吉良は急に話しかけられたことに驚き肩をびくつかせながらも大きな声で返事をする。

「彼女を拘置しなさい。また暴れられたらたまつたもんじやない」

「ただでさえ人手不足なのに何をしているのかしら」皇はそう言うとその場を去る。

「ハッ、ハハハ!!ハハハ!!」

急に大きな声で市丸が笑い始めた。

「ああ、おもしろいわ。もうあかん。もうガマンでけへんわ。…絶対に

殺す」

「市丸、副隊長…?」

吉良が話しかけるが市丸にはどうやら届いていなかったようだ。市丸は瞬歩で消えてしまう。

「藍染隊長に手エ出したこと後悔させたる」



「はあ!? 藍染隊長が殺された!? 一体誰に!!!?」

「い、いえ…まだ犯人は分からず…」

旅禍が侵入して現在瀨霊廷はドタバタとしていた。その中志波海燕は浮竹に資料を渡すため廊下を歩いていたのだが隊士に止められ報告を聞く。その報告は海燕にとってあり得ないことだった。

「市丸は何処だ」

「それが…」

「市丸副隊長は雛森副隊長と一悶着あった後から姿を消して現在行方かわからない状態で…」と隊士から話を聞いて海燕はため息をつく。

「相当キレてやがるな市丸のヤロウ」

藍染の一番弟子の市丸ギン。彼は藍染とかなり深い繋がりがある。そんな彼なら何か知っていると思っていたのだが…行方を眩ませていると言うことは彼は何かを握っていてそれを実行しようとしているのだろうか。

「あーもう、色々やらなきゃいけねえことがあつて参っちゃまう」

「どうなさいますか？」

「藍染隊長のことは市丸に任せる。俺達は…朽木の処刑を止めることに専念しねえと」

海燕は廊下から晴天の青い空を見た。

「全く憎たらしいぜ。あんなに晴天だよ」



「…藍染隊長、こんなお姿になられて…」

四番隊隊長 卯ノ花烈と一緒に死体の解剖をしていた虎徹勇音は藍染の姿を見て悲痛な声を漏らした。卯ノ花はテキパキと解剖を進めていく。そして一定の解剖が終わったとき卯ノ花は勇音の名を呼んだ。

「勇音」

「は、はい…!」

「奥に昔摂取していた血が有りましたよね？」

卯ノ花に聞かれ勇音は「え、ええ」と答える。

「確か有ったと思いますけど…それがどうかしたんですか？」

「今からDNA検索をします。持ってきて欲しい血が有るので取ってきてください」

卯ノ花は取ってきて欲しい血の番号を言う。すると勇音は目を見開き「その番号って…」と呟いた。その呟きが聞こえていた卯ノ花は静かに頷いた。

「ええ。多分彼は前任、四番隊副隊長 終夜結右華よもすがらゆうかの血縁者でしょ

う」



終夜結右華は卯ノ花隊長の右腕だった人物である。卯ノ花隊長との長い付き合いであり回道の腕だけであれば卯ノ花隊長を凌駕するほどの腕前だった、と聞いたことがある。

しかし彼女は体が弱く、護廷十三隊には長くいられなかった。

「結右華は私が気づかない内に子供を授かっていました」

彼女はそれを理由に護廷十三隊を抜け、隠居し始めた。最初は月一の頻度で卯ノ花と連絡をとっていたがある日を境にそれはなくなり最後には行方不明となった。

「何となく気づいていたのです。彼は結右華の子ではないか、と。目元なんかは特に結右華にそっくりでしたので。だから聞きたかった。結右華は今元気に暮らしているか。まあ聞けませんでしたがね」

卯ノ花が合間を縫って聞きに行こうとしたあの日。藍染には瀟灑で迷っていた客人がいた。それを見た卯ノ花は客人に譲ったのだ。いつでも聞ける、そう思っ

「こんなことになるのなら早めに聞いておけば良かったですね」
「隊長……」

卯ノ花の横顔はとても寂しそうで悲しそうだった。



雛森は牢に囚われていた。大きな隈を作って体育座りをして丸まっている。きつと寝れていないのだろう。

「雛森桃」

「…皇、隊長……」

牢の前に立ったのは皇帝。皇は座り込んでいる雛森を見ると牢の鍵を開けた。そして一言言う。

「ついて来なさい」

雛森は言われたように大人しくついていく。そしてとある場所につくと皇は歩いてきた足を止めた。

「ここは…せいじょうとうきよりん清浄塔居林…四十六室の為の居住区域…どうしてあたしをこんなところに…？皇隊長」

雛森が聞くと皇はニコリと不気味な笑みを張り付けて言った。

「…逢わせたい人がいるのよ」

「…逢わせたい…あたしに…ですか？」

雛森の問いに皇は「ええ」と頷いて答えた。

「ほら、後ろ見てみなさい」

「うし…ろ…？」

雛森の後ろにある扉には死んだとされていた藍染が立っていた。

「…あ……藍染……隊……長……」

「…久しぶりだね…雛森くん」

藍染はいつもの優しい笑みで言った。雛森は動揺する。当たり前

だ、藍染は雛森の目の前で死んでいたのだから。

「…本当に…藍染隊長なんですか…？亡くなられた筈じゃ…」

雛森は激しく動揺する。藍染が雛森を安心させるように優しく言った。

「…大丈夫。この通り生きているよ」

「あ…藍染隊長…藍染隊長あたし…あたしはっ…」

雛森は本当の藍染か、とペタペタ体を触って確かめそして藍染に抱きついて泣いた。

「…藍染…隊長…隊長…」

雛森は藍染にすぎるようにして抱き締める。藍染は雛森の頭を優しく撫でた。

「…すまない心配をかけたね雛森くん」

雛森は藍染に頭を撫でられ安心する。これは本物の藍染隊長の手だ。いつもと同じ心を洗い流してくれる藍染隊長の匂いだ。本当に藍染隊長だ、と。

「…すまない。僕のせいで少し痩せさせてしまった」

「いいんです。もういいんです。隊長が生きて下さっただけであたしは何も——…」

「…ありがとう雛森くん」

藍染は雛森のことを強く抱き締めた。

「君を部下に持てて本当に良かった…。ありがとう雛森くん…。本当に、ありがとう…」

藍染はそう言うのと雛森には気づかれないうちに冷たい目で見下ろし言った。

「さようなら」

雛森の腹を斬魄刀で刺す。雛森はあり得ない、と言うような顔で藍染を見上げた。

「嘘」

雛森の腹を刺した斬魄刀を藍染は抜くと同時に雛森は倒れた。藍染は斬魄刀に着いた血を振り払い言った。

「これでいい？帝」

「ええ。上出来よ聖」

藍染だと思っていたモノは藍染ではなく現鬼道長 乾聖だった。乾は皇に褒められたことが嬉しいのか笑った。

「もうしかしてオレ役者向いてるかもしれないね」

「ええ、そうね」

皇は腹から大量の血を出して倒れている雛森を冷たい目で見ると言った。

「行きましようか聖。ここは臭いわ」

「うん、そうだね」

部屋から出ると皇達の前に血走った目をした日番谷が現れた。

「…鬼道長の乾…と……」

「あら隊首会ぶりじゃないかしら、日番谷くん」

「……皇……!?!」

こんなところにいる皇を見て日番谷は驚く。日番谷は脱獄した雛森の霊圧を辿ってここまで来た。が、雛森は急に霊圧が減少し今はもうわからない程小さくなっている。

「皇、雛森を知らないか」

「ああ、彼女。彼女は……」

皇は後ろを向く。皇の視線には大量の鮮血を出して横たわっている雛森の姿。

「——ひ………雛………森………」

雛森の姿を見て日番谷は憤怒の表情を見せる。

「ごめんなさい。日番谷くんを驚かせるつもりはなかったのよ。でも貴方のために粉々に切り刻んでおくべきだったかもしれないわね」
「……どういふことだ皇に乾」

日番谷は肩をフルフルと震わせながら皇達に問うた。

「どういふこと? 見ての通りよ。私も聖も貴方の敵。尸魂界の敵なのよ。最初っから。私が隊長に、聖が鬼道長になった時から」

「……それじゃあ……てめえは今迄ずっと……雛森も俺もてめえの部下も他の全ての死神達も……みんな騙してやがったのか……!」

日番谷の言葉を聞いて皇は声を出して笑った。

「騙したつもりはないのよ。ただ貴方達が無能だっただけよ。まあ無能だったお陰で雛森ちゃんは簡単に騙されてそんなことになってるんだけどね」

皇がそう言った瞬間、日番谷は斬魄刀を抜いた。大量の氷が皇と乾を襲う。が皇も乾も避けていて傷ひとつついていなかった。

「――卍解『大紅蓮氷輪丸』」
だいくれんひょうりんまる

とてつもなく大きな氷の竜が日番谷を覆う形で出てくる。部屋には大量の冷気が漂う。

「――皇、俺はてめえを…殺す」

皇はニヤリと笑った。

「…あまり強い言葉を使わない方がいいわよ。弱く見えるから」

日番谷が『大紅蓮氷輪丸』を振りかざす。が攻撃を受けたのは皇ではなく日番谷だった。

「…嘘……だろ…」

日番谷を覆っていた氷の竜がただの水となって落ちていく。

「いい眺めね。季節ではないけれどこの季節に見る氷も悪くないわ」

落ちていく氷を見て皇は言った。が数秒後には飽きたとでも言うかのように歩いていく。

「行きましようか聖」

「行かせんよ」

皇の首筋にひんやりとした感覚がする。斬魄刀が当てられているのだ、皇の首筋に。

「その声は…：ギンね」

「倒れとるのは雛森ちゃんに…：日番谷隊長、か。三番隊に泥を塗つるのはボクじゃなくてアンタやろ皇」

皇はギンの斬魄刀を握りしめる。するとポタポタと皇の手から血が流れ落ちる。

「隊長のことを呼び捨てなんてダメな子ねギン。やっぱり藍染かに拾われた子だからかしら」

ギンの目が大きく開かれる。

「やっぱり…：アンタだったんやな」

「ええそうよ。簡単だったわ、彼を殺すのは」

「射殺せ——」

「そうはさせねエよ」

ギンが斬魄刀を抜いて始解をした瞬間、ギンの後ろに乾がいつの間にか回り込んでおり、回し蹴りを食らわせた。ギンは凄い早さで吹っ飛んでいく。

ドゴオン

ギンの速度は落ちることなくそのまま壁に追突した。

「クハッ！」

壁の破片がパラパラとギンの元へ落ちていく。

「…すめ、らぎ……」

ギンは立ち上がろうとしたが皇に斬魄刀で刺されそのまま気絶してしまふ。最後に見た光景は卯ノ花隊長が歩いて来ていたところだった。

本当は

死んだと思われた藍染が本当は生きていたら皆は一体どう思うだろうか。俺はそう考えながら高台の上で瀨霊廷を見下ろしていた。

皇に殺されたと思われていた俺は本当は生きています。勿論死体だって偽物^{フェイク}。簡単に引っ掛かってくれた皇を見て笑いが止まらなかったものだ。

皇に襲われたあの日。返り討ちにしてやっても良かった。が、そうしなかったのは雛森くんの矯正の為だった。

彼女は俺に依存しすぎている。彼女は俺を憧れ以上の“依存”と言う目で見ているのだ。それが俺にはどうも許せなかった。だからこそ俺に依存をやめさせるためわざわざ死んだフリをしたのだが……。

「まさかギンまでキレるとは」

想定外だった。俺の死にあんなに怒ってくれるとは思わなかった。もし俺が女がだったら惚れてたかもしれない（キモい）。

そして想定外がもうひとつ。ギンに『鏡花水月』の破片を持たせることを忘れていたのだ。平子隊長^{アホ}には持たせていたのだがギンには持たせるのを忘れていた。ギンに「本当は生きてるよー」って言いに行った時に自分を認識してくれなくて何でだと悩んだ結果自分のミスに気づいた。本当にアホだと思う。すっかり持たせてた気になつてたよ…。

『鏡花水月』を触らせれば俺をギンも認識できるようになるのだがそこまでするのはめんどいと思つたのでやめておいた。

そして今俺は高見の見物をしている。だって暇なんだもん。死んだことになつてるしここで『鏡花水月』をといたとしても混乱を招くことは簡単に想像できる。だから高見の見物だ。どうやら旅禍くん達は敵ではないようだし頑張れとエールを送っておく。

…まあギンが見逃したことでも敵ではないと分かつてただけ

どね。

あ、安心しておいていいよ。皇のせいで怪我を負った日番谷隊長とギン、雛森くんは傷痕が残らないようにきっちり俺の回道で治しておいた。

俺が居なくなっている間に物事は沢山進んでいく。例えば朽木ルキアの死刑はオレンジ色の旅禍くんが阻止したとか、双匣を浮竹隊長と共に海燕が壊したとか、本当は東仙要が敵だったとか、皇の斬魄刀が俺と同じ『鏡花水月』だったとか。

同じ斬魄刀がこの世に2つあるのは珍しくない。現に今十番隊長をやっている日番谷隊長だって同じ『氷輪丸』をかけ殺しあいをしたことだってある。

因みに皆は皇の斬魄刀が『鏡花水月』だと気づいていない。何故なら彼女は斬魄刀の名を呼ぶときは本当に小さな声で、周りに聞き取れない声で呼ぶのだから。正直こっちとしては助かっている。斬魄刀の能力バレてないし。

まあそんなことは置いておいて気づけば皇は乾と東仙を連れて虚に乗り何処かへと行ってしまった。行き先は多分虚^{ウエコムンダ}圏だろう。とりあえずはこの戦いが終わった、と言うわけだ。いや終わってないけどね？

それにしてもこれからどうしようか。皇は俺が殺すとして：うーん、そうだ!!平子隊長探そう!!あの人は不死身のような人だしきつと生きてる!!尸魂界にはいないと思うからいるとしたら：現世か。旅禍くん達が帰るときに俺も一緒に現世へ行こう、そうしよう!!我ながらなんと言う名案!!

という事で次の行き先は現世にしようと思う。



藍染隊長の為に三番隊に入った。あの人はボクの恩人だ。行き倒れていたボクを助けてくれて、霊圧の使い方まで教えてくれた。その恩に報いる為、ボクは三番隊に入った。

けど恩を報いるどころかやられて終わってしまった。ボクが目を

覚ました頃には皇は虚圏に乾と東仙を連れて逃げていたのだ。やるせない気持ちでいっぱいになった。仇を取るところかやられて終わってしまったのだから。

「ギン…」

お見舞いに来てくれた乱菊がボクの顔を見て心配そうな顔になる。

「ギンの怪我、いつの間にか治ってたんだって」

急に乱菊がポツリポツリと喋り始めた。

「ギンが倒れてた場所にはウチの隊長と雛森が怪我してて倒れてて卯ノ花隊長は時間もなかったからとりあえず応急処置をしたらしいの。本格的な治療は皇隊長達の情報を皆に伝えてから、そう思ってた。だけど、卯ノ花隊長達が治療する頃には三人とも怪我が綺麗に治ってたって」

「……」

「あたしこれが奇跡だとは思わない。けど、卯ノ花隊長達に気づかれずアンタ達を治療する事なんてムリだわ」

乱菊の綺麗な灰色の目とボクの目が合う。

「一体この尸魂界に何がおこってるんでしょうね」

乱菊はわからないとでも言うかのように静かに言った。



「かわいいなあこれ…。朽木さん喜ぶだろうなあ…」

井上織姫は石田雨竜が作ったワンピースを翳して呟いた。

「…朽木さんずっと元気なかつたけど…これを見たらきつと元気出してくれるよね…。それにしても石田くん…朽木さんの服なんでこんなにかわいく作れたんだろ…」

織姫は悩む。そして出した結論がこれだった。

「!!そ、そうか…!!もしかして石田くん、朽木さんのこと…!!」

凄いいお外れな勘を女の勘だと称して舞い上がっていた。そして朽木ルキアのいる部屋に着く。テンションの高い織姫は早くルキアに会いたいと言う思いでルキアの部屋を覗く。がそこにルキアは居なかった。

「…どこに行ったんだらう朽木さん……」

周りをキョロキョロと織姫は見渡すがルキアの姿は見えない。

「うーん…」

「どうかしたのかな?」

ルキアの居場所について悩んでいると後ろから聞いたことのない声が話しかけられた。

「えーと…」

「ああ、僕の名前は藍染。何か探してるみたいだったから」

眼鏡をかけた黒装束を着た男性。風貌はとても優しいそうで困っている織姫を見て優しい人だ、と織姫は直感で感じた。

「朽木さん…朽木ルキアの居る場所って知ってますか?ここに来たら

居なくて……」

織姫が藍染に聞くと藍染は残念そうに頭を振って言った。

「残念だが知らない。お詫びに僕も一緒に探すよ」

「ホントですか!？」

「ああ、ホントだ」

織姫は一人で探すのが心細かったのか嬉しそうに笑った。



「あ~~~~も~~~~足痛て~~~~」

十一番隊 更木剣八に追いかけられ逃げていた黒崎一護。黒崎は更木の愚痴を歩きながら漏らしていた。

「くろっ、さき、く——ん!!」

黒崎の姿を見つけた織姫はダッシュで走る。藍染は涼しい顔で織姫の横を走っていた。

「い、井上……?と……誰だ?」

「は——、は——、この人は藍染さんで……って、違くて……」

息切れをしながら中々言葉にならないので見かねた藍染が織姫の代わりに言っただけでやった。

「朽木さん知らないかな? 井上くんチカラの能力で瀨霊廷中を探しても見つからないみたいだね」

そこからはパニックだった。黒崎も仲間に加わりルキアを搜索し

た。阿散井恋次に聞きに行ったり、朽木白哉に聞いたり、松本乱菊に絡まれたり。探して探して探した結果、志波家に居た。

朽木ルキアは尸魂界に残り、織姫、石田、茶渡…そして黒崎は現世に戻ることもなかった。

「あれ？藍染さんどうしてここに？」

「いや、僕にも色々事情があつてね現世に行かないやいけないんだ。どうせなら一緒に行こうかと思つて」

「藍染さんも現世に行くのか？」

「ああ」

織姫や黒崎と喋っていると石田と茶渡が話しかけてきた。

「君は？」

「ああ、この人は藍染と言つて——」

「貴様ら！話しとる暇はないぞ!!」

夜一の一声で旅禍一行＋藍染は尸魂界を出、断界を通り現世に向かった。現世に戻ったとき、浦原が出迎えてくれた。浦原と一護が話している間に藍染は姿をいつの間にか消していた——。

「黒崎くん、藍染さんは？」

「うおっ、いつの間にか居なくなつてやがる……」

破面編

転校生

「お——す！オラア！席つけ野郎共!!」

黒崎が学校に久々に登校して数分後、担任の越智がやって来た。が、死神代行許可証しにがみだいこうきょかしょうが鳴り始めすぐに教室から出ることとなる。黒崎以外もトイレと称して教室から出てしまった。

黒崎は虚を素早く倒し遅れてきた井上達と話していた。そんな姿を見ていた男が一人——。

「…黒崎…一護ね」



「今日から転校生が来る!!後なア…えーと、何だっけ?ああ、数学でこのクラスの副担任だった山下先生が家庭の事情で暫く来れなくなつたからその紹介も入れる!!」

担任の越智がそう言う一人の男子生徒が挙手をして言った。

「越智センサー!男ですか?女ですか?」

越智の眼鏡が光る。

「どっちも男だ」

「キヤアア—っ!!」

女子達が嬉しきの悲鳴を上げる。一部の女子はガッツポーズをしているものも居た。

「ほら、入ってきな」

越智が言うのと生徒が一人、入ってきたがそれだけだった。

「あれ？アンタ一人？」

「ん？俺以外に誰か居るんですか？」

金髪おかつぱ頭が言った。越智はめんどくさそうに「あー」と言つて頭を搔くと「もういいや。君から自己紹介しちやつて」と言った。

「扁平足の『平』に小野妹子の『子』、真性包茎の『真』に辛子明太子の『子』で平子真子ヒラコンジです。よろしく——ウ」

「うお——い。平子君、平子君。逆、逆！」

平子が自分で黒板に大きく名前を書いたのはいいのだが鏡文字となつていて非常に読みづらいものだった。それを越智が平子に知らせるのだが平子は「上手いことかけてるやろ？俺得意やねんで、さかさま」と斜め上なことを言ってきた。

打ち合うのも面倒になつたのかそれを含めて自己紹介に入れ、と越智は言った。平子は一通り自己紹介をすると黒崎の隣の席へと移動した。

平子が話しかけるのも束の間、代行許可証が虚を知らせ黒崎はまた何処かへと行ってしまふ。それを見た茶渡がさすがフオローに入つた。

「…すまん何と言うか…ああ言う奴なんだ」

「ああ、いや構かめへん構かめへん。思おもうてたままんままや」



一護が教室に帰って暫くした頃。ようやく副担任の数学の先生が自己紹介をしに教室に現れた。

「今日から暫く数学を担当させて貰います、藍染惣右介です」

「うお——!!」

「!!」

「あつ、藍染さんだあ——!!」

黒崎、そして平子が雄叫びを上げ立ち上がる。石田や茶渡は静かに驚き、織姫に至っては藍染に手を振っていた。

藍染は営業スマイル（平子には物凄く黒く見える笑顔）で織姫に手を振り替えず。その時に一護と平子の眉間に向かって何かを投げた。クナイだった。

クナイは一護と平子の眉間に一寸たりともぶれずに刺さる。一護の場合はクナイの先に吸盤がついていた為被害はなかったのだが、平子のクナイには吸盤などついておらず普通に眉間に刺さる。

ブシヤアと大量の鮮血が平子の眉間から放出された。

「ひ、平子くん!？」

「す、すげー!!…藍染先生って忍者なのかな?」

「そんなこと言ってる場合か!!誰か手当てを!!!」

「あ、なんかクナイの取っ手に絆創膏が吊るしてあるぜ!藍染先生の配慮なのかな?」

「藍染先生——!!明らかに怪我のサイズと絆創膏のサイズが合ってますん!!」

生徒達が騒ぐ。藍染はそれを笑いながら静かに見ていた。そして口を開くとき、何故か教室は一瞬にして静かになった。

「まだ僕の自己紹介中です。黒崎くん、平子くん、静かにしてください」

「は、ハイ……」

黒崎と平子は藍染に言われておとなしく席に戻る。席に戻る際に平子が「なんで俺らだけなんやねん。織姫ちゃんとは大層な差があるやんけ」と愚痴をこぼしていた。勿論それは藍染に聞こえているため平子に第二撃目の攻撃がふりかかったことは言わずもなだろう。



「随分と滑稽な髪形になってますね…隊長…」

藍染はおかつぱ頭になった平子の髪形を見て肩をフルフルと震わせ、平子とは目を一切会わせず手で口をおさえながら言った。まあ要するに笑っているのだ。

「オマエ、久々に上司に合って一発目があれってあるか!?危うく俺死にかけたで!!」

「ちやんと隊長のことも考えて絆創膏吊るしてたでしょう?」

「あんなのが使える訳あるか!!」

どうやら平子の怒りが収まらない様子。それを見た藍染は静かに「はあ」とため息をつく。と平子の頭をガシリと鷲掴みし言った。

「なら俺も聞きますね?何故貴方は現世こんなところにいるのですか?尸魂界を探しても居なかったからまさか現世に、と思つて来てみれば…」

ギロツと藍染の目が光る。

「…ゼーんぶ、理由も含めて教えてくれますよね?」

平子は考えていた。自分が少し瀨霊廷を離れていた間に一体何があったのか。少なくとも自分の知っている藍染はこんなに黒くなかった…と思う。

「あ、いやな？俺にも色々あつてん。せやから労つてや。そんな脅しみたいなマネされても恐いだけやろ？ホラ平和的に行こうや。イマドキは平和に、これが一番やで」

藍染が誘導尋問しようとしたその時、チャイムが鳴り藍染はたまたま通りかかった学年主任に連れていかれてしまった。

「う、うっし!!逃げられた!!」

連れていかれた藍染を見て平子は本当に嬉しそうな顔でガッツポーズをした。しかし、藍染は平子を地獄に落とす言葉を口パクで残していった。

『俺は忘れないからな。覚えてろよ』

平子は暫く寒気と冷や汗が止まらなくて隣の黒崎に凄く心配された。

「お、おい顔色悪いけど…大丈夫か？井上呼ぶか？」

「……気分悪いとちやうねん。ただ……死を覚悟しただけや…」

「おーい井上!!こいつ気分悪いらしいから見てやってくれ!!」

「はーい!!ちよつと待ってね!!」

怒られる

結局平子隊長に何も聞けないまま数日が経ってしまった。途中グランドフィッシュシャーらしい霊圧を感じたが放置。まあ直ぐに無くなったから誰かが倒したんだろうけど。

「は——っ疲れるわア——！」

片手に通学カバンを持ち大きな独り言を言う平子隊長。因みに俺はそんな悲しく、怪しい平子隊長をつけている。

「やつぱ慣れへんことするもんちやうなア…。何やねん休み明けテストてアホか。そもそも何で俺が一護の引き込み役でガツコ行かなあかんねん。お陰で惣右介にも会ってまうし——まだなつとくいかんわー」

愚痴愚痴と一人で大きな声で愚痴を語る平子隊長。端から見れば完全に怪しい人であり、危ない人だ。そんな色々と危ない平子隊長の後ろにスーと一人、忍より——平子隊長のケツを蹴り飛ばした。

「あうッ!？」

蹴り飛ばされた平子隊長はそのまま電柱に突っ込む。どうやらおでこを強打したようでおでこが赤くなっていた。

「いいい、痛いのコラア!!誰やねんこの…」

いきなり蹴り飛ばされた平子隊長は怒りを隠すことなく赤くなつたおでこを擦りながら言うが相手が相手で文句もまともに言えなくなっていく。

「ひ、ひよ里…」

心なしか平子隊長は先ほどよりも汗をかいているような気がする。ひよ里さんは平子隊長の前に仁王立ちする形で立っている。それを見た平子隊長は少し、少しとひよ里さんに気づかれないように後ろに下がっていくがそれも無駄なことだった。

ひよ里は片足を高く上げスリッパを脱ぎ、持つとパアンと甲高い音がなるほど強く平子隊長の頬をぶっ叩いた。

「なにモタクサしてんねんがしんたれが!!!」

「すんませんッ!!!」

平子隊長はあまりの恐怖に反射的に謝った。が、それはどうやらひよ里さんの耳には入っていないらしい。平子隊長の胸ぐらを掴み、胸ぐらを掴んでいないもう片手は平子隊長の前髪を掴み怒鳴る。

「ドコや黒崎一護は?」

「イヤ…まだ…」

「まだア!?まだってどう言うことやねん!!さっさと言いくるめて連れてこい言うてるやろ!!」

「そんなん言うたかてあいつ言うこと聞かんへんねんもん!!」

ひよ里さんの怒りは平子隊長を怒鳴っただけではまだ治まらない。

「なら力ずくで連れてきい!!」

「ええ!?こないだまでと言うてることちやうやん!!」

どうやら平子隊長達は黒崎一護のことでもめている模様。一体何をしようとしているのか少し気になる。

「……見つけた」

おおっと!!ここで井上君と大きな人(茶渡)参戦!!井上君と大きな人はシリアスな雰囲気纏っているウツ!!(実況風)

「…織姫ちゃん…!」

井上君は学校が終わってからずっと平子隊長をつけていたのだが、平子隊長の顔ぶりからしてどうやらそれは気づいていないようだ。……え、隊長、気づいてなかったの？

ひよ里さんは「真子」と平子隊長を呼び出すと平子隊長の頭を鷲掴みし、平子隊長の頭を固定したところでおもいきり頭突きをした。

「ナニつけられてんねんハゲが!!!」

音はゴン!!ではなくゴスツ!!であるところを聞くと頭突きをしたひよ里さんもされた平子隊長もかなり痛そうである。

平子隊長もこれは痛かったのか、頭突きされたところを押さえて無言で立っていた。平子隊長が痛いのはわかるが頭突きしたひよ里さんは全く痛そうに見えない。一体ひよ里さんの頭はどんなに構造なのだろうか。少し気になる。

井上君は頭突きには何も突つ込まず、自分達が平子隊長をつけてきた理由を言う。俺が言うのもなんだが適応能力が高すぎである。

「…黒崎くんに訊いてもきつと黒崎くんは「何でもない」って答えると思うから…あなたに直接訊きにきたの平子くん。あなた達は何者?黒崎くんを…どうしたいの?」

井上君の言葉を聞いてひよ里さんは鼻で笑った。見方によっては悪役に見える顔でひよ里さんは言った。

「…はっ。そないもん訊かれてサラツと教える思うてんのか?」

そう言うとひよ里さんは急に自分を指差して名前を言った。それを聞いた井上君達は何がなんだかわからないらしい。「え？」と素っ気ない声が出ていた。

「え？」やないわ名前や名前！うちの！あんたらも名乗り！」

ひよ里さんにそう言われ慌てて井上君達は名乗り始める。

「…井上織姫…」

「…茶渡泰虎だ」

ひよ里さんは名前を聞いて笑った。

「姫にでも虎かい！大層な名前やのオ！うちらなんか猿に平やぞ！羨ましいのオこら！」

「ヒラって何やねん。俺だけ生き物ちがうやんけ。ムリヤリ括んなやボケ」

鼻をほじりながら言う平子隊長に向かってひよ里さんはおもいきり殴った。平子隊長の顔面におもいきりパンチが入り平子隊長の鼻から赤い血が流れる。しかしひよ里さんは気にしていないようである。

「…しかもでっかいオツパイにサラツサラの髪しやがって！ホンママカつくのーこの女！」

「普通にひがみやんけ。しかも織姫ちゃん单品に対しての」

次に平子隊長にひよ里さんの強烈なブローが入る。平子隊長はあまりの痛さに立っていながらも悶絶していた。…よく立っていられるな。

しかしここでひよ里さんの纏う空気が変わる。

「まあええわ。とにかくあんたらに教えることはナンも無い。あんたらはここで死にイ」

ひよ里さんは肩にかけていた斬魄刀の柄を触りいつでも斬魄刀を出せる状態で言った。このままでは井上君たちが危ない。それを察したのは俺だけでは無いようで平子隊長も慌ててひよ里さんを抱き上げ井上君達から逃げた。……抱き上げるところだけ見ると平子隊長とひよ里さんがリア充に見えて少しイラついた。

「スンマセンツしたア——!!」

井上君が平子隊長達を追いかけようとするが茶渡君がそれを止めた。

「茶渡くん……!」

「…判るだろう。…俺達のカじやあいつの速度には追いつけない。それにもし仮に追いつけたとしても…確実に殺される」

どうやら茶渡君はバカではないようだ。それがわかった俺は平子隊長の後を追った。



「真子コラ放せハゲ!!あいつらシバいたんねん!!」

「あかんわアホか!!俺らの狙いは一護やろ!まだ他と騒ぎ起こさんでええ!」

「やかまし!放せ!!」

ひよ里さんは余程平子隊長に放して欲しかったのだろう。平子隊長のケツにカンチョーをしていた。

「オギャ——!!!カンチョーは止めろ言うてるやろ!!」

そう言って平子隊長はひよ里さんにカンチョーを仕返した。…一体俺は何を見せられているのだろうか。

ある程度平子隊長は走ると止まりひよ里さんを下ろした。

「ふう、ここんところであええか」

「何やねん急に止まって。ここまで来るんやったら最後までおぶれや」

「まだアジトには帰れんで。なア惣右介」

どうやら後をつけていたことはバレていたらしい。俺は「はあ」とため息をつくくと大人しく出ていった。

「自分の隊長の後つけとるなんて中々ええ趣味持ったなア惣右介」

「一体いつから気づいてたんですか?」

「最初からや最初から」

平子隊長は当たり前前でも言うかのように言った。俺はジと目で平子隊長を見る。すると平子隊長は段々と冷や汗を流し始めた。

「本当は?」

「…ひよ里が斬魄刀抜きそうになった時です」

やっぱり気づいてなかったんじゃない。堂々と嘘をつこうとするなあこの人。

「さて、この前のお話の続きをしましょう」

「ちようどえかった。俺もお前に聞きたいことあったんねん」

隊長と話していると大きな霊圧を感じた。平子隊長は空を見て言う。

「破面アランカルやなア。この霊圧」

「…知ってるんですか？破面アランカルのこと」

俺が隊長に聞くと隊長はニヤリと笑って言った。

「知つとるも何も俺——破面アランカルやからなア」

「!!?!」

「なんや、さすがの藍染でも気づかへんかったんか？俺だけじゃ無いで？あのメンバーに選ばれた全員破面アランカルや」

驚いた俺を見て平子隊長はクツクツと笑いながら言う。

「信じられへんなら証拠でも見せたらか？」

そう平子隊長は言うが俺は断った。

「いえ、大丈夫です」

「あら。つれへんやつやね」

「別にそこら辺は疑いません。平子隊長が破面アランカルだろうが死神だろうが俺は貴方についていくと決めている」

次は平子隊長が驚く番だった。

「俺は今までずっと貴方の隊長命令を守ってきた。しかしそれも疲れる。早く復帰してきて貰わないと困るんですよ。俺、隊長なんてガラじゃないんで」

俺がそう言うと平子隊長は「帰れるなら遠の昔に帰つとるわ」と頭

をガシガシ搔きながら言った。そして平子隊長は俺の目を見ると言った。

「じゃあ次は俺がオマエに質問や。ギンはどうした？」

「はい？」

「オマエがここに来てからオマエの霊圧しか感じられん。ギンの霊圧なんてさっぱりや。まさか惣右介やからないと思うけど——尸魂界に置いてきた、なんてアホな真似はしとらんよな？」

平子隊長の重い霊圧が俺にのし掛かる。俺の頬に冷や汗が1つ流れた。こんな感覚は久しぶりだ。

「そのまさかですよ」

俺がそう言うと平子隊長は俺をぶん殴った。

「アホ」

平子隊長は俺を見て言う。

「自分を慕ってくれた奴を置いていく奴がおるかボケ。どうせオマエのことや。何も言わんで来たちやうか？」

「…死んできました」

「はあ!？」

平子隊長の目が見開かれる。確かに目の前に俺がいるのに「死んできた」と言われれば驚くだろう。

『鏡花水月』の催眠で……」

「アホか!!」

平子隊長だけではなく次はひよ里さんまで殴ってきた。お陰で俺の右頬は真っ赤に腫れている。

「欠片は！欠片はわたしたんか!？」

「渡すの忘れてました」

「アホやな!!変なところでアホやな!!」

「何やねんこいつ！頭ええ、出来る部下思うてたら変なところで天然入っとるやんけ!!どんな育て方したらこうなるんや!!」

ひよ里さんはそう言うのと平子隊長を殴る。

「何で俺まで殴るんや!!」

「部下の失態は上司が責任とるもんやろ!!今度市丸に会うたら二人共土下座しろ!!」

「だから何で俺まで——」

「同じこと二度も言わせんなボケ!!」

結果、平子隊長は俺よりもかなり殴られていた。怒られていた本人よりもそつちのけで殴られていた。これは…平子隊長の一種の才能だと思う。



平子と共にひよ里に藍染が殴られている間にどうやら破アランカル面達は撤退したようで霊圧を感じられなくなっていた。簡単に言うところまで長い時間藍染（と何故か平子は）お説教させられていたと言うことになる。お陰で藍染と平子の右頬は腫れた。現在湿布張って治療中である。

「うおっ、平子その頬どうしたんだよ!？」

「イヤ、身内で色々あつてん」

「そ、そうなのか……?」

「お、織姫どうしたの!?その怪我!!」

「いや、階段で転んじやって」

「嘘じゃん!!絶対嘘じゃん!!」

平子が男子生徒と話している間平子の後ろで井上君が友達と喋っていた。そして…平子の眉がピクリと動く。

ドアが勢いよく開かれる。そこには黒崎や平子や藍染が見慣れた人物達がそこに居た――。

「お――す元気か一護!」

いきなり現れた人物達に一護は驚く。

「…れ…恋次!!一角!!弓親!!乱菊さん!!冬獅郎!!」

「二日番谷隊長」だ!!」

「で、えと…誰?」

乱菊の横に立っていた銀髪の糸目の男――市丸ギンを見て一護は言った。

「ん?ああ、ボクか。ボクは市丸ギン。これから宜しゅうしてや」

ニコニコと笑って自己紹介するギンを見て一護は思い出す。

「ああ!!お前あん時の☒丹坊の!!」

「…ああ、あれな。もう忘れてええで」

「……忘れるって…」

何か変に疲れた一護は肩を落とす。すると乱菊が一護に耳打ちした。

「…今はあんまりギンに構わない方がいいわよ。ああ見えても今スツゴい機嫌悪いから」

「そ、そうなのか……?」

ニコニコと笑っているギンを一護は見るが全く機嫌の悪そうには見えない。するとギンの後ろにいる形で立っていた恋次や一角、弓親はウンウンと乱菊の言葉に肯定する形で頷いた。

「触らぬ神に祟りなし、だよ一護」

弓親の言葉に訳もわからなかった一護だがとりあえず「そ、そうか……」と話を合わせておいた。本当に順応性が高い。

一護が何故こんなところにいるのか、と問うと上からの命令だ、と帰って来た。その後朽木ルキアの登場等色々あったのだが平子としては視線が痛くてそれどころではなかった。

「……………」

「……………」

とりあえずギンの視線が痛かったと後に平子は語った。



「ギアとつとと教えろよ『破面』アランカルが何なのか!なんで俺らが狙われているのか!!」

一護がルキアに向かってそう言うと天井が空いて声が出た。

「…待ちなそいつは俺達が…教えてやろう」

「うおおおい!?!」

日番谷とギン以外が天井裏から出てくる。因みにギンはちゃんと

玄関から入ってきた。

「すんませーん、ここの息子さんに用あるんやけど入ってもええですか？」

「どうぞー!!」

「おお!!一護よりもイケメンだな!!」

「やかましい!!」

ギンが一護の部屋に入るとルキアの変な絵のスケッチブック付きで『アランカル破面』の説明が入る。しかしスケッチブックのせいでどうも情報が頭に入らない。

ルキアが一通り『アランカル破面』について話すと次にルキア達のメンバーを選んだことに内容が変わる。ルキア達を選んだのは山本総隊長で次の四十六室が決まるまで決定権が山本総隊長に有ることについて恋次は一護に言った。

「とりあえずお前を一番よく知ってるってことでルキアが選ばれて」
「違う!実力で選ばれたのだっ!」

ルキアが言うも恋次はルキアの言葉をスルーし、話を続ける。

「動ける戦闘要員の中で一番ルキアと近いってことで俺が選ばれた。で、隊長格以外で俺が一番信頼できる戦闘要員を選べって言われて俺が一角さんに同行を頼んだ。そしたら弓親さんが「僕も行く!」って言い出して騒ぎを聞きつけた乱菊さんが市丸副隊長を引き連れて面白そうだから行って行きたがって…乱菊さんがどーしても行くって聞かないものだから日番谷隊長が引率として仕方なく…って感じだな」

「ピクニックかよ」

一護がそう言うのと窓の方から声が聞こえる。

「ともかくてめーは確実に目エつけられてるってことだ黒崎一護」

「あ、日番谷隊長だ。ギンと一緒に天井裏に入るの断固拒否したノリの悪い日番谷隊長だ」

「何言つとんねん乱菊。ボクは拒否なんかしとらんよ？ボクがおるとぎゆうぎゆうで狭うなつてしまう言うて仲間外れにしたんやないの。まア日番谷隊長なら小さいし大丈夫やったやろうけどなア」

「マドが開くの外でずっと待ってたんすか？ダメつすよそれでなくても銀髪の小学生なんで目立つのに」

「……てめえら尸魂界むこに帰ったら憶おぼえておけよ……」



「ギン、一角達が現世に行くらしいわよ」

「……へえ……そうなんやね……」

ギンは縁側でまだ柿のなつていない木をボーと見ながら乱菊に返事をした。

「あたし、それについていこうと思ってるの。どう？ギンも一緒にいきましようよ」

「……なんでボクが……」

「少なくとも藍染隊長の敵、とれるかもしれないわよ」

「!!」

ギンの雰囲気が変わった。それを感じ取った乱菊は心の中で（バカね）なんて思いながら自分一人では全く何もできないギンに合いの手を差し出す。

「……元々あんたにやる気なんてなかったけど、今のあんたは見えてられないわ。何かあんたをやる気にさせるものがなくちゃね」

乱菊は微笑みながら言った。

「できる女はそー言うところもバツチリなのよ」

疲れた

「イヤや!!絶対行かへん!!」

「グダグダ文句言つとらんではよ行ってこい!」

床に這いつくばる平子とそれをゲジゲジと蹴っているひよ里。ひよ里の顔は大層お怒りのご様子。しかし平子も這いつくばることはやめなく何かを断固拒否していた。

「急にガツコ行かないとか何言い出しとんねん!!はよ一護連れてきい
やボケ!!」

「絶対イヤやね!ギンの眼恐すぎるもん!!斬魄刀なんか使わなくても
眼だけで射殺される!」

「元部下やろが!!何部下にびびつとんねん!!」

キリがないと思ったのかひよ里はおもいつきり平子の頭を蹴り、平子を気絶させると学校まで引きずって連れていき、適当に捨ててきた。

「シンジどこに行ったんや?あんなに駄々こねてたやろ」

「ウザイから捨ててきたわ」

「鬼やな」



一護の家に泊めて貰う気満々だった乱菊だったがそれは一護に却下されてしまった。一護曰く泊めるスペースが無いらしい。

「えー!?!…仕方ないわねえ」

「なんや乱菊。どっかアテでもあるんか?」

立ち上がった乱菊を見てしぶしぶと言うようにギンも立ち上がる。

乱菊はギンに向かってウインクすると「当たり前よ」と言った。

「織姫んとこ泊めて貰うわ!!織姫は優しいからギンや隊長でも泊めてくれると思うしね」

「貰うわ!!」って井上に許可とったのかよ?」

「とってないけどあの子は頼めばイヤとは言わないわよ♡」

乱菊は当たり前前とでも言うかのように言った。ギンは「井上織姫」に会ったことがないため、話についていけない。

「さ、行きましょギン、隊長」

「俺はいかねえ」

そうやって日番谷は何処かへと歩いて行ってしまふ。その後ろ姿を見た乱菊が大きな声で日番谷に言った。

「来ればいいのに〜楽しいですよオ♡」

「お前がな」

どうやら日番谷は本気で来るつもりがないらしい。乱菊は「つれないの」と唇を尖らせるとギンに話しかけた。

「じゃあ隊長抜きでいきましょ」

「べつにそれはええんやけど……その織姫ちゃんっていう子の家知つとんのか?」

「知らないわよ?」

「……………」

どうするんだ、そんな眼でギンは乱菊を見つめる。すると乱菊は何かイタズラを思い付いたかのような笑みをしてギンの右肩にポンと手を乗せると言った。

「あんなならいけるわ」

「イヤ…なんの笑み？ 恐いんやけど……」

「ギンのその顔ならナンパの要領でいけるわ」

乱菊がギンにそう言っているのを見て一護が呟いた。

「…悪魔だ……」

「乱菊さんあれ完全に遊んでるね」



織姫が死んだ兄に今日色々あった出来事を話していた。聞いているかはわからない。けど、とりあえず誰かに聞いて貰いたくて。織姫はボソボソと一人で喋っているとチャイムが鳴った。

「はい」

誰だろう、そう思いながら織姫は玄関を開けた。すると見たことのある人物一人と見たことのない人物が一人。思わず乱菊は首を傾げた。

「乱菊さんと……？」

「織姫!! あんたん家に泊めて!!」

織姫は急に乱菊にそう言われ驚いた顔をする。

「泊まりたい!?! うちにですか!?! …いいですけど……」

驚きながらも織姫は即答でオツケーをだす。それを聞いたギンは見知らぬ人ながらも心配になった。乱菊は織姫の即答が嬉しかったのか「ナイス即答!!」と織姫を抱き締めていた。

「そう言ってくれると思った!! そういうところ大好きよ織姫!!」
「ら、乱菊さん…そう言ってくれるのは嬉しいんですけど…この人…」

そう言って織姫はギンの方に視線を移した。ギンは若干疲れきっているような顔をしており身知らずの織姫も少しギンを心配した。

「あ、コイツはギンって言ってるね、あたしのダーリンよ♡」

「だ、ダーリン!？」

「……………もうなんでもええわ」

「乱菊さんにそんな人が居たんですね!!」とギンそっちのけで女子トークを始めた乱菊と織姫は詳しいことは中ではなそうと言うことになり、部屋に入ろうとする。が、乱菊は寸前で足を止めると外に向かって言った。

「行くところ無かったら入ってきてもいいですからね——」

「……………うるせえ」

この後すぐ女子トークで盛り上がり織姫の質問攻めが少しと言いかかなり窮屈になったギンは日番谷のところまで逃げる。

うづくまつて座るギンを見て日番谷が一言。

「…おめえも大変だな」

「……………そんな憐れんだ眼で見んといて。よけいに悲しくなるわ…」



「ふう。邪魔者も消えたことだし」

「邪魔者？」

乱菊の言った「邪魔者」という言葉を聞いて織姫は首を傾げた。乱菊は織姫に肩を組むと言う。

「あんたさ、なんで今日そんなに元気ないの？」

「…え!?そ、そんなこと……」

織姫がしどろもどろに答えると乱菊は織姫の頬を突つつきながら言った。

「答えなさいよ。人生の先輩が聞いてあげるから」

「いや…でも…元気なくなんてない…」

「ならギンも呼ぶ?折角織姫の為に追い出したっていうのに」

「ええ!?!私のせいで追い出されたの!?!」

「大丈夫よ。どうせ上に隊長いるし、寂しくはないわ」

織姫は自分のせいで追い出されたギンに悪く思いながらももう乱菊からは逃げられないと感じたのかポツリ、ポツリと喋り始めた。

乱菊は織姫の悩みを聞くと「…バカね」と呟いた。織姫は何がなんだかわからず「え?」と声を漏らした。乱菊は言う。織姫はそのままでいいと。一護はガキだから朽木も織姫も大切だと。そして…織姫のことをカツコいいと言った。

ブワリと織姫の眼から大量の涙が溢れる。乱菊は織姫の背中を擦る。織姫がある程度落ち着いたところで乱菊は織姫に問う。

「織姫ってさ、一護のこと好きなの?」

「え、ええっ!?!そ、それは…」

「なによう、勿体ぶっちゃって。好きなの?嫌いなの?」

乱菊の問いに織姫は顔を真っ赤にさせながら言う。

「嫌いじゃないけど……」

「じゃあ好きなんだ？」

「それもまた違うような……」

織姫のちゃんとしないうち中途半端な答えを聞き乱菊は唇を尖らせる。

「パツとしないわねえ」

「だ、だって…!!」

初々しい織姫を見て乱菊は「かわいいわねえ!!」と飛び付く。二人はキヤツキヤツと話しており、それを上から少し見たギンは「まだ入っちゃあかんのかな…」とため息をついた。

「寝とけ。あいつらのテンションが下がり始めたら起こす」

疲れきったギンの顔を見て日番谷は言ったのだ。

「…お言葉に甘えて」

破面

「さあ、見せてちょうだいウルキオラ。貴方が現世で見たもの、感じたことの全てを」

皇が膝まついているウルキオラを上から見下したような感じで言った。ウルキオラは何も言い返すことなく「はい」と返事をする自分の左目を割った。

全ての映像を見終わった皇は「…なるほど」と一言呟く。

「それで彼を『この程度では殺す価値無し』と判断したのね」「はい」

ウルキオラが返事をする。「微温ぬりいな」と後ろから男の声が聞こえた。

「こんな奴等俺なら最初の一撃で殺してるぜ」

そう言ったのはグリムジョーと言う男。右口元に仮面を残した破面アラシカルである。

「理屈がどうだろうが『殺せ』って一言が命令に入ってるなら殺した方がいいに決まってるだろうが！」

「同感だな」

「いずれにしる敵だ。殺す価値は無くとも生かす価値は更に無い」

グリムジョーの後ろに立っていた破面アラシカル達がグリムジョーの言葉を同意するように言った。グリムジョーはウルキオラの後ろにいたヤミーを見ると文句を大声で言った。

「大体ヤミー！テメーはボコボコにやられてんじゃねえか!!それで

「殺す価値無し」とか言っても「殺せませんでした」にしか聞こえねーよ！」

グリムジョーが言うのとヤミーはグリムジョーを睨み付けながら言った。

「…てめえグリムジョー。今の視てなかったのかよ。俺がやられたのはゲタの男と黒い女だ。このガキじゃねえ」

「わかんねえ奴だな。俺ならその二人も一撃で殺すつつつてんだよ！」

グリムジョーの挑発に乗ったヤミーは「…なんだと？」と言いながら立ち上がる。それを見たウルキオラがヤミーを止める。

「…グリムジョー、我々にとって問題なのは今のこいつじゃ無いつてことは分かるか？」

「あ？」

「皇様が警戒されているのは現在のこいつではなくこいつの成長率だ。確かに潜在能力は相当のものだった。だが、その大きさに不釣り合いな程不安定でこのまま放っておけば自滅する可能性もこちらの手駒に出来る可能性も在ると俺は踏んだ。だから殺さず帰ってきたんだ」

ウルキオラがそう言うとグリムジョーは怒りを含んだ眼差しでウルキオラを睨み付ける。

「それが微温ぬりイって言ってんだよ！そいつがてめえの予想以上にデカくなって俺らに楯突いたらてめえはどうするってんだよ!？」

グリムジョーの言っていることは正論だった。が、ウルキオラはグリムジョーの言葉を聞いても慌てることなく冷静にまるで本当に出

来るかのように言った。

「その時は俺が始末するさ」

どうやらウルキオラはそこまで自分の力に自信があるらしい。

「……………」

「それで文句は無いだろう」

ウルキオラの言葉一つ一つがグリムジョーの怒りを買っていく。ウルキオラの言葉を聞いた皇は面白そうに笑って言った。

「そうね。それで構わないわ。貴方の好きにきなさい、ウルキオラ」

「ありがとうございます」



「チィ!!」

グリムジョーは大きく舌打ちをすると側にあつた椅子を蹴り倒した。

「随分ご機嫌ナナメだねえ！グリムジョー!!」

グリムジョーの近くにいた金髪の女がケラケラと嗤う。グリムジョーはその笑い声に苛ついたのでか金髪の女の胸ぐらを掴むと「あ？文句でもあんのか」とドスのきいた声で言った。

「姐様!!」

金髪の女の後ろでおどおどとしていた黒髪の女。しかし金髪の女が胸ぐらを捕まされると慌てたようにして駆け寄る。その姿を金髪の

女が横目で見ると「別にこれぐらい大丈夫、大丈夫!!」と明るく言った。

「元数字持ちの従属官か」
フラッシュオン

「そうよ。彼女結構強いんだあ!」

ニコリと嗤って言う彼女の姿を見て嫌気がさしたのかグリムジヨーは手を離す。金髪の女は少し身だしなみを整えるぐらいでどうやら胸ぐらを捕まれたことは気にしていないらしい。

「ねえねえ、グリムジヨー! 現世に行くつもり?」

「だったら何だって言うんだよ」

「じゃあこの子も連れて行ってあげてよ!!」

金髪の女は黒髪の女をグリムジヨーに見せる。グリムジヨーは一瞬黒髪の女に視線を移すと鼻で嗤った。

「ハッ、誰がそんな奴連れて行くかよ」

「えゝ、彼女強いよ?」

「絶対エ連れて行かねえ」

グリムジヨーがそう言うのと金髪の女は駄々を捏ねる子供のよう
に「お願い、お願い」と言う。

「だったらてめえが連れていけばいいじゃねえか」

「それはムリ。ぼくまでついていったら意味がないんだ」

「はあ?」

「だから頼むよゝ!」とグリムジヨーに懇願する金髪の女。あまりのウザさに遂にグリムジヨーが折れた。

「ウゼエ。連れて行ってやってもいいが…邪魔したらお前の従属官ごと殺す」

金髪の女はグリムジヨの言葉に「いいよ」と言った。

「彼女もそこまで莫迦じゃないさ」



「姐様……」

グリムジヨー達と一旦別れた後、黒髪の女が不安そうに金髪の女を呼ぶ。金髪の女は歩く足を止め、後ろを歩いていた黒髪の女の顔を見るためか振り向いて「何だい？」と聞いた。

「何故私を現世に？」

「ああ」

質問の意図がわかったのか金髪の女は頷くと黒髪の女に向かって言った。

「そろそろお腹が空いただろう？」

黒髪の女がおどおどと頷く。それを見た金髪の女は嬉しそうに囁くと言った。

「なら沢山食べてくるといい。特に強い奴を狙うんだ。グリムジヨーとか破面は食べちゃダメ。後、グリムジヨーが気になってたあのオレンジの死神も食べちゃダメ」

「フュズイオンが殺されちゃうからね」

黒髪の女もと言いフュズイオンは金髪の女に言われたことを忘れないように頭に叩き込みながら頷く。

「後、無いとは思うけれど死にそうになったら逃げるんだよ。ぼくはフュズイオンに死なれると虚^{ウエコムンド}圏で生きていけなくなっちゃうからね」

「大丈夫です。私は——死にません」

フュズイオンの強い意思を聞いて金髪の女は嗤った。

「そう。じゃあ——行っておいで」



三日月の夜。空に数名の破面が現世に舞い降りた。

「あの女以外誰にも見られてねえだろうな」

「無論だ」

一人の破面が肯定すると共に「ウルキオラの報告と一致しない」と言った。

「複数の強い霊圧を感じます」

黒髪の女が言った。グリムジョーは苛立った顔で舌打ちをする。「探査^{ベススキス}神経を全開にしろ」と破面達に命令をする。破面達はグリムジョーに言われた通り探査神経を全開にした。

「…思った通りだ…メチャメチャ増えてやがる…！尸魂界から援軍を呼びやがったか…ゴタク並べてねエで最初^{ハナ}から殺しときゃこんな面倒にやならねエのよ…」

グリムジョーは苛立った顔から呆れた顔に変わる。グリムジョー

は立ち上がると一人一人の名を呼んでいく。

「デイ・ロイ」

「シャウロン」

「エドラド」

「イールフォルト」

「ナキーム」

「……フユズイオン」

「行くぜ」

下の街を、死神達がいる方向を見つめながらグリムジョーは言う。

「遠慮も区別も必要無え。少しでも霊圧の在る奴は……一匹残らず皆殺しだ」

グリムジョーの命令に破面の皆が返事を返した。

フユズイオン

「全員捕捉は完了したか？」

グリムジョーはこれからの戦いに思いを馳せながら言う。

「行くぜ、一匹たりとも逃がすんじゃないやねえぞ!!」

グリムジョーのその言葉を最後に破面は各自散らばる。強大な霊圧を放ちながら――。



「おい、市丸……」

「どうやら敵さんはボク等を休ませてはくれんみたいですね」

先ほどまで日番谷の横で寝ていたギンだが強大な霊圧を感じて目を覚ます。日番谷とギンは懐から飴のようなものを取り出すと口の中に入れた。すると義骸ギカイから死覇装を纏った日番谷とギンが出てくる。

「怪我しねえ場所に逃げとけ！」

「はい！」

「んー…あんまやんちゃはやらかさんといてね」

「そんな言われなくてもわかつとるわく」

日番谷とギンが義骸が走り去っていくのを見送っていると死覇装を着た乱菊がやって来た。どうやら義骸はもう脱いでいるらしい。

「隊長！ギン！」

乱菊の声を聞いた日番谷は乱菊に問う。

「井上織姫は？」

「戦闘に参加させないよう下で義骸に見張らせてます」

「そうか」

「確かにそうでもしとかんと、あの子戦いそうやね」

ギンが笑いながら言った。日番谷はずっと空を見つめている。暫くすると日番谷は少し緊張した様子で言った。

「おい、市丸、松本。…構えろ、来たぜ」

日番谷、乱菊、ギンの前に現れた破面は三人。それもかなりのスピードで現れた為、日番谷達は目を見開く。

「…初めまして」

破面が一言そう言うと言日番谷に攻撃を仕掛ける。日番谷は咄嗟に斬魄刀『氷輪丸』を鞘から抜くと破面の攻撃を受け止める。

ギンが加勢に入ろうとする。するとそれを見た破面がギンをおもいつき蹴り飛ばした。ギンはものすごい早さで飛んでいく。それを見た乱菊がギンの名前を呼ぶがギンの返事は帰ってこない。

「ギン!!」

「貴方の相手は私です」

破面は一言そう言うと言日番谷が吹っ飛んで行った方向へ向かっていく。



「(吹っ飛ばされただけ…。軽症の怪我すらしとらん。ボクを乱菊達から離れさせるのが目的か……)」

吹っ飛ばされる直前、ギンは腕でガードをした。しかし破面の蹴りの威力を抑えることは出来なかったのか織姫の家からかなり遠く離れた場所まで吹っ飛ばされてしまっていた。

吹っ飛ばされてもギンは焦ることなく冷静に相手を分析する。

「…どうも」

破面がギンの前に姿を現した。この破面は律儀なのかわざわざお辞儀までする。

「…えつと…現世では戦う前に自分の名を名乗るのが主流だと聞きました。——我が名はフズイオン。とある女性の従属官をさせていただいています」

「わざわざ名乗ってくれるんや。なら公平フェアにボクも名乗らなあかね。ボクは三番隊 副隊長、市丸ギン。どうぞ宜しゅうしてや」

ニコニコと自分の考えていることは顔に出さずギンが言うところフズイオンは「御丁寧にありがとうございます」と頭を下げた。

「先ほどは蹴り飛ばしてしまい申し訳ありませんでした。二対一は卑怯だと思ったので苦肉の策で蹴り飛ばさせて貰いました」

「いやええよ、別に。そんならいい気にしとらんわ」

「どうやらフズイオンと言う破面は変わり者らしい。少なくともギンはそう思った。」

「…ところで貴方は先ほど副隊長と仰られましたよね？」

「確かにそう言うたなア」

「なら貴方はお強いと思って構わないのですね？」

「さア、それはどうやろ」

ギンはそう言った。

「少なくとも自分の事を強い、なんて言える自信はボクに無いしなア。ボクが強いかどうかなんてアンタが決めるもんとちやうの?」

「…それはそうですね。まあ、お強くて弱くてもどちらでもいいのです。私のこの腹の減りを、渴きを無くしてくれるのであれば誰でも——」

フズズイオンは血走った目でギンを見ると大きく地面を蹴り、ギンの懐に入る。

「さて、貴方は一体何味でしょうか——?」

ギンは滅多に見開かない目を見開く。そして咄嗟に避けた。

一体フズズイオンは何をしようとした——?」

ギンの頭の中で警鐘が鳴り響く。フズズイオンはヤバい、強い、と。しかし逃げることは許されないし逃げるつもりもない。

フズズイオンは避けられたことに少し驚いていたのかボーと一瞬していたがギンを見ると楽しそうに笑い、攻撃を仕掛けてくる。

殴り殴り、蹴り蹴り、殴り、蹴り

テンポよく、リズムカルにフズズイオンは攻撃を仕掛けてくる。ギンは避けることしかできなく防戦一方だ。攻撃をしないことにはギンが勝つことはない。

何とかしてこのテンポを崩し攻撃をしなくては、ギンはそう思う。そしてギンは気づいた。殴りから蹴りに入る一瞬間が空くことに。

この間を利用して攻撃に移らなくてはギンに勝機は無いだろう。

ほんの一瞬の間。これを逃すことは許されない。

殴り殴り……—今だ。

ギンは瞬時に斬魄刀の柄を掴むと斬魄刀の名を呼ぶ。

「射殺せ『神鎗』」

フユズイオンの顔面めがけて『神鎗』のなら刃が伸びる。フユズイオンは『神鎗』を初めて見た為か『神鎗』の早さにはついていけず、避ける時頬に切り傷を負ってしまった。

ツーと頬から赤い血が流れる。フユズイオンは親指でその血を拭くと親指を舐めニヤリと嗤った。それを見たギンは思わず苦笑いになっってしまう。

「そこらの男子よりも普通にカツコいいなア、アンタ」

関係ない事を喋る余裕はあるらしい。テンポのいい攻撃を避けながら一瞬の間を逃すことなくギンは攻撃していく。しかしもう『神鎗』の伸縮スピードに慣れたのか簡単に避けられてしまう。

『神鎗』を避けるとき、フユズイオンはバク転をしながら後方へと下がっていく。ある程度ギンと距離を開けると口を大きく開いて空気を吸う。

『虚閃』

フユズイオンは口から霊圧の集中された閃光を口から放った。ギンは『神鎗』で受け止めようと一瞬思ったが直ぐにやめた。『神鎗』が折れてしまうと思ったからだ。体を無理やり捻り右に避ける。しかし虚閃をもろに受けてしまったのか左腕は血だらけになっていた。

「ッ——」

左腕を動かそうとすると痛みが迸る。思わずギンの顔が歪む。フユズイオンは二撃目の虚閃を撃つため、攻撃体制に入っていた。

ギンはその事に瞬時に気付き『神鎗』の名を呼び刃を伸ばす。攻撃体制に入っていたフユズイオンは避けることが出来なく『神鎗』の攻撃を受けてしまった。

『神鎗』がフユズイオンの腹を抉る。フユズイオンはこれ以上の傷を

作らない為にも『神鎗』を手で掴み、抜いた。

そしてフズイオンは思い出す。自分の我が主の言葉を。

『死にそうになったら逃げるんだよ』

フズイオンが死ねば、主は行き場を失う。それはいけない。そしてフズイオンは逃げることを決意した。まだ本当は戦える。戦いたい。けれど主に迷惑をかけるのはフズイオンのポリシーに反する。そして何よりも彼はまだ本気を出していない。それはフズイオンも一緒だったが、そこまで殺しに執着はしていない。

結局、フズイオンの腹の減りも渴きも満たされはしなかった。けれど久しぶりの戦闘はフズイオンの心を満たし、愉しませた。

「私は貴方に感謝します」

「？」

「ではこれにて失礼します」

急にお礼を言われ何が何だか分からなかったギン。そんなギンを数秒フズイオンは見た後姿を消した。響転ソニードを使って姿を消したフズイオンを見てギンは辺りを警戒するがもう自分の中の近くに、この空座町からくらちやうにフズイオンの霊圧が無いことを悟ると逃げたと理解した。

「…全く……ワケ分からんわ」

まだどうやら空座町では戦闘が続いているらしい。皆結構苦戦しているようだ。ギンも乱菊の戦闘に加勢しに行きたがったが問題が発生した。

「……、何処や……」

現世には藍染に度々連れてきて貰っていた為、物の使い方や何やらはある程度わかっていたギンだが、流石に地形を覚えることは無理だったらしい。

ついさつき来たばかりの為、地形何かはさっぱりだ。乱菊の霊圧を辿るのもいいがかなり離されているようで霊圧を辿るのが難しい。乱菊が限定解除されているのなら辿るのは簡単で楽……いや、無い物ねだりはよそうとギンは頭を振った。

その後すぐ、日番谷が限定解除した為、日番谷の霊圧を辿って乱菊のもとへ行つたギンだった。

黒髪の男

ジリリりと大きな音が小さな部屋にこだました。焦げ茶色のフワフワとした髪を揺らしながら男は固く薄い布団から出ると目覚ましを止めた。

時刻は朝の4時。時間ぴったりに起きたのが嬉しいのか男は少し微笑んだ。

まず男はタンスから服を取り出す。白のワイシャツに黒のネクタイ。そして黒の長ズボンをはくと洗面所に向かった。歯を磨き、顔を洗う。寝癖をお湯で濡らして無くすと黒淵眼鏡をかけた。

洗面所から台所へ行くと適当に朝ごはんを作り済ませた。時間は朝の5時30分。目覚まし時計を見てそれを確認すると男は靴を履いて家を出た。

男の行き先はコンビニだった。男の生活はお世辞でもいいとは言えなく、こうしてアルバイトを掛け持ちして生活をなんとか繋ぎ止めている。

「おはようございます」

「…おはよう、ございます……」

男が挨拶をすると交代する男は目を合わさず挨拶を返した。男はなんとも思っただけだった。これはもう日常茶飯事だから。慣れたのだ。

コンビニの制服に着替えると営業スマイルを張り付け、レジへと立った。朝早いがチラホラとコンビニに来る人はいるので何気に気が抜けない。

チリリーンと音楽が鳴る。客が来たことを知らせる音楽だ。男はコンビニに入ってきた客に「いらっしやいませ」と言った。

客は女で見たところ高校生だった。女は手に何も持たずレジの前に立つと「あのっ…!!」と男に声をかけた。

「いかがなさいましたか？お客様」

「バイト…終わるのいつですか」

「はい？」

これも慣れたことだった。時々聞かれるのだ。バイトの終わる時間帯を聞かれることや出待ちは。正直男はうんざりしている。

「あたし、貴方に言いたいことがあるんです」

「申し訳ございません、お客様。プライベートな情報は教えられない規則となっていますので」

「お、お願いします!!」

この後男は丁寧に、やんわりと断り帰って貰った。泣きながら走って帰っていく女を見て男は重いため息をつく。

「ホント、最近モテるようになったよなー、お前って」

「よっー!」と男に話しかけてきたのは同じバイト仲間である。聞いた所によるとこのバイト仲間とは同じ高校に通っていて、高校からの付き合いいだと言う。

「まあ藍染は確かに隠れファン多かったけど、お前の家ってホラ、やのつくあれじゃん？そこの女子も近寄り難かったみたいだったけど…変な才能でも開花した？」

「才能なんて開花してないよ。バカなこと言ってる暇あったら手を動かしてください、佐野」

「佑規ゆうきでいいって言ってるじゃん」

「結構です」

ズバツと佐野と呼ばれた男の言ったことを却下すると佐野は「ちえ、連れない奴だな」と言った。

「しかしよ、俺時々思うんだよ」

「……………」

「お前がホントの藍染なのかな、ってさ」

藍染と呼ばれた男は何も言わない。静かに佐野が楽しそうに言っていることに耳を傾けている。

「バイトの時間には遅れて来たことのない生活苦のお前がある日突然大遅刻したり、ここまで一人で来れなかったり、色々さ。何かお前、違和感あるんだよなあ」

「もうしかして本物の藍染じゃなかったりして」とニヤリと面白そうに言う佐野の頭を藍染はバシリと叩いた。

「……………やっぱ、なわけねえよな」

案外佐野こいつの観察眼は鋭い。侮れないなど思った藍染だった。



気が付けば硬いフローリングに寝転んでいた。身体中バツキバキで意味が分からなかった。周りは暗く何も見えない。そのせいで見渡しても何も見えなくて全く意味がなかった。

日が昇ってきて漸く辺りが見渡せるようになった。そして気づいた。ここは知らない場所だと。いくら知り合いの名前を呼んでも出てこない。勿論母の名前を呼んでも。

部屋は狭いし、暗いし、知らない場所だしで不安になった。その時、ポケットに入っていた何かが大きな音をたてて鳴った。

四角い箱形の何かだった。試行錯誤した結果、開いた。縦長の何かになって、ボタンが沢山ついていて。適当に左端の一番上のボタンを押してみた。

『おい、藍染!!お前今、何してんだよ!!店長怒ってっぞ!!』

箱形から大きな怒鳴り声が聞こえた。思わず肩がびくついてしま
う。

「店長……?」

『いいから早こい!!』

「……どこに?」

『はあ!?!』

『そんなこと言っても説教からは逃げられねえぞ!!』と言われるが何
がなんだかさっぱりである。

『あーもういい!!てめえがグズグズしてっから迎えに行く!!絶対そ
こから動くなよ!!絶対だからな!!』

ブチツと何かがキレる音がすると共に声は聞こえなくなった。全
く意味が分からなかったが、声の主は相当慌てていた様子だ。ここか
ら動かない方がいいのだろう。

暇なので四角い箱形をさわっていると黒い画面に自分の姿が映っ
た。見たことのない顔だった。本当に意味が分からなかった。

そこからは生きるのに、慣れるのに、必死だった。

どうやらこの男の名字が自分と同じ『藍染』らしい。下の名前も似
ていた。けれど、昔自分がいた場所と今いる場所は全く違って、焦っ
た。

「……ここには斬魄刀も死神も尸魂界もない……」

チカラ
霊力のある自分が死神を見れないなんて可笑しい。それに虚の被害
とか誰もあつていないようで、まるで別の世界に飛ばされたのではな

いか、と思った。

今、自分の体はどうしているのだろうか。

幼なじみはどうしているのだろうか。

気がかりな事が多すぎる。

今日も飽きず『藍染』は『藍染』の体を探した。

決断

「うわあ、ボロボロやないの日番谷隊長」
「うるせえ」

包帯だらけの日番谷を見てギンは言った。日番谷は眉を顰めると「しかし、てめえ戦闘は終わってたんだろ。何でこんなにも帰って来るのが遅えんだ」と言った。

「いやあ迷ってましたわ」
「……………」

「随分遠くまで飛ばされてもうて何処か判らん場所やし適当に歩き回ったたら隊長の限定解除した霊圧感じて。ほんま助かりました」

「ちっ」と舌打ちをした後日番谷は溜息ついた。それにつられる様に織姫が一息つく。どうやら朽木ルキアの治療が終わったようだ。

「も、もう治ったのか!？」
「ああ…癒えている…。信じ難い速さだ…」

ルキアが織姫に礼を言うと言った織姫は骨折していない片手をブンブンと横にふって「そ…そんな事ないよ！あたしなんて…」と謙遜した。

「んー」
「どうしたの？ギン」

肘を組みながら頭を悩ませているギンを見て乱菊はギンに聞いた。ギンは「織姫ちゃんと藍染隊長、どっちが早う怪我治せんのかな思うて」と言った。

「あんた……………」

「吹っ切れた訳やないで乱菊」

ギンから藍染の名前が出てくる事に乱菊は驚いた。藍染の名前が出せるほどもう心の傷が癒えたのか、そう乱菊が聞こうとするとギンは乱菊の言葉の上から重ねる形で言った。ちゃんと言わせてもらえなかった事に少し不機嫌になりながら乱菊はギンに「じゃあ何よ」と聞く。

「いや、ちよつと色々あつてん。 “あの人” に聞けば何か分かるかもしれへん。だから取り敢えずはウチの隊長死んだと思わへんことにしたんよ」

「……ホント、あんたが何考えてるのかあたしには分からないわ」

「おおきに」

「褒めてないわよ」



ピツピツピツピツと電子音が響く。携帯と睨めっこをしていた日番谷に近づく人物が一人。その人物は日番谷の後ろに立つとニヤリと悪い笑みを貼り付け——日番谷の目を手で隠した。

「だ——れだっ!？」

後ろに立っている人物の巨乳が日番谷の首を挟む。日番谷は少しキレながら「…何遊んでんだ松本…」と言った。

「やだ！ 凄い隊長！ 発正解!!」

乱菊は日番谷の目を隠していた手を外すと日番谷に問うた。

「何してんです？ 現世^{こっち}じゃ制服着てる子はガツコ行かなきゃダメなん

ですよお」

「報告書だ！」

乱菊の問いに日番谷はキレ気味で答える。乱菊は日番谷の答えを聞くと「ひゃ——っ」と興奮した様子で言った。

「ギンは限定解除しなくても勝てたしあたし達は限定解除のお陰でラクシヨーっした！って？」

「…連中はザコだ」

乱菊は目を見開く。

「ヴァアストローデ上級大虚でも無ければ恐らく中級大虚ですら無え。アジューカス隊長格ですら限定解除無しには最下級もまともに倒せねえ。オレたちそれが破面あいつらのレベルだって事だ」

乱菊達の周りの雰囲気重くなる。日番谷が大きく溜息を着くと乱菊を見て「おい、市丸はどうした」と聞いた。

「え——？ギンですかあ？ギンは何か「ボク用事が有るから乱菊先行っというてや」って」

「分かります？」と乱菊が日番谷に聞くと日番谷は「ああ。てめえが市丸のモノマネをすると凄くイラつく事が分かった」と答えた。



古びたもう使われていない工場。そこに一護は足を運んでいた。

「ん？黒崎一護やないの」

一護は名を呼ばれたことで動かしていた足を止め振り返る。後ろにはニコニコと笑みを貼り付けた制服姿のギンが一護の手を振って歩いてきていた。

「お前は…市丸ギン」

「ギンでええよ」

「何でこんな所にいるんだ」一護がギンに聞いた。ギンは貼り付けていた笑みを一瞬で消し真顔になると細い糸目を珍しく開き言う。

「この先に居る奴に逢いに来たんよ。ちよおつと聞きとう事があつてな」

「聞きたいこと？」

一護が首を傾げた。

「藍染惣右介」

一護が目を見開く。一護の知り合いにも同じ名前の男性が居たからだ。

「ボクの尊敬しとる隊長や。まあ尸魂界で死んだ事になってんやけど

――」

「……死んだ？」

「ウチの隊長に殺されててん。ボクがコッチに来たのも敵討ちが目的やし。せやけど久しぶりに面白い顔見つけたし何か知つとるなら教えてもらおう思うてわざわざここまで来たんや」

ギンが言い終わると同時に何処からか声が聞こえた。

「…ようこことが判つたなア一護」

ギンが地面を思いつき蹴る。一つだけ空いている倉庫の中にギンは入っていくと笑顔でカッコ付けている金髪おかつぱ頭の顔面を驚掴みにし、瞬歩で金髪おかつぱ頭と共にその場を離れた。

「え、えつと……」

何やらカッコイイ場面。そんな場面をぶち壊しにされ拳句の果てに置いていかれた一護は冷や汗を流した。ひよ里が溜息をつきながら立ち上がると先の事が何も無かったかのように口を開けて言った。

「そのカオ、や——つとついたみたいやなア仮面カウチの軍勢チの仲間ンなる決心が」



誰もいない人気の無い場所。そこにギンは平子を連れてきた。手に持っていた平子を投げ捨てる。

「ぐえつ！」

「あたたた」と腕を擦りながら立ち上がると「ちよつと何してくれんねん！今、めつちやええ所やつたんぞ！名言的なモン出るハズだったんやで!!」

と大声で言った。ギンは鋭い目で平子を睨み付けると「ん？何か問題でもあつたん？」と聞き返す。平子は目を逸らし「いやありません」と素早く答えた。

「何で姿消したとか色々聞きたいことは有るんやけど……なア、藍染隊長ほんまは生きてるんちやう？」

ギンが平子に聞く。ギンの顔は藍染が生きっていると懇願している顔で正直見ていられなかった。

平子は葛藤する。藍染には自分が生きていることはまだギンには言わないでくれと念を押されていたのだ。ここでギンに真実を伝えれば平子は藍染にボコボコにされることは目に見えている。しかし、こんな状態のギンに嘘をつくなんて心が痛む。

悩みに悩んだ。自分の命か、元部下の心の安静。本当に悩んだ。凄く悩んだ。

そして結果を出した。

「ギン、お前にこれやるわ」

「手エだせ」平子はギンにそう言った。ギンは何が何だか分からない状態ではあったものの恐る恐る手を差し出す。平子はポケットに手をつ突っ込むと何かを取り出しギンの掌の上に置いた。

銀色の何かの破片の様なものだった。

「何ですか？…これ」

「それ、肌身離さず持つとき。それがお前の質問に対する俺の答えや」

「絶対無くすなよ」と平子の言葉にギンは小さく頷いた。

「(後で惣右介に破片また貰わな)」

機嫌

「どーしょ!!」

とある休み時間。浅野啓吾あさのけいごの叫び声が教室に木霊した。啓吾の横に居た小島水色こしまみずいろは耳を塞ぎながらも「どうしたの?」と啓吾に聞いた。啓吾は顔を青く染めながら言う。

「す、数学の教科書忘れた…」

「あー。それはもう藍染先生に言うしかないでしょ。休み時間も後1分で終わるから他クラスに借りること出来ないし」

優しい風貌をしている数学教師、藍染惣右介。顔もイケイケでモテモテの教師であるが啓吾はそんな藍染に恐怖していた。

何故か、それは藍染が平子にクナイを投げた所である。的確に眉間を狙うあの技術、絶対前職は暗殺業か何かに就いていたと確信を持っている啓吾は藍染に苦手意識を持っていた。

「ちゃんと言ったら許してくれるよ……多分」

「……教科書だけだったら、な」

「え、もうしかして全部忘れたわけ?」

水色の問いに啓吾は小さく頷いた。水色は呆れてため息が漏れる。

「啓吾ってもうしかして死にたいの?」

「なわけねえだろ!!…昨日は色々あったんだよ。コンビニ行ったらさ、何かハゲに捕まって……姉ちゃん気に入って……あー!!もう!!」

急にブツブツと何か呟き出したかと思えば大声で叫び頭を掻き毟り始めた啓吾を見て水色はドン引きしている。もちろんそんな事に

なっているとは啓吾は気づいていない。

数秒後にチャイムが鳴る。啓吾の顔は絶望で塗り固められた。そんな啓吾を見て水色は啓吾の肩に手を置いた。

「今度風鈴買ってあげるよ」

「何で風鈴?!」

「この前屋台見つけたんだ」

清々しい笑顔で去っていく水色を見てくそうと顔を歪ませる啓吾。啓吾はこのわずか数十秒で死を悟った。

ガラガラとドアが開かれる。啓吾は忘れたことを藍染に言いに行こうと立ち上がったが足が直ぐに止まった。それは何故か。恐怖？

——違う。じゃあ何故か。それは藍染の顔から手にかけてだった。

啓吾以外の視線も藍染に降り注がれる。そして一気に教室がザワザワとどよめいた。

「あ、藍染…先生」

クラスメイトからお前が聞けとプレッシャーをかけられ啓吾は涙目で右手を上げ藍染に喋りかける。一瞬藍染は冷たい視線で啓吾を——見たような気がするがそれも一瞬で啓吾は気づく事無く藍染に問う。

「そ、その怪我は…——?」

藍染の顔は絆創膏が沢山貼ってあり、もし傷が残ったらどこかの海賊王にでもなれるのではないかというぐらいのものであり、手首には痛々しい包帯が巻き付けてある。まるでひと戦してきたような雰囲気。藍染はニコリと笑うとまるで大きな壁を作るように言った。

藍染はニコリと笑うとまるで大きな壁を作るように言った。

「何もありません」

勿論、藍染の言葉にクラスメイトの皆が「何も無いわけあるか!!」とツツコミを入れる。

「あ、あれだよ……絶対織姫たちと関係あるよね……」

誰かが言った。今は欠席していて居ない井上織姫の席に視線が集まる。織姫だけではない、黒崎一護、石田雨竜、茶度泰虎、その他休んでいる席にもチラホラと視線が集まった。

「関係ありませんし、本当になんでもないんです。ただ目つきの悪い蛇に咬まれただけですから」

「咬まれた？ 噛まれたじゃなくて咬まれた？」

「へ、蛇って大丈夫なの？ 毒とかで死なない？」

「…だ、大丈夫よ藍染先生って忍者だから解毒剤の1つや2つ持っている……でしょ」

「現職教師の人が解毒剤って……」

クラスの話は途切れる事無くコソコソと続けられる。暫くは笑って見ていた藍染だがバン!!と大きく机を叩きざわめいていたクラスを一瞬で静かにさせた。

「なんでも、ないです。——分かりました？」

クラスの全員は大きく頷き返事をした。そして決めた。もうこの話は学校ではしないと。関わらないと。

「で、浅野君」

「は、はい!!」

藍染の視線が浅野に行く。浅野は藍染に呼ばれたことにより大きく返事をした。藍染はにこやかとした表情で藍染に問うた。

「机に数学に関する物が出されていないみたいですが——何故か聞いても?。」

浅野啓吾16歳。今年で何回目か分からない死を悟った。



「何か——嬉しそうね、ギン」

どこことなく楽しそうな雰囲気を纏っているギンを見て乱菊は笑いながら言った。暫く姿を見なかったギン。少し心配していた乱菊だがそれも杞憂に終わり良かったと心の中で安心した。

藍染が殺されてからというもののギンの笑みはどこことなくきごちなく、そして少しの哀愁を漂していた。それを頑張って隠そうとギンはしていたみたいだが——女の勘を持つ乱菊には隠せない。それに気づきできるだけだけギンから目を離さないように、何かあれば自分が駆けつけられるようにと気を張っていた。

しかし、ついこの前までは僅かに漏れていた哀愁も今にはなくなつて、無理に作っていた笑みもちゃんとした心の底からの笑みに変わったことに乱菊は瞬時に気づいた。

「うん、ええことあったなあ」

「へえ。アンタがそこまで言うなんて…気になるわね」

「秘密や、秘密」

ギンが何を隠しているのかは流石の乱菊にも分からない。けれど、この秘密がギンの次に生きる為の目的ならいいのかもしれない、そう思い少し笑った。

『ギン。この事は誰にも言っちゃいけないよ』



チリンと風鈴の音が鳴る。パーカーのフードを深く被った男は空を見上げる。

「もう、こんな時期かよ…。早えな」

懐かしそうに、少し後悔を混ぜた声色で男は言う。そんな風鈴屋の屋台の前をスーツを着た男性が通りかかった。藍染だった。

藍染は視界に入った風鈴屋の屋台の前で足を止める。

「…風鈴…」

「なんか買っていくか？」

藍染は悩みに悩んだ末、綺麗な黄色が特徴の風鈴を1つ買うことに決めた。男は風鈴を木箱の中に入れ割れないようにする。そして風鈴入りの木箱を藍染に渡す時男はボソツと呟いた。

「…アンタ、変わったな」

「は？」

王鍵

ザアアアアア

ザザツ

ザザ——ツ

大きなモニターには砂嵐が写っており、そのモニターの前には暇そうにしている乱菊、相変わらずどんな事を考えているのか分からない笑みをしているギン、そして仏頂面の日番谷が立っていた。

「隊長おー、まだですかあ？」

「…乱菊、ちよつとは忍耐力付けなあかんよ」

もう待てないと言ったように口を尖らせながら言う乱菊を見てギンは苦笑いをしながら言った。この目の前にある大きなモニターは尸魂界と連絡をするもので尸魂界から緊急で回線を用意しろと言われたのだ。織姫が居ないこの時を狙ってやろうとしていたのだが……。

ばたばたばたばたガチャン！と大きな物音をたてながら織姫は帰ってきてしまった。家の半分以上を占領しているこのモニターを見て織姫は「カツコイイ」と呟く彼女は本当に優しすぎる。

「…じゃないよ！何これ冬獅郎くん!？」

「…ちっ、間の悪い時にかえってきやがったな……」

説明するのが面倒だ、といった表情をしながら頭を掻く日番谷。そんな日番谷を見て乱菊が「だからもうちよつと早めにしましよっつて言ったんですよお」と言った。そんな乱菊を見て「うん、乱菊は黙つてよくな」と言っている二人には織姫に見つかっても焦りは見せなかつた。まあそれは日番谷も同じだが。

「十番隊隊長 日番谷冬獅郎だ」

日番谷がそう言うとうとうやく繋がったのか『はい。お繋ぎ致しませす』と淡々とした声が返ってきた。数秒経つとブンと音と共に画面に総隊長の姿が出てきた。

「そ、総隊長…さん？」

織姫はまだ状況を理解していないらしい。総隊長の姿を見て疑問の声を出していた。

『…流石に仕事が早いもう、日番谷隊長。今回緊急に回線を用意してもろうたのは他でもない。皇帝の真の目的が判明した』

その場にいた全員の顔が驚愕に染まった。

「…皇の…真の目的…!？」

『如何にも』

漸く状況が理解出来た織姫は空気を読んでその場を退散しようとした。しかし総隊長は織姫を止めその場に居ろと言った。お主ら人間にも関係のある話じゃ、聞いていきなさい、と。

長い前置きから日番谷に言われようやく本題に入る総隊長。そして総隊長は言った。

『王鍵』

この名が出てきた時、あのギンさえも珍しく細長い目を開き驚愕していた。

「…王鍵…って何ですか？」

織姫の問いに答えたのは乱菊だった。

「王家の鍵よ。文字通りね。尸魂界にも王つてのがいるのよ。王つて言つても尸魂界の事は四十六室に任せつきりで一切干渉してこないから実感ないし実際あたしも隊長もギンも直接見たことは一度もないんだけどね」

『然様。王は霊王と言い尸魂界にあつて象徴的でありながら絶対的な存在。その王宮は尸魂界の中の更に別空間に存在し王族特務が守護している。王鍵とはその王宮へと続く空間を開く鍵じゃ』

漸く事の重大さに気づいた織姫は一筋の汗を伝わせながら言った。

「それじゃあ…皇…さんはその王様を…」

『殺す。それが奴の目的じゃろう。…じゃが問題は其処では無い』

総隊長の言いたい事を理解した日番谷は真剣な眼差しで総隊長を見つめ言った。

「……………皇が見たのは王鍵の在り処を記した本じゃない…」

『如何にも。王鍵の所在は代々十三隊総隊長のみに口伝で伝えられる。故にその所在を記した本など存在せん。奴が見たのは王鍵が創られた当時の様子を記した文献——奴が知ったのは『王鍵の創生法』じゃ』

「つまり…その創生法に問題があるという事ですか？」

乱菊の問いに総隊長は『否』と答える。

「人間、織姫ちゃんにも関わる言う事は——材料かなんかやないの？総隊長さん」

ギンの言葉に総隊長は深く頷いた。

『如何にも。王鍵には十万の魂魄と半径一霊里に及ぶ重霊地。重霊地とは現世に於ける霊的特異点を指し、その場所は時代と共に移り変わる。その時毎に現世で最も霊なるものが集まり易く霊的に異質な土地をそう呼称する』

総隊長は織姫を見て「もう判るじやろう」と言った。

『皇の狙う重霊地。それは『空座町』じゃよ』

織姫は目を見開き、ギンや乱菊、日番谷は想像でもしていたのだろう。大して驚いた姿は見せなかった。

『儂は彼奴がそれを成せるとは思っておらん。然し、それは儂個人の考えでありもしものことがあつては敵わん。そのもしもを無くす為にも儂ら『護廷十三隊』が居る』

乱菊が織姫の肩に手を置いた。いつものような余裕の表情の日番谷、相変わらず何も悟らせてはくれないギンの笑み。そんないつもを見て織姫は安著した。

この人達が仲間で良かった――。

決戦は冬と決まった。それまでは各々も力をつけることに専念する。

「あたしとギンは一角達に知らせて来ます、総隊長」

乱菊とギンが動くとそれを見た日番谷も自分も行くと言った。しかしそれを総隊長が止める。

「――お前……」



市丸ギンが現世に行き藍染惣右介の仇を取りに行くと聞いた雛森は自分も行くかと懇願した。しかし、それは皆に止められ行くことは叶わなかった。

酷い隈に青白い顔色。そんな雛森を見て日番谷は雛森の心配をする。ギンとは違い全て顔に出る雛森は中々部屋からも出して貰えず、日番谷と喋るのが雛森にとって久しぶりに人と話した瞬間だった。

雛森は藍染が死んでから皇に刺されるまで大きな空回りをした。時には仲間を疑ったこともあった。その事について雛森は日番谷に謝る。何故なら雛森が疑った相手とはモニターに写っている日番谷なのだから。

雛森は日番谷に謝る。段々雛森の顔は俯いていき、表情が見えなくなる。そこまで自分を追い詰めていたのか、日番谷はフツと笑うと「いつまでも気にしちやいねーよ」とおちやらけた表情で言った。雛森は日番谷が好意を向けている相手。好きな人が悲しい顔をしているのを見てられないのだろう。

「俺は気にしちやいねーからオメーも気にせずもうちよい寝てとつと目の下のクマ消せよな」

日番谷の言葉に安心したのだろうか。雛森は微笑しながら涙を流した。

『…うん、ありがとう日番谷く…』

「大体よ——」

日番谷は雛森の感謝の言葉を遮る形で更に言葉を続ける。

「オマエそれでもガキみてーなんだから他人の何倍も寝ねえと成長止まんぞ。松本見てみろ、オメーあと10年は寝続けねーとアレ

に追いつけねえぞ」

『う、うるさいな！乱菊さんは特別だもん！大体日番谷くんに成長のこととか言われたくないよっ!!』

「雛森……何遍も何遍も言わせんじゃねーよ。日番谷くんじゃなくて日番谷隊長だ」

日番谷の言葉に雛森は弱々しくも「うん」と頷いた。

『…ねえ、日番谷くん』

「何だ？」

急に声色が暗くなった雛森に気づいて日番谷は少し驚きながらも答えた。雛森は少し顔を俯かせながら言う。

『……本当は藍染隊長死んでないよね…?』

日番谷は目を見開いた。

『だってあたしや日番谷くん、市丸副隊長が怪我した時誰かが治したんでしょう？そんなの出来るのって藍染隊長か卯ノ花隊長しか出来ないもん。でも卯ノ花隊長は知らないって言ってたし——本当は生きてるんでしょう？ねえ、生きてるよね!!』

日番谷は目を閉じた。

「それは——」

日番谷が雛森の悲痛な質問に答えようとしたその時だった。総隊長が雛森を気絶させ、退室させた。

『…済まんの。本人の意志を尊重して話をさせたんじゃないが…どうやら

まだ早かったようじゃ…』

「——いえ…ありがとうございます」

日番谷は深々と総隊長にお辞儀をした。

「失礼します」

日番谷の言葉と同時にモニターは消え砂嵐へと変わる。日番谷はグツと歯を食いしばり拳を握った。

「…安心しろ、雛森。皇は……藍染の仇は俺が討つ!!」

攫われた井上織姫

井上織姫が攫われた。それを知ったのは一護達がグリムジョーとの再戦が終わった後だった。

「お話は分かりました山本総隊長。それではこれより日番谷先遣隊が一、六番隊副隊長 阿散井恋次、反逆の徒井上織姫の目を覚まさせるため虚圈へ向かいます！」

「恋次……！」

恋次は一護の顔を見ると笑った。しかし総隊長はそれを許してくれなく井上を見捨てると言った。ルキアは総隊長の命令を聞いて苦虫を噛み潰したような顔をする。そして言う。

「……恐れながら総隊長殿……その命令には……従いかねます」

『やはりな。——手を打っておいて良かった』

穿界門が開かれる。穿界門からやってきたのは更木剣八、朽木白哉の二人だった。二人はルキアと恋次を尸魂界に連れて帰った。そして総隊長は一護に釘を刺すように言った。

『身勝手な行動も犬死も許さぬ。命があるまで待機せよ』

総隊長の言葉は一護の体を深く縛り付けた。



総隊長の言葉を見無視し、一護達が虚圈に向かっている間、織姫は皇と会っていた。

「ようこそ、我等の城『虚夜宮』ラス・ノーチェスへ。……井上織姫、って言ったかしら」

高い場所に置いてある椅子に皇が座っている為織姫が見上げる形になる。織姫は皇に名を問われ合っていたので返事を返した。それを聞いた皇は霊圧を織姫に掛けながら織姫に命令をした。

「早速で悪いけど織姫、君の能力を見せてくれるかな」

ズクリと阿寒が織姫の背筋を沿う。織姫は立っているのがやつとで小さく返事を返した。

「どうやら貴女をここに連れてきたことに納得していない者も居るみたいだから。…そうだね？ルピ」

ルピとはグリムジョーの後にNo.6になった破面である。そしてルピは先の戦闘で日番谷にやられていた。

「…当たり前じゃないですか…。ボクらの闘いが全部…こんな女一匹連れ出す為の目くらましだったなんて…そんなの納得できる訳ない…」

「ごめんなさいね。貴女がそんなにやられるとは予想外だね」
「……………」

ルピは静かに鋭い目で皇を睨みつけた。しかし皇はそれを咎める事無く涼しい顔をしている。

「さて、そうね。織姫、貴女の能力を端的に示すために…グリムジョーの左腕を治してくれないかしら」

グリムジョーの左腕。それは東仙に灰にされた腕である。その為、ルピは無理だと主張した。しかし織姫はルピの予想を超え見事グリムジョーの左腕を治した。

織姫の能力は『神の領域を侵す能力』だと皇は称した。

グリムジョーは織姫に穴の空いた背中を治させるとルピの胸を貫く。こうしてグリムジョーはNo.6の称号を取り戻した。

グリムジョーは大きな口を開け笑う。織姫は後悔した。グリムジョーの左腕を背中を治さなければルピは死ななかつた。

怪我をするから治す。治すから戦える。

織姫は「治す覚悟」をまだ持っていない。



(「ここでおとなしくしてろ」って言われたけど…なんにもすることないなあ…。お腹すいた…)

小さな窓から見える月を眺めている織姫。そんな織姫の部屋にコンコンとノック音が響いた。織姫は窓から視線を外しドアを見つめる。

「返事ないけど入っちゃうねえ——つと」

入ってきたのはウルキオラのように白い死覇装——と言ってもお腹辺りの布はなくへそが見えており、短い白い短パン——を着ている金髪の破面だった。金髪の女性の青い瞳が織姫を写す。

「ぼくの名前はねえ、シンテシスって言うんだあ!!よろしくねえ、井上織姫ちゃん!!」

「え、えーと…よろしくお願ひします?」

織姫の反応が面白かったのかシンテシスは大きく笑いながら「よろしくう!!」と織姫の背中をバシバシ叩いた。

「い、痛いよう……」

「あ!!そう言えばお腹空いてない?料理持ってきたんだあ!!食べる?」

何処からか料理を取り出したシンテシス。織姫は口からヨダレを垂らしながら料理を見つめている。

「毒なんて入ってないから安心してよお!!」

「ほ、本当に食べていいの…?」

「いいよ!いいよ!!」

織姫はパアアと嬉しそうな顔をしてご飯を食べ始めた。

「美味しそうにたべるねえ」

「ふあつて、おいひいもん!!」

(訳：だって、美味しいもん!!)

「そっかそっか」

シンテシスは嬉しそうに食べる織姫を見て笑って眺めていた。

「ウルキオラってさあ仏頂面で面白くないよねえ。んーでもグリムジョーと比べればマシなのかなあ?」

「さ、さあ…?」

「織姫って現世捨てて来たんでしょ? やっぱり嫌だった? ん? 無理やり連れて来られたわけだから嫌なのは当たり前だよねえ。んー悲しかった? 怖かった? 誰かに助けを求めたかった?」

「そんなに質問されても答えられないよ…」

質問攻めに会う織姫は食べる手を止め言った。「じゃあさ」とシンテシスは笑って織姫に問う。

「現世に好きな人って居た?」

「ぶふー」

シンテシスの質問を聞いて思わず織姫は味噌汁を吹き出してしまった。

「わ、私のことよりもシンテシスちゃんのこと聞いてもいい？」
「うんいいよ。なんでも聞いて」

織姫は箸を置き、少し俯きながらシンテシスに聞いた。

「シンテシスちゃんもグリムジョーさんと同じ——」

「うん、エスパーダ十刃だよ」

「No.9なんだあ」とクスクス笑いながらシンテシスは言った。

「そ、そうなんだ…やっぱり強いよね……」

「さあ。それはどうだろ」

「え？」

「自分が強いかなんて戦ってみないとわかんない？」

純粹に言ったシンテシスに織姫は頷くことしか出来なかった。

「し、シンテシスちゃんはさ、皇さんに忠誠を誓ってるの？」

「誓ってないよ」

キョトンときさも当然に言うシンテシスを見て逆に織姫が毒気を抜かれる。

「え？」

「忠誠なんて誓ってないよ。そもそもこの破面達は昔の退屈してた生活よりもこっちの方が少しでもマシに見えたから皇様についてきてる人が多いし、バラガンって奴が居るんだけどさ。アイツはいつも皇様の寝首を狙ってるよ。皇様よりも隣に居る乾つて男がいつも

目エ光らせててさ、あつちの方が恐怖対象だよ。死神の鬼道沢山使えちやうから斬魄刀の能力見たことないし」

「な、なんか破面の裏事情聞いちゃったような気がする…」

シンテシスは大きく笑う。

「裏事情って程でもないよ！そうだなあ、破面って仲間意識があんまりないからかなあ？十刃とか本当仲悪かったりするよ」

「そ、そうなの？」

「うん。ぼくは好き嫌いとか特にないんだけどね。こんな性格してるからかな？グリムジョーとかからは顔合わせるだけですっごい嫌な顔させるしウルキオラとかは五月蠅そうな顔するし——男にモテてないなあぼく」

「モテたいの？」

「全然」

真顔で即答で答えるシンテシスを見て織姫は笑う。

「破面の男達はダメだよ。周りが見えて無さすぎるもん。付き合う相手で戦闘狂と仏頂面はダメだね。後お爺さんもダメだし、研究熱心な人もダメ。ぼくに心酔してくれるような人がいいなあ」

「織姫の好きな彼は織姫に心酔してくれるような男？」と聞かれ織姫は困ったような顔で「えーと」と言う。

「姐様」

ドアが開かれ黒髪の女性が顔を見せる。「フユズオン」とシンテシスが呟くと立ち上がった。

「もうちよつと話して居たかったけど、お迎えも来たことだしぼくは

そろそろ行くねえ！食べ終わったら皿、廊下に出しておいて！！んじや
！」

片手を上げ去っていくシンテシス。織姫はシンテシスに「ありがとう」と礼を述べた。

朽木ルキアの戦い

「申し上げます！六番隊副隊長 阿散井恋次及び十三番隊 朽木ルキア殿兩名の霊圧が隊舎から消えた模様です！現在、我が隠密機動 第二分隊・警邏隊が瀟霊廷全域に捜査範囲を広げ——」
「……………あ奴らめ……」

総隊長の重々しい声が室内に響いた。



虚圏に織姫を取り返しに来たルキアは急いでいた。なぜなら茶度の霊圧が消えかかっているからだ。階段を駆け上がり扉を抜ける。壁を抜けてもまだ空があることにルキアは疑問を持つ。

「……………これは……！何だこれは……！青空……！壁を抜けて何故まだ空があるのだ……！それに——……」
「教えてあげましょうか？」

ルキアの後ろに急に現れた黒髪の女性、フユズオン。ルキアは驚き振り返るがフユズオンは響転ソニックドを使いルキアの前へと移動した。

「ついてきてください」
「待て!!」

ルキアはフユズオンを追って部屋に入っていく。
部屋の中は普通であり大して変わった所なんてなかった。部屋の中心部にはフユズオンが立っておりルキアを見るとお辞儀を言った。

「お初にお目にかかります。私の名はフユズオン。これから貴女を殺

す相手の名です」

「……………」

フユズオンは黒い瞳でルキアを見つめる。そして口を開くと言った。

「貴女はあの人よりも弱いですね」

「あの人…?」

「名は確か…市丸ギンと言ったような気がします」

ルキアは驚いた声で「市丸副隊長を知っているのか!？」とフユズオンに聞いた。

「一度お相手をさせて貰いました。またあの人と戦いたかったのですが——貴女で我慢させて頂きます」

フユズオンの言葉を聞いてルキアは鼻で笑った。

「そう言えば私は自己紹介をしていなかったな。私の名は朽木ルキア。貴様を倒す名だ。覚えておけ」

「貴様など市丸副隊長が出て来ずとも私が殺す」そう言って強く地面を踏みつけ斬魄刀を構えフユズオンに向かっていった。

「舞え『袖白雪』」

ルキアの斬魄刀の刀身が綺麗な白い刀身へと変わる。ルキアの周りには冷気が帯びており周りの気温が下がった。

「初の舞・月白」

フユズオンの足元には白い円形状の何かが浮かび上がり——数秒後には白い円柱が地面から出てきていた。しかしフユズオンはそれを軽々と避ける。

「遅い」

フユズオンは斬魄刀を出す素振りすら無く響転ソニードで避けるとルキアに蹴りを一発食らわせる。ルキアはフユズオンの姿を捉えることが出来なく、腹に重い一撃を受けてしまった。

「ぐはっ!!」

ルキアは蹴りを食らってもダウンすることなく頭をフル回転し考える。

「(彼奴が使っているあの技——確か響転ソニードと言ったか。あれはもしかすると私の瞬歩よりも早いかもしれない。どうやって彼奴を倒すか。まだ彼奴は斬魄刀を抜く素振りすら見せていない。それ程までに私は嘗められているのか?)」

「嘗めるなっ!!」

ルキアは再び地面を蹴り独特な構えをとる。刀で地面を四箇所突きそこから強大な冷気を一齐に雪崩のように放出してフユズオンを凍らせようとする。

「次の舞・白蓮」

「そんな技では私を殺せない」

容易く避けられルキアは顔を顰める。それでもルキアは諦めることなく戦い続けた。しかし、一度も掠ることはない。フユズオンに容易くルキアの攻撃を止められる。力をグツと込めるとルキアは手か

ら斬魄刀をするりと落とす。

フュズオンはルキアを遠くに飛ばすと落ちていくルキアの斬魄刀に近づき——斬魄刀の刃を折った。ルキアの目が見開かれる。

『袖白雪』っ!!」

フュズオンはルキアに見せつけるようにわざわざルキアの元に折れた『袖白雪』を投げた。ルキアは少しの絶望を覗かせながら『袖白雪』を拾う。

フュズオンはただそれを静かに見ていた。しかし最後はフュズオンは呆れたような顔をし、ルキアを見つめていた。ルキアのプライドはフュズオンによってズタズタにされた。

フュズオンは先程よりも早い響転ソニートでルキアの懐まで入り込むと「さようなら」という言葉を残し、斬魄刀でルキアの腹を貫いた。

フュズオンは更に斬魄刀を押し込む為かわざわざルキアを上上げる。ルキアは重力に逆らうことなくズルズルとフュズオンの斬魄刀の柄へと近づいていく。ルキアの血が斬魄刀に伝いフュズオンの頬へと落ちてくる。それを光のない瞳で見つめていた。

「…やはり、貴様は……強い、な」

ルキアは力のない笑みをフュズオン見せながらフュズオンの漆黒の瞳を見つめた。

「しかし、私はここで…朽ちる訳には、いかぬ、のだ…。私は、井上を…井上を助けなければならぬ……だからこそ、ここで貴様を倒し………」

ルキアが刃のない斬魄刀をフュズオンの顔へと向ける。ゴポリとルキアは口から血を吐き出した。

「…参の舞『白刀』……」

折れた刀身から白い刀身を生み出し、フユズオンの眉間をした貫く。

「…へえ……」

これがルキアがフユズオンに初めて攻撃を加え、そして最後だった。

「私はここで貴様を倒し…井上を助けに行かなくてはならない…!!私は孤独を知っている、捕らわれし者の孤独を、仲間が助けに来た時の喜びを!! ……だからこそ、私はここで朽ちる訳にはいかぬのだ、貴様を倒し、私は井上を、助けに…行かねばならない……」

気がつけばフユズオンは倒れており、ルキアも地面に寝そべっていた。ルキアは重く、軋む体を引きずりながら織姫の霊圧がする方向へと向かう。

「……案ずるな、井上。井上は必ず……わた、し………が——」

そしてルキアの意識は途切れた。

尸魂界からの増援

「シンテシスのフランゾンの従属官だったか——そいつとの戦いの形跡は残っていないけども、フランゾンの従属官の姿は無い」

白い死覇装を着た更木剣八までとはいかなくともそこそこがたいの良い男が地面に伏しているルキアを見て呟いた。

「詰めが甘い。安心しろ、殺し残した此奴は私が殺してやろう」

誰に言っているのかは分からない。男は一人、そう呟くと斬魄刀を構えた。斬魄刀をルキアに振り下ろそうとしたその時だった。死神の霊圧を感じ手を止め振り返る。男が振り返ると案の定死神の死覇装を着、隊首羽織を着ている男が一人、そして爽やかな笑みを浮かべ立っている男が一人いた。

「何者です？一人はその羽織、隊長格とお見受けする。私はセブティマ・エスパーダ第7十刃ゾマリ・ルルー。さあ、名乗りなさい侵入者達よ」

ゾマリと名乗った男が死神達に問う。ゾマリの問いに答えたのは爽やかな笑みを浮かべている死神だった。

「そんなの答える迄もねえだろ？俺達の正体は一つ。お前らの敵だ」
「成程」

隊首羽織を着ている死神が倒れているルキアを見て口を開いた。

「…私も一つ兄に聞きたい。あれと戦ったのは兄か」

死神の質問に一つ間を置いてゾマリは返答した。手に持っている斬魄刀を敢えて見せるようにして。

「…私では無い。だが…止めはこれから私が差す所だ」

ゾマリの返答に死神二人の霊圧がどんどんと上がっていく。

「そうか」

隊首羽織を着た死神——ルキアの義兄、朽木白哉は切れ長の目を更に鋭くさせゾマリを睨んだ。

「志波」

「どうした？朽木隊長さんよオ」

白哉から名を呼ばれた死神——護廷十三隊 十三番隊副隊長 志波海燕は先刻まで浮かべていた笑みを消し白哉に答えた。白哉は倒れているルキアを見ると言う。

「兄の相手は私がする。あれは任せた」

「へいへい。任せましたよーだ」

海燕は耳をほじった後手にフーと息を吹きかける。その姿はともゾマリを警戒している様子はなく余裕の表情だった。

「…ほう。ですが貴方方が巧まれていることは無駄なことですよ」

「さて、何が無駄なのか知りたいね」

海燕は瞬歩で姿を消す。ルキアの前に辿り着くとルキアを姫抱きしその場を去ろうとした。しかしゾマリがそれを見過ごす筈も無く海燕に攻撃を加えようとする。

ゾマリが斬魄刀を振りかざし、海燕に当たるギリギリで白哉が二人の間に入り込みゾマリの攻撃を斬魄刀でガードした。

「堪忍袋の緒が切れた兄貴程、恐いもんは無エゼ」

海燕はまるで悪巧みをする子供のような笑みを貼り付けゾマリに言った。

「んじゃー頼みますよ、朽木隊長」

「……………」

白哉は海燕の言葉に返事はしなかった。そんな白哉を見て海燕は怒るどころか笑うとその場を瞬歩で去る。きつと慣れているのだろう。しかし、海燕はさほど遠くには行かなかった。

それはもしもの時の為に白哉に駆けつけられるようにしたのか、この周辺でも戦闘が行われているため巻き込まれるのを恐れてなのかは分からない。

「では貴方を倒し、逃してしまったもう二人を殺すとうしましょう」

ゾマリは白哉を標的ターゲットにした様子で言った。



「大丈夫う?」

「……………姐様……………」

シンテシスに膝枕をされていたフユズオン。フユズオンは重い瞼を開け、立ち上がった。

「私はどれくらい……………」

「うーん10分ぐらいかな?フユズオンの霊圧が小さくなってすぐ助けに向かったから。ほら、見てみなよ」

そう言つてシンテシスは机の上に置いてある水晶を指さした。水晶にはちようど海燕がルキアを抱え別行動をしようとしている場面が写りだされている。

「フズオンが殺し損ねた死神をアイツが助けようとしてるみたい。フズオン、分かつてるよね？」

「はい」

シンテシスの力によって回復したフズオンは立ち上がると響ソニック転で移動した。フズオンが向かうのは殺し損ねた朽木ルキアがいる場所、志波海燕がいる場所だった――。



「さてさて、敵さんを朽木隊長に任せたのはいいけど…どうすつかなア」

ルキアを抱え、ルキアの傷口が開かない程度の速度で海燕は走っていた。暫く走ると誰もいない宮殿につく。走る足を止め海燕はルキアを地面にそつと置くと、頭を掻きむしった。

「藍染隊長に習つたのはいいんだけど…俺、回道苦手なんだよ……」

「……かい、え、ん……どの……」

苦手でも治療しなきゃルキアが死ぬ。そんな事はわかり切つているので海燕はルキアの治療を始めた。すると傷を治しているのに気づいたのかルキアがうつすらと目を開けた。

「無理に喋んな。傷口開くぞ」

「……すみません、へまを……」

喋るだけでもルキアの体にはかなり負担を与えているのだろう。ルキアの額に汗が滲む。

「へマ？大丈夫だ。お前には強い味方がついてる」
「味方………」

少しずつだが海燕が回道で回復をしようとしている為か段々とルキアにも余裕が出てきた。その為、ルキアは一旦目を閉じ近くの霊圧を探る。

「——!? この霊圧は!?!」

「兄様!?!」と驚くルキアを見て海燕は頷く。

「何故兄様達が……」

「ああ、それはよ——」

海燕が詳しく事情を説明しようとしたその時だった。こっちに凄いスピードで向かってきている者に気づく。

「この霊圧つ!?!」

「……敵か」

海燕の問いにルキアは小さく頷く。海燕は「そうか」と言うように治療する手を止めた。

「ある程度は治療出来た。　　っと言って激しい運動とかはするなよ。傷口開いちまうから」

「しかし——!?!」

「安心しろ。怪我人なんかには戦闘はさせねえよ。何の為に俺がここに居るんだと思ってるんだ」

海燕はルキアの額を小突くと「霊圧を極限まで小さくしてどっかに

「隠れてろ」と笑って言った。

「隊長さんが頑張ってたんだ。俺も頑張らなきゃ顔立たねエよ」

海燕は立ち上がると近づいて来る霊圧の方を見た。

「来たな、敵さんよオ」

志波海燕の怒り

海燕が吹き飛ばされる。海燕が吹き飛ばされる瞬間がルキアには見えなく眉を顰めた。だが、霊圧で分かる。海燕を吹き飛ばした相手、それはルキアをボコボコにしたフズオンだと――。

「イキナリ、挨拶もなしに酷エな、破面さんよオ」

「――油断大敵と言うではありませんか」

海燕は唇が切れたのだろう。唇を手で拭うとフズオンを睨みつけて言った。大してフズオンは海燕に臆する事無く、涼しげな顔で返答をする。そして強い眼差しで海燕を見ると言った。

「お遊びはここまでです。私はお腹が減った。貴方方に私の飢えを満たしてもらいましょう」

「飢え？」

海燕の問いに答えることはなく、フズオンが強く地面を踏みつけ――海燕の懐に入り込む。海燕の懐に入り込むとフズオンは海燕の顎を狙って細い足で蹴り上げようとする。

しかし間一髪で海燕はフズオンの蹴りを両腕でガードする。どうやらフズオンの動きが見えていないわけではないようだ。

次は海燕の攻撃の番。ある程度フズオンと距離をとると海燕は駆け出しフズオンに向かう。腰に下げている鞘から斬魄刀を抜き出すと言った。

「出し惜しみはしねエ。行くぜ！――水天逆巻すいてんさかまけ『振花』ねじばな!!」

海燕の斬魄刀がトライデント状へと変化する。海燕の周り――いや、海燕の斬魄刀『振花』の周りには大量の水が出てくる。斬魄刀は水を纏っており、海燕は軽々と『振花』を片手首を軸にし、回転させ

る。フユズオンの霊圧を瞬時に察知すると、先程よりも早いスピードでフユズオンに向かつていった。

先程懐に入られたお返しか海燕もフユズオンの懐の中に入る。海燕は先程やったように片手首を軸に『振花』を回転させ、舞うような流麗な動きでフユズオンを切りつける。フユズオンは海燕の姿が察知出来ていなかったのだろう。胸を大きく海燕に切られていた。

「くっ——!?!」

フユズオンは痛そうに目を伏せ、地面に片足をつく。そんなフユズオンを見て海燕はため息をついた。

「(女を痛ぶる趣味は無い。出来れば)」

降参してもらいたいんだが、そう思うが血走っているフユズオンの目を見てそれは無理だと直ぐに分かった。

「私は二人で一人。ここで死ぬ訳にはいかない…!!」

「二人で一人？破面はなんでもアリだな」

「うるさい、うるさい、うるさいっつっつ!!」

カン、カンと斬魄刀同士がぶつかる音がする。

二人の戦いを見ていてルキアは「凄い」と小さく感嘆の声を漏らした。正直言つてルキアには二人の戦いが見えていない。金属同士のぶつかる音がしているのを聞いてまだ戦いが続いていると認識出来ている程度だ。

海燕が出来る人だとは昔から知っていた。自分の尊敬する副隊長であり、頼もしい副隊長だからだ。時には自分の修行に付き合っただけで貰ったことだっただけであった。だからこそ凄い人だとは分かっていた。わかっていただけののだが——。

「私はかなり手加減されていたのだな…」

ルキアとの修行の時はあそこまでは行かなかった。あんなにハイスペックな戦いは自分には出来ないのだ。だからこそ自分の無力が目の前に突きつけられたようで、かなり悔しかった。

ルキアは一護に付き添っていたから知らない。海燕だつて顔には出さないが藍染が殺されたことに腹を立てていたことに。海燕だつてギンに劣らない程皇を殺したいと憎んでいる。皇を殺すため、藍染の仇をとるため、昔よりもより一層修行に励んでいたのだ。その為、ルキアの修行に付き合っていた頃の海燕とは更にレベルアップした海燕が今、戦っている。海燕はルキアの修行には一切手を抜いてはいない。ただ昔よりも強くなっただけだ。

ルキアが歯を食いしばっているその時だった。ガキインと大きな音がした。ルキアはハツとした顔で海燕達を見ると二人の斬魄刀は大きく空中を舞っていた。どうやら激しいぶつかり合いの末、二人の手元から斬魄刀が飛んでいった様だ。

フユズオンは斬魄刀は見捨て、拳を作り海燕に向かっていった。海燕を殴るつもりなのだろう。流石の海燕もそう来るとは思わず固まってしまう。

「はああああああ!!」

フユズオンが大きく振りかぶり海燕の顔面に拳が当たる。海燕は後方へと吹っ飛んだ。海燕は壁を突き破って飛んでいく。そして上から降ってきた瓦礫に埋もれる。思わずルキアが叫んだ。

「海燕殿!!」

「…大丈夫だ」

瓦礫を退かして立ち上がると海燕は斬魄刀を取りに行く。

「真逆斬魄刀無しで殴ってくるとは思ってもみなかったぜ。こりゃ手加減してる暇は無えな」

ニヤリと海燕が斬魄刀を拾うと笑った。

「(海燕殿はまだ本気を出しておられなかったのか…!?)」
「行くぜ」

先程までトライデント状だった斬魄刀が手を離れたからなのか始解前の普通の刀へと戻っている。そんな斬魄刀を胸の前まで持っていくと、刃が下になるように手に持った。

「——卍解……」

『卍解』という言葉聞いてルキアは目を見開いた。

「(卍解だ?!海燕殿は卍解を使えなかった筈。いつの間に)」

ルキアが驚愕している間に話の展開は進んでいく。

「卍解 水龍逆巻すいりゆうさかまけ 『天逆龍王・振花ノ矛あまざかりゆうおう』
ねじばなのほこ

普通の刀だった斬魄刀は先程と同じトライデント状へと戻る。しかし先程はいなかった二頭の龍が中心の刃を強調するかのよう巻きついており、その姿はともカツコイイ。海燕の死覇装の上には肉眼でギリギリ見える程の薄い水で出来たコートが羽織っていた。

「…姿形変わろうとも、私には無意味だ!!」

フズズオンも海燕のように落ちていた斬魄刀を拾うと海燕に攻撃を仕掛ける。海燕は笑っていて避けることはしない。

当たる、そう思ってルキアは大きく海燕の名を呼んだ。

「海燕殿!!」

「大丈夫だ朽木。安心して見とけ」

フズオンの攻撃は海燕の肩を思いっきり切りつけた。そう、切りつけた、切りつけた筈なのに――。

「…効いて、いないっ!?!」

フズオンが切りつけた肩は水へと変化しており、攻撃が通っていなかった。更にフズオンが切りつけるが水が飛び散るだけで海燕は傷一つついていない。

「何故だ、何故だ、何故だっ!!」

海燕の正解『天逆龍王・振花ノ矛』は色々な能力がある。

そのうちの一つに自分自身の体の概念を『水』に変換させる能力がある。『水』に変化させると基本物理能力が効かなくなるのだ。

欠点としては空气中に水分が無くてはならない。それも海燕の体を構築出来るほどの水分が。しかし先の戦闘で海燕は始解の『振花』で戦っていた。『振花』は水を纏っているトライデントである。海燕達がいるこの辺りは戦闘のせいで水溜まり等が複数出来ている。

そのおかげで海燕の体を構築出来る程の水は有り余る程ここらにはあるのだ。

「――第二の矛、すいりゆういつせん水龍一閃!!」

刃に巻きついていく水龍がフズオンに向かって光の速さで突進して行く。

「くっくっく!!」

一頭は何とか斬魄刀で止められた。しかしもう一頭は止める事は出来なく、右肩を貫かれてしまう。フユズオンの右肩からは赤い鮮血が迸る。

左手で右肩を抑えているがそれは無駄なことで出血は止まらない。血の抜けすぎか段々とフユズオンの顔色は青白くなっていった。

力の差は歴然。

「もう降参してくれ。俺は女を痛ぶる趣味は無エんだ」

「私は、私は、姐様の為に――」

右手で斬魄刀の柄を握りしめ、海燕に突進しようと足を一步、フユズオンが踏み出した瞬間だった。

「姐様っ!!」

フユズオンは酷く焦っている様子で明後日の方向を向く。

「姐様…?」

「貴様との戦いはここまでだ!!姐様が、姐様が私を呼んでいらっしやる……!!」

早口でフユズオンは言うのと瞬く間に姿を消す。あまりの速さに海燕もどうやらその場を気づくのに時間がかかった。

「…怪我してるのにすげえな」

そう言うのと海燕は正解をといた。海燕はふらつく。地面に倒れそうになった瞬間ルキアが海燕を支える。

「大丈夫ですか、海燕殿!!」

「ははっ、済まねえ朽木。助けに来たはずなのに助けられちゃった」

ルキアにゆっくりと地面に下ろしてもらい海燕は地面に座り込んだ。顔には汗が浸っておりかなり無理をしたことが伺える。

「やっぱり慣れねえな」

海燕が言っているの慣れない、とは体の状態変化である。卍解の力を解き放つ一瞬で海燕は現在の体を水の体へと構築する。水の体になれば確かに物理攻撃は通らず無敵に近い力を持つ。しかし、攻撃を受ければその分構築していた場所から水が減るのだ。減った分の水は空気中から自分の体に再構築しなくてはならない。しかもそれを瞬時に、敵の焦りを煽るように。

他にも水の体と自分の体は全く違う。重さから感触、全てが慣れているものから一瞬にして変わるのだ。海燕はまだその変化についていけない。

それに海燕は頭を使うことよりも体を動かす事の方をどちらかと言えば好む。気を張るこの卍解状態はあまりの好きではないのだ。

そして――。

「まだ俺の卍解は不完全だ。まだまだ修行しねえとな」

「海燕殿!!」

「ん?」

ルキアに大きい声で名を呼ばれ海燕はルキアを見る。

「私にも…また修行を……」

モジモジとした姿で修行を願うルキアを見て海燕は笑って言った。

「ああ、
いいぜ」

『融合』

「さて、行くか朽木」

「で、ですが海燕殿はまだ…」

ヨロヨロと立ち上がる海燕を見てルキアは言った。すると海燕は険しい顔でルキアを見る。

「どうやら休んでる暇は無エみたいだぜ」

「え？」

「朽木隊長が危ねえ」

どうやらルキアを殺そうとしていた男を白哉は倒すことに成功したらしい。しかし、かなり深手を負ったのか霊圧が少し感じにくい。そんな所に新たな霊圧が。しかも先程まで海燕と戦っていたフユズオンまで白哉のいる場所へと向かっている。

深手を負った白哉に2対1はキツイだろう。ここにいる海燕もルキアも怪我や疲労している状態ではあれども、居ないよりはかはマシ、サポートぐらいなら出来る。

ルキアもそれに気づいたのだろう。焦っている表情をしている。

「(何だかんだ、今はちゃんと『兄妹』やってんだなコイツら)」

ルキアの姉、緋真の頼みで朽木家の養子になったルキアだが、義兄白哉は口下手、姉緋真は昔捨ててしまった妹にどう接していいのかわからず、家庭内はかなりギクシヤクしていた。

だが今はそんなこともなく仲のいい家族となっている。そんなことを何故か今思い出した海燕はふっと笑った。

「…うっし、行くぞ朽木!!遅れるなよ!」

「はっ!!」

ルキアの大きな返事を聞き海燕達は白哉の元へと向かう。



現在絶望的な状況下に白哉はいた。ゾマリとの戦闘のせいで手足はかなりの深手を負っているし、回復役で連れてきた山田花太郎はあっさりとはゾマリに見つかり倒されてしまった。どうやら死んでは居ない様子だがかなり深手だと思われる。白哉はため息をつく。怪我をしていない方の手で花太郎の襟を掴み引きずる。目指すのは海燕がいる場所である。

海燕は多少ではあるが回道が使えろと言っていた。まあ苦手分野でもあるので期待はするな、とも言っていたが。

花太郎の襟を持ち一歩歩いた時だった。早速歩く足を止めることとなる。深手を負っている花太郎ではあるがこれ以上深手を追わせるない為にも遠くへ投げ飛ばす。

「……ぐうえつ……」

傷口が開いたのか深手を負っていた場所からは大量の血が溢れ出す花太郎。そつと白哉は視線を逸らした。まるで自分は関係ないとも言おうように。

「やア、君は隊長さんだよねエ。その羽織りはさ。あ、もうしかしてゾマリを殺したのも隊長さんかな？」

クツクツと笑いながら言う金髪の女、第9十刃スベール・エスパルダの称号を持つシンテシスだった。白哉はシンテシスが笑うのを見て顔を歪める。

「かなり深手負ってるねエ、死にそうだねエ」

「でも残念!!君はここでぼくが殺しちゃうんだ!!」シンテシスは楽し

そうに言った。

絶望的な状況下だった。それがシンテシスの登場で更に絶望的な状況下になる。そして更にまた絶望的な状況下に白哉は落とされる。

「姐様!!」

敵の増援だった。いや、でも敵の増援フユズオンはかなりの深手を負っている。胸に大きな切り傷、肩は穴が空いていた。そこからは大量の夥しい血が流れており、フユズオンは顔面蒼白。今でも立っていることが奇跡に近い。

「やアフユズオン」

「姐様——」

「サヨウナラ」

シンテシスはそう言うのとフユズオンの胸に手を突き刺した。フユズオンの心臓をもぎ取るとシンテシスはそれを食べ始める。数秒後全て完食するときつきよりも更に深い笑みで嗤った。



彼女達は元々二人で一人だった。破面になった時、突然変異で二人に別れた。元々力を持っていたのはフユズオンだったがそれもいつの間にか逆転していた。

フユズオンはシンテシスに忠誠を誓っていた。たとえば、自分の片割れでも忠誠を誓っていた。一種の『依存』だった。

シンテシスがフユズオンの心臓を食べる時。それは『融合』の証、元の姿に戻る事を指している。

フユズオンの心臓を食べたシンテシスの体は成長する。死覇装だって変化して白い死覇装、へそ出しの上着に短い短パン。短パンは本当に短パンで綺麗な太もが見える。その太ももから『9』の数字が伺えた。先程までは浮き出ていなかった『9』の数字。これこそが

正真正銘本当の姿なのだろう。

「うわあ、久しぶりの体だあ!!」

そう言うのと近くに倒れていたゾマリの死体を発見する。融合したシンテシスはゾマリの死体を見ると口からヨダレを垂れ流した。ゾマリの死体に徐々に近づき——喰らった。

「っふう。美味しかった」

この言葉が試合のゴングだった。

「じゃあ手始めにコレ、使ってみるか!!」

懐から斬魄刀を取り出すと言う。

「鎮まれ『呪眼憎伽』」

それはゾマリの斬魄刀だった——。

ボロボロな三人

暫くして。海燕達が白哉の元に加勢に加わるものの、劣勢から優勢に動くことはなかった。ゾマリの斬魄刀『呪眼憎伽』フルヘリアを元の持ち主、ゾマリよりも巧みに使いこなし、尚且つ白哉達の知らない斬魄刀を使ったりなど技から何まで相手が一步上手だった。

白哉達の傷は増え、広がっていく一方相手は無傷。どうやら白哉と戦ってたゾマリの記憶もあればフュズイオンの記憶もあるらしく、そこから弱点解析をされていた。

どう足掻いても劣勢から優勢に動くことはない。諦めることはしなくともせめて、この中でも一番の重症を負っている山田花太郎の治療を——と考えている三人は戦闘に気をとられていて気づいていない。

「(この戦いの中に飛び出して行くなんて無理!!)」

四番隊副隊長 虎徹勇音が物陰に隠れて戦闘を見ていたことに誰一人と気づいていない。勇音自身怖がりなので自分から飛び出すことはないだろう。現に物陰に隠れている今の状況でも顔を青くして体を縮こませている。

「ねえ、君達さあ」

ボロボロの三人を見つめながらシンテシスは攻撃の手を緩めながら三人に問うた。

「君達は一体何の為にここに来たの？」

「それは勿論、井上を助ける為だっ!!」

シンテシスの問いに真っ先に答えたのはルキアだった。シンテシスは「ふーん」と答えると三人から距離をとり、斬魄刀を鞘になおす。

「やーめた」

「はあ?」

「織姫はあそこにいるよ」

そうやってシンテシスは大きい塔を指さした。

「まあ、グリムジョー達が連れ出してなかったら、の話だけど」

「貴様何を……」

「そもそも、ぼくは暇を潰す為に十刃になったんだよ。でも織姫にもよくしてもらったし、本人も帰りたいそうにしてたしね。ぼくはそこまです織姫を監禁する必要もないと思ってるし。——破面もここまで」

シンテシスはニコツと笑うといきなり吐き出した。シンテシスの腹から出てきたのは少しの胃液、そして丸くなっているフュズイオンだった。シンテシスの体も小さくなっていく。

裸のフュズイオンを俵抱きすると「さようなら」と言っただけで何処かへと去って行ってしまった。案外呆気ない。

「……………」

シンテシスが去ったその場の雰囲気は最悪だった。



少しだけ、少しの時間話ただけで絆されたのかもしれない、シンテシスはフュズイオンを抱え走りながら苦笑いした。

シンテシスは破面だ。でも、ご飯はそこらの虚よりも現世のご飯が好きだし、虚圏にいるよりも現世を眺めてる方が有意義に感じるほどシンテシスは変わり者だった。

人間が好きか、と問われれば虚よりは好きだと答えるだろう。虚圏

よりも現世が好きか、と問われれば速攻頷く自信がある。

だから時々考えてしまうのだ。自分が人間だったあの頃、自分は現世で有意義に生きていられたのか、と。後悔とかやり残しとか無かったのかな、と。破面になった今ではもう分からない。だけど人間を見ると考えてしまうのだ。

ふと、織姫と喋っている時、自分にこんな妹がいたらどうなんだろうと思った。自分は破面で敵だ。織姫を無理やりここに連れてきた奴らの仲間なった筈なのに織姫は警戒一つせず、自分が持ってきたご飯を綺麗に平らげ話し相手になってくれた。

きつと愛しい、と思うんだろうな、と思った。あんなに可愛く笑う彼女が妹だったらきつと自分は話したんびに妹の自慢しかしいだろうな、と予想した。

気づかない内に絆されていた。

人間は嫌いじゃない。

この退屈な毎日をどうにかしたくて皇についてきた。けど、それももう、意味の無いことなのかもしれない。

せめて結末だけは見届けようと思った。

「ほら、早く起きな。フユズイオン」



三人は唾然した後にはシラテシラに怒りを抱いた。遊びでここまで仲間を傷つけられたのだから当たり前だろう。そんな怒りを霧散させたのは勇音だった。

勇音は今、出ていくつもりは無かったのだ。ただちよーつと足を動かしたら石に当たっちゃって、その石が音をたてて転がって皆にバレただけだ。

勇音は死を悟った。

「ご、ごごごめんなさいい!!」

「な、何を謝っているのです？勇音殿」

「え、えとえとその…あの…」

「卯ノ花隊長にここに来て言われたんだろ？別に誰も勇音を責めたりしねえよ。な？朽木隊長」

「……………」

「ほら、朽木隊長もこう言ってることだし、まあ、なんだ…山田七席を治療してもらってはくれねえか？」

朽木隊長何も喋ってない、そう思う勇音だが勿論口には出さなかった。何故なら勇音にそんな勇気は持ち合わせていないからだ。

勇音は空気を読み、領くと素早く山田花太郎の治療に取り掛かった。



「……………？ 兄様？」

白哉に凝視されていることに気づいたルキアは首を傾げながら白哉に喋りかけた。すると白哉は一度目を伏せ、そして静かに小さな声でルキアに問う。

「…無事か、ルキア」

その声は妹をかなり心配している兄の声だった。それが少し嬉しくて、むず痒かったルキアは頬を朱く染めると少し俯いて「ええ。兄様や海燕殿が助けてくれたので」と答えた。

「…そうか」

白哉は安心した声を出すがルキアに「怪我したところがあれば志波

に回道で治して貰え」と言ったのでルキアは「私よりも先ず兄様が治して貰ってください」と言ったのだった。

そんな二人を見て、海燕はホツと息をつく。最近ルキアと会うことも無かった。海燕自身忙しかったし、ルキアも現世に赴いていた為、顔を合わせる事が中々出来なかったのだ。

だが、何も無く今はちゃんと兄弟として白哉と喋れているルキアを見て安心した。

「朽木隊長オー、応急処置ぐらいはするんで来てくださいー」

気づかない内に部下が成長していて嬉しい反面少し寂しかったー。

空座町を滅す

捕まっていた織姫をようやく取り戻せた、そう、安心していた。近くには一護が、剣八が居る。戦力になるかどうかは分からないがやるだつていた。敵のノイトラは剣八が倒し安心しきっていた。

でも、その安心が、命取りだった――。

目の前で消えた織姫を見て一護、剣八は目を見開いた。

「…消え…た…」



「おかえりなさい」

織姫にそう告げるのは敵の総大将、皇。皇の後ろには乾と東仙が立っていた。目を見開いて動かない織姫に皇は近づいて行く。

長い階段を下り、織姫の目の前に立つと優しそうな表情――いや、織姫にとっては不気味な笑顔で織姫の頬を触り言った。

「どうしたの。随分と辛そうな顔をしているわね。――笑いなさい」

織姫は怖かった。目の前で不気味に笑う彼女を見て恐怖していた。

「太陽が陰ると皆が悲しむのよ。貴女は笑って少しここで待つてるだけでいいの。ただ――」

トントンと長い階段を上り、振り返って織姫を見ながら言った。

「私達が空座町を滅して来るまで」



何故、私がここにいるんだろう、とかどうやってここに来たんだろう、とか黒崎君は剣八さんはやちるちゃんネルちゃんはどうなったんだろう、とか沢山疑問が浮かんだけどそれを皇さんに告げる前に違う疑問を声に出した。

「空座町を……滅す……？」

無理だと、思った。空座町には冬獅郎君や乱菊さん、それに市丸君だっているし、強いのかどうかは分からないけど藍染さんだっている。他にも浦原さんや夜一さん、出したらキリがない程に空座町には今、沢山の死神や強い人達が集まっている。

なのに呑気に階段を上っていく皇さんの後ろ姿を見て『不可能』だとは思ってないと感じた。

「ええ。空座町を滅して王鍵を創生するの」

階段を上りきった場所には大きな切れ目が出来ていて、そこには空座町が見えた。皇は切れ目に飛び込む事はせず隣にいた乾の名を呼ぶ。

「へいへい、分かってるよ」

乾はそう言うところからか白く小さいものを取り出しそれを右手首に付ける。すると右手首の横に大きな二重の四角が出てきた。

「縛道の七十七 天挺空羅」

乾がそう呟けば皇さんはニヤリと笑って一人喋り始めた。

「聞こえるかしら？ 侵入者諸君。ここまで十刃を陥落させた貴方達に敬意を表し先んじて伝えるわ。これより私達は現世へと侵攻を開始

する。井上織姫は第五の塔に置いておくわ。助けたければ奪い返しに来て結構。だって彼女は最早、用済みだもの」

クスリと皇は笑うと言葉を続ける。

「彼女の能力は素晴らしいわ。『事象の拒絶』は人間に許された能力の領域を遥かに凌駕する力だもの。尸魂界上層部はその能力の重要性を理解していた。だからこそ彼女の拉致は尸魂界に危機感を抱かせ現世ではなく尸魂界の守りを堅めさせる手段たりえた。破面の戦闘準備が整っていると判明した以上、日番谷先遣隊は全名即時帰還し尸魂界の守護についてももらう。そして彼女の存在は尸魂界の新規戦力となるであろう。『死神代行』を『旅禍』を虚圏へとおびき寄せる『餌』となり、更にはそれに加勢した四人もの隊長をこの虚圏に幽閉する事にも成功した。十三人の隊長全てが主要戦力足り得る力を有しているという事だ。だが今はその中から二人が離反し一人死亡。そして四人が幽閉。尸魂界の戦力は文字通り半減したと言って良い。容易い。私達は空座町を滅し去り王鍵を創生し尸魂界を攻め落とす。貴方達は全てが終わった後でゆっくりとお相手するわ」

皇はそう言うと切り目を通っていく。皇が切り目を通って行った先には護廷十三隊一番隊隊長 山本元柳斎重國が立っていた。

「…どっやら間に合ったようじゃの」

目の前に立つ元柳斎を冷たい瞳で見て皇は言った。

「——間に合った？ 一体何を以てその言葉を口にしてているのかしら？ そこにあるのが空座町ではないことは解っているのよ。でも、それは何の妨げにもなりはしないわ」

皇はそう言うと一人一人誰かの名前を呟いた。

「スターク、バラガン、ハリベル。来なさい」

三つの黒腔ガルガンタが出てくる。そこから出てきたのは面倒くさそうにアタマをかいている男スターク、顔中皺だらけの老人バラガン、褐色肌の金髪女性ハリベルだった。後ろには彼らの従属官と思われる人物もいる。

「空座町が尸魂界に有るのなら貴方達を殲滅し尸魂界で王鍵を創る。それだけのことよ。それまで虚夜宮ラス・ノーチエスは貴方に預けましよう、ウルキオラ」



「ざっと見たところギンが居ないようね。彼は私に死ぬ程恨みを持っているでしょうに…意外だわ」

皇がそう言えば乱菊は目を細めた。

「貴女に関係は無い」

「まあ、それもそうね」

皇は嗤った。

「ちィ」と舌打ちをし、愚痴を溢す大前田。その愚痴を聞いた碎蜂は「恐ろしければ逃げても構わんぞ腰抜け」と伝える。

「ここは先ず頭を叩くのがスジですかいの」

「いや。皇の能力は特殊だ。集中して対処する為には周りを先に倒すべきだろう」

「誰が一番強いかな？十刃の中で」

「難しいな…。皇に訊いてみない事には……」

「問題は十刃との戦闘中に皇が手を出さない保証は無え、つて事だ」
「…ですネ」

「で、市丸はどこに行った」

「さあ？どこでしょう」

「松本…：…っ!!」

一人、歩き出す。歩き出したのは総隊長、山本元柳斎重國だった。

「皆、退がっておれ」

元柳斎が持っていた杖が刀へと変わる。それを見た面々は大人しく後方へと退がった。

「万象一切灰燼ばんしやういつさいかいじんと為せ『流刃若火』な『流刃若火』りゆうじんじやつか」

山本元柳斎重國の周りに大量の炎が渦巻く。それを見た死神は慌ててふせる。

山本元柳斎重國が『流刃若火』を一振すれば炎が大きな壁となつて皇達に立ち塞がる。山本元柳斎重國は『流刃若火』を鞘に戻りながら言った。

「城郭炎上じやうかくえんじやう」これで暫くは皇達もこの炎の壁から出られまい。さて、ゆるりと潰して征ゆこうかの」

一人、炎の壁を見つめながら呟く山本元柳斎重國を見て浮竹は冷や汗を出しながら言った。

「手荒いな…：総隊長…」

「それだけ山じいもご機嫌ナナメってことじゃないの」

「——皇」

一人、殺意を込めた目で炎の壁を見つめる日番谷の瞳は、顔はとても真剣だった。

「うわあ、熱い。凄い無茶するなあ、山本の爺さん。どうするよ帝。これだったら俺ら戦いに参加出来ねえけど」

乾が皇に問えば皇は焦ることなく淡々と言った。

「何も。ただこの戦いが、私達が手を下すまでもなく終わることになった、それだけよ」



狛村が正解し容赦なく敵を切り殺す所を遠目で見ていた大前田は「容赦ねえ〜〜〜…」と口をあんどり開けながら言った。容赦なく敵を切り殺す狛村を見て「良いことだ」と頷く碎蜂を見て「(碎蜂のこの最悪な性格じゃ彼氏は出来ねえだろうな)」と確信した大前田だった。

「空座町ほんものも模造レプリカの町もカンケーないのね…これで七番隊、今期赤字かしら」

「隊長なら隊の戦いで出た損害は自腹切っても隊には背負わせねえさ。少なくとも狛村はそういう男だ」

少し論点のズレた乱菊の言ったことが聞こえた日番谷は乱菊にそう言うのと乱菊はキラキラとした顔で振り向き言った。

「マジですか!? やった! じゃあお気軽に戦お——つと♪」

「お前は別だ。お前が壊した分は問答無用で給料から引くからな」

日番谷がそう乱菊に言えば乱菊は頬を大きく膨らませ「そりゃない

ですよ隊長く」や「せめてあたしの自腹じゃなくてギンから引いて下さいよお〜」等と言い始める。

少し、ギンのことが可哀想に思えた日番谷だった。

「ぼくら間に合わなくて良かったですね…」

「…ああ…」

間に合っていたら逆に仲間に殺されそうになっていたイツルと檜佐木は静かに身震いした。

簡単にやられた破面を見て他の破面達が動き出す。その姿を見た山本元柳斎が言った。

「全霊を賭してここで叩き潰せ！肉裂かれようと骨の一片まで鉄壁とせよ！！奴等に尸魂界の土を一步たりとも踏ませてはならぬ」

山本元柳斎の命令を聞いて京楽が笠を深く被り少し怠そうに言った。

「…やれやれ肩が凝るねえ。気合いの入った山じいと居るところつまでさ」

「そうだな。これが片付いたら久し振りに先生の肩でも揉んでやろうか」

「いやいや、凝ってるのはボクの肩だつてば」

「何言ってるんだ。見たことないぞお前の肩が凝ってる所なんて」

そう言っている二人には油断は無い。

「大前田！」

久々の戦闘が怖いのか、死ぬのが嫌なのかブルブルと震えている大前田を見て碎蜂は言った。

「ガチガチだな。怖いか、久々の実戦が。情けなくて見るに堪えんな。いい機会だ。この際、適当なところで何かのついでに死ね」
「はあ!？」

碎蜂のそんな言葉が大前田の何かのスイッチを入れた。大前田は大量の汗を垂らしながら、硬い表情で碎蜂をおちよくる様に言う。

「ハハーン！何言ってるんすか！怖くねえしガチガチでもねえし!!つか絶対死なねえし!!」

「…そうか。じゃあ死ぬな」

「言われなくてもそうしますよオ!!」

珍しく隊長がデレた、そう思った大前田だった。

「…始まるぞ松本。本当に市丸の居場所知らねえんだな?」

「執拗いですよ隊長。知らないって言ってるじゃないですかあ」

乱菊の瞳を見る。しかし、乱菊は本当に知らないのか、それとも言う気がないのかは分からない。それを見た日番谷は「そうか」と言う
と乱菊に声をかける。

「行くぞ気を抜くな松本!」

「はい!」



誰も居ない職員室。そこに二つの影があつた。

「…どうやら戦いが始まったみたいだね」

「そやね。まだボクら行かんでええんですか?」

「そうだね。そろそろこの重い腰を上げよう」

そう言つて立ち上がる男、藍染惣右介。それを見て笑みを深める男、市丸ギン。

「ホンマはこないな事にならんかった筈やけど…。隊長が学年主任に捕まつてしまつたから」

「仕方ないだろう？ 彼女は何かと俺に突っかかっ来るんだ。お陰で出遅れてしまつた」

久し振りの死覇装を着て、校門を出る。横目で見たギンは嬉しそうな顔をしていた。

「ホンマに、ホンマに生きてて良かった——」

藍染はギンの言葉は聞こえていないフリをした。

乾聖

やつほー皆。最近碌に出番の無かった藍染です。え？前話出番あつたろつて？何言つてんだバーロー。あれは少ししか出番無かつただろーが。主人公の俺よりも敵の、感想欄でボロクソ言われてる皇の方が出番多いつてどういうことだよ！

え？メタイ？テンションが可笑しい？知るかボケ。ついさつきまで五月蠅い学年主任に捕まつてて、こちとら機嫌悪いんだよ。それにねえ、何気にこつてり絞られたんです部下さんにね。誰とは言わないけどかなり怒られたんです。だから俺は心を入れ替えて更に上司に厳しく行こうつて決めたんです。

とまあ、無駄話はここまでにしておいて……。瞬歩で皆の場所にギンと向かつていたのだが、その足を止めた。ギンも気がついたようで足を止める。

皇達の行動は総隊長の炎の壁で制限されている。しかしそれは総隊長達が見ていた皇達が『本当の皇達』ならの話で本人が閉じ込められて居ないのなら意味をなさない。現に、俺達の目の前には尸魂界の反逆者の一人が立っている。

白い死覇装を着た、乾聖だった。

「お久し振り。尸魂界の反逆者、乾聖」

「まさか生きてたなんてなア。予定が狂った」

「計算外だ」と笑う乾は言葉とは裏腹に余裕の表情である。しかしそんな事はこつちには関係ない。計算外だろうが計算内だろうがやることはやる。乾や皇を殺すことには変わらないのだから。

「皇の野郎は居ないのか？残念だ。あ、もしかして俺が生きてるつて知つてしつぽ巻いて逃げたか？」

「はあ!?そんな訳ねエだろオが!!お前ら相手に帝が出てくる必要は無エんだよ」

「さつきと終わらせるぜ」乾はそう言うと言から斬魄刀を取り出し言った。俺はギンをチラリと見る。ギンもこちらを見ていて目が合った。

俺は頷く。するとギンは申し訳なさそうな表情をして「すんません。でもありがとうございます」と言っただけで瞬歩でその場から消えた。ギンは乱菊を助けに行ったのだ。先程から段々と小さくなっていく乱菊の霊圧。きつとギンがこのままここにおいてもギンは戦闘に身が入らないだろう。そんな奴は邪魔だ。なら役にたつ場所に送り込めばいい。

「…一人逃げたか。まあいい。行くぜ」

ニヤリと乾は笑うと斬魄刀の名を呼ぶ――。

「世と世を繋げ『魂呼び』」

斬魄刀の変化は無い。何か変化があったとすれば――それは乾の横にある青い火の玉が出てきたことぐらいだろうか。

青い火の玉は縦に長く伸びると段々人の形へと成っていく。そして最後に構成された形はまるで俺に似ているかのように造形されていた。

そう藍染光右介に似ている人物に――。



いつものように生きる為、朝から晩までバイトをしていた。昼休みの休憩時間、余った弁当を一つ分けてもらいそれを食していた時だった。体が急に光だし、目を瞑ればいつの間にか空の上に立っていた。隣には白い服を着た男、そして前には少し前まで見慣れていた顔があったと

嗚呼、ようやく見つけた。

藍染惣右介を――。

よく神経を研ぎ澄ますとつい先程まで感じられなかった霊圧を感じた。それを感じてようやく本当の世界に、尸魂界に戻ってこれただと実感した。

「へエ。まさかこんな奴が呼ばれるなんてビックリだ」

「……君は？」

隣からケラケラと笑う声が聞こえた。鋭く睨むと隣のチャラ男は「いやアこれは失敬」と言う。正直佐野よりもいけ好かない。

「俺は乾聖。君をここに呼び出した者だ」

「呼び出した、君が？」

「ああ、そうだよ。これでね」

カチャリと私に見せつけるように斬魄刀を持っている。どうやら私は彼の斬魄刀の能力でここに来れたらしい。

「俺の斬魄刀は対象者と最も魂の関わりが深い奴を一人だけ呼び出せる。色々と制約は有るんだけど…でもまさか君達がこんなに面白い事になっているとはね。全然知らなかったよ」

ペラペラと喋る奴の話は正直聞くに値するのだろうか。そう思っている。「ああ、そうだ」と何か思い出したように言った。

「俺は君をここに呼び出す時君の記憶も、藍染の記憶も一通り見せてもらったよ。それで分かったんだがね？君が大事にしていた――榛巳だったっけ？彼女、死んだんだよ」

男の言葉に俺は啞然した。

――榛巳が死んだ？

——私が傍にいない間に榛巳は死んだ

——死んでいた——

クツクツと笑いが込み上げてきた。嗤いが。

「あは、アハハ!!君は先程「私の記憶を見た」と言ったね?見てそんな事が言えるのかい?だとしたら滑稽で愚かだよ。嗚呼、なんて可哀想なんだ君は」

男は目を細めて「どう言う意味だ」と私に問うた。

「分からないのかい?なら教えてあげよう。私は遠の昔に榛巳に会うことは諦めていたさ。そもそもこんな形であれ、ここに戻ってこられた事に驚いている」

——私は諦めていた

——帰る手段が見つからなかったから

——見つかったとしても、元の時代に帰れるのかは分からなかった
——それに私が違う人物に憑依しているという事は、違うもう片方の魂も私の体に憑依していると考えていい

——もし、そいつがヘマをして、肉体が死んでいたら帰れる方法を見つけたとしても全ては無駄だ

——だから諦めていた

——帰れたとしても周りが、身近な人間が死んでいると、覚悟していた

——だから榛巳が死んでいたのは予想の範疇だ



昔とは違って伸び切った髪は綺麗に整えられていた。切り長の青い瞳が俺を映す。見慣れた筈の顔でももう、それは俺とは認識しなかった。バイトの途中だったのかコンビニの指定制服で登場してきた俺を見て苦笑いが隠せなかった。

正直、ここにギンがいなくて良かったと思う。

榛巳が死んだと聞いて目の前の俺は一瞬悲しそうな顔をしたが笑って言ったのだ。「そんなの予想の範疇だ」だと。「だからそんなことを告げて私を操り人形にしようなんて無意味だ」とも。

「それにしても君は死神になったのか」

「え、ま、まあ」

見慣れた顔が減多にしない口調をするのでなんか違和感がある。それはあつちも同じなのか一瞬顔を歪めた。

「それにしても…随分と成長したのだね、私は」

確かに俺が『藍染惣右介』に憑依したのはまだ小さい頃だった。だからこそあちらも少し感慨深いのだろう。

「積もる話もあるんだが…まあ、私は今、君のおかげでここにいる」

目の前の彼は乾に向かって言った。彼は一步踏み出し俺に向かって歩いてくる。

「正直、この世界に戻ってこれるなんて思っていなかったからね。少し驚いたよ」

距離が段々近くなる。彼は笑みを深める。

「榛巳は死んだ。それは目の前に居る彼の力量不足なのかそれとも、運命さだめなのか。知りたくてもそれは知ることの出来ない領域だ」

彼は俺の目の前に立つと歩みを止めた。

「だからこそ、私は——」

彼は素早く私の腰に刺さっていた斬魄刀を抜き出し、瞬歩で乾に近づくと勢いよく首を撥ねた。一瞬だった。俺も乾も、対応出来なかった。それだけの実力が彼には備わっていた。

——もう、彼に笑みは無かった。

「だからこそ私は——天に立つ。次は彼の能力じゃなく、自分の実力でここに戻ってこよう。そして地獄も現世も尸魂界、全ての頂点に私は立つ。全て私の支配下に入れる」

シュツと彼は『鏡花水月』についた血をはらった。

気付けばつい先程まで乾の前に居たはずなのに俺の目の前にいて『鏡花水月』を鞘に戻していた。

そして彼は呟く。

「だからその日が来るまで、私の肉体を頼むよ『藍染光右介』くん」

背筋がゾツとした。

気付けば彼は消えていた。

彼女だけは

敵と遭遇する前から、乱菊が戦闘していたのは霊圧で分かった。けれど助けに行かなかつたのは、乱菊が殺られる筈がないと思っただからだ。

怠慢で副隊長と言ってもほとんど副隊長の仕事をしていない乱菊だが、やる時はやるし空気だって読める。そもそも乱菊が死神になったのだって「ボク一人じゃ心配」だからだった。

死神とは何時、命を無くしても可笑しくない職業だ。ボクは藍染隊長を尊敬した。あんな風な男になって何時か乱菊を護れるような男になりたいと思った。そこから本格的に死神への道を目指したのだ。最初はただ自分を救ってくれた藍染隊長に恩返しする為に死神になった筈なのに気がつけば『死神になる理由』が変わっていた。

これを乱菊に一度言ったことがある。確か、まだボクが藍染隊長が死んだと勘違いして病んでいた時だったと思う。

ボクが乱菊にそれを伝えると乱菊は「馬鹿ね」と言っただけで笑った。そして言ったのだ。

「あたしはもう、ギンに護られなくちゃいけない程弱くないわ」

乱菊は強い。

多分ボクよりも強い。

遥かに。

——心が

乱菊はボクの顔を見るとボクを抱きしめて言ったのだ。

「でもね、ギン。『絶対』なんてこの世には存在しないのよ。人だって死神だって何時か死ぬ。病でも殺人でも。あたしは虚に、裏切り者に殺されないように努力してきたつもりよ。でもね『絶対』死ねないなんて約束は出来ない。だから——」

「だから——もし、あたしが死にそうになったらあんたが助けに来てよ。あたしもあんたが死にそうになったら助けるから」そう含羞んだ乱菊を見て救われた気持ちになった。

そもそも、乱菊にこんな感情を抱くなんて遠の昔は思っていないかった。自分の目の前に倒れていた乱菊を助けたのも藍染隊長の言い分けがあったから仕方なく。最初はそんな気持ちだった。

「ギン。目の前でお腹を空かせて倒れていた子が居た時は自分の食料を分けてあげなさい」

「ギン。目の前で深手を負って倒れていた子が居た時は全力を持って治療に望みなさい」

ボクは、ただ、隊長のこの言いつけを護っただけだ。

「乱菊っ!!」

ボクは乱菊を助ける為、いち早く乱菊の場所へと向かう。



乱菊が敵三人と戦っていたその頃。乱菊に思わぬ増援が来た。勿論、まだギンは到着していない。

「…雛森……」

ついこの前、見たような青白い顔色、隈は前ほど酷くは無かった。そんな雛森が五番隊の副官章をつけて乱菊の応援に駆けつけた。

「あんた…もう平気なの？」

雛森の青白い顔を見つめながら問うと雛森は力のない声で「はい」と返事をした。その返事は乱菊にとっては全く信用のならない返事

で、応援に駆けつけてくれたのは嬉しいがどうせならまだ雛森には休んでいて欲しかったと乱菊は複雑な心境だった。

「心配しないで乱菊さん。あたしは確かに五番隊副隊長として副官章をつけてここへ来ました。でもそれは〃五番隊の隊員達を預かる者として〃と言う意味です。〃ただ皆に迷惑をかけてばかりの藍染隊長の死を嘆く女として〃じゃありません」

乱菊は何も言わない。ただ黙っていた。

「…あの人はもう、尸魂界にも何処にも…いませんから」

そう言つて視線を逸らした雛森を見て乱菊は「そうね」と答え、斬魄刀を握った。

「分かつてるならいいわ。行くわよ！」

「はい！」

斬魄刀を構えるとどうやら乱菊達を待っていた破面達と言った。

「終わったかア？」

「つまんねえお喋りはよ」

いきなり乱菊と雛森が攻撃を受ける。咄嗟に乱菊の『灰猫』でガードした為無傷だったが、息をつく間に二撃目の攻撃が乱菊達を襲った。

「飛梅!!」

リングのような物を雛森の斬魄刀『飛梅』で攻撃する。リングはそのまま爆発し、破面の元へと戻って行った。

破面の腕で未だにリングは回りつ続けている。その為、乱菊も雛森も警戒は怠らない。

「…成程な。きつきの爆発はそいつの能力か。見たところ副隊長みただけけど…副隊長二人じゃ三対一と大差ねえぞ」

クルクルと回っていたリングから棘のような物が出てきた。破面はそれを空中へと投げ、キャッチした。それを見た二人の破面も戦闘態勢へと入る。

「ミラ・ローズ!! スンスン!! 終わりにするぜ!!こんなママゴトみてーな戦いとつとと片してハリベル様んとこ行くんだよ!!」

「仕切んな馬鹿」

「一番ダラダラしてたのはあなたでしょ」

「でもまあ」

「意見には同感ですわ」

三人は空中を蹴り、乱菊達の元へと向かう。

「じゃあな!!牛オンナ!!」

その時、三人は何かにつかつかつたような感覚を覚えた。まるでそう、蜘蛛の糸に絡まれたような感覚に。

「何だ……こりゃ……!?!」

破面、アパッチの疑問の声に雛森は当然の如く答えた。

「…考えませんでしたか?最初にあたしがどうやってあなたに飛梅を命中させたのか」

雛森の言う通り、乱菊を助けるため雛森は一度アパッチに飛梅を命中させていた。

「あなた達はみんなあたしよりずっと強いです。飛梅を当てられる距離まで気付かれずに近づくためには鬼道で姿も霊圧も消して近づかないといけなかった…。だから姿を消したついでに乱菊さんの周りに鬼道の網を張り巡らせておいたんです」

そう説明する雛森の副官章には糸のような物が繋がっていた。

「まさか三人ともかかってくれるとは思いませんでした」

「ガキが…！」

悔しそうな、そんな顔をするアパッチを見た雛森は淡々と言った。

「――弾け『飛梅』」

『飛梅』は鬼道の網を伝ってアパッチやミラ・ローズ、スンスンを巻き添えに大きな爆発を起こす。風圧が凄く暫く乱菊達は顔を上げるこゝとが出来なかった。

風圧がおさまり、乱菊は息が上がっている雛森に声をかける。

「…大丈夫？ 雛森…」

「はい。すみません、初めて使う組み合わせの術式だったから…。」

乱菊はそんな雛森を褒めた。すると雛森は嬉しそうに術式の解説をする。

『伏火』に『赤火砲』を練り合わせたものを縛道二十六番の『曲光』で覆って見えなくして、それを慎重に伸ばして網状に練めぐらせました」

乱菊に分かるように解説する雛森を見て乱菊は少し安心した。

—— 凄い…こんなに幾つもの鬼道を自己流で組み合わせるなんて…この子いつの間にかそんなに力つけてたのね。まあ、ギンが育てた子だし……当たり前か。

「…上手く行ってよかった」

——…良かった。思ったより大丈夫そうね…

案外大丈夫そうな雛森を見て乱菊は優しく微笑んだ。

そんな和やかな雰囲気の中、突如煙が晴れる。煙が晴れた先には怒り狂った破面達がいた。

「突き上げろ 『碧鹿鬪女』!!!」

「喰い散らせ 『金獅子将』!!!」

「締め殺せ 『白蛇姫』」

先程とは異なった姿になった破面三人。 レスレクシオン 帰刃だろう。無傷で再び乱菊達の前に現れた三人を見て乱菊達は驚きが隠せなかった。

「今ので倒すまではいかないと思ってたけど…ほとんど無傷なんて…」

「レスレクシオン 帰刃すると傷が回復するの。そういう連中よ、こいつらは」

驚きが隠せない乱菊達。破面三人も怒りを隠せていなかった。

「くそ…調子に乗りやがって…」

「長引かせた方が面倒そうだ。あれで一気に片付けるよ」

「…仕方ありませんね」

そう言うときアパッチは自分の左手をもぎ取り、ミラ・ローズは持つ

ていた大剣で左腕を斬り、スンスンは捻って右手を切断し、空中に投げた。

「『『混獣神』』」
キメラ・バルカ

空中に投げられた三人の左腕は勝手に融合し、そして新たな破面を生み出す。

「な、なによ…あれ…!?!」

乱菊と雛森の冷や汗が止まらない。

そんな二人を見たアパッチは嬉嬉として喋る。

「『混獣神』キメラ・バルカ。解放したあたし達三人の左腕から創ったあたし達のペットだ。名前は『アヨン』」

その時、乱菊と雛森はとてつもない寒気を感じ取った。そう、例えば底の見えない深い穴を覗き込んだような——…。

アヨンは乱菊達に狙いをつけると思いかかってくる。

「!! 『灰猫』!!」

乱菊が『灰猫』でガードしようとするがそれも遅く、アヨンによって右腹を抉り取られる。そんな状況を見てアパッチは楽しむような弾んだ声で言った。

「ああ、言い忘れてた。アヨンは死ぬほど強いから気をつけろよ」

グラツと乱菊の体が傾く。雛森が叫んだ。

「乱菊さん!!!」

落下して行く乱菊を見て雛森は慌てて乱菊の死覇装の裾を掴んだ。

「縛道の三十七！『吊星』^{つりぼし}!!!」

『吊星』は近くにあった建物に霊圧の網をくつつけ空中で乱菊と雛森を受け取った。雛森は悲痛な声で乱菊に言った。

「待つてね乱菊さん!!すぐ治すから!!」

五番隊に入った時、一番最初に教えられるのは死神の心得やどのよう迅速に動くか、そのようなものではない。一番初めに教えられるのは『回道』である。

四番隊が近くに居なくても、助けられる命を助ける為、『回道』が得意な藍染を筆頭にした先輩死神が新入りへと教えていく。その為、勿論ながらギンや雛森、そして藍染の弟子の海燕だつて不器用ながらも使える。鬼道が得意な雛森だつて勿論使える、使えるのだが――。

正直初めてだった。こんなに重症な人を治そうとするのが。そして乱菊の傷は深い。急いで治療をしないと乱菊が危ない。しかし、そんなこと勿論敵もアヨンも許しはしない。

雛森はアヨンに重い一撃を腹に喰らう。雛森は吹っ飛ばされ、絶望を感じた。

(あたしも…乱菊さんも…一撃…。めちやくちやだ…こんなの…勝てるわけないよ……)

そんな『絶望』から雛森を救おうと二人の男達が援軍に駆けつけた。『吊星』で雛森を受け止め、男達は言った。

「…よく頑張ったな。少し休んでろ雛森。こいつは…俺達で片付ける」

九番隊副隊長 檜佐木修兵、三番隊三席 吉良イヅル。檜佐木はア
ヨンを受け持ち、吉良は怪我した乱菊と雛森の担当に向かう。

しかし意図も容易く檜佐木はアヨンに敗れ闇討ちしようとした射
場鉄左衛門も敗れてしまう。そして戦うターゲットがいなくなつた
アヨンは治療に専念していた吉良を標的に変えた。

「……くる……くそっ……あと少しなのに……あと少し……！」

再び『絶望』が襲つて来ようとした、その時。吉良にとってはとて
も心強く、力が湧いてくる声が聞こえた。

あの声は、僕が一番尊敬する……。

「射殺せ『神鎗』」

銀色の鋭い刃がアヨンを襲った。

怒りの力

銀色の刃がアヨンを襲う。首を斬ろうとしたギン。しかし、想像以上にアヨンの装甲が厚く斬ることは出来なかった。

「市丸副隊長!!」

突然現れたギンに戸惑いを隠しきれない吉良。当たり前だ。もう無理だと絶望していた所にヒーローのように現れたギンを見て驚かない筈はない。

ギンはアヨンを見たまま、静かに口を動かす。

「イズル。口よりも手エ動かし。そのままやと誰も助けられずに後悔することになるで」

きつい言い方。声音はいつもよりも数段階低く、ギンは決してアヨンから目を逸らそうとはしない。イズルは慌てて乱菊の治療にとりかかる。

「なア、乱菊をあんなにしたのはお前か?それともそっちの右腕無い3人組か?」

アヨンは答えない。破面3人組も鼻で嗤い傍観しているだけで答えるつもりは無いようだ。

普段見えないギンの瞳がアヨンを映した。

吉良はそんなギンを間近で見ても背中か凍えた。こんなにも怒っているギンを見るのは初めてだからだ。藍染が死んだ時、ギンは怒っていたが、殆ど吉良は関わっていなかったし、皇達に逃げられた後だつてギンは怒っていると言うよりも悲しんでいて。部屋にずっと籠もりっぱなしか、時々散歩に出て藍染を探すくらいだった。

だから怖かったのかもしれない。

いや、今吉良が抱いているこの感情は——憧れだ。昔から吉良はギンに憧れていた。助けられたあの日から雛森が藍染に憧れを示したように、吉良もギンを憧れた。

「殺し損ねたそのデカブツも後ろで笑つとる3人組も殺す。安心してな。簡単には殺さんで。乱菊が苦しんでる以上にお前らは甚振って甚振って「殺してください」って懇願してくるぐらい殺ってやる」

ギンは地面を大きく蹴った。

怒りとは、時として力になるものである。冷静さを無くす代わりに強大な力を手に入れる。しかし、力が上がったとしても身体能力が急激に上がることはない。無茶をすれば当然その分は体に負荷として返ってくる。

「射殺せ『神鎗』」

霊圧を全開放。使える力は全て使う。

次こそはちゃんと狙い——。

アヨンの首を刎ねた。

しかし首を刎ねてもアヨンはまだ動き続ける。

「あ、あの状態でもまだ動けるのか!？」

「……ここまでなつてくると見苦しくてたまらんわ」

ギンはそう言うとアヨンを粉々に斬り刻む。ただの肉塊となったアヨンはそのまま重力に逆らうことなく落ちていく。

「イヅル、乱菊と雛森護るんやで」

「……え?」

アヨンが殺され、怒りに周りが見えなくなった破面達はギンに突進

していく。

「卍解 死せ『神殺鎗』」

素早い刃が吉良の目の前を通り、アパッチの左太腿、ミラ・ローズの左肩、スンスンの脇腹に突如切り裂かれた後ができる。

「カハッ！」

「な、何だ急に…！」

「アヨンを殺した以上の速さで私達に傷をつけた…!？」

傷ができた場所をそれぞれ手で抑える破面達。キツとギンを睨みつけるがギンにそれはきかない。いつもの飄々とした笑みをギンは浮かべると「どないしようか」と言った。

「アンタらほつといても死ぬし、別にボクがどうこうせんでええんよね。このまま縛道で縛って死ぬ時間まで待つのもええし、ボクと戦って動かせる手もアリや。どれが一番苦しむんやろ。乱菊がこない苦しんどるのに君らだけのうのうと死なせる事は出来ひんやろ？」

「はあ？死ぬ？あたしらが？お前頭トチ狂ってるんじやねえのか？」

「……………」

「…アパッチ、気づかなくて？」

スンスンがアパッチに言う。アパッチは「んだよ」と不機嫌そうに言った。

「体が重いんだよ。さつきよりもな」

「この短時間でこんなことができるのは…恐らく毒。私達が動き回れば毒はより早く体を巡り、動かなくても毒は勝手に回る。正直詰みですわ」

「何だよそれ!!勝ち目ねーじゃねーか!!」アパッチがスンスンに怒鳴る。スンスンはアパッチを思いつきり睨みつけると「私に言わないで下さる!？」と怒鳴る。

勝手に喧嘩し始めた3人を見てギンは放っておくことに決めた。あ、これ勝手にしてても死ぬやつだ、と思ったからだ。

「イヅル、傷残らんよう治してな。ボクは雛森ちゃん治すから」

ギンはそう言つて雛森の手当てを始めた。



「やはり、お前も出てきてたな」

乾が炎の壁にいなかったことにより、皇もそこにいないと踏んじた。勿論、目の前に皇が出てきたことにより藍染の読みは当たっていたことを示す。

キンと金属同士がぶつかり合う音がする。藍染が鞘から『鏡花水月』を抜き背中を護っていたのだ。皇は前に居る。いや、『居るように見える』と言った方が正解なのか。

「チツ」と舌打ちの音が聞こえる。皇だろう。焦っているのか剣さばきは段々と雑になっていく。藍染は自身に傷をつけることなく全て綺麗に防御していく。

「何故、何故お前は生きてる!!何故、お前は私が見えている!?!何故、私はお前に騙された!!?」

藍染は決して見えている訳では無い。違和感を感じとっているだけだ。

「じゃあ逆に問おう。君は一体いつから完全催眠が自分の斬魄刀の能力だと勘違いしていた?」

目に見える違和感が更に酷くなった。皇が動揺しているのだろうか。

「いや、君は勘違いしていた訳じゃないね。きっと君の中に居る虚がそうさせているんだ」

「〜っ!？」

「何故気づいてるのか、そんな感じかな？ いやあ、君の中にいる虚って主張強いよね。完全催眠で隠してたみたいだけど…隠せてなかったよ」

笑って言うのと荒い攻撃が飛んでくる。勿論、全て躲すか『鏡花水月』で打ち返す。

「君の完全催眠よりも俺の完全催眠の方が強い。それは目に見えている。現に君は騙された。けれど、あれは本気じゃない。君には更に力の差を見せてあげよう——」

不敵の笑みで藍染は笑った。

『鏡花水月』 遂に卍解

「主、我を卍解させる為には何が必要だと思えますか？」

卍解を習得する際、『鏡花水月』は俺に問うた。俺は顎に手を当て、考える。

「…霊圧？」

「確かに霊圧も必要です。でも一番必要なのは——想像力」

「想像力？」

『鏡花水月』は静かに頷く。

「卍解と言っても始解とそんなに変わりませぬ。変わるとこと言えば能力の範囲、騙す『物』、霊圧の量」

「しかし、私の卍解には想像力は不可欠。さあ！修行をしましょうぞ！！」張り切って言う『鏡花水月』に俺は「どんな修行をするんだ？」と聞いた。

「…滝行？」

「いや、なんで滝行」

俺がそう聞けば「現世の書籍には滝行がいい、みたいなこと書いてあったような気がするのです!!」と返ってきた。…なんで『鏡花水月』が現世の書籍に詳しいのかはこの際聞かないことにする。面倒事には関わらない主義だ。

「卍解って一体どんな能力なんだよ」

少し気になったことを『鏡花水月』に聞くと『鏡花水月』は嬉しうに笑った。

「始解が『人』を騙すのなら、次は『世界』を騙しましょうぞ、主」

規模がかなり大きくなったのは言わずもがな。正直、俺はもう正解の練習を辞めたいと思ってしまった。しかしここで許してくれないのが『鏡花水月』である。逃がしてくれない。自分の斬魄刀ではあるが鬼畜過ぎると思う。何せ俺は先程まで山のように積み上げられていた書類仕事をしていただけだから。

本気で逃げたいと思った。だけど逃がしてはくれなかった。誰もいない静かな場所で寝させてくれと叫びたかったのはここだけの話である。



「正解 世ヲ欺罔セヨ『鏡花水月』」

目に見えない波が皇をビルを？み込み、アスファルトを、世界を？み込んだ。この見えない波は始解の時よりもより強い完全催眠である。ふつうの人間、いや多分俺以外はこの波は見えない。

波が通った場所はもう俺の支配下に着いており、催眠にかかっている。普通の人間には、いや、全ての人間は完全催眠にかかったとは微塵とも感じられない。と言っても『鏡花水月』の破片や本体を持っている人間には当たり前だが完全催眠はかからない。というか本体や破片を持っている人間までかかってしまったら、俺まで完全催眠にかかることになってしまう。

「どうやっても君は俺には勝てないよ」

「私は負けない、貴様に屈しはしない!!」

皇はそう叫ぶとまるで馬鹿の一つ覚えのように単調な攻撃で仕掛

けてくる。勿論、俺はいとも容易く全ての攻撃を避けてしまうが。

「私は、私は……！ 死んだ望の分まで頑張らなくちゃ、こいつを殺さなくちゃいけないんだ!!」

焦った顔で俺に攻撃を仕掛ける皇。対して俺はきつと退屈な顔をしているのだろう。何故そんな表情をしているのか。実に簡単である。退屈だからだ。

時が経つにつれて皇は弱くなつていつている。もう段々と面倒に感じてきた。終わらせようか。

「なあ、1つ聞きたいんだが」

「…答える義務は無い!!」

「……君は一体いつから——自分がまだ生きてると錯覚していた？」

ツウーと皇の頬に冷や汗が一筋流れる。悪寒がした。まさか、と思つた。

「そのままさかだよ」

藍染が笑うと同時に皇の首が吹っ飛んだ。皇は何が何だか分からないという顔をしていた。優しい俺は何も分かっていない皇に親切に教えてあげる。

「君は俺が正解を使った時にはもう死んでいたんだよ。生きていると錯覚したのは俺がそう思わせていたから」

「莫迦……な、私、は……」

「首を斬られても喋れてるのは凄いな」

莫迦な、莫迦なと何回か繰り返した後、皇は事切れた。それを見た

俺はふうと息をはくと卍解をとく。これは実に精神に負荷がかかる。あまりやりたくないなと思った。

「皇は殺した。が、中にいた虚は逃げたか…」

死んだ皇からは先程までうるさく主張していた虚が感じられなくなってしまう。一瞬皇と共に死んだのかとも考えたがそれはないだろうと一蹴する。

追いかけるかで悩んだがやめた。今日はかなり頑張ったしわざわざ俺が出しゃばらなくても護廷十三隊の誰かか、死神代行が殺してくれると考えたからだ。俺以外にも心強い仲間は沢山居る。…殆ど面識ないと思うけど。

「…とりあえず一休みするか」

この後俺が殺し損ねた皇の中にいた虚は死神代行、黒崎一護の『最後の月牙天衝』で殺したと後に聞いた。その反動で黒崎一護が死神の力を使えなくなったことも。いつか謝ってお礼をしようと思ったのは秘密である。

閑話

生きてた

「あ”い”ぜん”だいぢようく」

滝のような涙を流しているのは「元」五番隊副隊長雛森桃。泣く雛森を見てアワアワと慌てているのは藍染。勿論、慌てていると言っても内心だけで表情には出ていない。一種の才能である。

「いぎででよがっだああ」

どうやら雛森が泣いている理由は藍染が生きていることを知って安心の涙のようだ。

尸魂界 五番隊隊室。長き接戦が漸く終結し、藍染は皆の目の前に姿を現した。藍染の姿を見て色々な反応が湧き上がる。藍染が生きてて良かったと泣くものや何故生きているのかと驚く者、またお前と戦えると悦ぶ者もいたし、藍染が本物かと疑う声も上がった。まさしく十人十色である。

「なんで、何で生きてること教えてくれなかったんですかああ…！」
「て、敵を騙すには先ずは味方からって言うだろう？それに情報が漏れることを恐れたんだ」

泣いている雛森に必死に説明する藍染を後ろから見ているのは藍染の部下、市丸ギンとその彼女松本乱菊。若干慌てている藍染を見てクスリと笑いながら乱菊は言った。

「まさか藍染隊長が浦原さんとグルだったなんて知らなかったわ。ギンは知ってたの？」

「乱菊。もう藍染隊長は隊長じゃあらへん。知ってたか、知つたらんかったかって聞かれれば知つとったけど、知つたのもかなり後やで」「そりやそうよね。だって藍染隊長が生きてたなんて知つてたらあそこまで精神的ダメージ受けてなかったもの。…あ、そう言えば藍染隊長はもう隊長じゃ無かつたのよね。つい癖で」

藍染は表向きで浦原とグルだったと言うことになっている。浦原が作った精密な死体で卯ノ花隊長を騙し、皇や乾を殺したことになるがこれはあくまでも『表向き』である。

藍染は『鏡花水月』の能力を調べさせてあげると言う交換条件で浦原に手伝ってもらっている。こうでもしなければ藍染は死神に戻ってこれなかった。『鏡花水月』と言うチート斬魄刀があると知られれば四十六室はきつと藍染を死神に戻そうとは考えないだろう。現に、浦原は戻ってきていない。

藍染が死神に戻ってくる際、藍染は四十六室に条件を言い渡した。それは仮面の軍勢を死神に戻すと言う事だ。藍染は言った。「平子隊長が戻ってこないのならば自分は戻ってこない」と。それを聞いたギンは言った。「隊長が居なくなるんならうボクもやめよかな」それを聞いた乱菊が「じゃあ私も辞めるわ」と退職連鎖になりかけたので、四十六室はやむを得なく藍染の条件を承諾したのだ。

と言っても仮面の軍勢の中でも戻ってきた人と戻ってこなかった人がいた。平子真子は藍染の強い希望で戻ってくるようになったので現在また五番隊長として死神に。

その為、隊長だった藍染は副隊長に。副隊長だった雛森は参席となった。ギンも五番隊に戻りたいと四十六室に進言していたが、それは飲まれることはなかった。

何とか雛森を慰めた藍染は久しぶりに隊首室に入る。すると中は凄いいことになっていた。

山積みにしてある沢山の書類達。それも1つではなく10は簡単に超えるぐらいの量である。昔から平子は書類を溜める癖はあったがここまではなかった。まあ、こんなに酷くなる前に藍染が平子に喝

を入れるからなのだが。

「…な、何だ…これは…」

「あ」と重なる声があった。声の主は雛森とギンである。

「あ、あたし…最近ちゃんと仕事してなかったから…」

「ぼ、ボクも殆ど仕事しとらんかったしとりあえず全部五番隊に仕事送とったから…」

雛森君なら分かるが、ギンの言っている意味がわからない。何、五番隊に送ったって。可笑的いでしょ、部下に少しはさせなさいよ!!

「まあ、勝手にボクらの前から消えた罰だと思えばええんやない？ちよつとは反省しいや」

ぐつと何も言えなくなる藍染。少しだけ平子の気持ちがあったような気がした…。

藍染惣右介誕生祭

藍染達が尸魂界に戻ってきてきて約1週間。三番隊副隊首室に平子、ギン、乱菊、雛森が来ていた。皆、神妙な顔つきである。まるでこれから何かがあるような――。

「さて、皆も知つての通り今日は惣右介の誕生日や。有難いことに惣右介は仕事好きで今も尚仕事をしとる。おかげでアイツは自分の誕生日が今日だと忘れとる。サプライズしまくりやで」

「相変わらず藍染隊長可哀想ね。時間稼ぎにあんな大量の書類させられるなんて」

「ええねんええねん。アイツ慣れとるから」

醜い笑みを貼り付けて言う平子を見て乱菊は「心底ウチの隊長が仕事できる子で良かったわ」と呆れたように言った。

「∴藍染隊長って何が好きなんでしょう」

「仕事」

「貴方は黙っていて下さい」

「俺、隊長やで!? 貴方って他人行儀な言い方!! とても悲しい!!」

「仁義のなせる技ね」

雛森はとても冷たい目で平子を見る。乱菊は呆れている。

「隊長はなんか決めとんの?」

「藍染の写真集」

語尾にハートマークがつきそうな勢いで言う平子。正直その贈り物は平子の死の結末しか見えないのだが本人は何故かルンルンで嬉しそうなので言わないでおく。

「市丸副隊長は？」

「安眠できる枕」

「それはいいですね!!」と雛森は笑う。それを見た平子が「俺は？」と雛森に聞くが完全スルーされていた。早くも1週間、平子の扱い方が酷い。

「安眠できる枕を使うと藍染副隊長の場合、永眠しそうね」

乱菊の一言で雛森は青ざめる。ギンの肩を大きく揺らし「それは駄目ですう!!」と叫んだ。

「確かにありそうやけど…まあ、大丈夫やろ」

「全然大丈夫じゃないですよおお!!」

雛森は中々ギンの肩から手を離さないで乱菊に止められていた。乱菊のおかげで雛森の手から逃れたギンは雛森に聞く。

「雛森ちゃんは藍染副隊長に何やるん？」

「それがまだ決めかねてて……」

「誕生日プレゼントはわ・た・し、なんかどうやろ？きつと藍染、飲んでたコーヒーとか吹き出して驚くで」

雛森からとてつもなく重い一撃を食らった平子は蹲る。皆からはとてつもなく冷たい目で見られている。当たり前だ。セクハラ紛いなことを言ったのだから。

「でも、藍染副隊長ってそう言うの奥手そうよねえ」

「そうですか？あたしは意外とがつつくと言うか……」

女性陣が恋バナらしきものを始めた。もうギンや平子が入り込め

る隙はない。何故なら女性は恋バナ好きだからだ。

いつの間にか紅茶などを出して話の華を更に咲かせる二人を見てため息をつくギン。ギンと平子は三番隊隊舎を出て藍染の居る五番隊隊舎へと向かう。



「誕生日おめでとうございます。 藍染副隊長」

「おめんとさん、惣右介」

宣言通り平子は藍染惣右介の写真集（新作）をあげ、ギンは安眠できる枕をあげた。平子が渡した写真集はビリビリに切り裂かれた。平子は叫ぶ。勿論、藍染は無視である。ギンの渡した枕は藍染に素直に喜ばれ、ギンはホッコリとする。

「この写真集何ですか」

「何って新作やけど？」

「新作？」

藍染が平子に聞けば「せや」と平子は答える。

「お前のためにわざわざ作ってもらったんや。因みに発売は明後日やて言いよったで」

「また盗撮ですか」

キラんとキメ顔をする平子を見て藍染は平子の背中をゲシゲシと蹴る。怒りを灯した瞳で。

「そんなことする暇があれば仕事しろ」

誕生日でも藍染は通常運転だった。



一方その頃。乱菊と恋バナを咲かせていた雛森は。

「あいへんらいちちょうのお、たんじょうびい、どれがあ…」

酔っていた。勿論、乱菊もである。

次の日。

「ああ!!! あ、藍染隊長のプレゼント買ってない!!て言うか…終わっちゃった」

この後、雛森は土下座をする勢いで藍染に謝ったという。(平子談)

涅マユリ

大量の書類の半分を終わらせ、息抜きとして藍染は他の隊に溜まった書類を届けていた。正直、十二番隊と四番隊には近づきたくない藍染であるが、平子のお使いもあり十二番隊に行くこととなっていて、気分はダダ下がりである。

「書類ぐらい自分で届けるよな、あのおかつぱ野郎」

朝、書類を整理してた所に平子が出てきて「惣右介、これマユリン所に届けてくれへん？」なんて言ってきたのだ。勿論藍染は「自分で届けて下さい」と断つたのだが、いつにも増して粘る平子。仕方なく、息抜きをする為にも、という事で了承したのだ。

十二番隊に着くと予め平子が伝えていたのか客室へと簡単に通される。いろんな意味で感嘆の声を漏らす藍染。勿論、十二番隊に客室なんてあったのか、という意味の感嘆の声である。

客室に通された後、色の可笑しい飲み物が出された。勿論、口を付けるつもりは無い。十二番隊で渡される物の殆どは信じてはいけないものだ。これは尸魂界内の暗黙のルールとなっている。

「ヤア、よく来てくれたネ」

涅マユリ本人がわざわざ出てくるとは思っていなかった藍染は少し驚くが慌てて立ち上がり会釈をする。

「どうやら作戦は今の所成功している様だネ。あの男もやれば出来るじゃあないか」

「…作戦？」

今、聞き捨てならない言葉が聞こえたような気がする。しかしマユリは「何でもないヨ」と言っただけ以上喋ろうとはしない。

何だか嫌な予感がする。そう感じ取った藍染はさっさと書類を渡して帰ろうとする。勿論、現実はそのなりに甘くない。藍染はマユリに呼び止められる。

「待ちたまえ」

そそくさと帰ろうとしていた藍染だが、仮にも隊長に呼び止められたのだ。無下にすることは出来ない。恐る恐る振り返るとそこにはドアップのマユリがいた。

「私はネ、あの男と取り引きをしたのだヨ。藍染惣右介、今から君は私の実験材料となつて貰うヨ」

あの男とは誰だ。実験材料とは何だ。取り引きとは何だ。聞いた事は沢山ある。しかし、いつにも増して目がイカれているマユリが答えてくれるとは思わない。というか、答えさせたら本格的に逃げられなくなってしまうような気がした。

「し、失礼します…！」

慌てて客室から出て行けば「逃がさないヨ」とマユリの独特な声が聞こえてくる。

仕方ない、ここは『鏡花水月』を使って…！

そう思い、腰に差してある『鏡花水月』を手に取ろうとするのだが、藍染の手は空を切るだけで一向に掴めない。

「え……………」

そこで藍染は気づいた。この、絶望的な状況に。『鏡花水月』を持ってきていないと言うことに。

気を抜いていた。書類を渡すだけだからと、斬魄刀は必要無いと、

尸魂界は安全だと、気を抜いていたのだ。朝、『鏡花水月』を持ってこなかった自分を恨む。

「卍解 こんじきあしそぎじぞう 金色足殺地蔵」

十二番隊の隊舎の屋根を突き破って出てくるのは赤子の頭を持つ巨大なイモムシみたいな生物である。アレは、マユリの卍解だ。卍解をしてまで自分を捕まえたいと言うのか。本当に狂気のマッドサイエンティスト科学者の考えることは理解できない、藍染はそう思った。

「早く捕まった方が身の為だと思うのだけれどネ。この金色足殺地蔵は致死性の毒を吐く。解毒剤は私しか持っていない。死にたく無ければ大人しく投降することだよ」

一体、自分が何をしたというのか。雛森やギンに恨まれる事はあっても、マユリに恨まれることはしていない筈だ、そう思いながらも命欲しさに渋々投降する藍染であった。

「君が無能でなくて本当に良かったヨ」



「あれ、今日は藍染副隊長居らへんの？」

毎度毎度、吉良に仕事を押し付け五番隊へとやってくるギンは藍染の居ない隊首室を見て言った。平子は「おう」と答える。

「珍しいなア、副隊長がここに缶ずめしとらんって。ここ最近、あの人がずっとここにおったやろ」

「せやから無理矢理にでも追い出したんや。安心せえ、息抜きできるようマユリに頼んどる」

「は？マユリ??マユリって十二番隊隊長の？」

「他にどの『マユリ』がおんねん」

「莫迦か」そう言う平子に「アンタが莫迦やろ」とギンは真顔で言った。

「十二番隊の隊長さんとか藍染副隊長の心労増やすだけやて。早く止めさせな」

「お前も心配性やなア。大丈夫、大丈夫。アイツはやれば出来るねん」

ゲラゲラと笑っている平子を見て更に心配になってくるギン。別に心配性という訳では無いのだ。明らかに平子の人選が可笑しいだけ。

心配になれば更に心配になってくるのが性分というものである。隊首室の中を行ったり来たりと繰り返していたギンだが、遂に十二番隊に行くことを決意する。

「何や？そこまでせえへんでも…」五番隊を出ていくギンに何だかんだ着いていく平子。どうやら平子はギンを止めようとしているらしい。勿論、ギンは止まらない。

ギンと平子が言い合いをしていると平子にドンと衝撃が来た。衝撃と言っても小さい子に当たったような衝撃である。痛くも痒くもない。

瀨霊廷内に子供が居るなんて珍しいなア、なんて思いながらその子供を見る平子。その数秒後、平子の目は大きく見開かれる事になる。

「…は、藍染……？」

幼い少年の顔つきは藍染に似ていて、服はブカブカな服を引きずってここまで来ていたようだ。二回り以上大きい服——元言い死覇装——は引きずられたせいか、砂まみれになっていた。

涙目の少年。平子の死覇装を見てグツと掴むと言った。

「おじさん、ここ何処——？」

小さくなった「藍染惣右介」

藍染、いや、この場合は藍染光右介と言った方が正しいのか。兎に角、光右介は気づいて居ないのだが、光右介と惣右介の魂が急に入れ替わった、と言う訳では無いのだ。

元々、前兆は起きていた。しかし、光右介は生活苦でバイトを掛け持ちしていた程忙しい人間だった。その為、時折起きていた前兆を「唯の疲れ」で「夢」だと思っていたのだ。何故なら前兆が起きていたのは光右介が疲れて気絶するように寝静まった頃であり、前兆が「起きた記憶」が無いからだ。

しかし、そう思っていたのは光右介だけであって、幼い惣右介はかなり悩まされた。何か謎の体験をしたような気がする、体が重いような気がする、酷く疲れていたような気がする。

どれも「気がする」であって確定したものは無い。それに、前兆が起きていた頃は惣右介の母親、結右華の容態が悪くなった頃だ。更に悩まされた。

最初は光右介のように疲れだと思っていた。しかし、疲れだけでは現せない妙な感覚。それに「脳に記憶」されていなくても「魂は記憶」している。それがまた惣右介を悩ませた。

——もうやめてくれよ

——母さんが大変なんだ

——私が疲れている場合じゃ無いんだ!!

惣右介はマザコンでは無い。しかし、母親の結右華をととても大切にしていた。父親は生まれた頃からいなかったし、結右華は父親の事を話そうとはしなかった。だから深くまでは聞かなかったし、何より結右華は惣右介を愛して育てた。だから惣右介も結右華を做って愛していたのだ。

近くにいた人間と言えばうるさくて頭を使うのが苦手な幼馴染にその両親、そして病弱な結右華だ。周りにいた人間は少なすぎた。だからこそ結右華の看病に明け暮れていた惣右介は誰にも相談する事が出来なかった。

結右華の看病をする人は幼い惣右介しかいなかった。結右華は親戚と絶縁されてるらしい。詳しいことは結右華を除く誰一人知らなかった。

だからこそ、結右華を離れた幼い惣右介は不安になったのだ。

——自分がいなかったら、母様は死んでしまう。

辺りが知らない場所だったのもあるかもしれない。兎に角、惣右介は不安で柄にもなく泣いてしまったのだ。元々、惣右介は泣き虫だった。けれど、結右華の容態が悪化してからは、明るく振舞ってきたつもりだし、しっかりしてきたつもりだった。

だからこそ、久し振りに泣いた自分がみつともないと思ってしまったのかも知れない。



平子とギンは心の底から思った。この場に雛森が居なくて良かった、と。雛森が居たらきつと平子は有らぬ疑いをかけられ下手をすれば刑軍に行つてた可能性だつてあつた。因みに、雛森は今、休暇中である。休暇を取つて誰と一緒にいるかなんて聞くのは野暮である。

「グスツ…済みません、取り乱してしまいました」

五番隊隊首室。そこに、見事に小さくなってしまった藍染と顔を青くした平子そしてギンがいた。平子を見て急に泣き出すもんだから平子の顔が怖いのかとか試行錯誤したが泣いている藍染が首を横に振つたので平子は整形をせずに済んだ。

小さくなつてしまった藍染——この際、ミニ藍染と名付けよう——はソファーに座っていた。立って威圧感を与える訳にもいかないの
で平子とギンは藍染の傍の地面に片膝をつけてしゃがみこんでいる。
端から見たら完全に平子とギンは怪しく誤解を招きそうな絵面なの
だが、内心意外とパニックっている平子達は気づかない。

「えーと……ここがどこだが、分かるか？」

恐る恐る平子が聞けば藍染は首を横に振った。

「…でも、その格好知ってます。死神さんですよね」

「あらら、いつの間に俺ら有名人になってもうてん。ちよー恥ずかしいやないの」

「いえ。貴方は知りません。その死覇装を知っていると云っただけです。勘違いしないで頂きたい」

「うん、やっぱ小さくなくても藍染は藍染や」

しみじみとした顔で平子は頷いた。藍染は少し首を傾げると「貴方達は私の知り合い：なんでしようか」と聞いてくる。まだミニ藍染はイマイチこの状況を理解できていないらしい。

「知ってるも何も、なア」

「せやねエ」

平子がギンの方を向けばギンは深く頷く。何が何だか分からないミニ藍染は心配になってくる。

「俺、お前の上司な」

「ボクがキミの部下」

そうミニ藍染に伝えればミニ藍染藍染は「えっ」と驚く。震える指で平子を指さすと言った。

「こ、この人が…上司!? ……世も末ですね」

「オイコラ。どう言う意味やそれ」

「殴ったるか」と拳を構える平子を見てギンが「まあまあ」と平子を宥

める。「相手は子供なんやから」と。

「それにしても、このミニ藍染、記憶まで幼児化しとるみたいやなア」
「ホント、色んな意味で雛森ちゃん居らんくて良かったわ」

説教もそうだが、居たら居たで「きゃー」やら「可愛い」なんて言っ
て五月蠅そうだ。女子とはそういうものである。逆に男の平子達は
全然そう思わない：いや、レアだなアとは思うがそれぐらいであっ
て、藍染に向かつて「可愛い」等言う気に起きない。考えただけでも
ゾツとする。

「それにしても何時になったらこれ治るんや?」

「さア。そんなのボクが知るわけ無いやん。ここはやっぱ聞きに行く
しか無いんやない?もしかしたら治す薬有るかもしれんし」

「いやア、マユリやで?そんな簡単に教えてくれるわけ無いやろ。解
毒剤だつてくれるかどうか…」

そう、マユリはそんな優しい性格はしていないのだ。情報1つ聞き
出すだけでかなり面倒である。と言うか面倒くさそうな性格は容姿
からかなり滲み出していると思う。マユリのあのファツションは一
体どこに向かおうとしているのだろうか。藍染のことよりもそっち
が知りたい。

「まア、考えるのは後や。取り敢えず、飯でも食うか。腹減ったわ」

現在の時刻は12時である。ちょうどお昼時だ。平子が「何か飯で
も作るか」と言えばミニ藍染が「私が作ります」と言った。

「何、言うてんねん。子供が火イなんて使ったら危ないやないの」
「私、人が作ったものは食べないようになっているんです。何が入っ
てるのか怖いし、人の作った料理で死にたくない」

「……なんやろ、大人の頃よりも辛辣のような気がしなくもない」
「いつもの事やろ」

ギンがチラツと見たミニ藍染の瞳は虚無を映していた。きつと誰かの料理にトラウマか何かがあるのだろう。汗の量が半端なかった。大人の藍染は普通に人の手料理食べれたのになア、と思うギンだが大人の藍染は「光右介」である。二人の目の前にいるのは「惣右介」なのだ。それが知る由もない。

「台所はどこですか」と聞くミニ藍染に「あつちや」と答え台所まで連れていく平子。なんか完全に立場が変わっているような、平子が歳上に見えなくなってきたような感じがするのだが、まアいつものことか、と納得させる。

ミニ藍染の作った手料理は美味しかった。大人藍染がたまに作る料理もそう言えば凄く美味しかったなと平子とギンは思い出した。



なんと言うか…似てる。それが平子とギンを見た感想だった。二人とも、似たような喋り方をするし、年中無休で笑っている。いや、訂正しよう。喋り方は平子の方がなんかおちよくった感じがするし、笑い方だってギンの方がなんか胡散臭い。よく考えてみると全然違ったような気もする。兎に角、二人ともキャラが濃いのは確かである。ご飯を食べ終わった後は、二人して何か話し込んでいる。途中途中で、顔色を変えながら話しているので、きつと重要な話なのだろう。迷惑をかける訳にもいかないので大人しくしとこうと思った。

そう言えば、平子…さん、は私の上司だと言っていた。平子さんは五の文字が乗った羽織を着ていたので私も五番隊に所属しているのだろうか。

自分は一体どのような仕事をしているのだろうか。あの上司だと絶対書類仕事とか押し付けられてそうだ。そう言う細かいこと出来なさそうだしな、あの人。

あれが上司だと絶対に部屋に缶詰めさせられそうな結末が見えるのに、どうして大人の私はあの人を上司に選んだのだろうか。

実は書類仕事とかちゃんとする人だったり？

——いやいや、それならあの机の上に置いてある山のような書類はどうやって言い訳するつもりだ。思いつき『平子期限内に提出！九月十五日まで』って書いてあるぞ。この案はなさそうである。

なら、頭がずば抜けて良かったりするのだろうか？

——それなら目の前の光景に言い訳して欲しい。ギンと名乗った男に完全に言い負けしているぞ、あの上司。この案も無さそうだが。では、あの上司はものすごく強い、なんて案はどうだろう。

——これなら有り得るかもしれない。仮にもあの人には『隊長』であつて隊を、尸魂界の住民を護る役目を課せられている。規定を超えた強さを持っているから隊長に慣れた訳で——。：正直全然強そうに見えないのはきっと私の目が節穴だからである。きっとそうだ、そう信じたい。

結論は、世の中にはたくさん人間がいて、未来の自分はかなりの変わり者だ、ということだろう。



結局、平子とギンはマユリに問いただす事に決めた。交換条件で一体どんな無理難題を押し付けられるのかとビクビクしていれば案外すんなりと教えてくれた。マユリ曰く「今回は失敗だよ」との事。何をしたかったのか問おうとすればマユリの目の色が変わったので聞くのをやめた。

「治るも何も放っておいたら治るヨ」

「いや、かれこれ数時間は治つたらんのやけど」

平子がマユリにそう言えば「知らないヨ。私に聞かないでくれ。忙しいんだ。君とは違ってネ」となんとも無責任な返答が帰ってきた。

困ったように空を見ているとネムが近づいて来て平子に言った。

「きつと数十分もしないうちに治りますのでご心配しなくても大丈夫ですよ」

だそうだ。平子はネムに「ありがとさん」と伝えると五番隊に戻っていく。平子が五番隊に戻った頃には藍染の体も治っていて——なんてことはなく、まだ子供のままだった。

残りの数分どうしようか、と平子が頭を悩ませた結果、写真を撮ろうと言う決断になった。因みに、カメラは現世から1台持ってきている為、困ることはなかった。

「なあなあ、写真撮ろうや」

「写真?」

「いいからいいから」と平子がミニ藍染とギンをセッティングする。背景は五番隊だ。誰かにシャッターを頼まうかと辺りを見ていたらルルンな乱菊が通りかかったので乱菊に頼んだ。

「あら、カメラじゃない。それも中々良い奴ねこれ。ふふ、あたし、カメラは織姫から習ったのよ!この腕とくどご覧なさい!!」

乱菊の機嫌がいいのはきつと日頃監視役の日番谷が居ないからなのだろう。何故、日番谷が居ないのかなんて野暮なことは聞いちやあいけない。

「行くわよー!! カツ井、牛井、親子ドーン——」

「ちよつと待てやー!!なんやそれ、聞いたことないんやけど?」

「え?織姫はこうやって撮るって教えてくれたんだけどねえ」

「可笑しいわね」なんて言っている乱菊に平子は「普通にハイ、チーズ

「でええから」と言った。

「なによお、それ全然新鮮味ないじゃない」

「いいから!!こちとら時間無いねん!!」

「分かったわ」と少しいじけたような声で「ハイ、チーズ」と言って写真撮った。フラッシュの大きな音にびっくりしたのか、それとも光にびっくりしたのかミニ藍染は目を瞑って写真に映っていた。

現像したらこれで藍染をからかってやる、と独りで平子は笑う。勿論、そんな事したら平子の命は危ない。実に学習しない男である。

写真を撮った数秒後に藍染は元の藍染へと戻った。妙にニヤニヤしている平子を見て殺意が湧いたと後に平子の屍を踏み越えて語っていたのはギンの記憶にまだ新しかった。

男として

今の現状を理解出来なかった。

壁ドンならぬ床ドンを現在進行形でされていた雛森はそう思った。恐怖はない。ただ、嗚呼、男の子なんだな、と意味のわからぬ理解をして。

雛森のこの現状を知るためにも、藍染が小さくなる2日前の話からしよう。



とある居酒屋。そこに藍染は居た。人は店員しかおらず、客は居ない。何故かと問われれば藍染がわざわざ貸切にしたからとしか言いようのない。全く無駄な出費である。

チリンとドアに掛けてあったベルがなった。店内に入ってきたのは藍染に呼び出されていた日番谷冬獅郎である。日番谷は迷わず藍染の隣の席に座ると「何の用だ藍染」と藍染に声をかけた。

藍染は別段酒に弱い訳では無い。仕事が忙しい事もあるし、そもそも酒を好んで飲む性格ではないので、誰かに進められたら飲む、ぐらいなのだが今日は珍しく飲んでいた。

グラスに注がれていた酒をグツと一気に飲み干す。そしてどこかを見つめ藍染は言った。

「日番谷君は知っているかい？」
「何がだ」

質問の意味が全く分からないとでも言うかのように日番谷は返した。すると藍染は「本当に何も知らないのだね」と言う。

コイツ酔ってるのか、そう思って日番谷は眉を顰めるが、藍染からは酒の匂いがしない。店員の方を見れば「彼が飲んだのはまだ1杯目でございます」と言われた。もう一度言う。藍染は別段酒に弱いという訳では無い。

いつもならしない面倒な言い回しに全く理解が出来ない日番谷。藍染はそんな日番谷を気に止めることなく店員におかわりを頼んだ。

「五番隊の雰囲気、日番谷君はどう思う？」

「はあ？知らねえよそんなモン」

日番谷が五番隊に出す事は他の隊と比べれば多いがそれだけである。乱菊のようにサボり魔では無い日番谷はこの前まで不在だったが為に出来た大量の仕事を一人でこなしていた。その為、五番隊に顔を出す時間もなければ余裕もなかった。

「五番隊は今、とてもギスギスしている。その理由の筆頭にいるのが雛森君だ」

それを聞いた日番谷は目を見開いて驚く。だってそうだ。あの雛森が隊の雰囲気悪くするなんて信じられないのだから。

「雛森君は尸魂界に戻ってきてからは僕にずっとつけ回ってきてね。まあ、これは僕の行いが悪かったから、と黙認していたのだが…。何分、隊長の当たりが強いんだ」

「おかげであのメンタル馬鹿がいつも以上に使い物にならなくてね」藍染は困ったように言った。新しく注がれた藍染のグラスに入っていた氷がカランと音を鳴らす。

「そもそもあの計画——嗚呼、生きていたけど死んじやった計画ね、あの真相を予め雛森君に伝えていても良かったんだ。でもそれをしなかったのは雛森君が僕に『依存』していたからなんだよ」

藍染の死体——ただし偽物だった…と表ではなっている——を目の前で第一発見者となった雛森の精神ダメージは凶りしれないもの

だった。

そうなるを知っていてなお、雛森にこの計画を伝えなかったのは親離れならぬ藍染離れをさせるためだと藍染は語る。

「人間に依存していてもいいことは何も起きないんだよ。人はいずれ死ぬ。その死を受け入れられないのは死者の冒涇だと思うんだ。もし、僕が死んだとして追いかけるようにギンや雛森君が死ねば僕は悲しい。生きてて欲しかったと思うんだ。物が壊れるように人間だつていなくなる。これはどう足掻いたつて変わらない事実だ。それを受け入れられないのは生きていないことと一緒なんだ」

無表情に、瞳には何も映さず藍染は言った。

「…てめえの持論は分かった。それを俺に伝えてどうするんだ」

「日番谷君、雛森君を嫁に貰わないかい」

たまたま、水を飲みかけていた日番谷の口から水が噴射される。藍染の顔は無表情だ。そんなに付き合いが長いとはお世辞でも言いきれない日番谷からは今、藍染がどんなことを考えているかなんて分かっていなかった。

「きゅ、急に何を…!!」

「いや、取り敢えず依存先を変えないことにはどうにもならなくてね。これ以上平子隊長あのカが使えなくなるのは本当に勘弁なんだ」

知るかそんなモン!!日番谷はそう言い返そうとするがニコリを笑う藍染を見て何も言い返せなくなつた。何故なら、その意味深な笑みが怖い。笑っているのに目が笑っていない。冷たい、殺気が乗っている。

「日番谷君。君は男だろうか？砕けてもいいから取り敢えず雛森君に男

だと認識されてくれないか。そうすれば僕から意識が削がれる」

知っていた、知っていたさ。俺が男だと思われてないくらい、藍染のさり気ない毒にダメージを受ける日番谷。それを知ってか知らぬか藍染はさらに毒を吐く。

「そうだね、日番谷君が男だと認識されるには先ず…襲ってみたらどうだい？そうすれば嫌ってほど雛森君も分かる筈さ」

襲う？そんなの出来ていたら既にしていた。日番谷はそう言いたいが藍染は一人ペラペラと喋り続ける。そして藍染は言う。

「明日からの三日間、十番隊の仕事は僕が受け持とう。だから休暇を取りなさい。雛森君も休暇取らせるから。それで二人で温泉にでも行っておいで」

有無を言わせない声で藍染は言った。と言うか藍染の声は若干怒りが籠っているようにも聞こえる。そんな藍染に気圧され日番谷は「お、おう…」と返してしまふ。

藍染と別れた後、凄く後悔した。

がっかり？

藍染副隊長が戻ってからというもの、藍染副隊長の後ろをずっとつけ回っていた私。目を離せばまた、どこかへ行ってしまうようで目が離せなかった。

それに、新しい隊長が入ってきてからというもの、藍染副隊長がよく笑うようになった。何時もの優しい微笑みじゃなくて、楽しそうな笑い。初めて怒った所を見た時はビックリしたし、平子隊長を足蹴にしてる時なんか本当に、藍染副隊長なのかと少し疑ってしまったが、やっぱり副隊長で。少し平子隊長に嫉妬してしまった。

私が見たことの無い表情を平子隊長は軽々と出して見ている。まるでそれが、当たり前のようなのだ。私は妹みたいな感じでしか見られていないというのに、平子隊長はしっかりと信頼されていて、羨ましくて少し爆発して塵にでもならないかな、とも思った。

現在、私は死神の仕事を3日間だけ休んで休暇に出ている。藍染副隊長の粋な計らいだ。久しく遊んでなかったシロちゃんと一緒に温泉にでも行ってきたらどうか、と言われたのだ。

確かにシロちゃんには色々と助けて貰ったし、遊ぶなんて何時ぶりだろうか。死神になってから1度もなかったような気がするし、たまには休暇が必要だよ、という優しく囁かれた言葉に私は頷いてしまった。

わざわざ、藍染副隊長は私達の為にシロちゃん名義で予約を取ってくれたらしい。つくづく出来た上司だと思う。使い物にならない隊長とは違って。

「シロちゃん!!」

旅館に着けば、シロちゃんは待っていた。長い事待たせてしまっただろうか。「ごめん、待った？」と聞けば「もう松本で馴れてる」となるとも微妙な返しが来た。でも、こういう所がシロちゃんほくて少しだけ笑ってしまった。笑われた事が嫌なのかいつもみたいに眉間に

シワが寄ってたけど。

旅館は今回、二組予約していたらしい。私達と後、旅行なのかな？そんな感じの人達だ。きつと貴族様か何かなのだろう。

3日間、旅館で過ごすことになった。2日目の夜まではそれと言った事件もなく、温泉もう露天風呂も気持ちよかつたしご飯も美味しかった。そう、問題は2日目の夜だ。

予め、ここで何かを言っておくならば、私は凄くお酒に弱い。それはもう、弱過ぎて乱菊さんからは「雛森と呑みに行くと私が酔う前にアンタが酔っちゃうから酔えないのよねえ」と言われるぐらいには。

それに、シロちゃんも身長のことを気にしてお酒は呑まないようにしている。基本、童顔なこともあってかお酒を頼むとお店の人からはいい顔をされないし、呑むと身長が伸びないと思っっているので本当に呑まない。その為、お酒に耐性が無かった。

そんな私達がお酒を呑んだらどうなるのだろうか。ジュースと間違え、呑んでしまった私達。ジュース感覚で呑めるお酒だったから、温泉に入って火照っていた身体に冷たいお酒を流し込んでしまう。それはもう一気飲みだ。

そこから私が覚えている事と言えば。真っ赤になったシロちゃんの顔にヒックと少し高めのしゃっくり。そして気がつけば押し倒されていた。もう、少女漫画みたいな展開でついていけない。

でも、そんなシロちゃんを見て悪くないな、と思ってしまったのは、何故だろうか。いつも、弟みたいな感覚で見えていたからか、シロちゃんが隊長になってもお姉ちゃんに実力を見せつける為になりました！みたいな感じで可愛くて中々隊長だと思えなくて。だからいつもの癖でシロちゃんと呼んでしまう。

そんな弟みたいなシロちゃんが私を軽々と押し倒した。怖い、つてよりも嗚呼、シロちゃんも男の子なんだなあと思ってしまう。

熱を帯びているせいか熱い身体。少しはだけた浴衣。白に近い銀髪がシロちゃんの顔を更に赤く見せてしまう。

「ひ…なも、り……」

シロちゃんは呂律のまわらないのに私の名を優しく呼んだ。不覚にもキユンとしてしまう。

そんなシロちゃんは私の髪を一束持ち上げると口付けをした。まるで絵本の王子様だ。

「昔から、小さい頃から——」

そう呟いて、電池の切れたおもちゃのようにコテリと落ちてしまった。眠ってしまったのだろう。

ドクンドクンと心臓がなる。

いつもは可愛いと思っている日番谷君が格好良く見えた。

少し、ちよつとだけ、先が聞きたいと思つてしまった。

自分の気持ちに分からなくなった——。

3日目の朝。少し、重いと思つて目を開ければ昨日の体勢で寝落ちしてしまったシロちゃん……日番谷君が居た。ビツクリして大声を出してしまいそうになったけれど、寸前で止めた私は凄く偉いと思う。

日番谷君を頑張つて退かせば、衝撃で起きたのだろう。日番谷君が目を開けた。

「んう……」

「起きて、日番谷君。朝だよ」

ユサユサと揺らせば眠たげな目と合う。「おう……」と少し寝ぼけたような返事が帰ってきた。頭を抑えていることから二日酔いなのだろう。いつも以上にしかめっ面だ。

「日番谷君、昨日の事、覚えてる？」

「……昨日？ そういや、途中から記憶がねえな……」

日番谷君はどうやら呑むと記憶がトぶタイプらしい。少し、がっかり。少し、だけね？

藍染と浦原はグル？

「いやー、まさか藍染サンがこんな所に居るなんてアタシびっくりしましたよ」

そう言つてカラカラと笑っているのは浦原喜助^{うらはらぎすけ}。風貌はかなり変わっているが、声から浦原さんだと間違いないと分かる。緑色のシマシマ帽だったり、緑色の甚平を着ていたりとやたらと緑色を強調しているがこれでも、元十二番隊長だった人だ。

今現在、俺は浦原商店に居る。理由は道でばったりと出会つてしまったのだ。え？ 『鏡花水月』の催眠で見えてないだろうって？ 気を抜いてたのさ。気を抜くと直ぐミスするのが俺の欠点だな。今日然り、ギンに破片を渡し損ねた然り。

「俺も、貴方が現世^{こんなせう}に居るなんてびっくりです」

「此方も色々とありましてね」

「藍染サンも色々とあつたんでしよう？」そう浦原さんは俺に聞いた。どうせ隠すことも無いし、知っているのだろう。素直に頷いたら「夜一サンから聞いてますよ」と言われた。知ってるなら聞くなよと思うが口には出さない。世渡りの術である。

「尸魂界では死んだことになつている藍染サンですが……。まあ、単刀直入に聞かせて貰いますね。卯ノ花隊長を騙せる程の精密な偽装工作、どうやったんスカね？」

普通ならどうして偽装工作をしたのかとか理由を聞いたりするものだろうが……。そこら辺を聞いてくるあたり科学者らしい。思わず溜め息をついてしまうのは仕方がない。

どう言い訳をしようか、と悩む。が、俺のチカラでは逃げられそうにない。いや、『鏡花水月』を使って物理的に逃げることは出来そうだ

が、浦原さんなら俺の斬魄刀がどういうものか推理して『鏡花水月』の能力を無効してくる物を作りそうで怖い。

「……俺の斬魄刀の能力で」

「斬魄刀の能力？　ですが、藍染サンの『鏡花水月』は確か流水系の斬魄刀でしたよね？」

「……………」

「なるほど、なるほど。それはデマと言うことっすか。じゃあ本当の能力を聞いても？」

ここでお暇することは出来ないだろうか。…出来ないな。浦原さんの目が怖い。帽子の影から見える浦原さんの目が俺を真っ直ぐ見ている。もう、本当に怖い。草食動物を狩る肉食動物の目をしている。

「何、ただで教えて欲しいとは言いませんよ。藍染サン…平子サンの居場所知りたく無いですか？」

「!？」

「アタシは知っています。なんなら、平子サンが尸魂界に戻った時、藍染サンは死んだことになってるんで戻れないですよ？　その手助けだってしてあげますよ」

「まあこれも、藍染サンが斬魄刀の能力を教えてくれたら、の話ですがね」そう悪どい笑みを浮かべながら浦原さんは言った。なんとも性格の悪い男である。だから周りからは「胡散臭い人」だと認識されるだ。自業自得だよ。

「仕方ないですね。教えますよ、俺の『鏡花水月』の本当の能力は——」

真剣に『鏡花水月』の能力を聞く浦原さんは見えていて怖かった。メモを取っているあたり、本当に興味があったことを知る。

「…うわあ、チートじゃないですか」

浦原さんの零した独り言に思わず俺も頷いてしまった。これに正解まであると言うのだから、全てを殺しにかかっている。

「でも興味深い能力つスねえ。アタシにも是非、破片を貰っても？」
「いいですよ」

「ただし、解析とかはしないでくださいね」笑いながらそう言ったら「それはお約束出来ませんねえ」と返ってきた。するのによ、解析。さすが狂った科学者だ。研究熱心過ぎる。

「浦原さん、約束は覚えていきますね？」

浦原さんにそう聞けば浦原さんは思い出したように「ああ」と言った。

「平子サンなら確か、ひよ里サンに黒崎サンを仲間になるよう説得しろって命じられたらしく、黒崎サンの通っている空座第一高等学校に転校生として通うことになったらしいスよ。この前、愚痴零してたんで間違いないと思います」

平子隊長が高校生？ 年齢サバ読みし過ぎだろ。最早、詐欺レベルだぞ。あの人1000は遠の昔に超えてるだろうに高校生？ 頭がイカれてる。コスプレだコスプレ。というか、恥ずかしくないのか？
…いや、平子隊長に限って恥じらいとかはなさそうだな。全てをオーブンにさらけ出してる男だから。

「どうせなら藍染サンも空座第一高等学校に行きますか？」

「…いや、流石に高校生はちよつと…」

「高校生じゃなくてもやりようはいっぱいあるっスよ。例えば先生、とかね？」

「先、生……」

それならコスプレにならずに済むし、俺の精神だつて守られる。いかもしれない、先生。ただし、俺が高校生の勉強を覚えているかにかかっているが。

「適当に現職の人襲つて、藍染サンが『鏡花水月』かけちやえばいいんスよ。まあ、手荒にはなりますが大丈夫でしょう。襲っちゃった人が怪我したらアタシが治しますし」

いかもしれないそれ。

「手続きとか色々手を貸すんで、『鏡花水月』を定期的に解析させてください」

浦原さんは俺に手を差し出す。

迷うことなく俺は浦原さんの手を握った。

更木剣八との決闘!!

十一番隊。それは『戦闘専門部隊』の異名を持つ、好戦的で戦闘しか頭の無い者が属す部隊である。そんな十一番隊はいつも以上に気がたつていた。理由は『藍染惣右介』にある。

十一番隊の隊長、更木剣八は幾度となく藍染に決闘を申し込む。しかしながら藍染は、あの手この手を使いさらりと逃げてしまうのだ。折角藍染が生きていたのだ。直ぐに死なれても困る、とヤケになった更木。いつも以上にしつこく藍染を追いかける。方向音痴なのに。

「はあ、本当にやめてもらいたい」

「ええやん。やってやれや決闘」

「馬鹿ですか、アンタ馬鹿でしたね」

「おい、せめて否定させろ」

「あ?」と眼光を鋭くさせ、平子を睨みつける藍染。平子は「おー怖つ」と肩を竦めた。

そんな平子を横目で見ながらため息をつく。どいつもこいつも…と漏らした声はどうやら平子には聞こえていないようだ。いや、聞こえていないフリをしただけかもしれない。

「ちゃんと前見い。前おるかもしれへんで更木」

「大丈夫です。あの人みたいに霊圧感じられない訳じゃないんで。それに垂れ流しでしょ? あの人」

「せやなア。心做しか遠ざかってるで」

明後日の方向を見ながら平子が言った。藍染は周りを見ることなく、歩きながら書類を見つめていた。歩きスマホならぬ歩き書類だ。とことん仕事中毒^{ワーカホリック}を極めている。

「なんでやらんの? 決闘ぐらいパパパとやってやればええやん」

「あの人をそう簡単に倒せないでしょう。それに…仕事が終わらない。勝つてもいい事がない。デメリツトだらけです」

「下手したら十一番隊の隊長にさせられますからね。冗談じゃない」と疲れた様子で藍染は言った。平子は「モテる男は大変やなア」と面白そうに言う。

「男じゃなくて女にモテたいよ…」

なんで男にしか持てないんだ、弟子二人と戦闘狂一人を思い出して藍染は呟いた。



何故こうなった？

ワーワーと騒ぐ十一番隊の隊士達、隣で楽しそうにケラケラと笑っている自分の隊長、そしてガーガーと吠えている更木剣八。もう考えるのをやめた。

実は、あの後十一番隊隊士の斑目一角と綾瀬川弓親に見つかり、こうなった。油断してるとすぐこうなる。自分が凄く怨めしい。まじ一旦滅びろと思ってしまう。

「おら!! 俺と戦え藍染!!」

うわあと顔が歪む。しかしそれに気づいていないのかワーワーと更木は言う。隣で平子はケラケラと笑っている。

一旦、うちの隊長をやりたいのだが、ダメだろうか。自分には関係ないからと笑って楽しんでやがるこの野郎。

気がつけば隣にいた平子はいなくなっていた。近くにいた隊士達も遠くに離れており、現実逃避していた間に一体何があったのか。目

の前にいる更木に聞こうにももう、無理だった。

狂気の笑みを浮かべ、突進してくる更木。開始のゴングはもう既に
なっていた。

一旦全て滅びてしまえばいいのに。そう思ってしまったのは仕方
の無い事だと思う。

なぜこうなった？

前回のあらすじ!!

右手に持っていた書類達はいつの間にか消え、斬魄刀を持っていた藍染!! (そんな描写は書かれていない)

気がつけば試合のゴングは鳴っていたぞ!! 全く乗り気じゃないし、仕事は終わらないしで既にツーパンチをくらいボロボロだし!! 勝っても負けても地獄!! さあ、どうでる藍染!!

——どうでる藍染!?

じゃないんだよ。現実逃避をしながら自分の回想に自分でケチをつける俺。嗚呼、なんて悲しいんだろう。もうやだ、ホワイト企業に移りたい。

別に戦闘でも戦争でも勝手にやってくれたらいいよ。但し俺を巻き込まないで頂きたい。この際、うちの隊長を生贄として召喚するかそれで勘弁してくれないだろうか。あ、無理ですね。分かりますうん。だからお願い、その刃こぼれしまくってる斬魄刀をこっちに向けないでお願いだから!!

「てめえ、さつきから避けまくってんじゃねえ!! さつきと反撃しろ!!」

「いや、誰一人やるなんて言っていないでしょう?」

更木隊長を筆頭に十一番隊からの野次が凄い。めちやくちやうるさい。そして、どさくさに紛れて俺の悪口を叫んでいる平子。聞こえてるからな、バツチり聞こえてるからな! 録音してるからな!! 覚えとけよコノヤロー!!

更木隊長の攻撃を避けることで精一杯な俺は一体どうしたらいいのか: なんて誰が言った? そもそも、更木隊長と向かい合ってる俺が本物のわけないでしょう。ヴァカめ!!

俺はところ変わって三番隊にいた。

「あの…藍染隊長、何故ここに……？」

「市丸隊長なら乱菊さんといるので三番隊にはいませんよ？」そう言ってくる吉良君に苦笑いで俺は答えた。

「少々ここで隠れさせて貰えないかな？ 隊首室は隊室で仕事しにくいんだ」

隊首室ではココ最近雛森君がずっと唸っている。唸り声の内容は「うー…日番谷君があ…で、でも私は…あ、ああ…」と壊れたおもちやのようにならずと唸っていて凄く怖い。日番谷隊長と何があったのかは知らないが、隊首室で唸らないで欲しい。けど、そんなことは言えないので三番隊でさせてもらうことにした。

吉良君はあまりわかっている様子だったが「別にいいですけど」と了承してくれる。めっちゃいい子だ。さすが伊達にギンの尻拭いはしてないなと思った。

沢山持ってきた書類を片っ端から手をつけていく。それを見ていた吉良君も最初は自分の仕事をしていたのだが、途中からメモをとり始めた。え、それ何のメモですか？

「…何をメモしているのかな？」

「え、あまりにも手さばきが凄かったのでもどのようにしているのかな、と。最近の仕事が追いつかなくて期限内に出せない事が多いです。それに隈も増えてきて、なんかもうビタミン剤とか薬が手放せなく…」

ダメだ。吉良君、かなり重症かもしれない。ていうか、吉良君は常日頃から顔が白かったから気づかなかったけどかお色凄く悪い。え？ その状態でやってたの？ 君も大変だね。

「ちなみに何徹目？」

「五徹目ですネ」

「人間、覚醒すれば十三徹はいける。でも、睡眠と引き換えに何か大切なものを無くしてしまうからそうなる前に寝た方がいい」

「え、でも仕事が……」なんて渋っている吉良君の背中を押して仮眠室へと連れて行った。俺は徹夜に慣れてるからいいけど、慣れてない人がやつても身体を壊すだけだ。仕事は程々が一番だし（藍染が言えない）

仮眠室のベッドで寝かせたら、吉良君はコロリと睡魔に負けて寝てしまった。いやはや、三番隊もブラックなんだね。上司がアレだと下はキツイよね。分かる、分かるよ。俺も何度十三番隊に行きたいと思ったか！ 四番隊でもいいけど、あそこは少し怖いからやだ。

二番隊と三番隊、八番隊と十二番隊には行きたくない。二番隊は蜂隊長とどう接すればいいのか分からないし、上手くいける気がしない。三番隊は言わずもがなだし、八番隊も七緒ちゃんがいてようやく機能するし、十二番隊なんてブラック中のブラックだろう。絶対にやだ。命がいくつあっても足りる気がしない。

マトモな場所少なえなあ、なんて思いながら吉良君の仕事をやる。まずは吉良君の仕事を終わらせてやろう。彼には少し休んでいて欲しいし。弟子が馬鹿で使えなくてごめんよ。後できつく言っておくから。



一方その頃、更木は。

「てめえ!! そろそろやり返せ!!」

かなり派手にキレていた。平子の顔がうわあと歪む。それはそうだろう。更木が藍染だと認識しているものはただの空気で避けるも

何も無いからだ。藍染本人は既にその場にいないし完全に遊ばれている。斬魄刀の能力を更木に知られたら殺されるぞ、と思うがそんなヘマはしないだろう。多分。言いきれないから怖い。

ブンブンと風を凧ぐ斬魄刀。空気を斬っているだけで誰にも当たることがはない。少しぐらいは手合わせしたれよ…鬼だな、と改めて藍染の鬼具合を再認識した藍染だった。

ちなみに、この後更木の興ざめということとで解散になるのだが、完全不完全燃焼だった野次の十一番隊隊士が五番隊にちよつかいを出してきて三番隊から帰ってきた藍染に尽く成敗されるのは数時間後の話である。

「そんな雑魚共を相手する暇があるなら俺としろ!!」

M e r r y X , m a s

残業、残業、残業。

現世ではクリスマス一色になっているが、俺は違った。クリスマスはやたら滅多に仕事が多い日である。

どうしてか。それは、独り身の自分を再認識したくないが為に仕事を少し残していたというのもあるが、他にも死人が沢山来たりと案外本当に忙しかったりするのだ。

リア充を僻んで殺人。いや、気持ちは分からんでもないが少し馬鹿すぎやしないかと思う。そんな事で自分の人生を棒に振るっていいのか。

無心とまでは行かないが、コツコツと仕事を片付けていると、誰かが部屋に入ってくる音がした。誰なんだろうか、と思つて顔をあげる。

早々に逃げたアホバカ隊長か？ それとも、今日は休みの雛森くんが来てくれたとか？ いや、それは無いな。なんか雛森くんこの休みをとる時、頬を赤らめてモジモジしながら休暇取らせてください、つて言ってきたからなあ。確実に無いわ。

「うわ、マジで居ったわ」

ドン引きした顔で言ったのはギンだった。しかも、ギンは凄い格好をしていて現世風で言うなら『サンタコス』である。お前、満喫してるな。

「こんな所で一人、何しに来たのかな？」

周りを見ても乱菊の姿は一向に現れない。霊圧も感じないし、多分一人でここに来たのだろう。

「いや、乱菊も連れてきたかったんやけど、今雲隠れつて言うんか？」

まあ兎に角居らんねん」

話を聞く限り、仕事をしない乱菊に痺れを切らした日番谷隊長が乱菊をどこかに隠したらしい。ギンもギンで自業自得だと思っっているのか助けに行くつもりはないんだと。

「結局のところ、助けに行つて日番谷隊長の雷が落ちるのが怖いんだろう」

「まあ、そんなところやね」

では、次の疑問に行くのとしよう。何故、ギンがサンタコスをしているのか。それを聞けば「あー、似合つとるやろ？」と的はずれな答えが返ってくる。

「あれや。雛森ちゃんも碌に誘えんで、仕事漬けなイヅルを励ますためのサービスや」

「お前のサービスは求めてないだろ流石の吉良くんも」

「え？ イヅル泣いて喜んでったんやけど」

「喜びの涙では無いことは確かだね」

俺がそう教えて上げれば、ギンは「えー、折角ここまでサービスしてやったのになあ。ショックやわー」なんて全然ショックじゃ無さそうな顔で言った。対してダメージは食らつてないらしい。凶太い神経で何よりだ。

「そういや、今日隊長見とらんなあ。何処におるん？」

「あんなアホの行先なんて知るわけないだろう？」

「うわ、珍しっ。……でも、なんか逆に怖いわ」

ギンがブルつと身震いをした。きっと今の俺は悪い顔でもしているのだろう。自分でもどんな顔をしているのか大体は予想がつく。

「これまでの刑は生温かったみたいだから、次からは総隊長にも御協力願おうと思ってるね」

「……総隊長？」

「この仕事の束が終わるまで、総隊長の目の前で正座しながら仕事をしてもらおうと思ってるんだ。大丈夫、許可は既に取っている」

「うっわ……えげつな」

仕事が終わらなければ流刃若火、逃げてでも流刃若火。一度、死ぬギリギリを味わわないとアイツはダメだ。骨は拾わないし、そこらの犬にくれてやる。

「ギンもあまりサボるんじゃないよ。目に余るようだったら、アホの隣空いてるから」

「え、遠慮しとくわ。ボク、やれば出来る子やし」

「今度から仕事やろ」と呟いているのが聞こえたので、一先ず安心かもしれない。

喋りながらも動かしていた手を止め、立ち上がった。漸く、書類が消えたので次の仕事に行くとしよう。

「終わったん？」

「デスクワークはね」

「何処に行くん？」

「あのアホを捕まえに」

「暇やしボクも行くわ」

「好きにすればいい」

立ち上がり、隊首室を出ると吹雪いてはいなかったが、雪がポツポツと降っていた。

「…ホワイトクリスマス、か」

「何が嬉しくて男と見なあかんねん。さっびしーわー」

その言葉をそのままお前にバットで打ち返してやる、とは言わずに無言で歩き出す。雪が降っているせいか、いつもよりも外が寒く感じる。ハアと息を手に吹きかければ当然、白い息が出て直ぐに消えていった。

他愛もない話をしながらギンと歩いていく。通りすがりの死神に話を聞きながら歩いていると、案外早く見つかった。

「よオ、 藍染」

「おや、 日番谷隊長じゃないですか」

殺さないようにする為か、体だけ凍らされていたアホを背に日番谷隊長が話しかけて来た。何となくだが、状況は理解できたような気がする。多分だが、乱菊に助けを頼られた隊長が、乱菊を助けようとして簡単に成敗でもされたのだろう。これが当たっているなら完全に自業自得だ。

チラツと日番谷隊長の方を見てみると「当たってる」とでも言うかのように小さく頷いた。もう呆れて溜息すら出てこないのは逆に凄

い。

「うちのアホが迷惑かけたみたいですみませんね」

「別にいい。案外早く片付いたからな」

「言い方怖すぎん？ ちゆうか、めっちゃ寒いんやけど。誰か助けて」

『寒い』と言うキーワードを聞いて思わず笑みが出てきてしまうことは仕方の無いことだろう。笑った俺を見てギンは引いた目で「うわっ」と言った。

「隊長、温まりたくないですか？」

「え、急に何なん？ あれか、飴と鞭か！」

急に優しくなった俺を見て隊長が慌て始める。何故慌てる？ 俺は優しいから別に苦なことはしないさ。唯、一瞬、全身に火傷を負うだけで（火傷では済まされない）

「俺、取っておきの場所用意してるんで行きましょう」

ニコリと爽やかな笑みを浮かべ俺は言った。優しく言っているのに、何故か隊長は「嫌だ」と言って顔を横に振る。あまりにも抵抗するので、引きずって連れていくことにした。

せいぜい、流刃若火で温まるといいさ。